

# 求来里の遺跡 I

— 県営経営体育成基盤整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(1) —

町ノ坪遺跡B区の調査

2009年

日田市教育委員会

求来里の遺跡 I  
町ノ坪遺跡B区

日田市埋蔵文化財調査報告書第88集

2009年

日田市教育委員会



日田市



求来里川流域遠景（西から）



調査区周辺全景（真上から）





調査区遠景（東から）



調査区全景（真上から）



## 序 文

古来より九州の交通の要所であった本市には、多くの文化財が市内各所に残されております。

この中でも、市東部の求来里川一帯に広がる谷地では、平成14年度より大規模な農業基盤整備事業が施工され、この谷地に数多くの遺跡が所在することが近年明らかになりつつあります。そして、この工事によってやむなく消滅する埋蔵文化財について、当委員会では事前に発掘調査による記録保存を実施してまいりました。

本書は、そのなかでも平成16年度に県営経営体育成基盤整備事業に伴って発掘調査を行った、町ノ坪遺跡B区の調査内容をまとめたもので、遺跡の調査では、古墳時代中期～後期の住居群などが発見されました。カマドの導入期の竪穴住居は、住居構造の変遷を理解する貴重な資料として注目されます。

本書が市民の方々の埋蔵文化財に対する理解と保護につながり、地域の歴史の解明や学術研究等にご活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、作業に従事いただきました皆様方や、調査にご協力いただきました関係者の方々に対しまして、心から厚くお礼申し上げます。

平成21年3月

日田市教育委員会

教育長 合 原 多賀雄

# 例 言

1. 本書は、日田市教育委員会が平成16年度に実施した町ノ坪遺跡B区の発掘調査報告書である。
2. 調査は県営圃場整備事業（担い手育成型）求来里地区（平成15年度より県営経営体育成基盤整備事業）に伴い、大分県日田地方振興局の委託業務として、日田市が受託し、日田市教育委員会が事業主体となり実施した。
3. 調査にあたっては大分県西部地方振興局耕地課（H16年当時）、日田市農林経済部農政課（H16年当時）、求来里地区圃場整備組合の協力を得た。
4. 調査現場での写真撮影・実測は渡邊が行い、一部実測を雅企画有限会社の委託により実施した。
5. 本書に掲載した遺物実測・製図は（株）九州文化財総合研究所、遺構図の製図は雅企画有限会社の委託によるものを使用した。
6. 空中写真撮影は九州航空株式会社に委託し、その成果品を使用した。
7. 遺物の写真撮影は雅企画有限会社に委託し、その成果品を使用した。
8. プラントオパール分析についてはパリノサーヴェイ株式会社に委託し、その成果品を第4章に掲載している。なお、掲載にあたっての修正は渡邊が行った。
9. 村落遺跡調査については別府大学文化財研究所に委託し、その成果品を第5章に掲載している。なお、掲載にあたっての加筆修正を別府大学文化財研究所 飯沼賢治・園田大・高陽一氏が行っている。
10. 本書に使用した図面中の方位は、全体図が国土座標を使用し、個別遺構は磁北で表示している。
11. 国土座標の数値は世界測地系に基づいた数値にて表示している。
12. 写真図版16～25に付している数字番号は挿図番号に対応する。
13. 出土遺物および図面、写真類は日田市埋蔵文化財センターにて保管している。
14. 本遺跡の名称のもととなっている町ノ坪は調査区一帯の小字名で、日田市の地籍台帳には「まちのつぼ」と読み仮名が記載されている。地元では「ちょうのつぼ」と呼んで馴染みがあるようであるが、遺跡名をつける際には小字名を採用する事を原則としているため、正式に台帳に記載されている小字名「まちのつぼ」を正式な遺跡名とした。
15. 本書の執筆は第1章(1)・第2章を若杉、第5章を別府大学文化財研究所飯沼賢治・園田大・高陽一が担当した他は渡邊が実施し、編集は渡邊が担当した。



日田市の位置

# 目 次

第1章 はじめに	
(1) 県営圃場整備事業求来里地区に伴う発掘調査概要	1
(2) 町ノ坪遺跡の調査に至る経過	
1. 調査に至る経過	3
2. 調査経過と調査組織	4
第2章 遺跡の立地と環境	
(1) 三芳の歴史と遺跡	7
(2) 求来里川流域の遺跡	8
第3章 調査の記録	
(1) 調査の概要	10
(2) 層序	10
(3) 遺構と遺物	
1. 住居	10
2. 掘立柱建物	49
3. 溝	50
4. 土坑	57
5. 柱穴	63
6. その他の遺物	64
第4章 町ノ坪遺跡B区の植物珪酸体分析	71
第5章 求来里地区における村落遺跡調査	
(1) はじめに	77
(2) 調査の経緯	
1. 調査の目的	78
2. 調査の組織	78
3. 各年度における調査の経過と内容	78
4. 調査の協力	80
(3) 求来里地区現況調査（字町ノ坪を付近を中心に）	
1. 水利調査	81
2. 地名調査	82
3. 信仰遺跡調査	86
(4) 元宮と大原八幡社周辺の調査	
1. 水利調査	93
2. 地名調査	100
3. 信仰遺跡調査	100
4. 文献調査	101
(5) 考察 大原神社における祭祀共同体と地形的環境との関わりについて	
1. 迫地形—地名調査の成果から—	105
2. 尾根と大原神社	105
3. 中世の大原神社の放生会について	106
(6) むすびにかえて	111
第6章 まとめと考察	
(1) 町ノ坪遺跡B区の遺構の時期と性格について	
1. 遺構の時期比定について	123
2. 遺跡の性格と特徴	125
(2) 日田地域におけるカマド導入と住居構造の変遷過程	
1. カマドの導入について	126
2. カマド・住居の変遷過程	127



# 挿 図 目 次

<b>(第1章)</b>		第41図	23号竪穴住居出土遺物実測図② (1/3)……………	43
第1図	圃場整備及び市道改良・河川改修工事 実施区域と調査区位置図 (1/10000)……………	第42図	24号竪穴住居実測図 (1/30・1/60)……………	44
	2	第43図	24号竪穴住居出土遺物実測図 (1/3)……………	45
第2図	調査区位置図 (1/3000)……………	第44図	25号竪穴住居実測図 (1/60・1/30)……………	46
	3	第45図	26～28号竪穴住居実測図 (1/60・1/30)……………	47
<b>(第2章)</b>		第46図	25～28号竪穴住居出土遺物実測図 (1/3)……………	48
第3図	三芳地区及び求来里川流域 の主要遺跡分布図 (1/10000)……………	第47図	1号掘立柱建物実測図 (1/60)……………	49
	9	第48図	2号掘立柱建物実測図 (1/60)……………	50
<b>(第3章)</b>		第49図	1・4号溝実測図 (1/150・1/40)……………	51
第4図	遺構配置図 (1/250)……………	第50図	1・4号溝出土遺物実測図 (1/3)……………	52
	11・12	第51図	2・3・5～9号溝実測図 (1/80)……………	53
第5図	調査区北側土層図 (1/60)……………	第52図	5～9号溝出土遺物実測図 (1/3)……………	53
	13	第53図	1～8号土坑実測図 (1/40)……………	55
第6図	1号竪穴住居・カマド実測図 (1/60・1/30)……………	第54図	10～17号土坑実測図 (1/40)……………	56
	14	第55図	18～25号土坑実測図 (1/40)……………	58
第7図	1号竪穴住居出土遺物実測図 (1/3)……………	第56図	26～28号土坑実測図 (1/40・1/60)……………	60
	14	第57図	29～30号土坑実測図 (1/40)……………	61
第8図	2号A竪穴住居・カマド実測図 (1/60・1/30)……………	第58図	土坑出土遺物実測図 (1/3)……………	61
	15	第59図	柱穴出土遺物実測図 (1/3)……………	62
第9図	2号竪穴住居出土遺物実測図 (1/3)……………	第60図	その他の遺物実測図 (1/3)……………	63
	16	第61図	縄文土器実測図 (1/3)……………	64
第10図	2号B竪穴住居・カマド実測図 ・3号竪穴住居実測図 (1/60・1/30)……………	第62図	石器類実測図① (1/2・1～4は1/4)……………	65
	17	第63図	石器類実測図② (2/3)……………	66
第11図	4・5号竪穴住居実測図 (1/60)……………	第64図	石器類実測図③ (2/3・12のみ1/2)……………	67
	18	第65図	石器類実測図④ (1/2)……………	68
第12図	6号竪穴住居・カマド実測図 (1/60・1/30)……………	第66図	石器類実測図⑤ (1/2)……………	69
	19	<b>(第4章)</b>		
第13図	4・5・6号竪穴住居出土遺物実測図 (1/3)……………	第67図	植物珪酸体含量の層位的変化……………	75
	20	<b>(第5章)</b>		
第14図	7号竪穴住居実測図 (1/60)……………	第68図	調査区周辺地図……………	77
	20	第69図	求来里水利・字図……………	83・84
第15図	7号竪穴住居カマド実測図 (1/30)……………	第70図	求来里地区文化財分布図……………	87
	21	第71図	正風寺跡模式図……………	88
第16図	7号竪穴住居出土遺物実測図 (1/3)……………	第72図	田島水利・字図……………	95・96
	22	第73図	古金・東寺堤 水利・字図……………	97・98
第17図	8号竪穴住居・カマド実測図 (1/60・30)……………	第74図	日田市地形図……………	107
	23	第75図	日田航空写真……………	109
第18図	8～10号住居出土遺物実測図 (1/3)……………	第76図	尾根・谷・迫概念図……………	112
	23	第77図	時期別遺構変遷図 (1/150)……………	124
第19図	9号竪穴住居・カマド実測図 (1/60・1/30)……………	第78図	方位角模式図……………	128
	24	第79図	竪穴住居類例 (1/150)……………	128
第20図	10・11号竪穴住居実測図 (1/60)……………	第80図	主軸方位時期別度数分布図……………	129
	25	第81図	主柱穴配置時期別推移……………	129
第21図	11号竪穴住居出土遺物実測図 (1/3)……………	第82図	竪穴規模時期別度数分布図……………	129
	26	第83図	カマド類例 (1/60)と計測模式図……………	130
第22図	11号竪穴住居カマド ・12号竪穴住居実測図 (1/30・1/60)……………	第84図	カマド張出の推移……………	131
	27	第85図	袖石利用の推移……………	131
第23図	12号竪穴住居カマド実測図 (1/30)……………	第86図	支脚利用の推移……………	131
	28			
第24図	12号竪穴住居出土遺物実測図 (1/3)……………			
	29			
第25図	13号竪穴住居・カマド ・14号竪穴住居実測図 (1/60・1/30)……………			
	30			
第26図	13号竪穴住居出土遺物実測図 (1/3)……………			
	32			
第27図	15号竪穴住居・カマド実測図 (1/60・1/30)……………			
	32			
第28図	15号竪穴住居出土遺物実測図 (1/3)……………			
	33			
第29図	16号竪穴住居実測図 (1/30)……………			
	33			
第30図	17号竪穴住居・カマド実測図 (1/60・1/30)……………			
	34			
第31図	16・17号竪穴住居出土遺物実測図 (1/3)……………			
	34			
第32図	18号竪穴住居・カマド実測図 (1/60・1/30)……………			
	35			
第33図	18号竪穴住居出土遺物実測図 (1/3)……………			
	35			
第34図	19号竪穴住居・カマド実測図 (1/60・1/30)……………			
	36			
第35図	19号竪穴住居出土遺物実測図 (1/3)……………			
	37			
第36図	20・21号竪穴住居実測図 (1/60)……………			
	38			
第37図	22号竪穴住居・カマド実測図 (1/60・1/30)……………			
	39			
第38図	20～22号竪穴住居出土遺物実測図 (1/3)……………			
	39			
第39図	23号竪穴住居実測図 (1/60)……………			
	40			
第40図	23号竪穴住居出土遺物実測図① (1/3・1/4)……………			
	42			

## 挿入写真目次

写真1 調査作業風景① ..... 5	写真14 大原神社八幡宮縁起 .....102
写真2 調査作業風景② ..... 5	写真15 行事帳写 ..... 103
写真3 植物珪酸体 ..... 76	A-① 弘法太師坐像 ..... 89
写真4 平島井堰 ..... 81	A-② 弘法太師坐像 ..... 89
写真5 正風寺跡全景 ..... 88	A-③ 弘法太師坐像 ..... 89
写真6 辻堂 ..... 86	A-④ 地藏菩薩立像 ..... 89
写真7 町ノ坪太子堂観音像 ..... 91	A-⑤ 仏龕 ..... 90
写真8 小西宝篋印塔 ..... 92	A-⑥ 水盤 ..... 90
写真9 豊前坊と呼ばれる石洞 ..... 92	B-① 磨崖板碑 ..... 90
写真10 べしみ (豊前坊石洞内) ..... 92	B-② 磨崖薬師如来像 ..... 90
写真11 むくむく谷の湧水点 (モクモク水) ..... 99	C-① 磨崖板碑 (永禄九年銘) ..... 90
写真12 鞍形尾神社 ..... 100	C-② 磨崖板碑 ..... 90
写真13 会所八幡神社 ..... 101	

## 写真図版目次

<p>巻頭写真図版1 上段 求来里川流域遠景 (西から) 下段 調査区周辺全景 (真上から)</p> <p>巻頭写真図版2 上段 調査区遠景 (東から) 下段 調査区全景 (真上から)</p> <p>写真図版1 上段 住居群全景 (真上から) 中段 完掘状況 (南から) 下段 完掘状況 (西から)</p> <p>写真図版2 ① 土層1全体 ② 土層1 ③ 土層1 ④ 土層2 ⑤ 土層2 ⑥ 土層3全体 ⑦ 土層3 ⑧ 土層3</p> <p>写真図版3 ① 1号竪穴住居 (南から) ② 1号竪穴住居カマド ③ 1号竪穴住居カマド縦土層 ④ 1号竪穴住居カマド横土層 ⑤ 2号A竪穴住居 (東から) ⑥ 2号A竪穴住居カマド ⑦ 2号A竪穴住居カマド縦土層 ⑧ 2号A竪穴住居カマド横土層</p> <p>写真図版4 ① 2号B竪穴住居 (東から) ② 2号B竪穴住居カマド ③ 3号竪穴住居 (南から) ④ 3号竪穴住居カマド ⑤ 4号竪穴住居 (北から) ⑥ 4号竪穴住居土器出土状況 ⑦ 5号竪穴住居 (南から) ⑧ 6号竪穴住居 (南から)</p>	<p>写真図版5 ① 7号竪穴住居 (南から) ② 7号竪穴住居カマド ③ 7号竪穴住居縦土層 ④ 7号竪穴住居横土層 ⑤ 7号竪穴住居天井石 ⑥ 7号竪穴住居カマド土器出土状況 ⑦ 8号竪穴住居 (西から) ⑧ 8号竪穴住居カマド</p> <p>写真図版6 ① 8号竪穴住居屋内土坑 ② 9号竪穴住居 (南から) ③ 9号竪穴住居カマド ④ 10号竪穴住居 (東から) ⑤ 11号竪穴住居 (東から) ⑥ 11号竪穴住居カマド ⑦ 11号竪穴住居カマド縦土層 ⑧ 11号竪穴住居カマド横土層</p> <p>写真図版7 ① 11号竪穴住居遺物出土状況 ② 11号竪穴住居遺物出土状況 ③ 12号竪穴住居 (南から) ④ 12号竪穴住居カマド ⑤ 12号竪穴住居カマド縦土層 ⑥ 12号竪穴住居カマド横土層 ⑦ 12号竪穴住居煙道部土層 ⑧ 12号竪穴住居土器出土状況</p> <p>写真図版8 ① 12号竪穴住居遺物出土状況 ② 13号竪穴住居 (東から) ③ 13号竪穴住居カマド ④ 14号竪穴住居 (西から) ⑤ 15号竪穴住居 (南から) ⑥ 15号竪穴住居カマド ⑦ 15号竪穴住居カマド縦土層</p>
--	--

	⑧ 15号竪穴住居カマド横土層		⑤ 4号溝土層②
写真図版9	① 16号竪穴住居（南から）		⑥ 5号溝（西から）
	② 16号竪穴住居土器出土状況		⑦ 5号溝土層
	③ 17号竪穴住居（南から）		⑧ 5号溝土器出土状況
	④ 17号竪穴住居カマド	写真図版15	① 6号溝（西から）
	⑤ 18号竪穴住居（東から）		② 6号土坑（北から）
	⑥ 18号竪穴住居カマド		③ 19号土坑（北から）
	⑦ 18号竪穴住居カマド縦土層		④ 21号土坑（北から）
	⑧ 18号竪穴住居カマド横土層		⑤ 22号土坑（北から）
写真図版10	① 18号竪穴住居土器出土状況		⑥ 22号土坑土層
	② 19号竪穴住居（南から）		⑦ 25号土坑（南から）
	③ 19号竪穴住居カマド		⑧ 土坑群全景（真上から）
	④ 19号竪穴住居土器出土状況	写真図版16	出土遺物
	⑤ 20号竪穴住居	写真図版17	出土遺物
	⑥ 21号竪穴住居（西から）	写真図版18	出土遺物
	⑦ 22号竪穴住居（南から）	写真図版19	出土遺物
	⑧ 22号竪穴住居カマド	写真図版20	出土遺物
写真図版11	① 23号竪穴住居（南から）	写真図版21	出土遺物
	② 23号竪穴住居炉	写真図版22	出土遺物
	③ 23号竪穴住居南側土器出土状況	写真図版23	出土遺物
	④ 23号竪穴住居北側土器出土状況	写真図版24	出土遺物
	⑤ 24号竪穴住居（南から）	写真図版25	出土遺物
	⑥ 24号竪穴住居カマド		
	⑦ 24号竪穴住居カマド縦土層		
	⑧ 24号竪穴住居カマド横土層		
写真図版12	① 24号竪穴住居初期須恵器出土状況		
	② 24号竪穴住居屋内土坑		
	③ 25号竪穴住居（南から）		
	④ 25号竪穴住居カマド		
	⑤ 25号竪穴住居カマド縦土層		
	⑥ 25号竪穴住居カマド横土層		
	⑦ 26号竪穴住居（西から）		
	⑧ 27号竪穴住居（東から）		
写真図版13	① 27号竪穴住居カマド		
	② 28号竪穴住居（南から）		
	③ 1号掘立柱建物（真上から）		
	④ 2号掘立柱建物（真上から）		
	⑤ 1号溝南半（南から）		
	⑥ 1号溝北半（南から）		
	⑦ 1号溝土器出土状況		
	⑧ 1号溝土層①		
写真図版14	① 1号溝土層②		
	② 1号溝土層③		
	③ 4号溝（西から）		
	④ 4号溝土層①		

## 表 目 次

第1表	県営圃場整備事業求来里地区に伴う調査一覧	1
第2表	植物珪酸体含量	74
第3表	屋号確認表	85
第4表	「行事帳写」記載の名（みょう）一覧表	103
第5表	町ノ坪遺跡出土遺構変遷一覧	124
第6表	支柱別竪穴規模推移表	129
第7表	カマド計測値平均推移	131
第8表	煙道時期別推移	131
第9表	袖石利用石材軒数推移	131
第10表	支脚利用石材軒数推移	131
第11表	出土土器観察表①	136
第12表	出土土器観察表②	137
第13表	出土土器観察表③	138
第14表	出土土器観察表④	139
第15表	出土土器観察表⑤	140
第16表	出土土器観察表⑥	141
第17表	出土土器観察表	142

# 第1章 はじめに

## (1) 県営圃場整備事業求来里地区に伴う発掘調査概要

県営圃場整備事業（担い手育成型）求来里地区（平成15年度より県営経営体育成基盤整備事業（担い手育成型）に名称変更）は、日田市東部に位置する求来里川流域一帯の25haを対象として基盤整備を実施すると同時に、農地の集団化や利用集積を促進し、経営規模の拡大や農業機械の整備などによって農作業の効率化を図り、低コストの農業を確立する目的で平成12～16年度予定で事業が計画された。

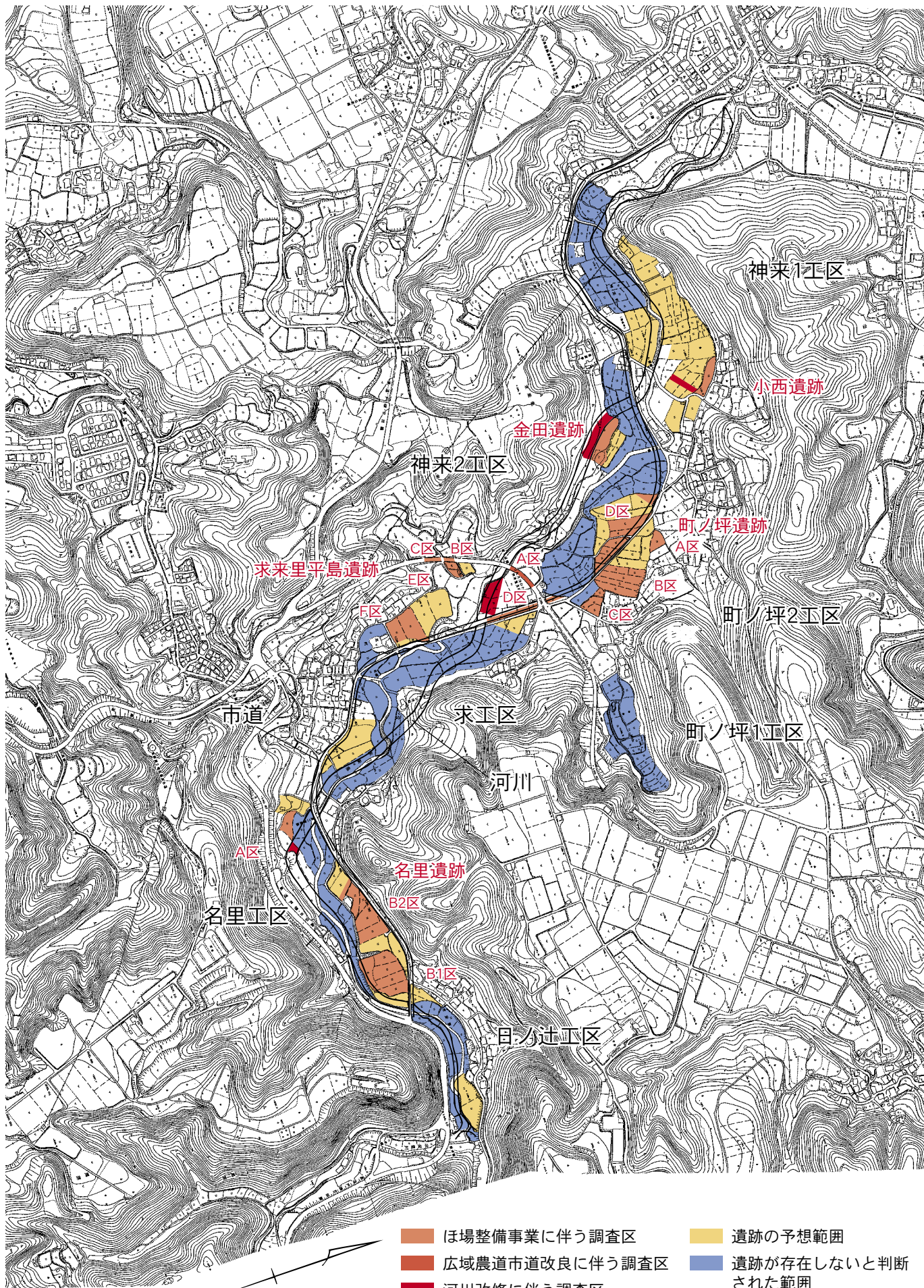
平成11年9月13日には市経済部農政課名で大分県日田地方振興局耕地課による求来里地区における圃場整備事業の工事实施の通知文が提出され、続く9月30日には同じく農政課長名で埋蔵文化財に関する事前協議の依頼文が提出された。これを受けて市教育庁文化課は、事業予定地には広域農道建設の際に発掘調査が行われた求来里平島遺跡などの周知の埋蔵文化財包蔵地が存在することから、工事の計画段階でその都度十分協議する旨の協議調書を大分県日田地方振興局耕地課との間で取り交わすこととなった。

工事対象地域は、求来里川に沿って7工区に分かれており、工区毎の工事实施年度に合わせて、事前の試掘調査を平成12～14年度にかけて実施した。調査によって、遺跡の存在が明らかになった箇所については、工法変更の協議を随時行い、現状保存が困難である箇所に関しては、工事計画に合わせて発掘調査を実施することになった。各遺跡の調査経緯については、本報告のほか、今後刊行予定の各報告に記述することとした。

なお発掘調査は、平成15年度町ノ坪遺跡ABC区、平成16年度町ノ坪遺跡BD区・金田遺跡・小西遺跡、平成17年度町ノ坪遺跡D区・求来里平島遺跡EF区、平成18・19年度名里遺跡AB区の計5遺跡10調査区について実施した。

第1表 県営圃場整備事業求来里地区に伴う調査一覧

試掘年度	工区名	遺構内容	時代	処置	遺跡名	発掘調査年度	調査期間	調査面積	備考
平成12年度	神来1工区	住居・溝 土坑・柱穴	弥生時代	発掘調査	小西遺跡	平成16年度	04.12.10～05.3.25	2,000㎡	
平成13年度	神来2工区	住居・柱穴	弥生時代 ～中世	発掘調査	金田遺跡	平成16年度	04.4.23～11.26	2,000㎡	
		住居・柱穴	弥生時代 ～中世	発掘調査	町ノ坪遺跡	平成16, 17年度	05.3.8～3.25 05.4.26～9.19	4,500㎡	D区
	町ノ坪2工区	住居・柱穴	弥生時代 ～中世	発掘調査	町ノ坪遺跡	平成15, 16年度	03.11.10～04.3.26 04.4.6～7.29	7,000㎡	A～C区 B区本報告
	求工区	住居・柱穴	古墳時代 ～中世	発掘調査	求来里平島遺跡	平成17年度	05.11.24～06.3.24	3,400㎡	EF区
平成14年度	町ノ坪1工区	—	—	許可	—	—	—	—	試掘調査のみ
	求工区	土坑・柱穴	弥生時代 ～中世	発掘調査	名里遺跡	平成18年度	07.2.27～3.2	1,800㎡	A区、遺構なし
	名里工区	住居・土坑・柱穴	古墳時代 ～中世	発掘調査	名里遺跡	平成18, 19年度	07.1.9～3.27 07.5.11～12.26	8,800㎡	B区
	日ノ辻工区	住居・土坑・柱穴	古墳時代	盛土保存	—	—	—	—	試掘調査のみ



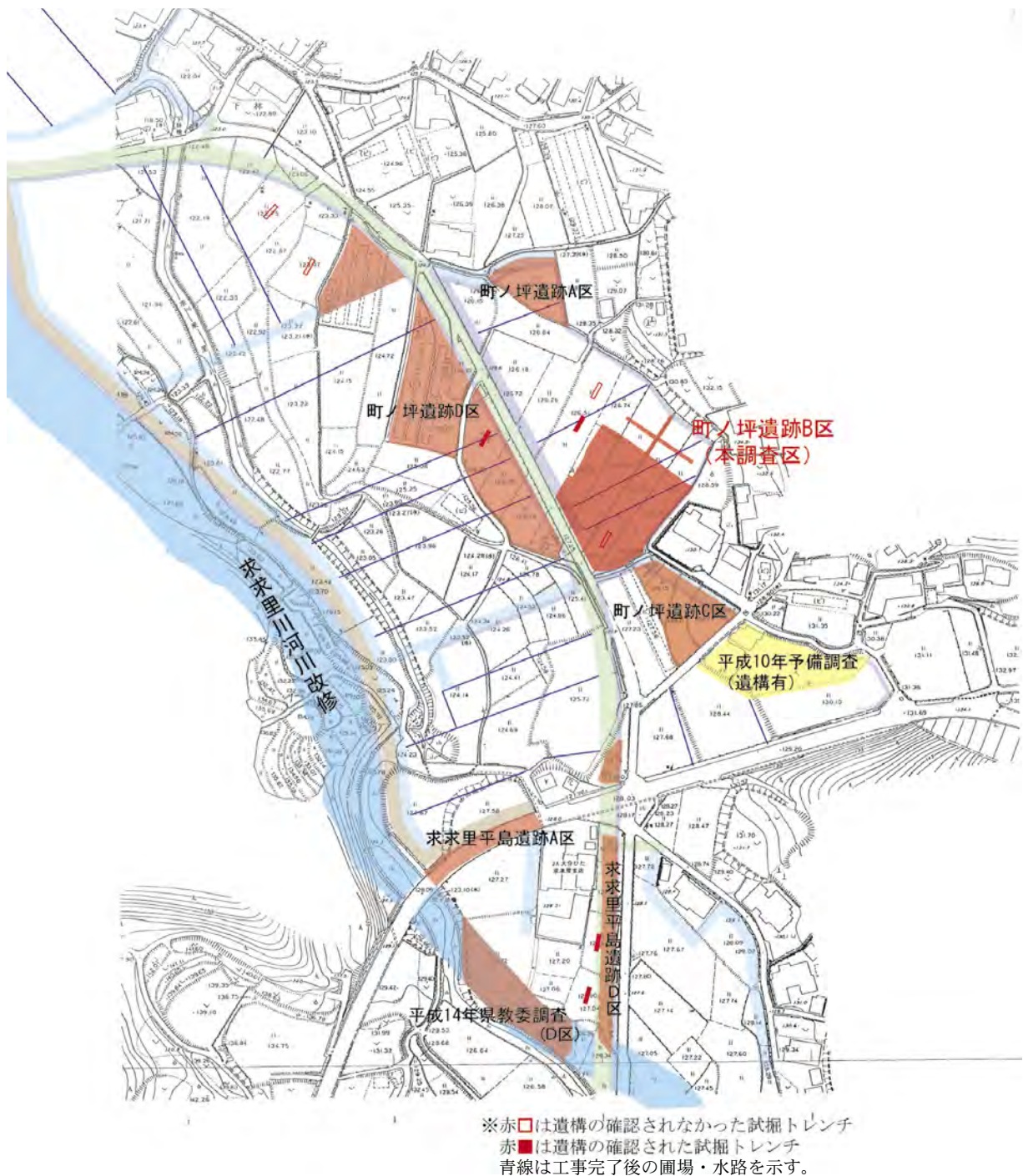
第1図 ほ場整備及び市道改良・河川改修工事実施区域と調査区位置図 (1/10000)

## (2) 町ノ坪遺跡の調査に至る経緯

### 1. 調査に至る経過

前述のように、県営圃場整備事業求来里地区の工事が推進されるなかで、平成13年12月には町ノ坪・着来一帯(20ha)の予備調査依頼が提出された。これを受けて市教育庁文化課では、平成14年3月11日～3月20日までの期間予備調査を実施した。対象地に29本のトレンチを設定して調査を行った結果、町ノ坪・求町一帯に遺跡の所在が確認された。(第2図)

平成16年度から求来里地区の工事着工が予定されることから平成15年9月には事前協議を行ったものの、遺跡の保存が困難であると判断された各対象地区については、事前に発掘調査を実施することとなった。このうち町ノ坪一帯は、市道求来里中央線で分かれる東西両側圃場の工事年度が異なることから、平成16・17年度の工



第2図 調査区位置図 (1/3,000)

事着工前にそれぞれ対象範囲を発掘調査することとなった。これに伴い、町ノ坪一帯の遺跡を町ノ坪遺跡とし、市道を挟んで東側をA～C区、西側をD区として調査区を設定し、A・C区を平成15年度、B区を平成15・16年度、D区を平成16・17年度にそれぞれ発掘調査を実施した。(第2図)

町ノ坪遺跡B区の調査は、平成15年11月10日～26日の間A～C区全体の耕作土除去作業を開始し、翌平成16年2月16日～26日の間表土除去を実施した。その後、平成16年4月6日～7月29日の間発掘調査を実施した。文化財保護法の手続き及び契約については以下の通りとなっている。

平成15年11月28日には日田局耕第970号にて文化財保護法第57条の3第1項の埋蔵文化財発掘の通知文書の提出が行われ、12月9日には大分県教育委員会より教委文第57-47号にて発掘調査実施の通知が行われた。これを受け、平成16年5月31日には日教委文第708号の文化財保護法第58条の2第1項の発掘調査実施の報告を行い、平成16年8月3日には大分県教育委員会に発掘調査の終了報告を行うと共に埋蔵文化財発見届け及び保管証の提出を行い、8月17日には大分県教育委員会から教委文第19-32号にて文化財の認定を受けた。

契約に関しては平成15年度が平成15年11月1日～平成16年3月26日、平成16年度が平成16年4月5日～平成17年3月11日、平成17年度が平成17年5月2日～平成18年2月28日の期間契約を締結し、平成15・16年度は調査・整理、平成17年度は整理作業を実施した。報告書作成業務として平成19年度には平成19年5月1日～平成20年3月24日の間契約を締結し、平成20年度には平成20年5月7日～平成21年3月19日の間契約を締結した。

## 2. 調査経過と調査組織

町ノ坪遺跡B区の調査経過を調査日志に基づき略述する。

なお、当初調査対象としていたB区の東側に関しては、表土除去作業段階において地形が大きく下がり、工事による影響がないと判断されたことから、調査範囲から除外し、トレンチによる確認調査に留めることとした。(当初面積4,100㎡、最終調査面積2,700㎡)

- |             |   |
|-------------|---|
| 平成15年11月10日 | 町ノ坪遺跡全体の耕作土除去作業を開始する。                         |
| 12月4日       | 耕作土除去作業が完了する。                                 |
| 平成16年2月16日  | B区の表土除去作業を開始する。                               |
| 2月26日       | 表土の除去作業が完了し、作業を中断する。                          |
| 4月6日        | B区の調査を再開し、雨水除去用に排土移動を実施する。                    |
| 4月12日       | 発掘作業員を導入し、遺構検出作業を開始する。                        |
| 4月22日       | 本格的に遺構の掘下げを開始する。                              |
| 5月28日       | 順調に作業が進むと共に、日隈小学校生徒46人が遺跡の見学を行う。              |
| 6月15日       | 小野小学校生徒15名が遺跡の見学・体験発掘を行う。                     |
| 7月15日       | 遺構の掘下げがほぼ完了する。                                |
| 7月21日       | 清掃を行い、空中写真撮影を実施する。                            |
| 7月23日       | 遺構の実測作業がほぼ完了する。                               |
| 7月24日       | 求来里地区現地説明会と題して、金田遺跡と共に現地見学を実施し、地元住民約50名が参加する。 |
| 7月26日       | 重機を導入し調査区外東側一帯の確認用トレンチの掘下げを行う。                |
| 7月29日       | 全ての機材を撤収して調査を完了する。                            |

なお、B区の整理作業はA・C区と併せて実施しており、平成16年5月6日～平成17年1月25日、平成17年5月2日～11月30日までの間行った。また、併せて平成17年1月11日から3月11日及び平成17年9月1日～

平成18年2月28日までの間、中・近世の求来里地区一帯の集落景観の歴史的な復元を目的として「村落遺跡調査」を別府大学に委託した。

調査関係者は以下のとおりである。(職名は当時のままとしている)

平成15年度

調査主体 日田市教育委員会  
調査責任者 後藤元晴(日田市教育委員会教育長)(~平成15年7月)  
諫山康雄(日田市教育委員会教育長)(平成15年8月~)  
調査統括 後藤清(日田市教育庁文化課課長)  
調査事務 佐藤晃(同文化課主幹兼埋蔵文化財係長) 園田恭一郎(同文化課主査)  
酒井恵(同文化課主事補)  
調査担当 土居和幸(同文化課主査)、若杉竜太(同文化課主事)【表土除去作業】  
調査員 行時桂子(同文化課主任)、渡邊隆行(同文化課主事)  
調査補助員 岡本 彩

平成16年度

調査主体 日田市教育委員会  
調査責任者 諫山康雄(日田市教育委員会教育長)  
調査統括 後藤清(日田市教育庁文化課課長)  
調査指導者 坂本嘉弘(大分県教育庁埋蔵文化財センター)  
調査事務 高倉隆人(日田市教育庁文化課課長補佐兼埋蔵文化財係長) 伊藤京子(同文化課副主幹)  
中村邦宏(同文化課主事補)  
調査担当 渡邊隆行(同文化課主事)  
調査員 土居和幸(同文化課主査)、行時桂子(同文化課主任)  
若杉竜太(同文化課主任)  
来訪者 今田秀樹(天瀬町教育委員会)、田中裕介(大分県教育庁埋蔵文化財センター)  
宮内克己(大分県立歴史博物館)

発掘作業員 安心院照雄、穴井昌生、穴井正利、諫元正隆、石井猪之助、荏隈マサ子、江藤キミ子、梶原利徳、梶原隆介、蒲池妙子、河津定雄、河津モリ、河部松子、小下一、五島絹代、五反田静子、後藤孝市、財津利枝、財津由太、坂本今朝人、庄内武子、高倉富美子、高村三郎、田中伝江、筒井英治、中尾タマエ、中島カズ子、原口勝利、原田強、平川五男、松岡初次、本松シヅエ、森輝雄、森本絹子、行村シズエ、吉長利夫

整理作業員 穴井トヨ子、朝倉眞佐子、梶原ヒトエ、坂本和代、田中静香、安元百合、和田ケイ子



写真1 調査作業風景①



写真2 調査作業風景②



平成17年度

調査主体 日田市教育委員会  
調査責任者 諫山康雄（日田市教育委員会教育長）  
調査統括 後藤清（日田市教育庁文化財保護課課長）  
調査指導者 後藤一重（大分県教育庁文化課）  
調査事務 高倉隆人（日田市教育庁文化財保護課課長補佐兼埋蔵文化財係長）  
伊藤京子（同文化財保護課専門員）、中村邦宏（同文化財保護課主事補）  
調査員 土居和幸（同文化課副主幹）、今田秀樹（同文化財保護課主任）  
行時桂子（同文化財保護課主任）、若杉竜太（同文化財保護課主任）  
渡邊隆行（同文化財保護課主任）、矢羽田幸宏（同文化財保護課主事補）  
整理作業員 朝倉眞佐子、穴井トヨ子、井上とし子、伊藤一美、石松裕美、鍛冶谷節子、梶原ヒト工、武石和  
美、聖川暢子、平川優子、安元百合、吉田千津子  
調査補助員 中川照美

平成19年度

調査主体 日田市教育委員会  
調査責任者 諫山康雄（日田市教育委員会教育長）～平成19年9月  
合原多賀雄（日田市教育委員会教育長）平成19年10月～  
調査統括 梶原孝史（日田市教育庁文化財保護課課長）～平成19年9月  
原田文利（日田市教育庁文化財保護課課長）平成19年10月～  
調査事務 井上正一郎（日田市教育庁文化財保護課課長補佐兼埋蔵文化財係長）  
田中正勝（同文化財保護課専門員）伊藤京子（同文化財保護課専門員）  
塚原美保（同文化財保護課主査）  
報告書担当 渡邊隆行（同文化財保護課主任）  
調査員 今田秀樹（同文化財保護課主査）、行時桂子（同文化財保護課主任）  
若杉竜太（同文化財保護課主任）、矢羽田幸宏（同文化財保護課主事）

平成20年度

調査主体 日田市教育委員会  
調査責任者 合原多賀雄（日田市教育委員会教育長）  
調査統括 原田文利（日田市教育庁文化財保護課課長）  
調査事務 井上正一郎（日田市教育庁文化財保護課課長補佐兼埋蔵文化財係長）  
田中正勝（同文化財保護課専門員）、塚原美保（同文化財保護課主査）  
報告書担当 渡邊隆行（同文化財保護課主任）  
調査員 今田秀樹（同文化財保護課主査）、行時桂子（同文化財保護課主査）  
若杉竜太（同文化財保護課主任）、矢羽田幸宏（同文化財保護課主事）  
比嘉えりか（同文化財保護課嘱託）  
協力者 大坪志子 宮田栄二

## 第2章 遺跡の立地と環境

### (1) 三芳の歴史と遺跡

今回報告する求来里川流域一帯の地域は、盆地東部に位置し、現在三芳地区と呼ばれる。三芳とは明治22年～昭和15年までの村名で、求来里・日高・田島の3村が合併したことに由来する。

三芳地区が文献に初めて登場するのは『豊後国風土記』である。古代の日田郡を治めた日下部氏の祖先である邑阿自が靱部としてこの地に住み着いたことから、「靱負（ゆぎおい）」の村、後に「靱編（ゆぎあみ）」の郷と呼ばれたとあり、現在の「刃連（ゆきい）」という町名にもその名残を留めている。

古代後半には、後に宇佐神宮の所領となった田島別符や竹田別符など耕地の開発が盛んに行われた。また、郡内だけでなく、豊後を治めた大友氏の信仰も厚かった大原八幡宮（求来里村から田島村へ江戸時代初めに遷座）が鎮座する地域である。戦国期になると文書等に「刃連郷」の記述がみられ、近世には求来里・田島・刃連・上井手・下井手の5村が郷内に存在していたことがわかる。また、19世紀の前半には、私塾咸宜園を開いた広瀬淡窓の弟、広瀬久兵衛らの出資による小ヶ瀬井路の開発などが行われた。

明治8年の小村合併の際には、近世に存在した5村のうち刃連・上井手・下井手の3村が合併し、日高村が成立した。その後、明治22年の町村制施行により、求来里・日高・田島の3村が合併して三芳村が誕生、昭和15年に日田町ほか5村と合併して日田市となり、求来里・日高・田島は大字名として現在に残っている。

続いてこの地区の遺跡を概観していく。求来里地区及び求来里川流域の遺跡については後述することから、ここでは日高・田島地区を中心に見ていく。

日高地区は三隈川右岸と左岸の一部に広がる地区である。地区の北西側に田島地区との境をなすように会所山丘陵が東西に延びているが、この丘陵上には、古墳時代後期の円墳である鳥羽塚古墳(11)や横穴式石室を主体とする北向古墳(12)などが存在する。この会所山丘陵の南東側にある独立丘陵上には1基の装飾古墳を含み7基の円墳からなる法恩寺山古墳群(13)が存在し、古代日田を治めた日下部氏の祖先の奥津城と推定されている。さらにこの丘陵の南西側から南側にかけての沖積地には、中世の集落の存在が想定される上井手遺跡(14)が存在する。

また、法恩寺山古墳群の南東側には東寺横穴墓群(15)が存在する。この横穴墓付近にはJR久大線建設時に破壊されたダンワラ古墳が存在したとされる。

三隈川と大山川の合流地点の南東側に張り出した台地上にも遺跡が展開する。中世の角塔婆や古墳時代前期の方形周溝墓が確認された牧原遺跡(18)・(19)や、円墳とみられる千人塚古墳群(16)などがある。また、千人塚古墳群を含む一帯は縄文時代の炉穴や集石、奈良時代の焼土坑などが確認された大部遺跡(17)に含まれる。

続いて田島地区は、日高地区の北西、求来里地区の西側に広がる地区である。会所山丘陵北側の沖積地には弥生時代後期の集落が確認された会所宮遺跡(22)が存在する。また、この丘陵の北側裾部には横穴式石室を主体とし、鉄製の菱形辻金具が出土した後山古墳(20)がある。

会所宮遺跡より北の大波羅丘陵の西側裾部では、弥生時代から古代にかけての遺構が確認された大波羅遺跡(23)が存在する。中でも古代の流路や包含層から出土した「山」「田」銘の墨書土器の存在から、役所的施設や寺院などの存在が想定されている。また、大波羅遺跡の南西の沖積地に位置する日田条里飛矢地区(27)では、古墳時代後期の竪穴住居・溝、古代の建物や土坑、日田条里大原地区(28)では弥生時代から中世にかけての竪穴遺構や土坑が確認されている。

大波羅丘陵上には古墳時代の墳墓群が確認された赤迫遺跡(26)や、市内で唯一の埴輪を持つ5世紀代の築造とされる円墳の薬師堂山古墳(24)の他、丸尾神社古墳(25)が存在する。

## (2) 求来里川流域の遺跡

町ノ坪遺跡の所在する求来里地区は盆地の東部に位置し、大字東有田大石峠を源とする求来里川により形成された沖積地が狭い谷状の地形を呈している。求来里川は大きく蛇行を繰り返しながら、北西方向に流れ、遺跡の北約2kmの地点で有田川と合流する。

求来里地区及び求来里川流域では、圃場整備事業に伴って行われた発掘調査の他にも、広域農道建設や市道建設などによる発掘調査が行われている。ここでは、それらの遺跡を中心に周辺の遺跡を概観していく。

町ノ坪遺跡より北西側400mの台地裾には、弥生時代中期から終末期にかけての集落が確認された小西遺跡(2)が存在する。また、町ノ坪遺跡の南西側には金田遺跡(3)が所在する。調査では弥生時代中期後半から古墳時代中期の集落が確認された。特に古墳時代中期の集落では朝倉産の初期須恵器などが出土しており、地床炉からカマド導入期の集落変遷が伺える遺跡である。

町ノ坪遺跡南側には、縄文時代の竪穴遺構や古墳時代の集落、中世の四面庇の建物が見つかった求来里平島遺跡(4)が存在する。特に、古墳時代中期の住居は金田遺跡や町ノ坪遺跡と同様に導入期カマドとして注目される。さらに求来里平島遺跡の南側には弥生時代・古墳時代の包蔵地である着来遺跡(5)がある。着来遺跡の東側、求来里川が形成する谷の最奥部には縄文時代前期の包含層、古墳時代後期～終末期の集落や中世の墓地が確認された名里遺跡(6)が存在する。

一方、谷の北側には町野原台地が広がり、台地一帯は旧石器時代・縄文時代・古墳時代の包蔵地である町野原遺跡(7)が存在する。また、台地の南東側に円墳の亀ノ甲古墳(8)、さらに台地から西側に派生し、小西遺跡背後にあたる丘陵上には、横穴式石室を主体とし、3基の円墳からなるガニタ古墳群(9)がある。

また、谷南側の元宮原台地上には弥生時代後期の甕棺墓・石棺墓や古墳時代後期の石蓋土坑墓、中世の塚と笠塔婆などが見つかった元宮遺跡(10)が存在する。弥生時代～古墳時代にかけての墓地は、求来里川流域に展開する同時期の集落との関係を想起させる。

さらに、求来里地区から求来里川を下流に下った有田地区でも、沖積地及び周辺の丘陵上に多くの遺跡がみられる。小西遺跡の西約600mの丘陵上には古墳時代の集落や古代の土坑墓が見つかった馬形遺跡(29)がある。さらに下流の沖積地及び微高地上には、縄文時代晩期の埋甕や平安時代の竪穴遺構が確認された森ノ元遺跡(30)や弥生時代の墓地や古墳時代の集落、300枚を超える六道銭が埋納された土坑墓が確認された尾漕遺跡(31)が存在する。さらに求来里川右岸の台地上には、弥生時代から古墳時代にかけての集落や近世墓群が見つかった祇園原遺跡(37)、古墳時代から古代を中心として集落が確認された長迫遺跡(32)、古墳時代後期の横穴式石室を主体とする塔ノ本古墳(34)などが存在する。一方、左岸の台地上には古墳時代の土坑墓・石蓋土坑墓・石棺墓などが確認された大迫遺跡(46)や3基の円墳からなる中尾古墳群(45)が存在する。

### (参考文献)

『日田市史』日田市 1990

若杉竜太編『平成15年度日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会 2004

渡邊隆行編『平成16年度日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会 2005

今田秀樹編『平成17年度日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会 2007

矢羽田幸宏編『平成18年度日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会 2008

土居和幸・行時志郎・永田裕久編『会所宮遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第11集 日田市教育委員会 1996

松下桂子編『牧原遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第12集 日田市教育委員会 1997

行時志郎編『森ノ元遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第13集 日田市教育委員会 1998

土居和幸・行時志郎・永田裕久編『馬形遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第16集 日田市教育委員会 1998

若杉竜太編『平島遺跡D地点 塔ノ本古墳 祇園原遺跡2次 長迫遺跡C地点 長迫遺跡D地点 尾漕遺跡6次』日田市埋蔵文化財調査報告書第28集 日田市教育委員会 2001

行時志郎編『尾漕遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第30集 日田市教育委員会 2001

渡邊隆行編『大波羅遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第29集 日田市教育委員会 2001

土居和幸編『求来里平島遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第38集 日田市教育委員会 2003

若杉竜太編『日田糸里飛矢地区』日田市埋蔵文化財調査報告書第40集 日田市教育委員会 2003

若杉竜太編『日田糸里大原地区』日田市埋蔵文化財調査報告書第47集 日田市教育委員会 2004



## 第3章 調査の記録

### (1) 調査の概要

調査は試掘調査の結果を踏まえて、対象地南西側より順次機械で掘り下げてから遺構の確認を行った。なお、調査区北東側は、表土除去段階で大幅に落ち込み、工事による影響が少ないことが判明したことから、表土除去を行わず、トレンチ調査にとどめ遺構の確認を行った。その結果、遺構の存在は認められず、調査対象地は南西側のみに絞られる事となった。調査区は南北軸約60m、東西軸約52mを測る。遺構検出面は、現況基盤土直下に見られる暗黄灰褐色砂質土で、遺構の大半は高い所に集中していた。中央の1号溝を挟んで西側に住居が多く、東側には土坑類が多く見られた。また、調査区には南北方向に水田畦畔に伴う攪乱が見られた。

調査において検出された遺構は住居29軒、溝9条、掘立柱建物2棟、土坑30基、柱穴多数である。遺構埋土は黒褐色、暗褐色土、灰褐色に分けられ、時期の新しいものほど灰色系の傾向が見られた。

### (2) 層序 (第5図、図版2)

調査区北東側が落ち込んでおり、崖面との間が湿地のような状況であったことからトレンチにて堆積状況の確認を行った。土層1は調査区中央北側に残存していた水田畦畔をそのままベルトとして利用したものである。北側へと向かって緩やかに傾斜している。1・2層は近年の水田層である。3・4層は水田層で、4層は部分的にであるが基盤状に形成される。5～7層は北側に向かって傾斜堆積している灰色系の砂質土である。土層2は確認用に掘り下げた調査区北側のトレンチ部分の西壁土層で、土層3とほぼ対応する。1・2層は近年の水田層で、土層3の3・3'層にそれぞれ対応する。3層は暗黄褐色土で土層3の3"層、4・5層は灰色系の堆積層で土層3の5・6層にそれぞれ対応する。土層3は調査区北側壁面の土層である。1・2層は現況水田層、3・3'・4層は水田層である。3"層は暗黄褐色の堆積層、5・5"・6層は灰色系の堆積層である。この灰色系が土層1の5～7層に対応する。

以上大まかに堆積状況を見てきた。どの層位においても見られるのが、最下層に灰色系の砂質堆積(第5図①)が見られる点である。また、土層2・3では①砂質堆積層上面に暗黄褐色の基盤層(第5図②)が見られ、土層1でも①上面に基盤層を伴う水田層(第5図③)が形成されている。このような点から推測されるのは、土層2・3の暗黄褐色粘土層②は土層1の水田基盤土層③に対応する可能性が考えられる。従って、少なくともこの一帯の現況水田層下面には1枚以上の水田層が所在したものと想定され、第4章のプラントオパール分析結果での当該層での水田耕作の可能性の指摘は、この想定を補強するものとなっている。また、最下層に堆積する灰色系の砂質土も水田層の可能性が高いとの結論が示されており、この灰色系の堆積が丘陵と河岸段丘面との間の窪みに堆積していることから、調査区北側が谷水田などとして利用されていた可能性を示唆しているものと考えられる。

また、この水田層の下層にある黄褐色系の遺構検出面の一部に土器破片などが含まれる事から、トレンチ等を設定して確認したが、黄褐色系の砂質土の堆積が見られ、河川氾濫に伴う遺物包含層の可能性が考えられる。なお、工事により地山面が大幅に掘削されることがないため、確認のみに留めている。

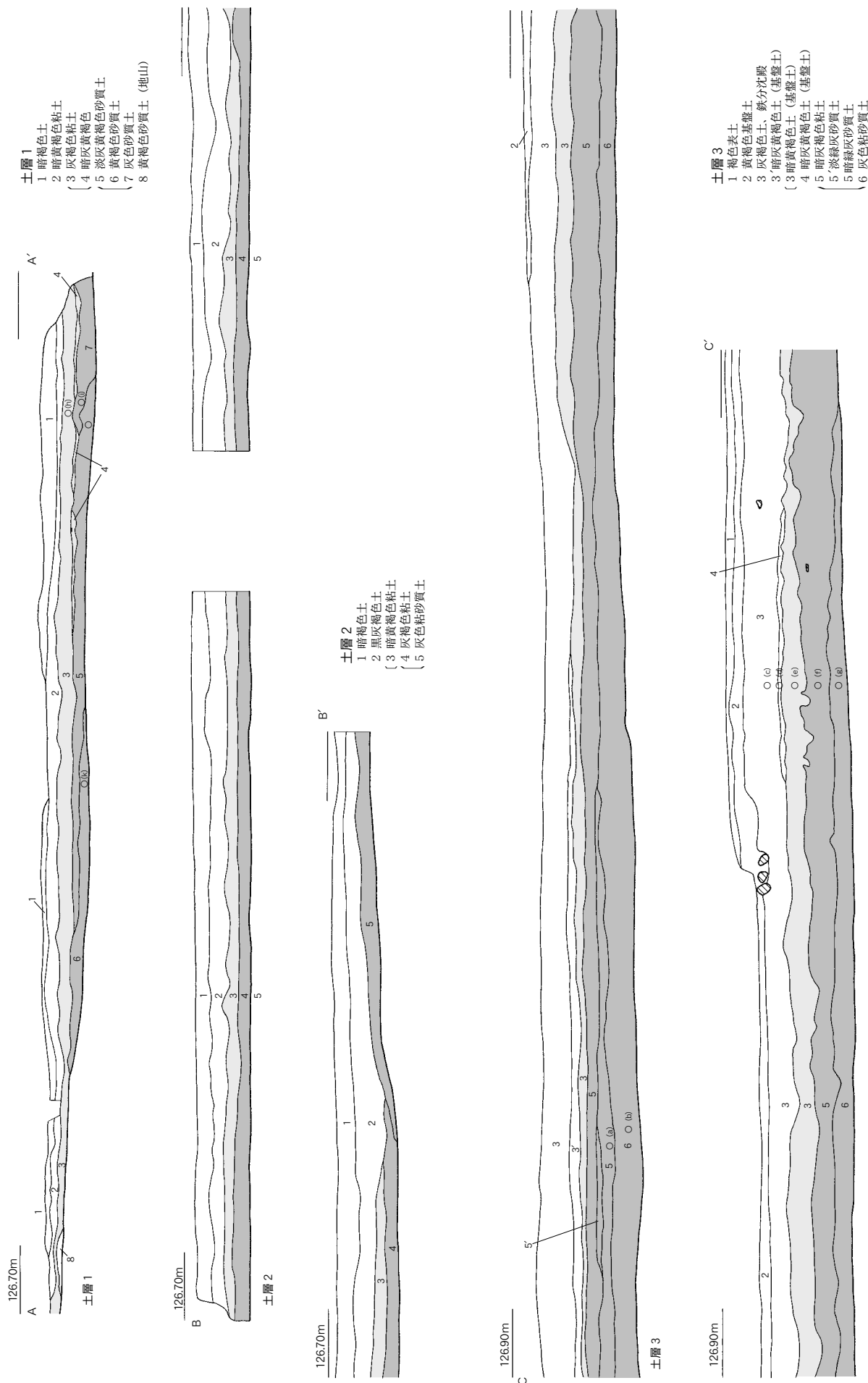
### (3) 遺構と遺物

#### 1. 住居

全部で29軒(建替えを含む)が確認された。大半が調査区中央を南北に流れる1号溝の西側に集中している。建替えと見られるものも含めて大半が切り合い関係にある。時期的には数軒が弥生～古墳時代前期の可能性が考えられるが、それ以外は古墳時代中～後期に属している。大半の住居にはカマドが付設しており、カマドの方向

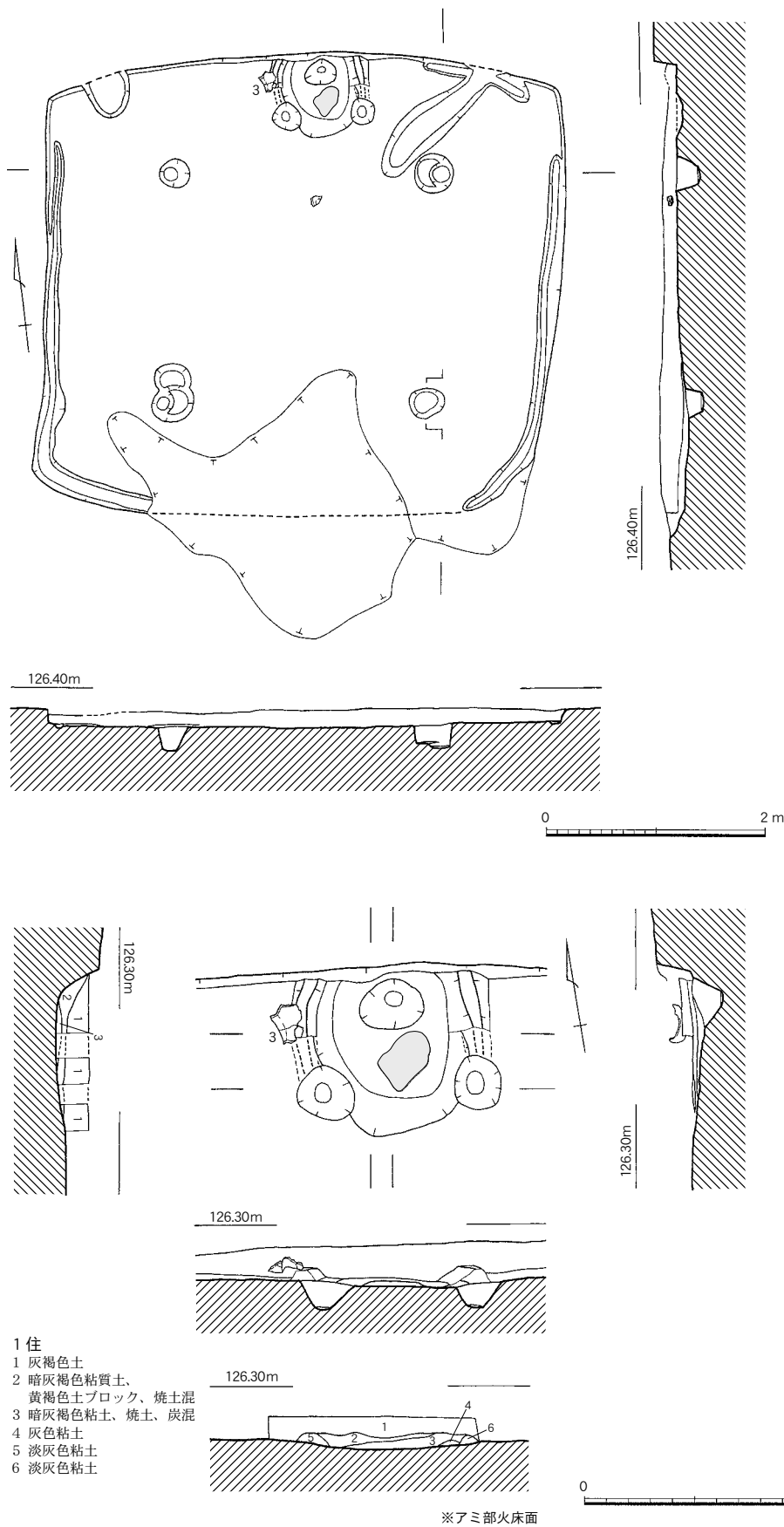


第4図 遺構配置図 (1/250)



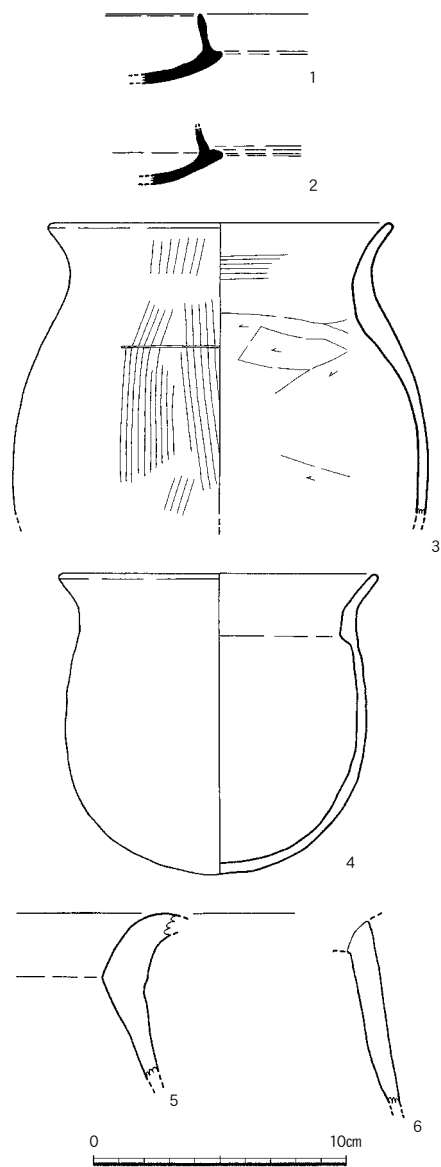
※ ①灰色系の砂質土層 (濃いトーン)  
 ②暗黄色系水田層 (薄いトーン)

第5図 調査区北側土層図 (1/60)



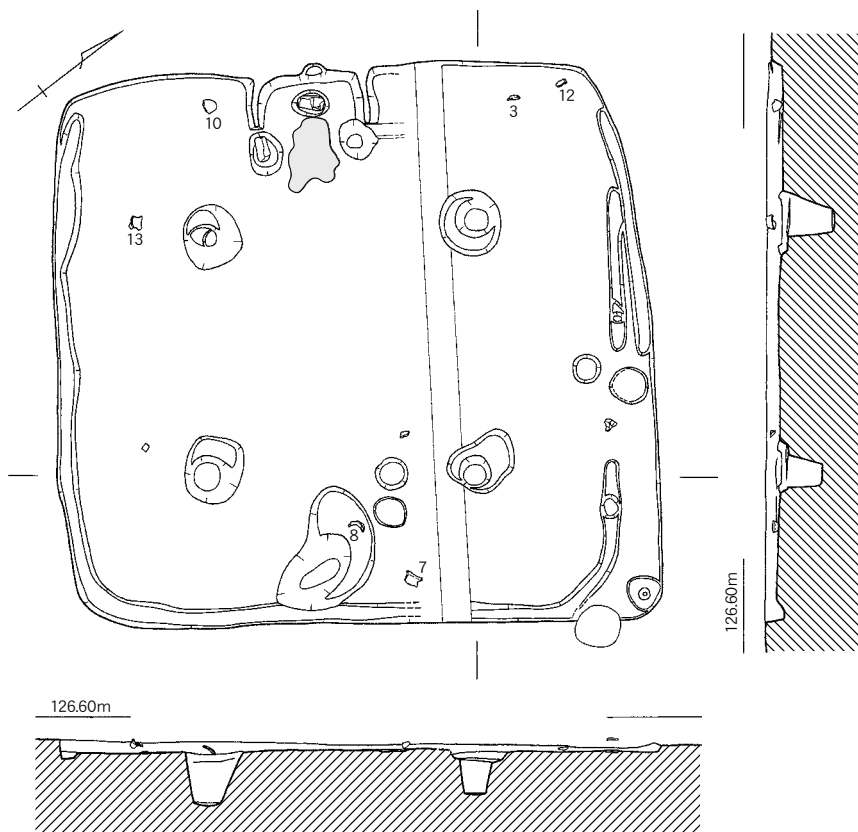
第6図 1号竪穴住居・カマド実測図 (1/60、1/30)

は8号住居を除いたほかは北あるいは西方向に揃っている。隣接する各調査区では古墳時代の住居がA区4軒・C区10軒・D区24軒確認されており、町ノ坪遺跡全体では約60軒を超える比較的規模の大きな集落であったものと想定される。なお、遺構番号は調査中に順次割振ったため、全体として不統一なものとなっている。



第7図 1号竪穴住居出土遺物実測図 (1/3)





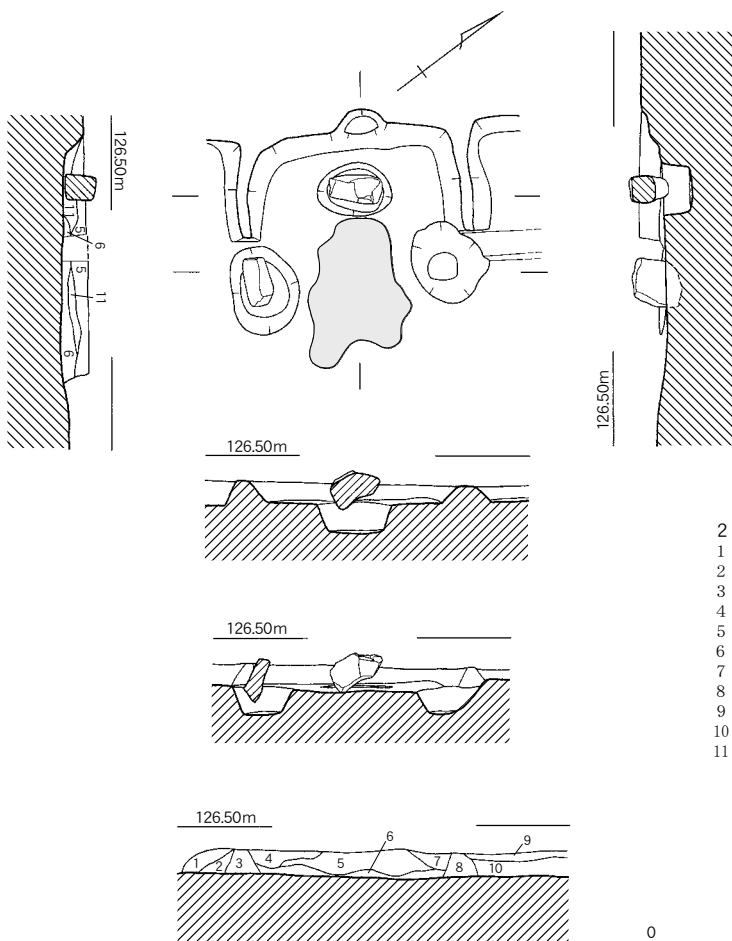
### 1号竪穴住居

(第6図、図版3)

調査区北側にて検出され、住居西壁に大幅な攪乱を受ける。確認面での規模は東西軸約4.7m、南北軸約4.2m、床面までの深さ約20cmを測り、方形を呈する。床面は地山整形で一部貼床による硬化が見られ、東西壁に周溝が巡る。深さ20cm程度の支柱穴が4穴確認される。

カマドは住居北壁内側に付設される。上面を破壊されているものの袖が残存し、両袖間の距離は約80cm、袖の長さは約40cmを測る。袖石の残存は見られなかったものの、深さ約10cmの抜取り痕跡が左右に見られた。カマド中央部は緩やかに窪んでおり、この中央部に火床面が見られた。火床面と壁との間に深さ約10cmの支脚抜取り痕跡が見られた。カマド左袖上面には甕が廃棄されており、カマド天井部を破壊した際の崩落土と想定される2・3層の存在からカマド祭祀の可能性が考えられる。

0 2m



### 2号A

- 1 暗褐色土、炭混
- 2 褐色土
- 3 暗灰色粘質土
- 4 灰褐色土
- 5 暗褐色土、炭混
- 6 灰褐粘質土、焼土混
- 7 灰褐色土
- 8 暗灰色粘質土
- 9 暗褐色土
- 10 褐色土
- 11 暗灰褐色土、炭多痕

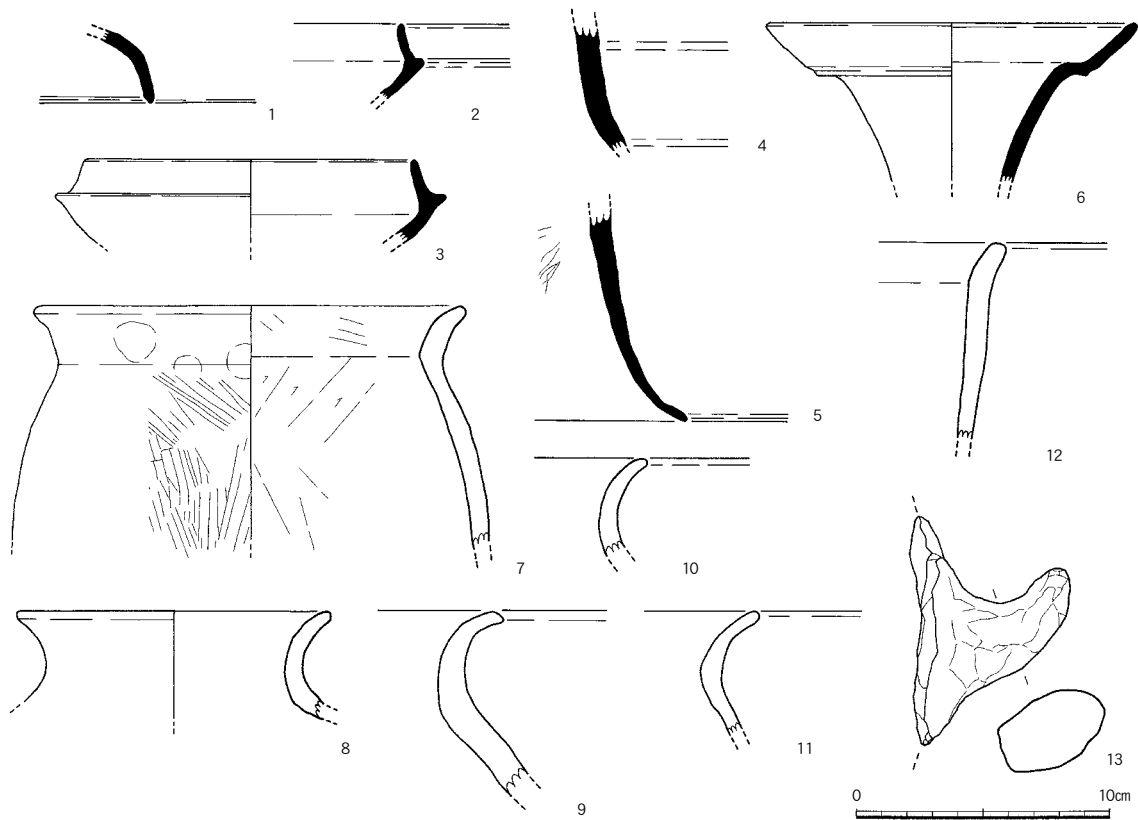
※アミ部火床面

### 出土遺物

(第7図、図版16)

1・2は須恵器坏身である。3はカマド上面より出土した土師器甕である。4はカマドより出土した小型甕である。5は土師器甕の口縁部、6は高坏の脚部である。

第8図 2号A竪穴住居・カマド実測図 (1/60、1/30)



第9図 2号竪穴住居出土遺物実測図(1/3)

#### 2号A竪穴住居(第8図、図版3)

調査区西側にて検出され、18・20号竪穴住居を切る。建替えが少なくとも2回以上あったものと考えられ、カマドなどをほぼ同じ位置に持つ小型の2号B住居を拡張して作られている。また、北壁側には壁周溝が2重に巡り建替えの可能性が想定される。確認面での規模は南北軸約4.8m、東西軸約4.5m、床面までの深さ約10cmを測り、方形を呈する。床面は地山整形で、2号B住居上面は一部貼床による硬化が見られ、東側を除く壁面には周溝が巡る。深さ40cm程度の支柱穴が4穴確認される。

カマドは住居西壁内側に付設される。上面を破壊されているものの袖が残存し、両袖間の距離は約80cm、袖の長さは約40cmを測る。袖石の残存は見られなかったものの、深さ約10cmの抜取り痕跡が左右に見られた。カマド中央部は緩やかに窪んでおり、この中央部に火床面が見られた。火床面と壁との間に深さ約10cmの支脚抜取り痕跡が見られた。カマド天井部を破壊した際の崩落土と想定される6層の存在からカマド祭祀の可能性が考えられる。

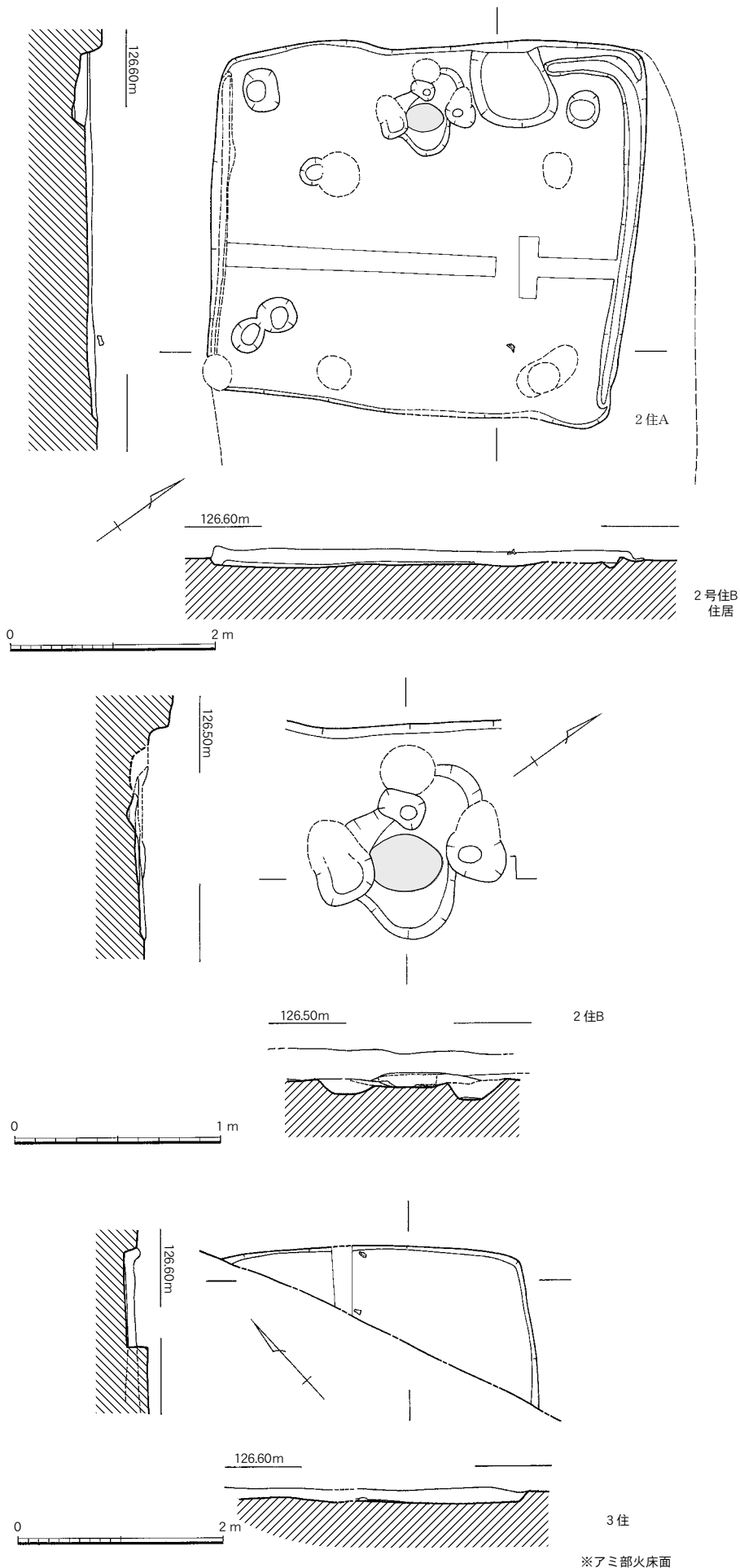
#### 2号B竪穴住居(第10図、図版4)

調査区西側にて検出され、18・20号竪穴住居を切り、2号A住居に切られ、中心軸は東西方向にあわせている。2号A住居拡張前の住居と想定される。確認面での規模は南北軸約4.2m、東西軸約3.7m、床面までの深さ約10cmを測り、方形を呈する。床面は地山整形で、南北両壁面には周溝が巡る。支柱穴は確認出来なかった。

カマドは住居西壁内側に付設される。大半が破壊を受けており残存状況が悪いものの、火床面及び両袖石・支脚の抜取り痕跡が確認された。カマド中央部が窪んでおり、抜取り痕跡間の距離は約60cm、壁からは約70cmを測る。

#### 出土遺物(第9図、図版16)

4のみが2B住居の出土である。1は須恵器坏蓋である。2・3は須恵器坏身である。4・5は須恵器高坏の脚部である。6は須恵器甗である。7～11は土師器甕で口縁部は緩やかに外湾する。12は土師器甗である。13



は土師器甕の把手か。

### 3号竪穴住居 (第10図、図版4)

調査区南西端にて検出され、大半が調査区外へと広がる。6号住居を切っている。確認面での規模は東西軸約3m+ $\alpha$ 、南北軸約1.5m+ $\alpha$ 、床面までの深さ約15cmを測り、方形を呈する。床面は地山整形で確認範囲内に支柱穴は見られなかった。遺物は図化不能の小破片が出土した。

### 4号竪穴住居 (第11図、図版4)

調査区北側にて検出され、住居西壁に大幅な攪乱を受ける。確認面での規模は東西軸約3.8m、南北軸約3.4m、床面までの深さ約20cmを測り、方形を呈する。床面は地山整形で、支柱穴・カマドは確認出来なかった。南壁やや西側に焼土・炭が飛散した箇所が検出され、その周辺には土器片が散乱しており、廃絶時の祭祀痕跡の可能性が考えられる。

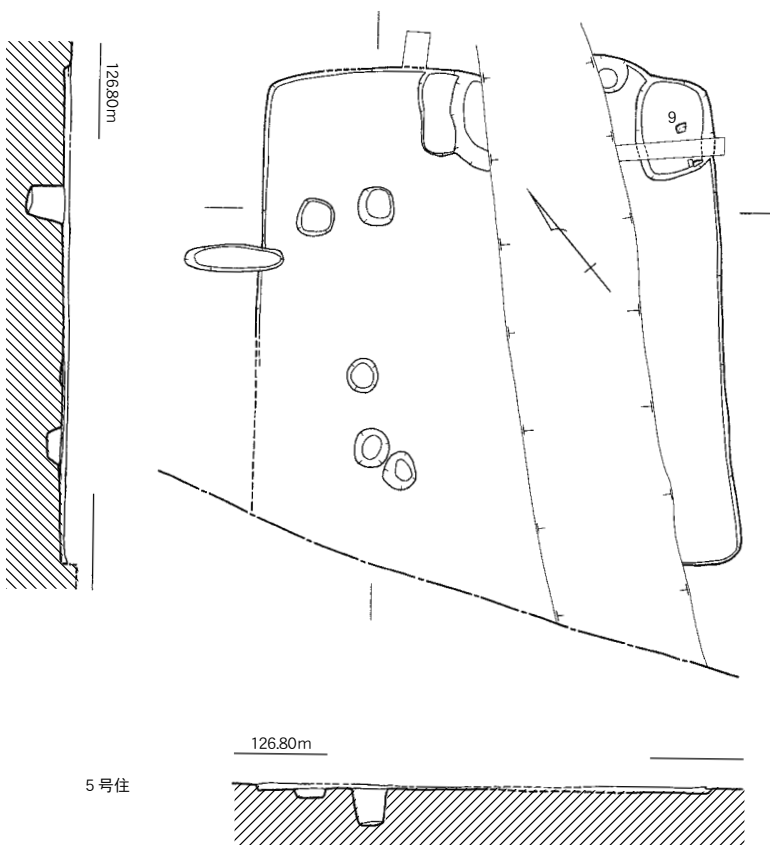
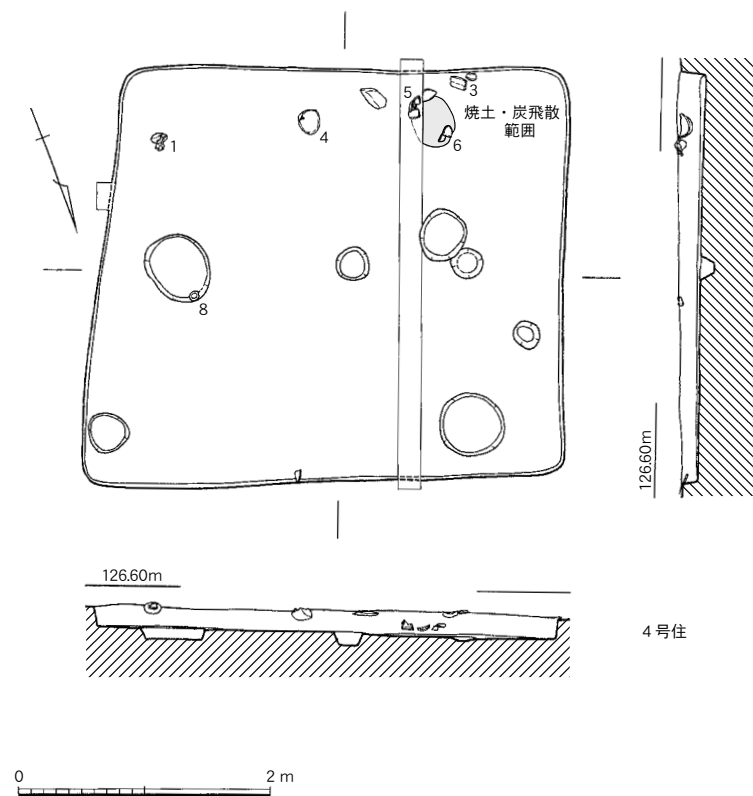
### 出土遺物 (第13図、図版16)

1は須恵器甕である。頸部は短く、口縁下部及び胴部文様帯に櫛描列点文が巡る。2は須恵器坏身である。3は土師器甕で、口縁部が緩やかに外湾する。4は土師器甕である。やや大型の鉢状を呈し、底部中央に1穴が開けられる。5は土師器碗で、やや底の深い器形を呈する。6は高杯の坏部か。7は碗か鉢の口縁部である。8は手捏土器破片である。

### 5号竪穴住居 (第11図、図版4)

調査区南側にて検出され、中央部に水田畦畔作成時の大幅な攪乱を受け、8号住居を切る。確認面

第10図 2号B竪穴住居・カマド実測図・3号竪穴住居実測図 (1/60、1/30)



第11図 4・5号竪穴住居実測図 (1/60)

面までの深さ約15cmを測り、方形を呈する。床面は地山整形で、東壁一部に周溝が巡る。深さ40cm程度の支柱穴が4本確認される。

での規模は東西軸約3.8m、南北軸約3.7m、床面までの深さ数cmを測り、方形を呈する。床面は地山整形で、北東隅に屋内土坑と想定される浅い窪みが確認された。深さ30cm程度の支柱穴が西側に2穴確認され、東側は削平のため確認出来ない。カマドの明瞭な痕跡を確認出来ないものの、北壁中央部には窪み状の落ち込みが確認されており、カマドの可能性が想定される。

**出土遺物 (第13図、図版16)**

9は須恵器坏身である。10は土師器甕の口縁部である。

**6号竪穴住居 (第6図、図版5)**

調査区南西端にて検出され、大半が調査区外へと延び、3号住居跡に切られる。確認面での規模は東西軸約5.3m、南北軸約2.5m +  $\alpha$ 、床面までの深さ数cmを測り、方形を呈する。床面は地山整形で、東壁に周溝が巡る。深さ40cm程度の支柱穴が東側に1穴確認された。

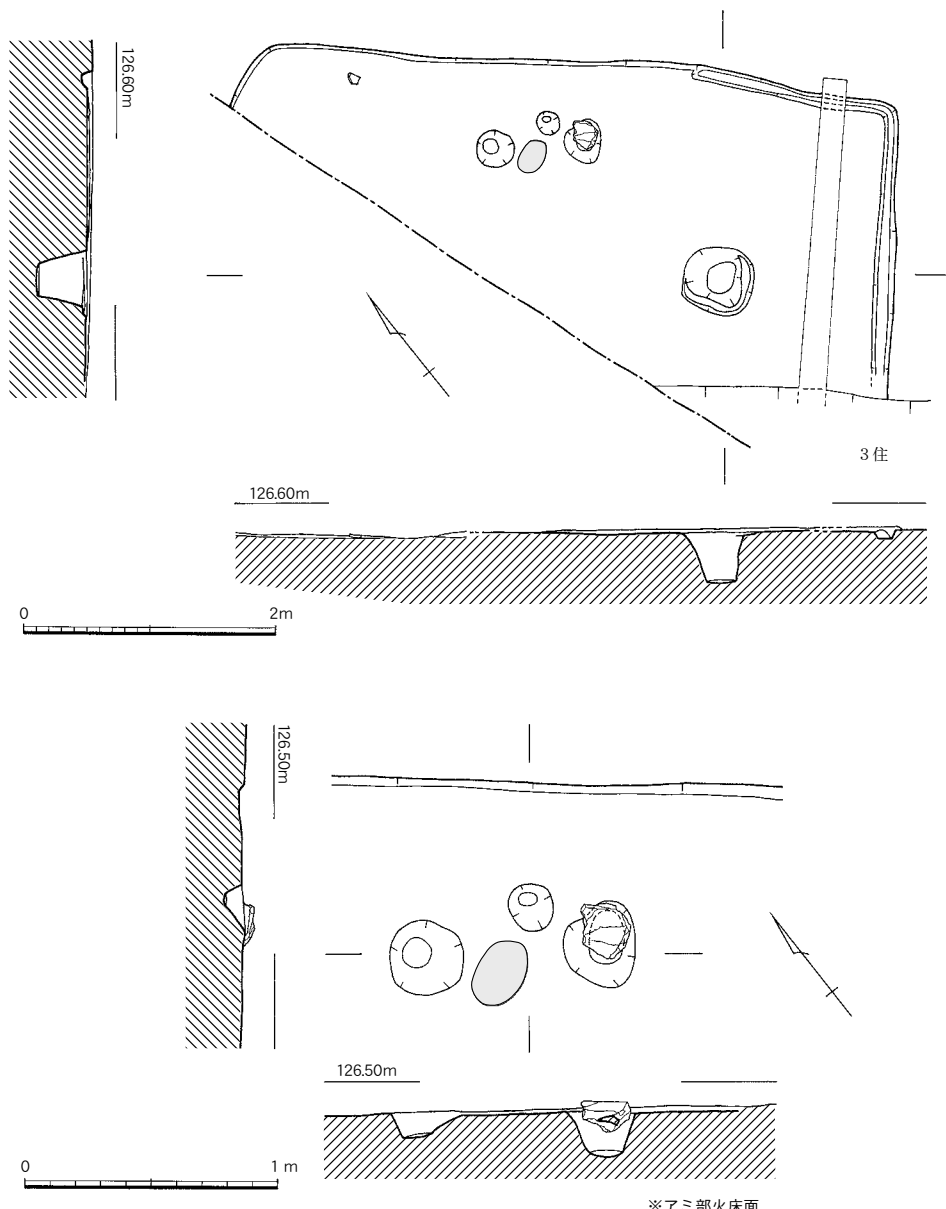
カマドは住居北壁内側に付設される。大幅に破壊されているものの火床面や袖石抜き痕が確認された。東側の抜き痕には安山岩製の袖石が引き倒されて残存しており、西側には深さ10cm程度の抜き痕跡が見られた。両袖間の距離は約75cm、袖の長さは約70cmを測る。両袖の間やや西よりに火床面が見られ、火床面の直上に深さ約10cmの支脚抜き痕跡が見られた。

**出土遺物 (第13図、図版16)**

11は土師器小型壺で、12は土師器椀である。口縁部は小さく外反する。

**7号竪穴住居 (第14・15図、図版5)**

調査区東側にて検出され、南側は削平を受け、21号土坑に切られる。確認面での規模は南北軸約5.5m、東西軸約5m、床



第12図 6号竪穴住居・カマド実測図 (1/60、1/30)

カマドは住居北壁内側に付設される。比較的残存状況も良好で、暗黄褐色粘土を塗りこんだ両袖とその先端には凝灰岩製の袖石が確認された。両袖間の距離は約70cm、袖の長さは約70cmを測る。両袖の間に火床面が見られ、火床面の北側に安山岩製の支脚が残存していた。カマド奥には煙道の下部が約1m程残存し、カマドの手前約1.3mの位置には凝灰岩製の天井石が引き倒されており、天井石とカマドの間の床面には土器が散乱していた。火床面直上には一部天井崩落と見られる粘土が薄く乗っており、その上層には破壊に伴う崩落土などは検出できていない。また

支脚周辺には甕や須恵器の大きな破片が床面より浮いた状態で検出された。

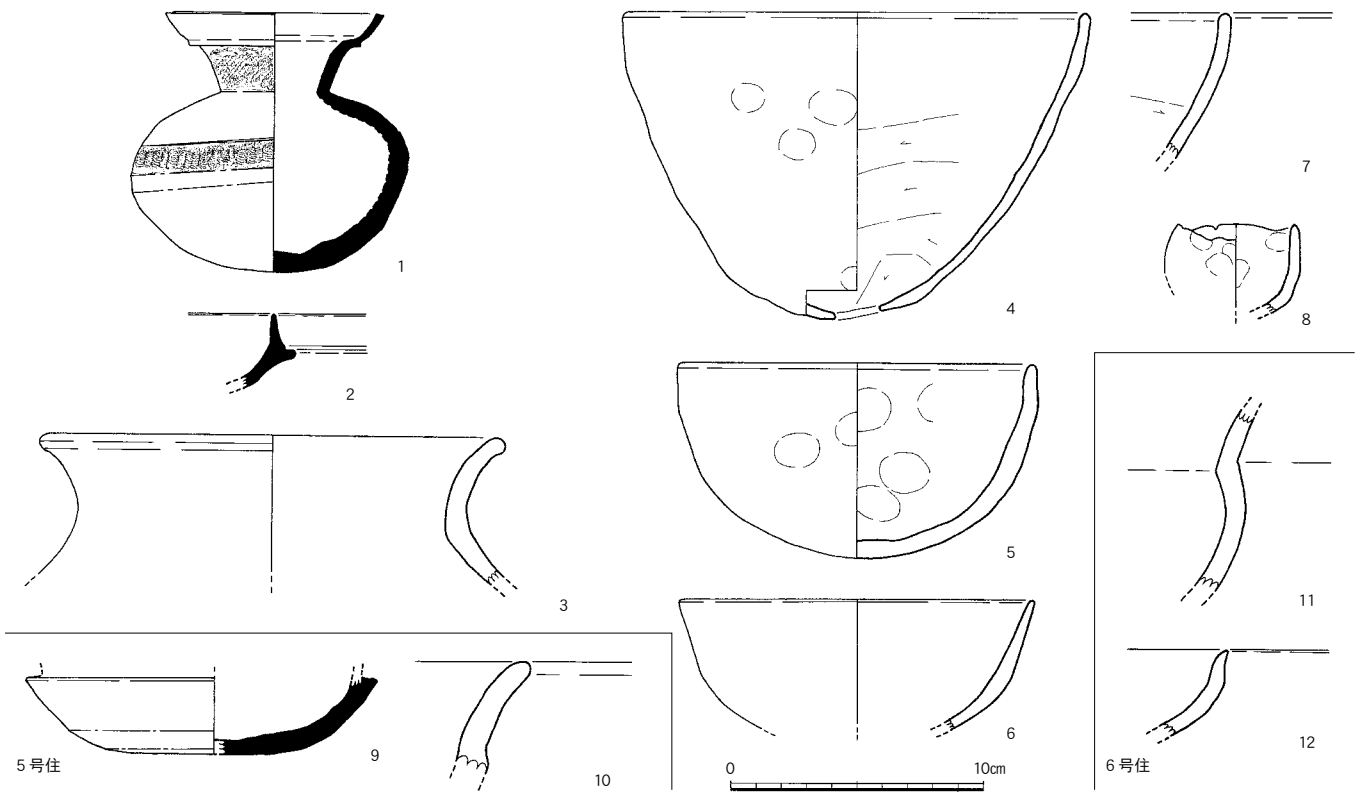
カマド構造物の残りが比較的良好で、カマドが上部の圧力により破壊されていないこと。天井石が大きく手前に引き倒されていることやカマド中央部とカマド手前に土器が廃棄されていることなどから、カマド祭祀が行われたものの、丁寧に解体もしくは破壊後に掃除が行われた可能性が高く、その後に祭祀遺物を廃棄したものと考えられる。なお、カマド内部に関しては2層の堆積と遺物の出土状況から埋め戻しが行われた可能性がある。

#### 出土遺物 (第16図、図版16)

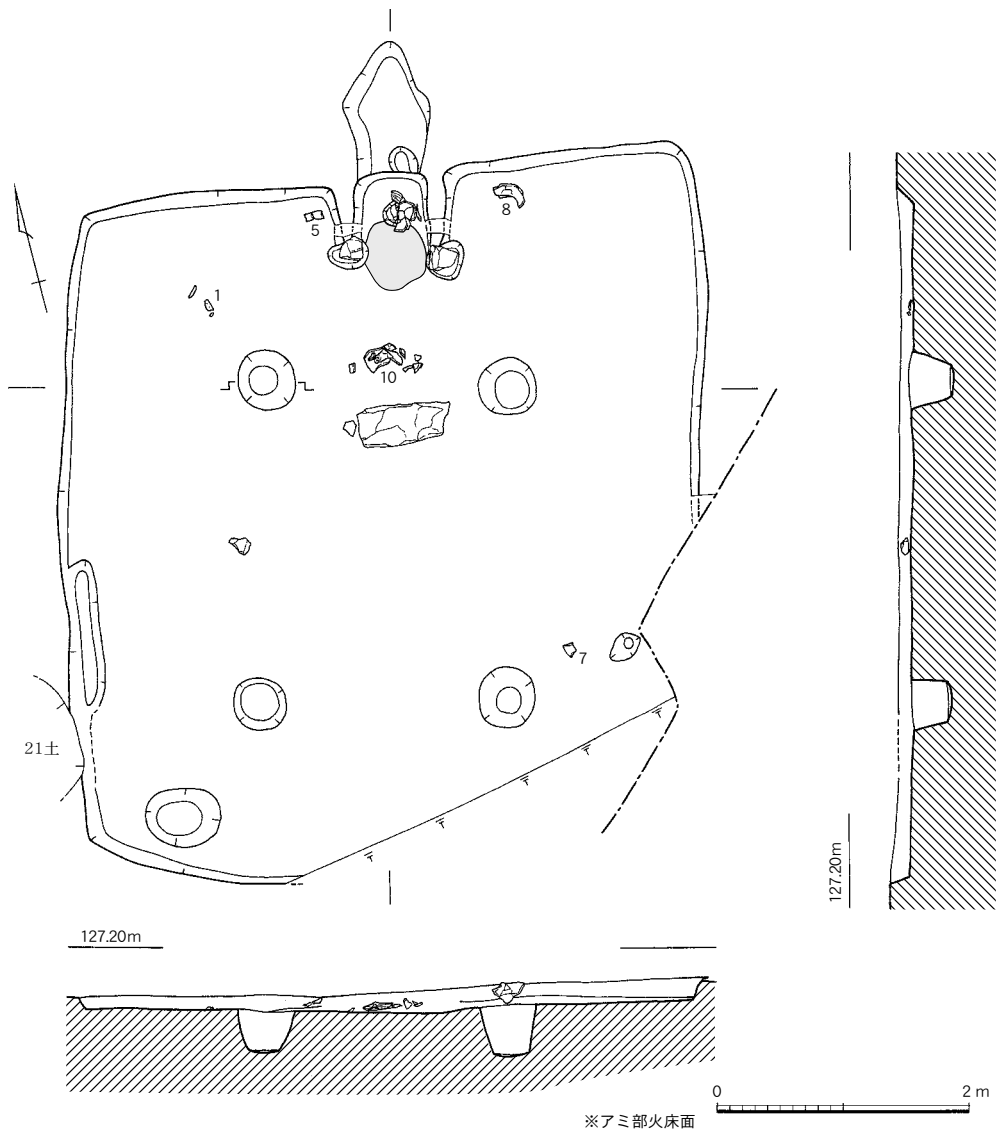
1は須恵器坏蓋である。口縁部内面に段を有する。2は須恵器坏身である。口縁部は内傾しており、体部内面には「井」状のヘラ記号が施される。3～8は土師器甕である。3・4・6・7の口縁部は直口してから外に開く。5は小型甕で口縁部は直立する。8は口縁部が直立する。9は丸底の底部である。10は土師器甕で、胴部に袖の痕跡が見られる。11は牛角状の把手である。12は不明土製品である。円盤状を呈しており、中心より下部に穴が開けられる。比較的焼成も悪く、用途不明である。2～4・9がカマドより出土した。

#### 8号竪穴住居 (第17図、図版5)

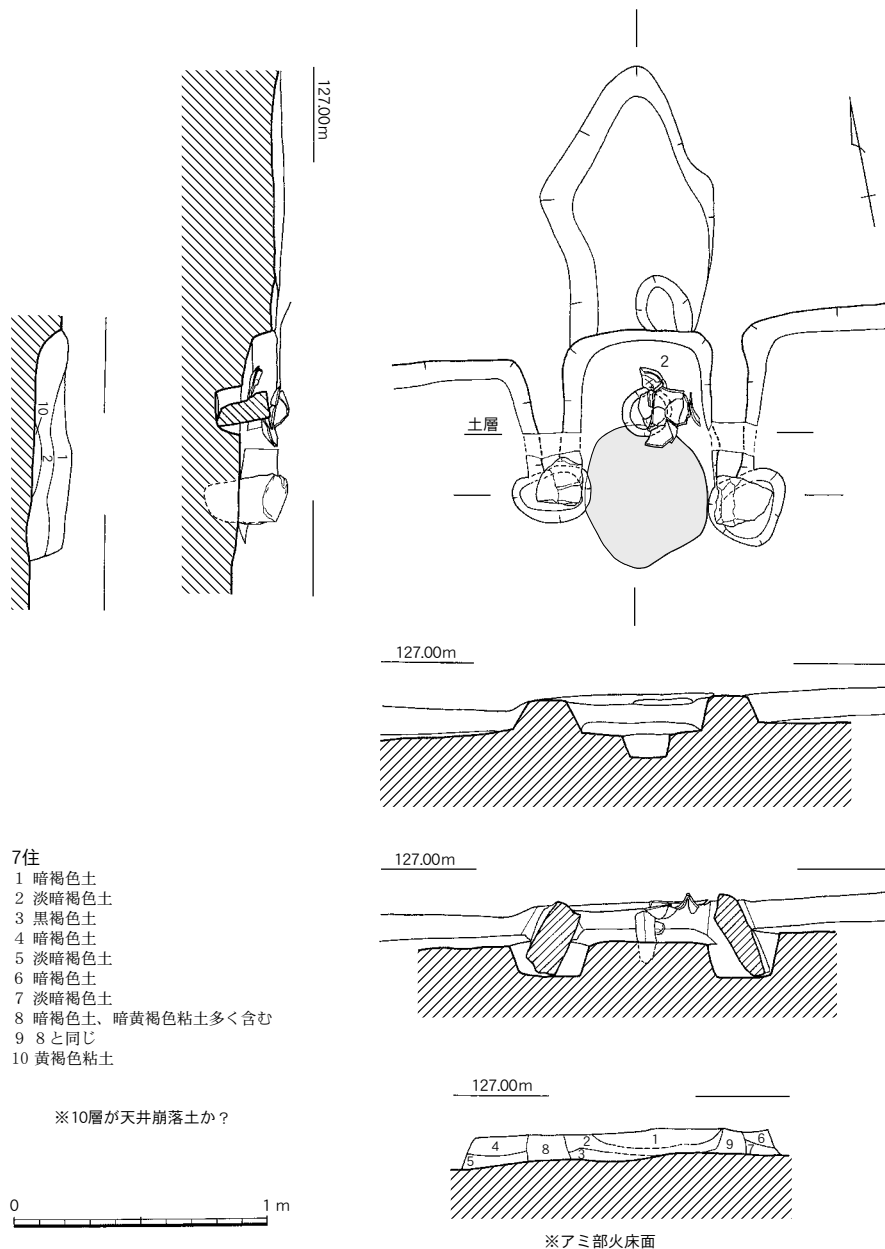
調査区南側にて検出され、中央部に水田畦畔作成時の大幅な攪乱を受ける。5号住居跡に切られ、22号住居



第13図 4・5・6号竪穴住居出土遺物実測図 (1/3)



第14図 7号竪穴住居実測図 (1/60)



第15図 7号竖穴住居カマド実測図 (1/30)

を切る。確認面での規模は東西軸約4.2m、南北軸約4.1m、床面までの深さ数cmを測り、方形を呈する。床面は地山整形で、南東隅、北壁中央部に屋内土坑が作られている。深さ25cm程度の支柱穴が4本確認される。

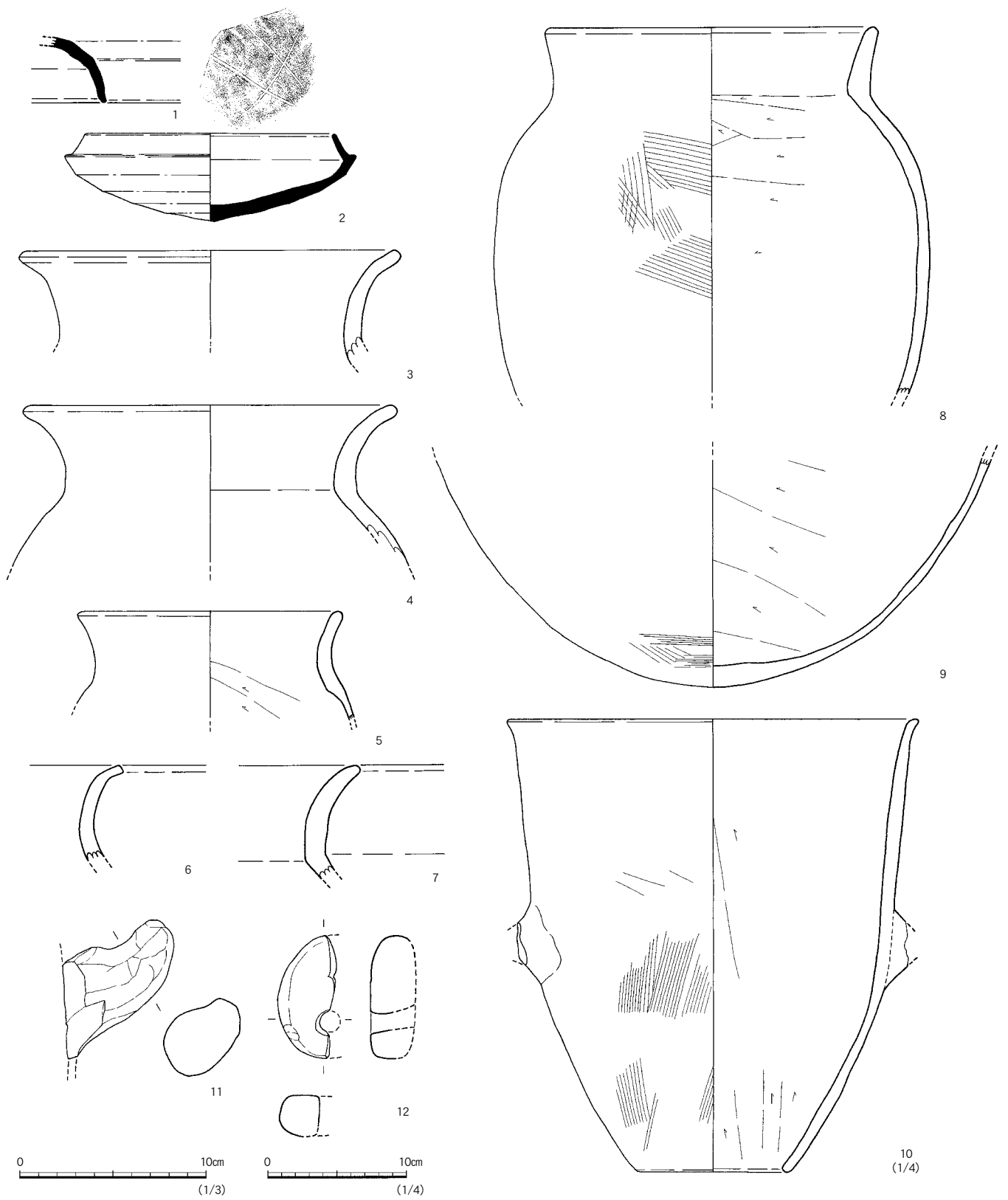
カマドは住居東壁内側に付設される。残存状況は不良であるが、袖が浅く残存し、やや離れて深さ10cm程度の両袖石抜き痕が見られた。両袖間の距離は約60cm、袖の長さは約80cmを測り、奥壁部はやや住居より外に張り出している。両袖抜き痕の間に火床面が見られ、火床面の東側に凝灰岩製の支脚が残存していた。

#### 出土遺物 (第18図、図版16)

1～3は土師器甕である。1・2の口縁部は小さく外に開く。4は小型甕である。5は高杯の坏部である。小さく外反する。

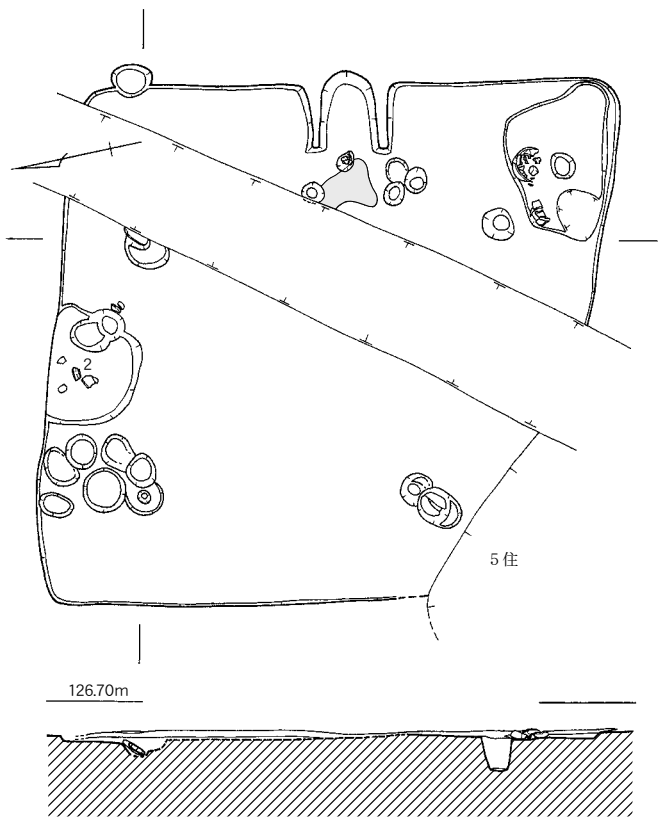
#### 9号竖穴住居 (第19図、図版6)

調査区東側にて検出され、大半が攪乱を受け、10号住居を切っており、中心軸は南北方向にあわせている。確認面での規模は南北軸約2.7m +  $\alpha$ 、東西軸約6m、床面までの深さ数cmを測り、方形を呈する。床面は地山

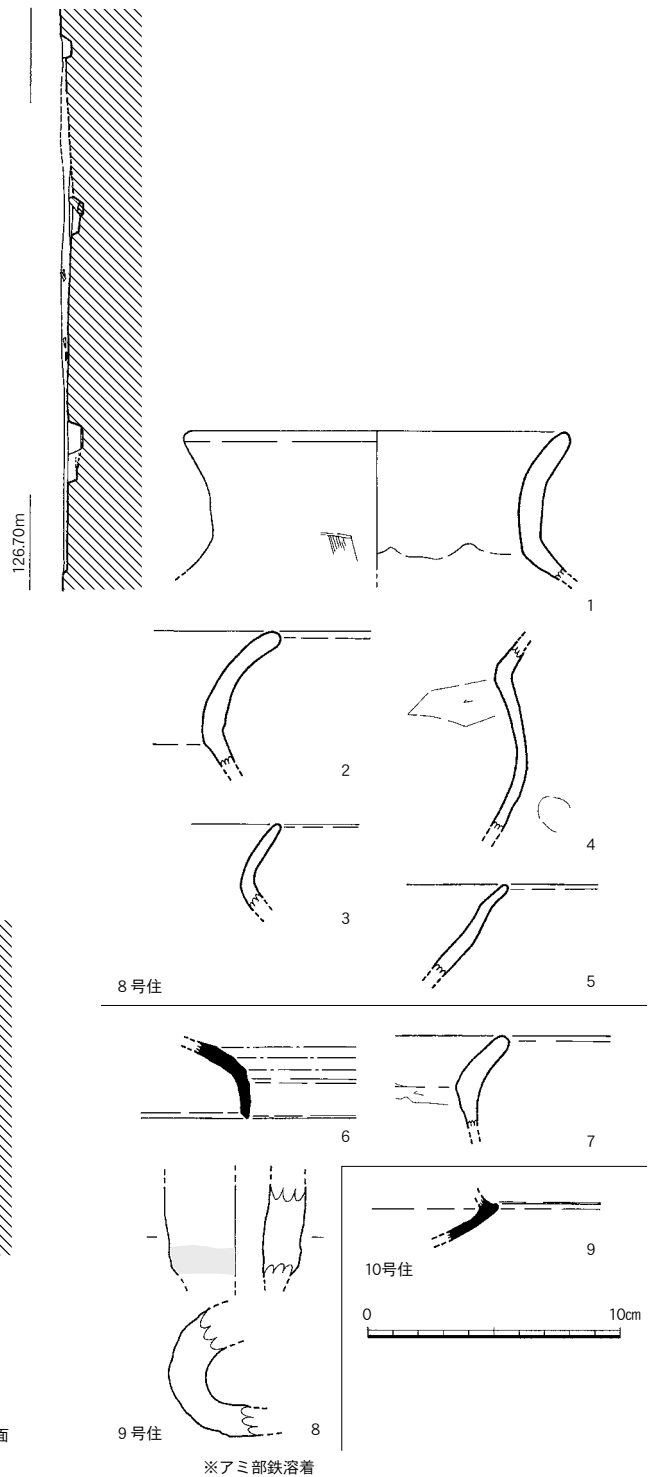


第16图 7号竖穴住居出土遺物実測図(1/3)





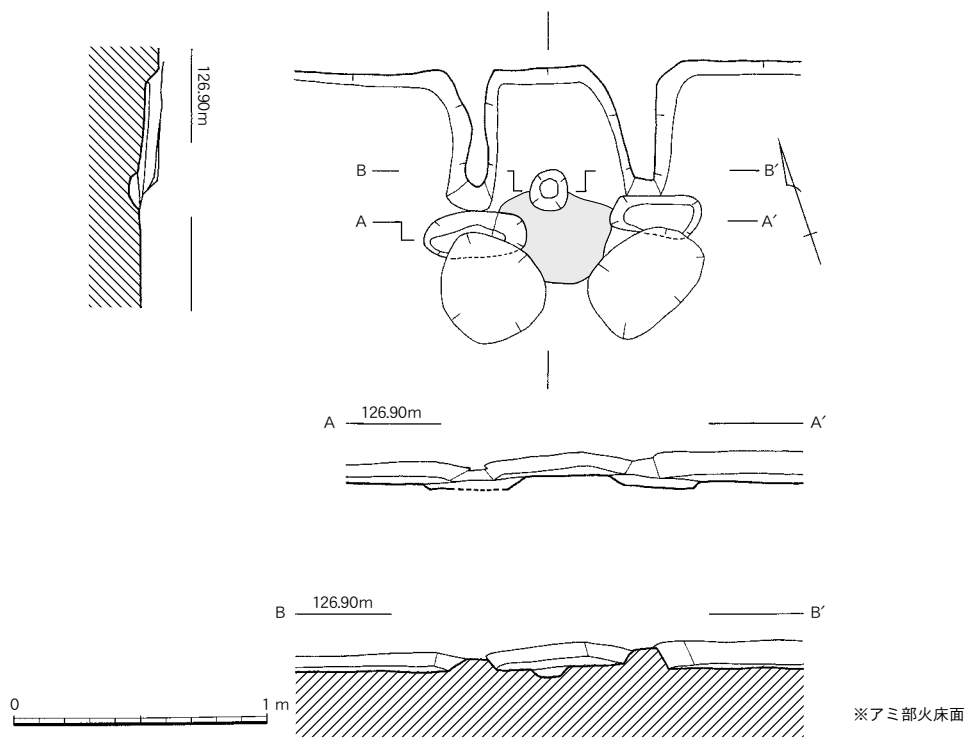
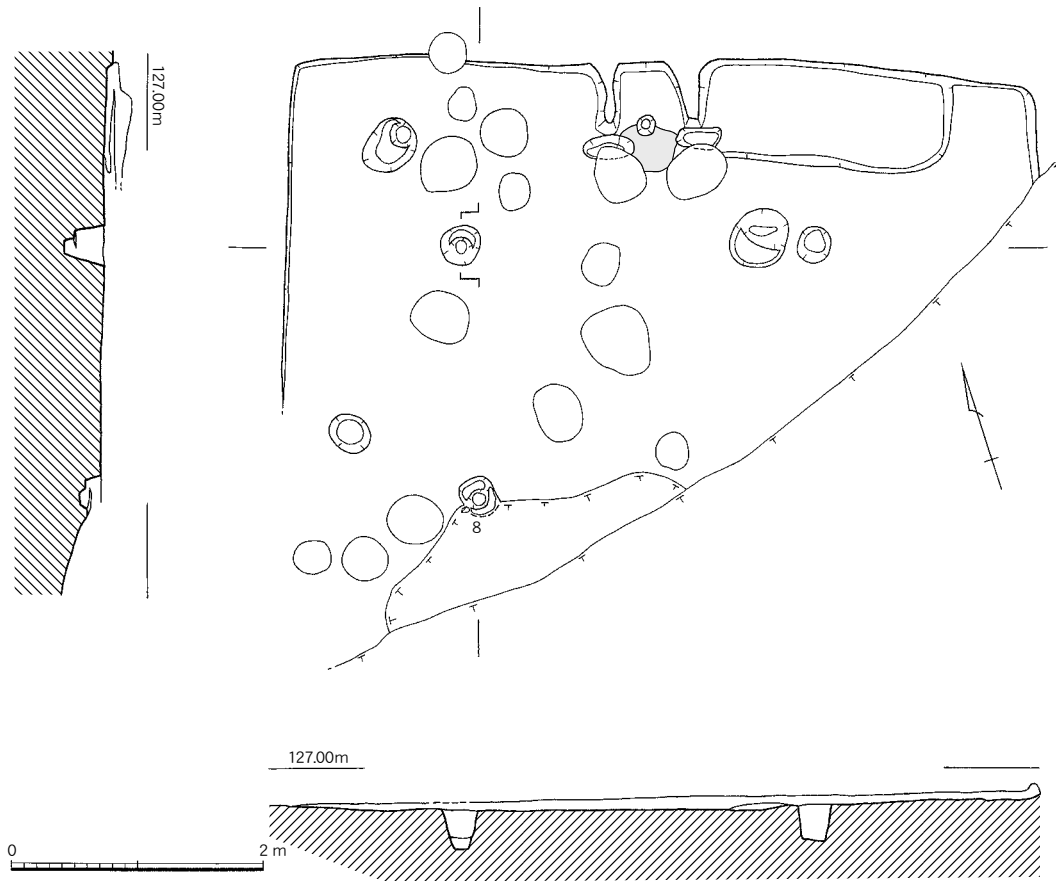
第17図 8号竪穴住居・カマド実測図 (1/60、1/30)



第18図 8～10号住居出土遺物実測図 (1/3)

整形で、カマド右側に屋内土坑が作られている。深さ30cm程度の支柱穴が調査区外の南東側を除いて3本確認された。

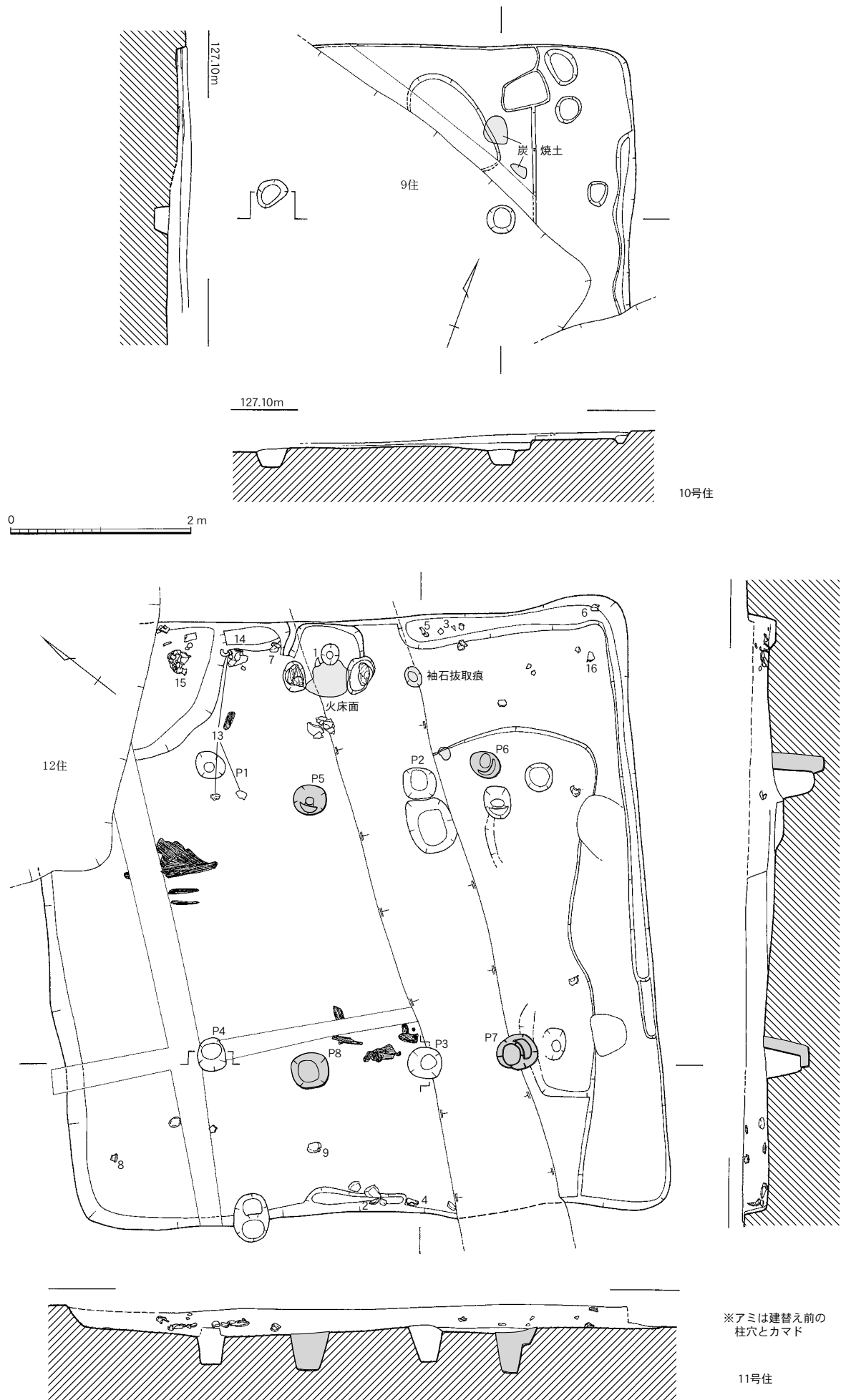
カマドは住居北壁内側に付設される。残存状況は不良であるが、袖が浅く残存し、深さ数cm程度の両袖石抜き取り痕が見られた。両袖間の距離は約70cm、袖の長さは約60cmを測る。両袖抜き取り痕の間に火床面が見られ、火床面の東側には支脚の抜き取り痕が見られた。



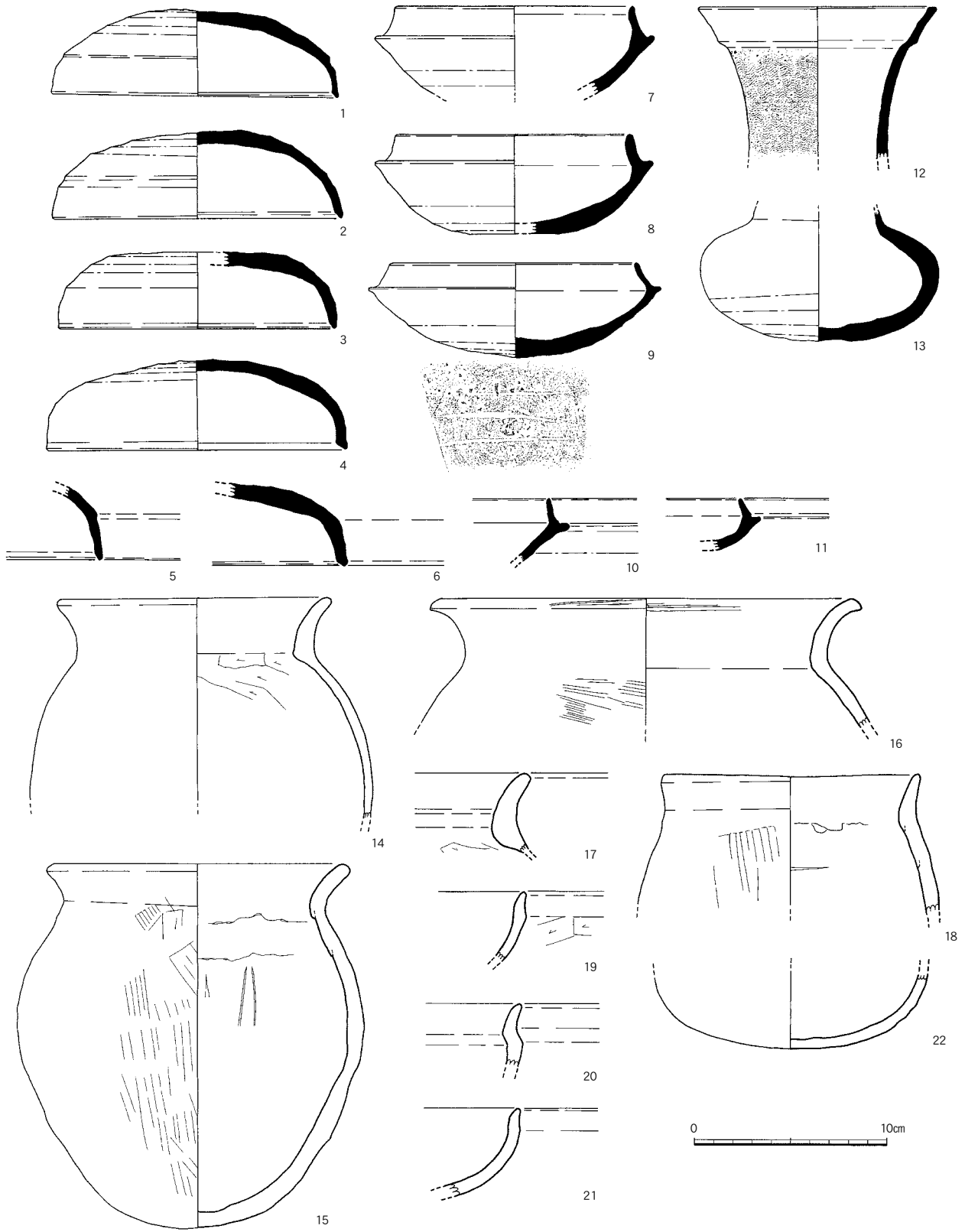
第19図 9号竪穴住居・カマド実測図 (1/60、1/30)

出土遺物 (第18図、図版16)

6は須恵器坏蓋である。口縁部内面に段を有する。7は土師器甕である。8は鞆羽口である。破片であるが、径は5cm強を測り、先端部には鉄が溶着している。



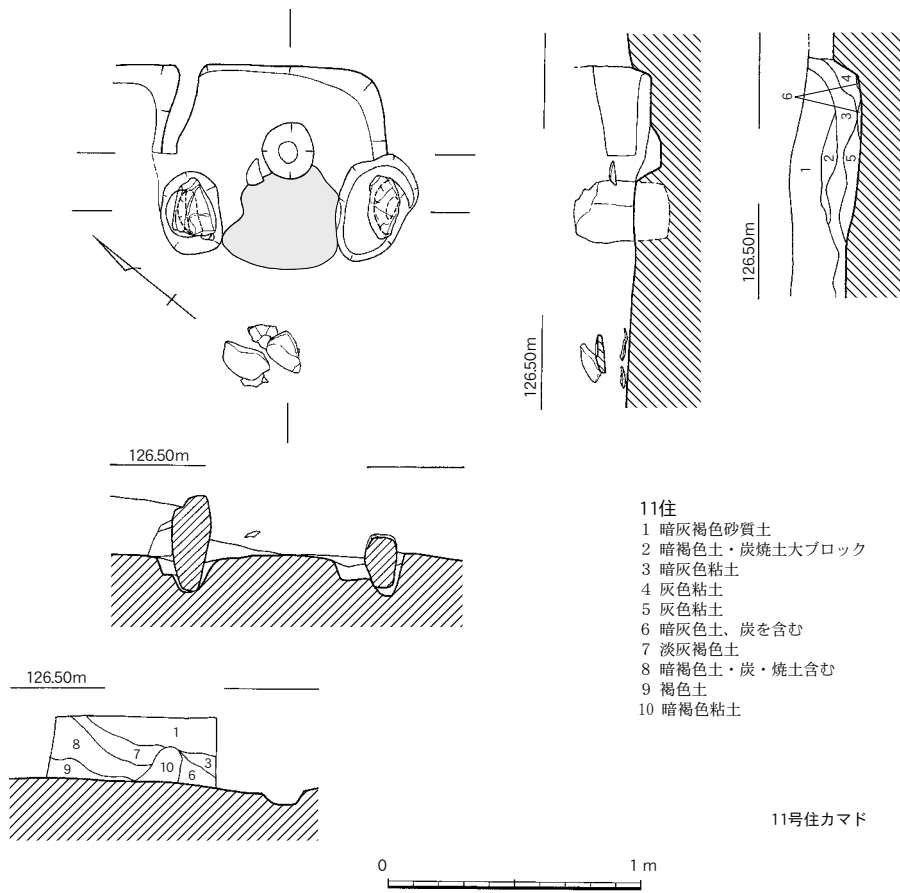
第20図 10・11号竪穴住居実測図 (1/60)



第21図 11号竪穴住居出土遺物実測図 (1/3)

10号竪穴住居 (第20図、図版6)

調査区東側にて検出され、東半が攪乱を受け、9号住居に切られる。確認面での規模は南北軸約3m + α、東西軸約3.5m + α、床面までの深さ数cmを測り、方形を呈する。床面は地山整形で、東側にはベッド状の段が作



られ東壁際には周溝が巡る。中央部に浅い土坑状の落ち込みが見られ、この土坑の周囲に焼土や炭が広がっており、炉の可能性が考えられる。深さ20cm程度の支柱穴が9号住居の部分より検出されており、2本柱の建物構造と考えられる。構造的な特徴などから、弥生～古墳前期の竪穴住居の可能性が考えられる。

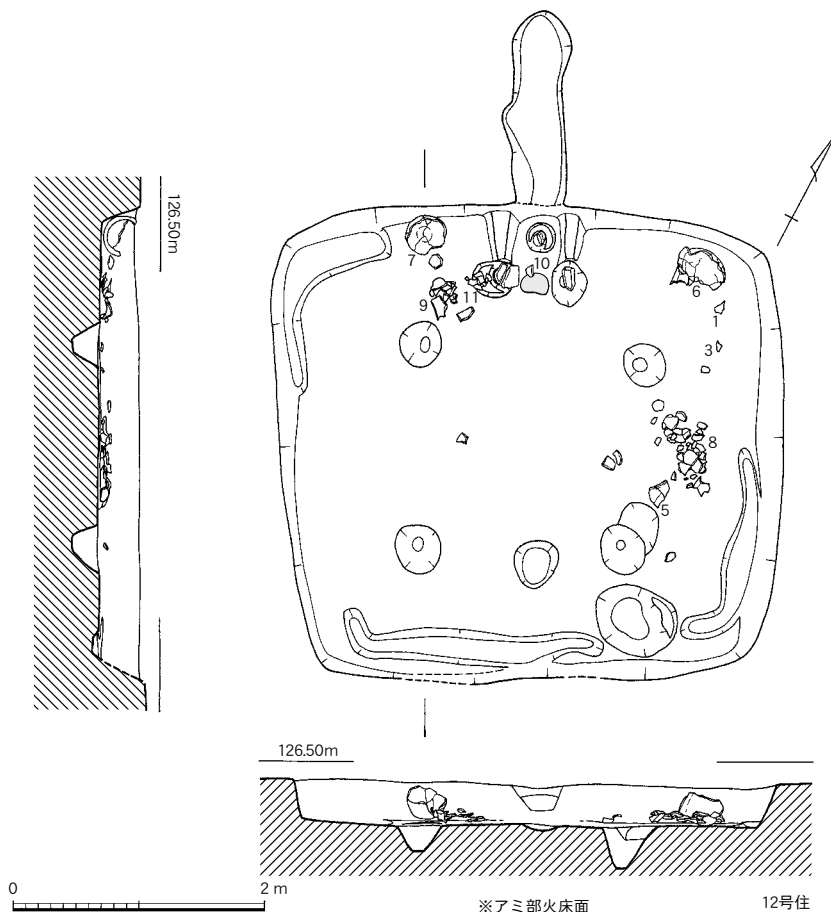
#### 出土遺物 (第18図)

9は須恵器坏身である。埋土中の出土で、隣接する9号住居の遺物を混入して取り上げた可能性が高い。

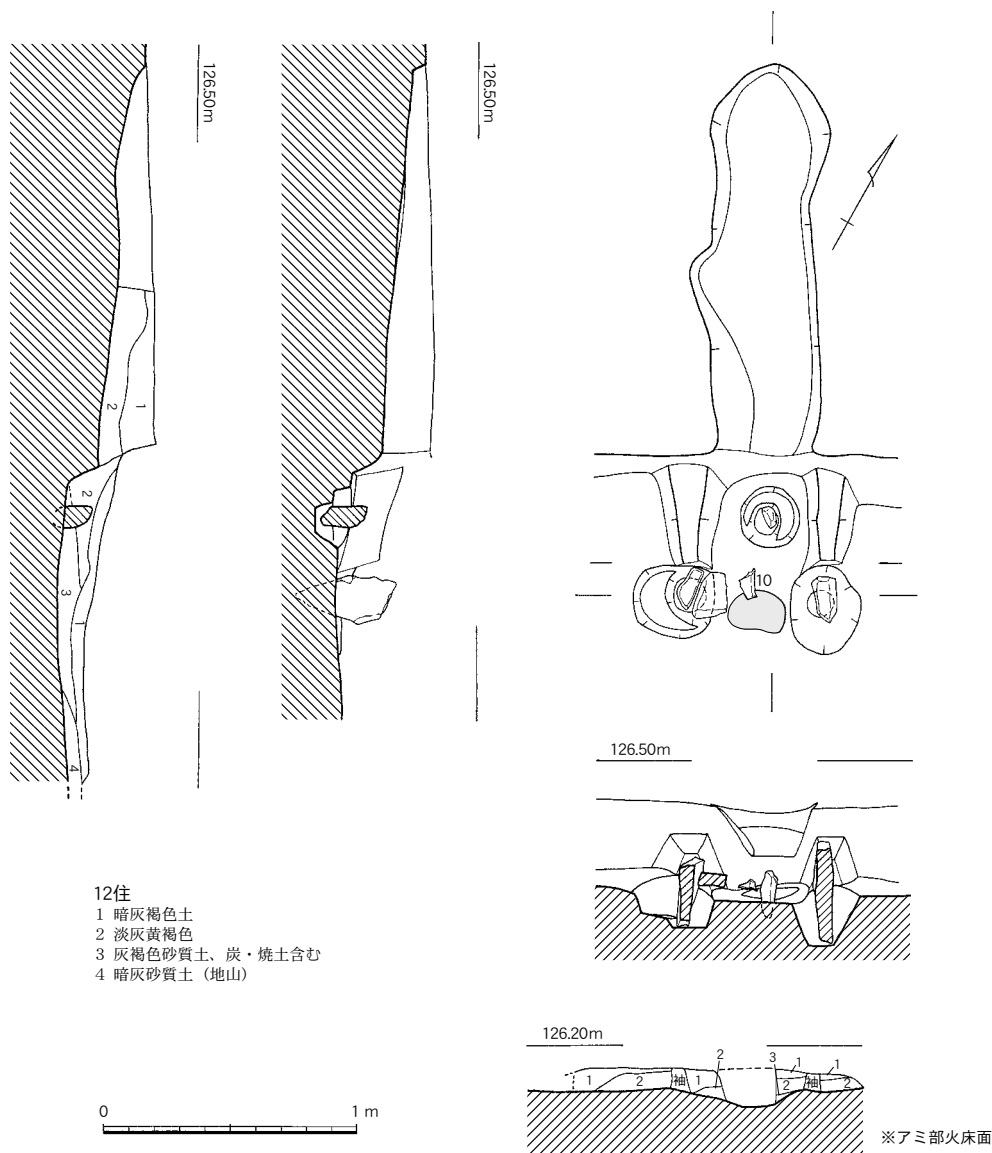
#### 11号竪穴住居

(第20図、図版6・7)

調査区中央部にて検出されている大型の住居跡で、中央部を水田畦畔作成により大幅に攪乱を受けている。23号住居を切っており、12・13号住居に切られる。確認面での規模は南北軸約6.7m、東西軸約6.7m、床面までの深さ約30cmを測り、方形を呈する。床面は地山整形で、一部貼床が見られ、カマド左側に屋内土坑が作られている。この屋内土坑周辺及びカマド右側に土器の散乱が見られた。また住居跡南壁側の壁面にやや浮いた状態で遺物が集中していた点が特徴的で、住居廃絶行為に伴う祭祀の可能性が指摘出来る。南東側にはL字状にベッド状の小さな段が見られ、北東壁には周溝が



第22図 11号竪穴住居カマド・12号竪穴住居実測図 (1/30、1/60)



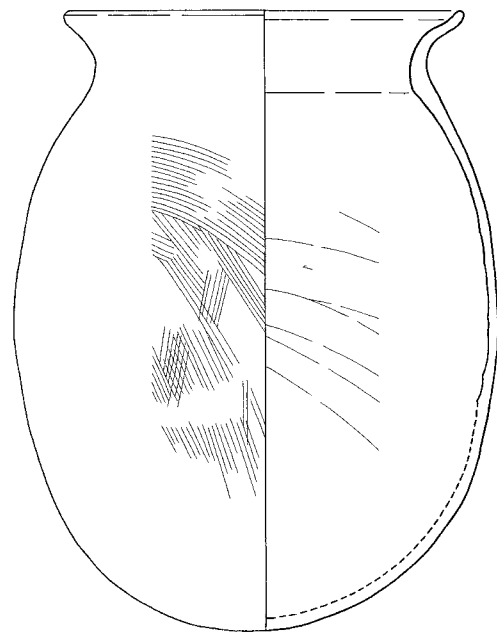
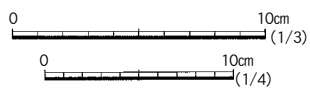
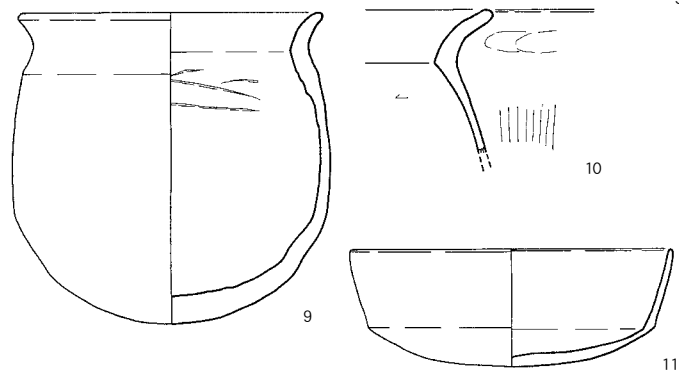
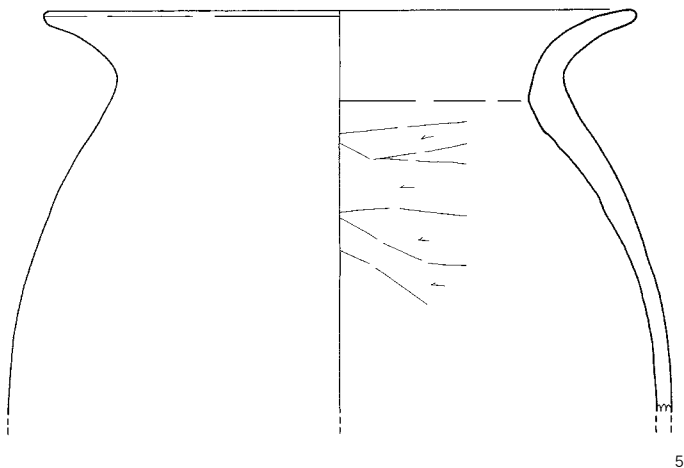
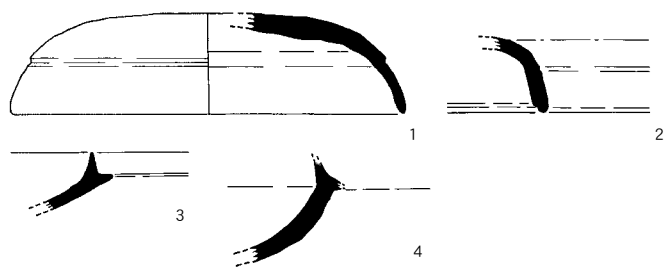
第23図 12号竪穴住居カマド実測図 (1/30)

巡る。また住居跡西壁側及び中央部付近には壁材と想定される炭が見られた。廃絶前に火災を受けた可能性が想定される。主柱穴は深さ40cm程度の1～4とそれよりやや東側に軸をずらした5～8の計8本が確認される。当初5～8が作られ、その後やや西側に住居跡を拡張して1～4の柱穴が掘り込まれたものと想定される。そのため、当初の住居に伴うカマド痕跡と想定される右袖石抜き取り痕が60cm程離れて残存していた。このことから、ベッド状の段も住居跡拡張に伴う可能性が考えられる。

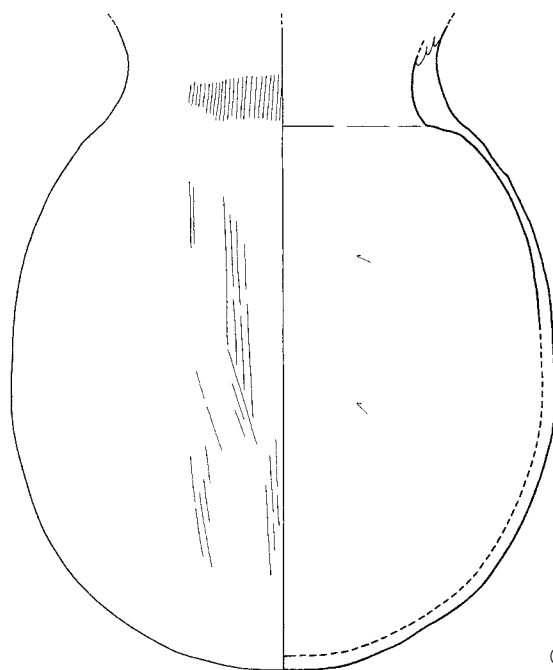
拡張後のカマドは住居北壁内側に付設される。残存状況は攪乱のため不良であるが、褐色粘土による左袖の残りは良好で、凝灰岩製の袖石が両袖に残存していた。両袖間の距離は約70cm、袖の長さは約50cmを測る。両袖石の間に火床面が見られ、火床面の北側には深さ10cm程度の支脚の抜き取り痕が見られた。カマドの埋土のうち2～5層が天井崩落土と考えられ、袖は高さ15cm程度しか残存していないことなどからも、カマド祭祀に伴う破壊が行われた可能性が高い。

#### 出土遺物 (第21図、図版17)

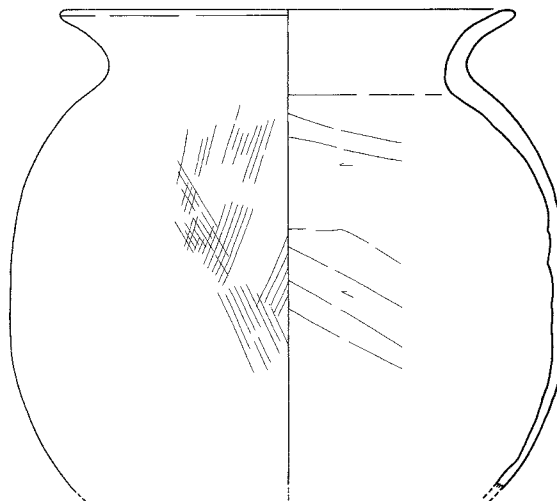
1～6は須恵器坏身である。いずれも口唇部内面に段を有し、体部との境に稜を持つものが見られる。7～11は須恵器坏身である。口縁部はやや長く伸び、内側に傾くものも見られる。うち9には体部外面に「三」のヘラ記号が施される。12は須恵器器底である。口縁部下半には櫛描波状紋が施される。13は須恵器器底である。14～17



6  
(1/4)

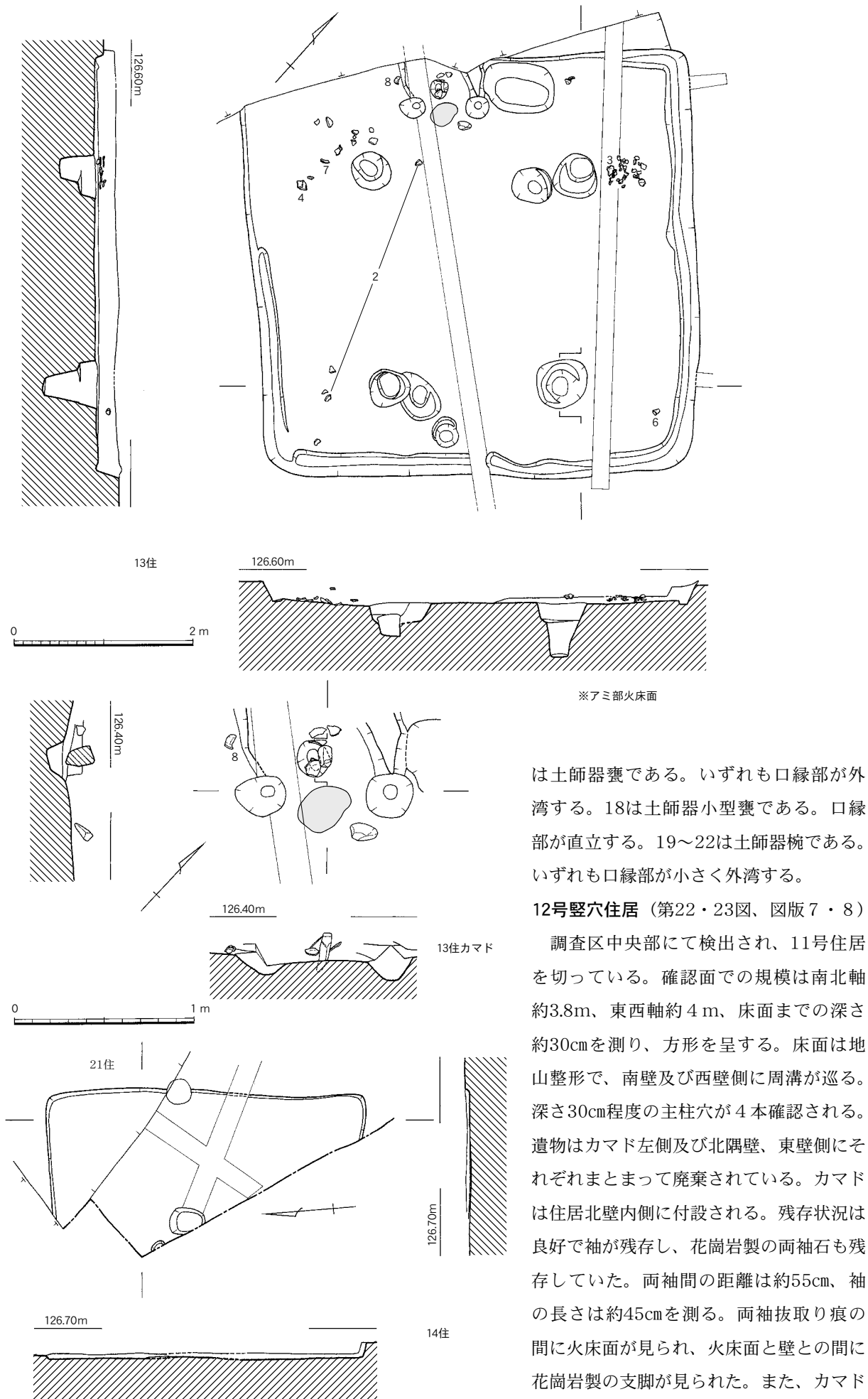


7  
(1/4)



8  
(1/4)

第24図 12号竪穴住居出土遺物実測図 (1/3・6～8のみ1/4)



は土師器甕である。いずれも口縁部が外湾する。18は土師器小型甕である。口縁部が直立する。19～22は土師器碗である。いずれも口縁部が小さく外湾する。

**12号竪穴住居 (第22・23図、図版7・8)**

調査区中央部にて検出され、11号住居を切っている。確認面での規模は南北軸約3.8m、東西軸約4m、床面までの深さ約30cmを測り、方形を呈する。床面は地山整形で、南壁及び西壁側に周溝が巡る。深さ30cm程度の支柱穴が4本確認される。遺物はカマド左側及び北隅壁、東壁側にそれぞれまとまって廃棄されている。カマドは住居北壁内側に付設される。残存状況は良好で袖が残存し、花崗岩製の両袖石も残存していた。両袖間の距離は約55cm、袖の長さは約45cmを測る。両袖抜き取り痕の間に火床面が見られ、火床面と壁との間に花崗岩製の支脚が見られた。また、カマド

第25図 13号竪穴住居・カマド・14号竪穴住居実測図 (1/60、1/30)



奥壁には煙道の下部が約1.5m程残存していた。煙道の深さは約15cm、幅は最大50cmを測る。カマド埋土の土層観察では、明瞭なカマドの破壊痕跡を確認出来なかったことからカマド祭祀は考えにくいものと思われる。

#### 出土遺物（第24図、図版17）

1・2は須恵器坏蓋である。体部に稜を持ち、口縁部内面に段を有する。3・4は須恵器坏身である。5～10は土師器甕である。口縁部が外湾するものが殆どで、6・7は長胴化している。9は小型甕である。11は土師器椀である。体部との境に明瞭な段を持ち口縁部は直線的に立ち上がる。

#### 13号竪穴住居（第25図、図版8）

調査区中央部にて検出され、北西壁は削平を受けており11号住居を切っている。確認面での規模は南北軸約5m、東西軸約4.8m、床面までの深さ約15cmを測り、方形を呈する。床面は地山整形で、南壁及び西壁側に周溝が巡り、カマド右側に屋内土坑が付設される。深さ40cm程度の支柱穴が4本確認され、遺物は住居跡東西隅それぞれにそれぞれまとめて廃棄されていた。

カマドは住居北壁内側に付設される。残存状況は悪いものの、両袖が残存し深さ10cm程度の袖石抜き取り痕跡が見られた。両袖間の距離は約70cm、袖の長さは約40cm +  $\alpha$  を測る。両袖抜き取り痕の間に火床面が見られ、火床面と壁との間に凝灰岩製の支脚が見られた。支脚周辺には遺物の散乱が見られることから、カマド祭祀の可能性が想定される。

#### 出土遺物（第26図）

1は須恵器坏蓋である。2・3は須恵器坏身である。いずれも体部内面にヘラ記号が施される。4・5は土師器甕である。口縁部が外湾する。6は土師器高坏の脚部である。7は土師器高坏の脚部である。8は牛角状の把手である。

#### 14号竪穴住居（第25図、図版8）

調査区南側にて検出され、西側は削平を受けており28号住居を切り、21号住居に切られる。確認面での規模は南北軸約3.6m、東西軸約1.9m +  $\alpha$ 、床面までの深さ数cmを測り、方形を呈する。床面は地山整形で、支柱穴は確認出来なかった。遺物の出土も見られなかった。

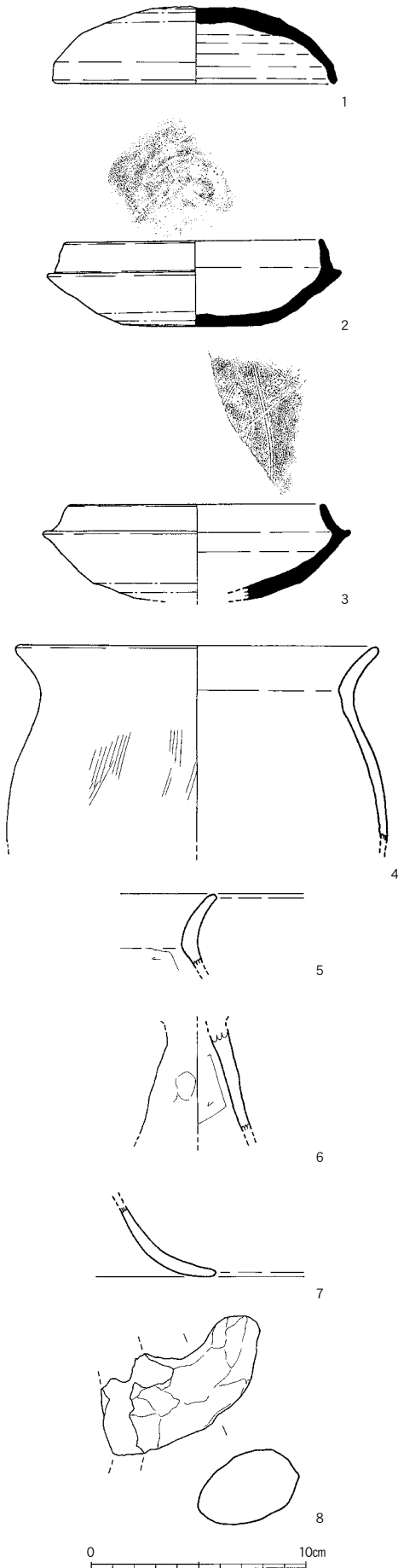
#### 15号竪穴住居（第27図、図版8）

調査区中央部にて検出され、北東壁は削平を受けており16・23号住居を切り、4号住居に切られている。確認面での規模は南北軸約4.9m、東西軸約4.5m、床面までの深さ約20cmを測り、方形を呈する。床面は地山整形で、西壁側に周溝が巡り、カマド右側に屋内土坑が付設される。深さ30cm程度の支柱穴が4本確認された。

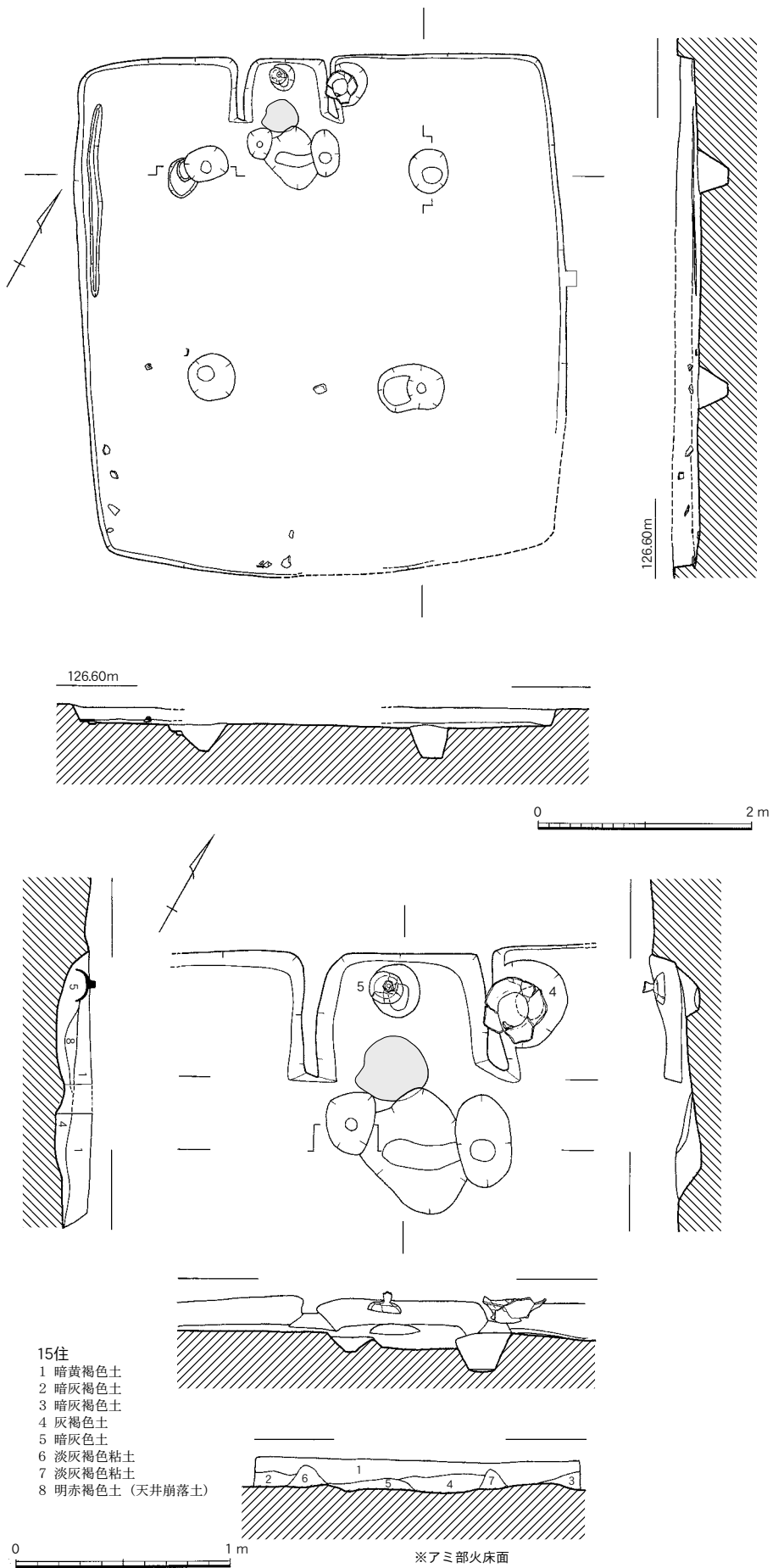
カマドは住居北壁内側に付設される。残存状況は比較的良好で、褐色粘土の両袖が残存し深さ10cm程度の袖石抜き取り痕跡が見られた。両袖間の距離は約80cm、袖の長さは約80cmを測る。両袖抜き取り痕の間は浅く窪んでいた。この凹みの上方に火床面が見られ、壁に近い位置に高坏が倒立して置かれていた。この高坏の下部には支脚の抜き取り痕と見られる深さ10cm程度の穴が確認され、この高坏は天井崩落土と見られる8層下部の暗灰色土層（5層）に置かれており、天井崩落前に置かれていた可能性が想定される。このことから、この高坏は石製支脚が抜かれたのち支脚に転用して利用されたものと考えられる。また右袖外側にはやや浮いた状態で甕が倒立して置かれており、原位置を保って出土したものではなく、祭祀行為の可能性を考慮する必要がある。

#### 出土遺物（第28図、図版18）

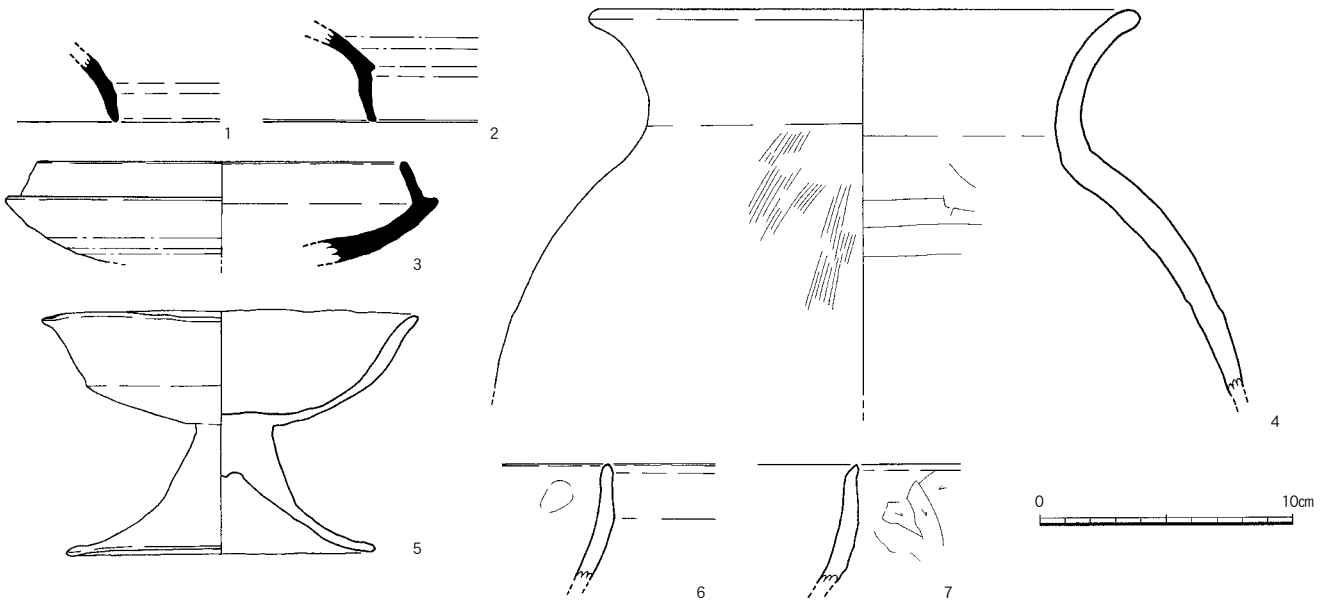
1・2は須恵器坏蓋である。2は天井部との境に明瞭な段を有する。3は須恵器坏身である。4は土師器甕である。口縁部が外湾する。5は土師器高坏である。表面が剥落しているため詳細な調整は不明であるが、脚部外面に一部二次焼成らしき痕跡が見られる。6・7は土師器椀である。



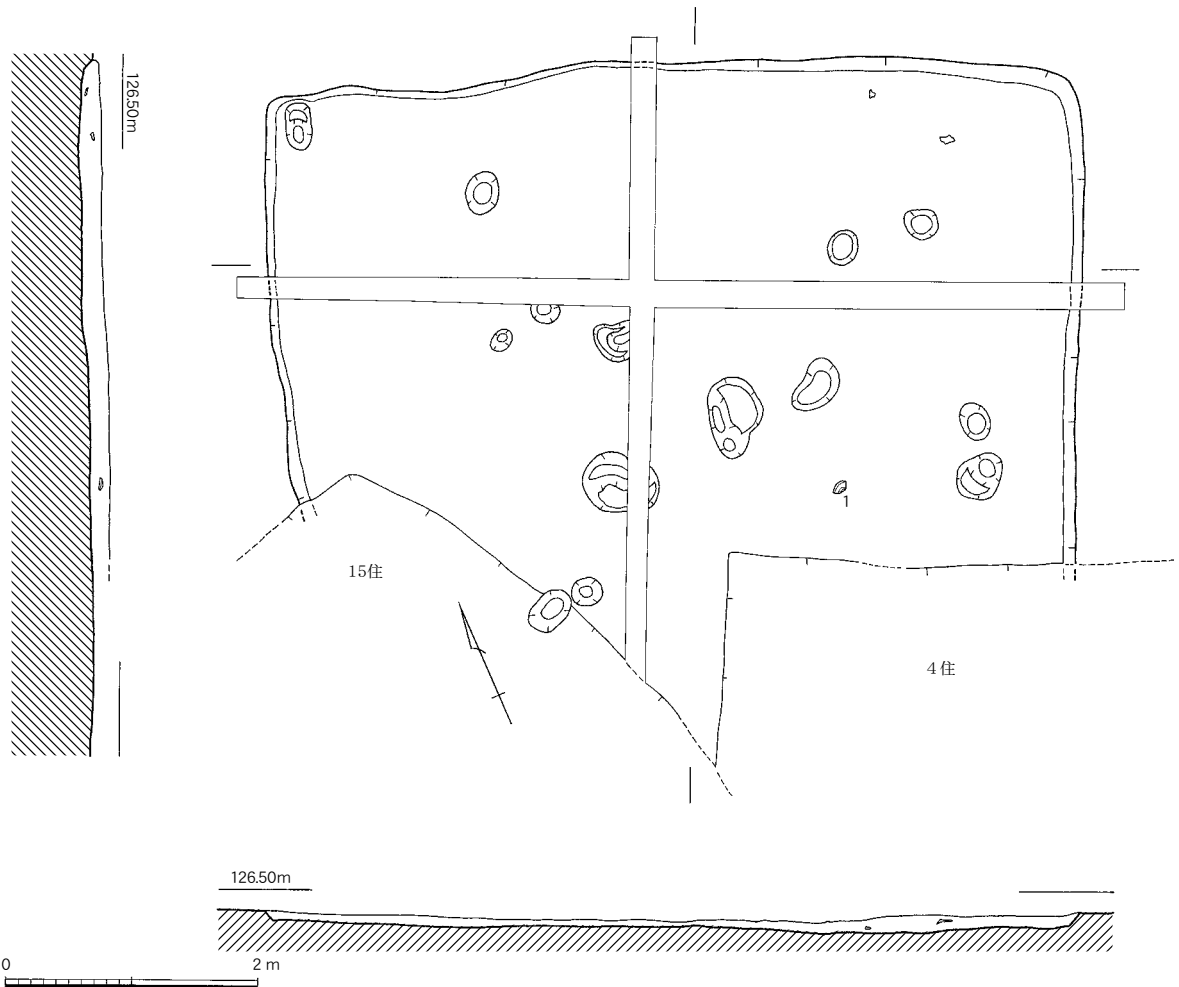
第26図 13号竪穴住居出土遺物実測図 (1/3)



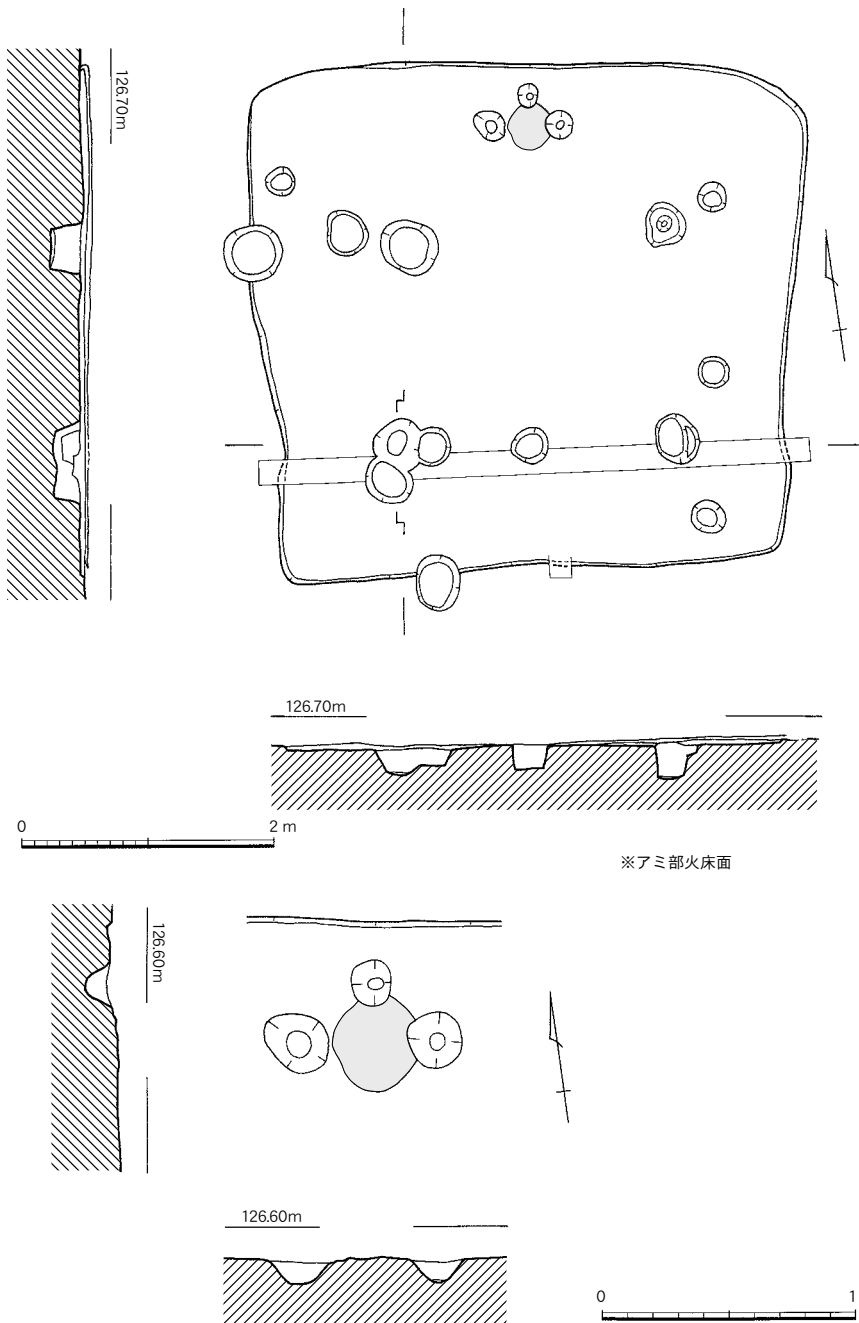
第27図 15号竪穴住居・カマド実測図 (1/60、1/30)



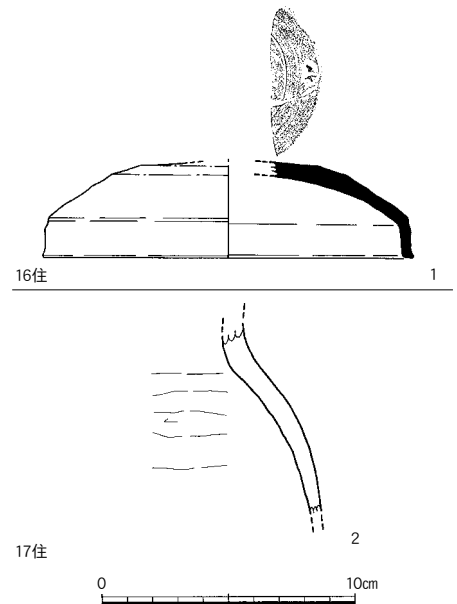
第28图 15号竖穴住居出土遺物実測図 (1/3)



第29图 16号竖穴住居実測図 (1/30)



第30図 17号竪穴住居・カマド実測図 (1/60、1/30)



第31図 16・17号竪穴住居  
出土遺物実測図 (1/3)

#### 16号竪穴住居 (第29図、図版9)

調査区中央部にて検出され、南半を4・15号住居に切られており残存状況が悪い。確認面での規模は南北軸約5.6m+ $\alpha$ 、東西軸約6.5m、床面までの深さ約10cmを測り、方形を呈する。明瞭な主柱穴・カマド等は確認出来なかった。

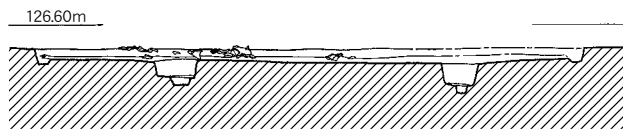
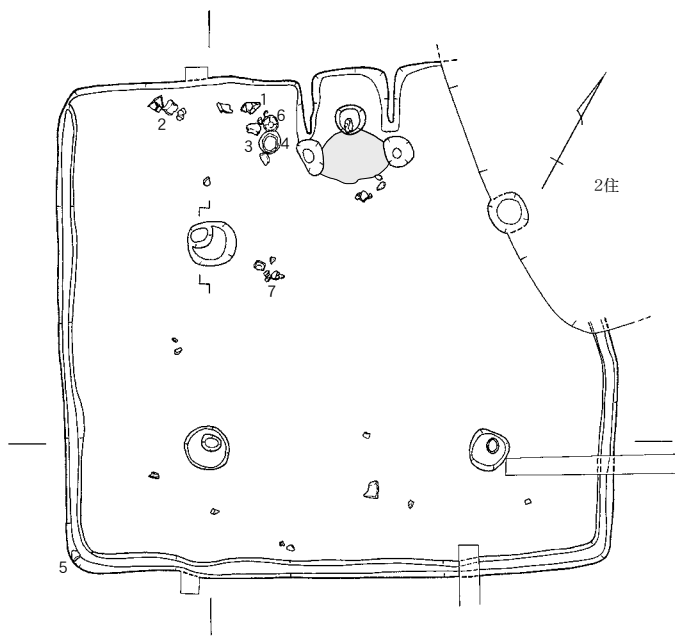
#### 出土遺物 (第31図、図版18)

1は須恵器坏蓋である。端部との境に明瞭な段を有し、端部は平滑に仕上げられる。

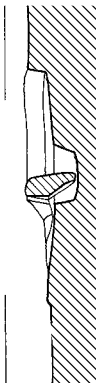
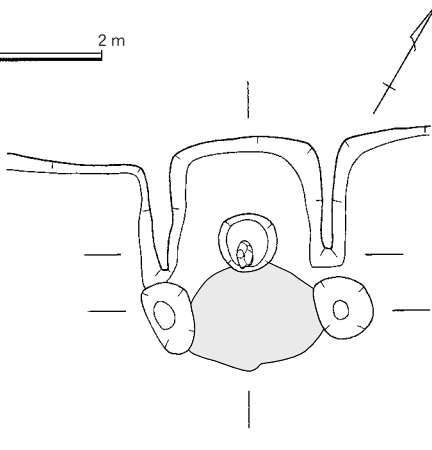
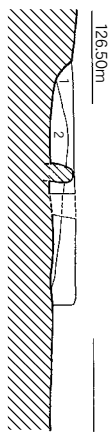
#### 17号竪穴住居 (第30図、図版9)

調査区中央部にて検出され、24・25号住居を切っている。確認面での規模は南北軸約4.1m、東西軸約4.4m、床面までの深さ約20cmを測り、方形を呈する。床面は地山整形で、深さ30cm程度の主柱穴が4本確認された。

カマドは住居北壁内側に付設される。残存状況は悪く、深さ10cm程度の袖石・支脚拔取り痕跡が見られた。

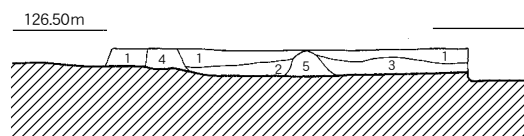
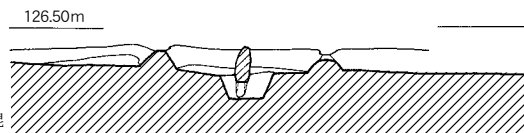


0 2 m



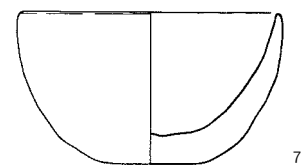
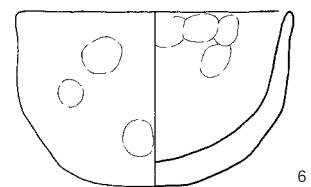
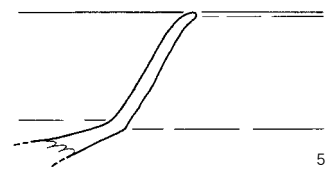
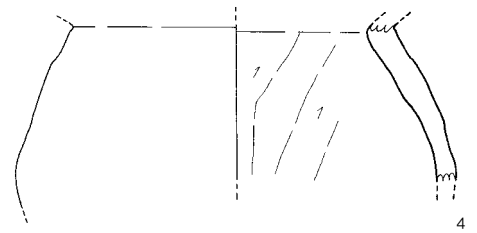
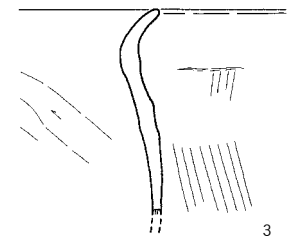
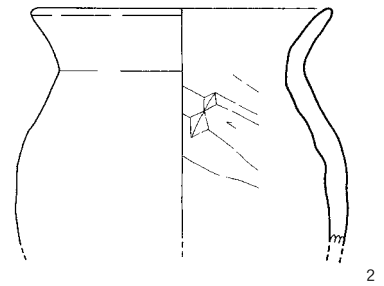
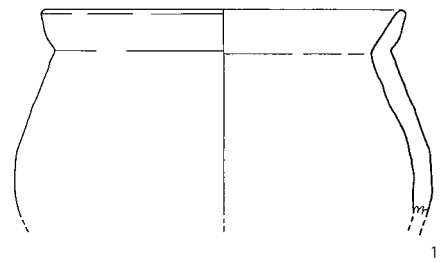
18住

- 1 暗灰褐色土
- 2 褐色土・焼土・炭混
- 3 暗褐色土
- 4 黄褐色粘土
- 5 灰褐色粘土



0 1 m

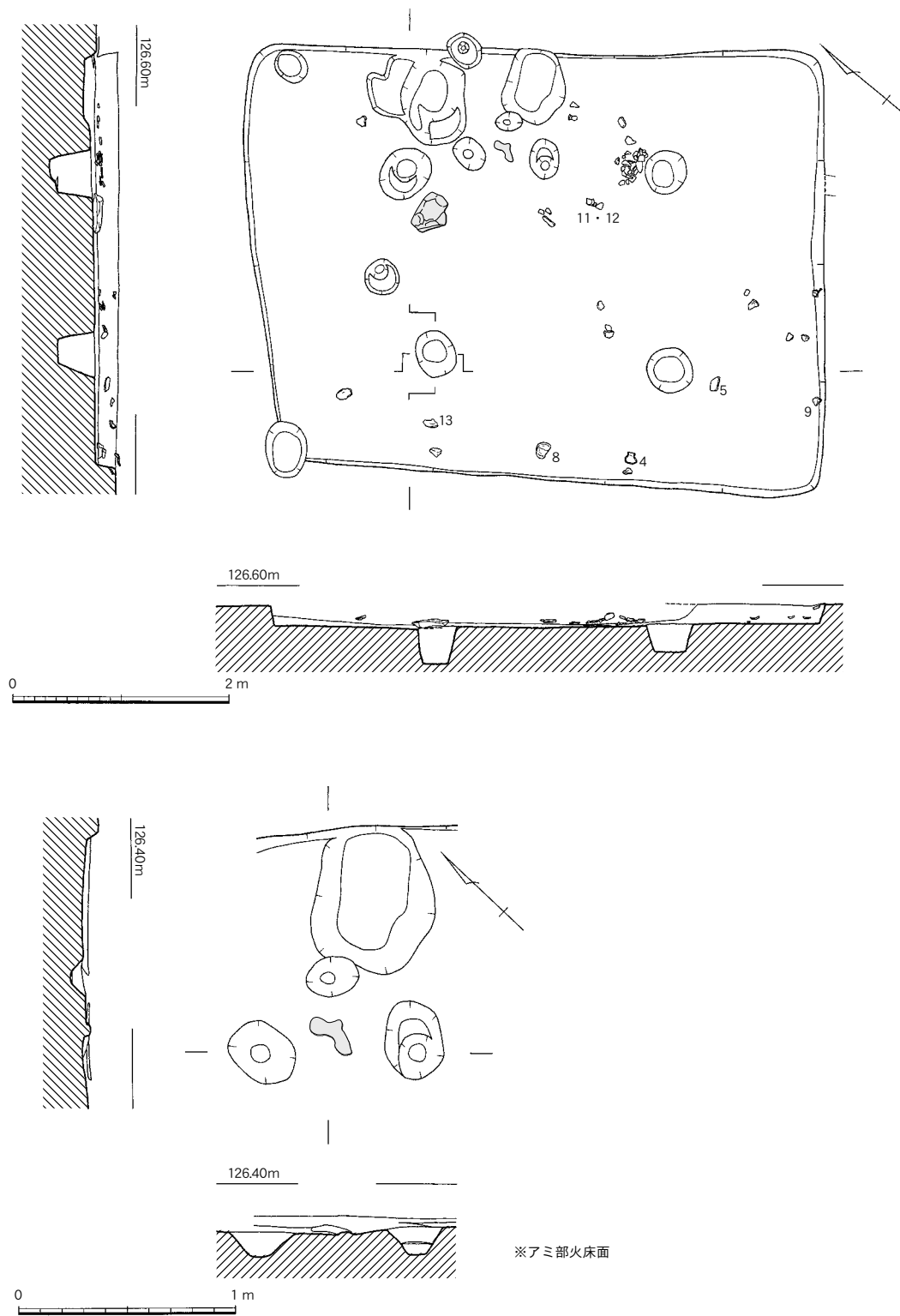
※アミ部火床面



0 10cm

第32図 18号竪穴住居・カマド実測図 (1/60、1/30)

第33図 18号竪穴住居出土遺物実測図 (1/3)



第34図 19号竪穴住居・カマド実測図 (1/60、1/30)

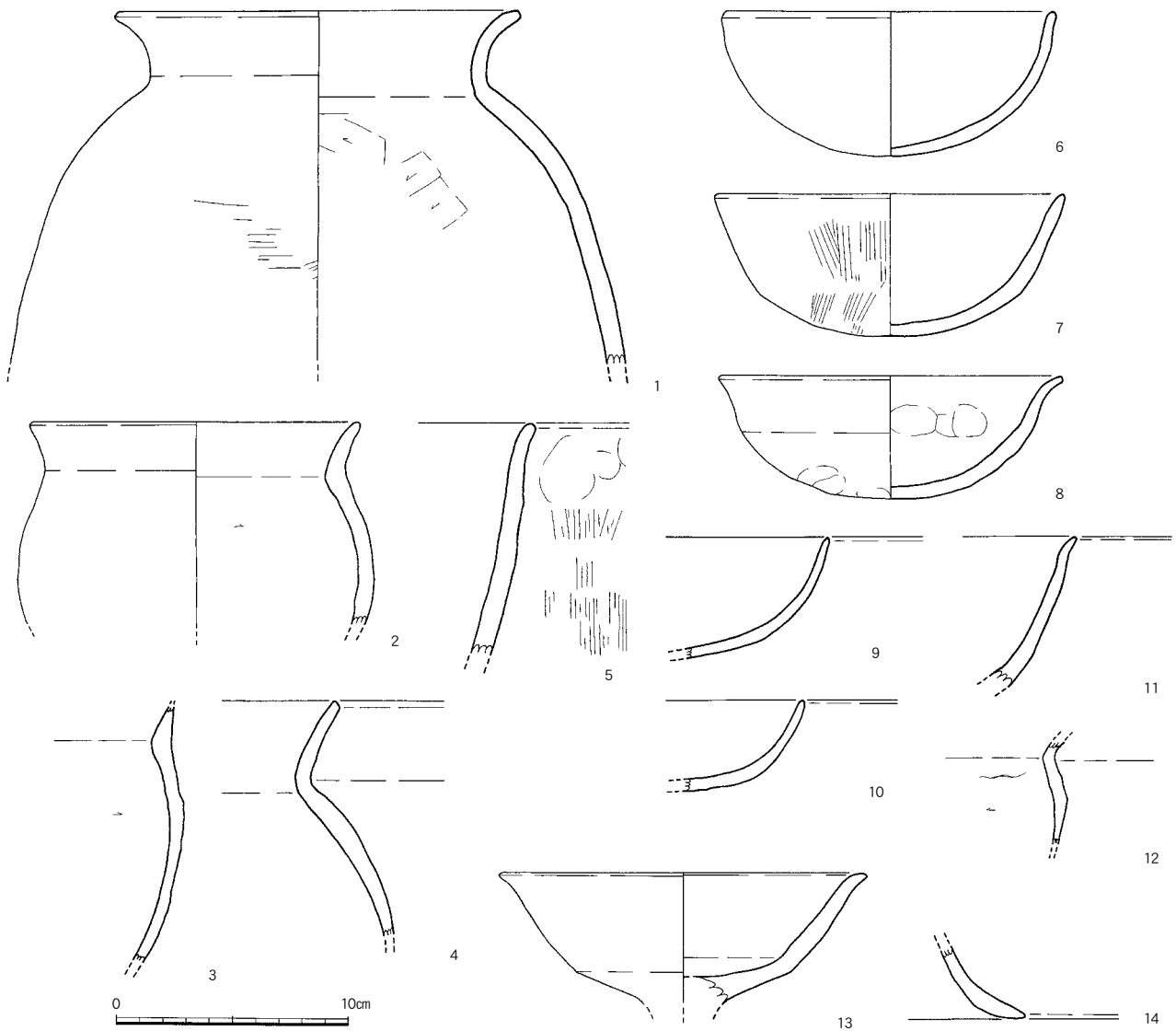
袖石間の距離は約55cm、袖の長さは約45cmを測る。

出土遺物 (第31図)

2は土師器甕の胴部である。

18号竪穴住居 (第32図、図版9)

調査区西側にて検出され、2号住居に切られる。確認面での規模は南北軸約4m、東西軸約4.4m、床面まで



第35図 19号竪穴住居出土遺物実測図 (1/3)

の深さ約10cmを測り、方形を呈する。床面は地山整形で、北壁を除く全てに周溝が巡る。深さ20cm程度の支柱穴が4本確認され、遺物はカマド左側にまとまって廃棄されていた。

カマドは住居北壁内側に付設される。黄褐色粘土の両袖が残存し、先端には深さ10cm程度の袖石抜き取り痕跡が見られた。両袖間の距離は約65cm、袖の長さは約65cmを測る。両袖抜き取り痕の間に火床面が見られ、火床面と壁との間に凝灰岩製の支脚が見られた。明確なカマド祭祀の痕跡は見られなかった。

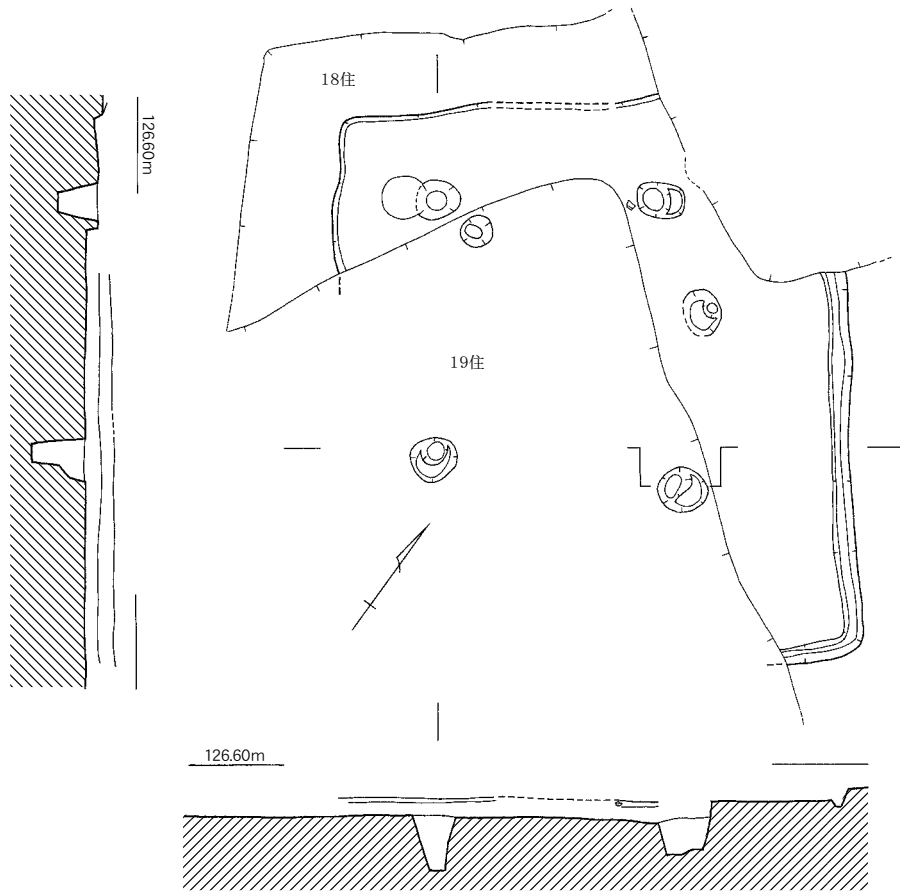
**出土遺物 (第33図、図版18)**

1～4は土師器甕である。頸部は丸みを帯び、口縁部は直線的に外に開く。5は土師器高坏で、口縁部にかけて明瞭に屈曲する。

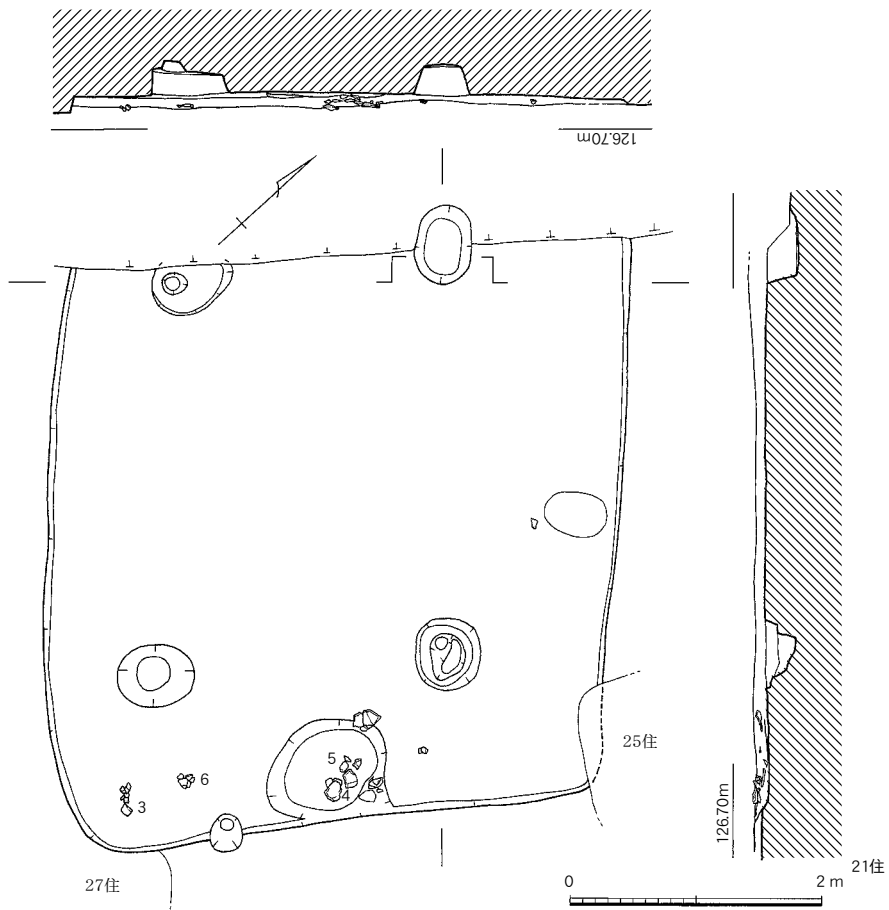
**19号竪穴住居 (第34図、図版10)**

調査区西側にて検出され、西側は削平を受けており20号住居を切り、18号住居に切られる。確認面での規模は南北軸約5.4m、東西軸約4.2m、床面までの深さ約20cmを測り、方形を呈する。床面は地山整形で、深さ20cm程度の支柱穴が4本確認された。

カマドは住居北西壁内側1m程の箇所付設される。袖は残存せず、深さ10cm程度の袖石・支脚抜き取り痕跡

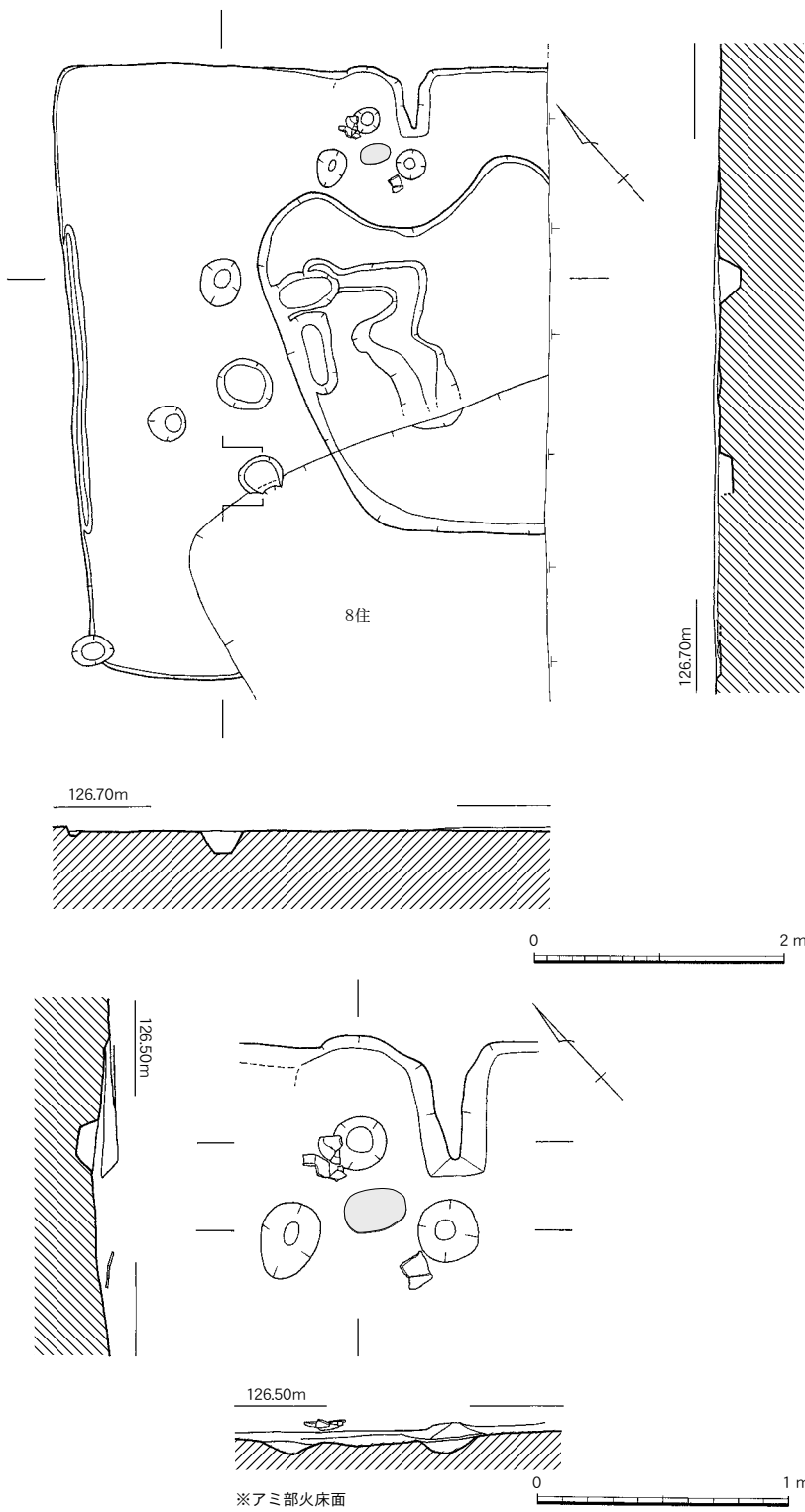


20住

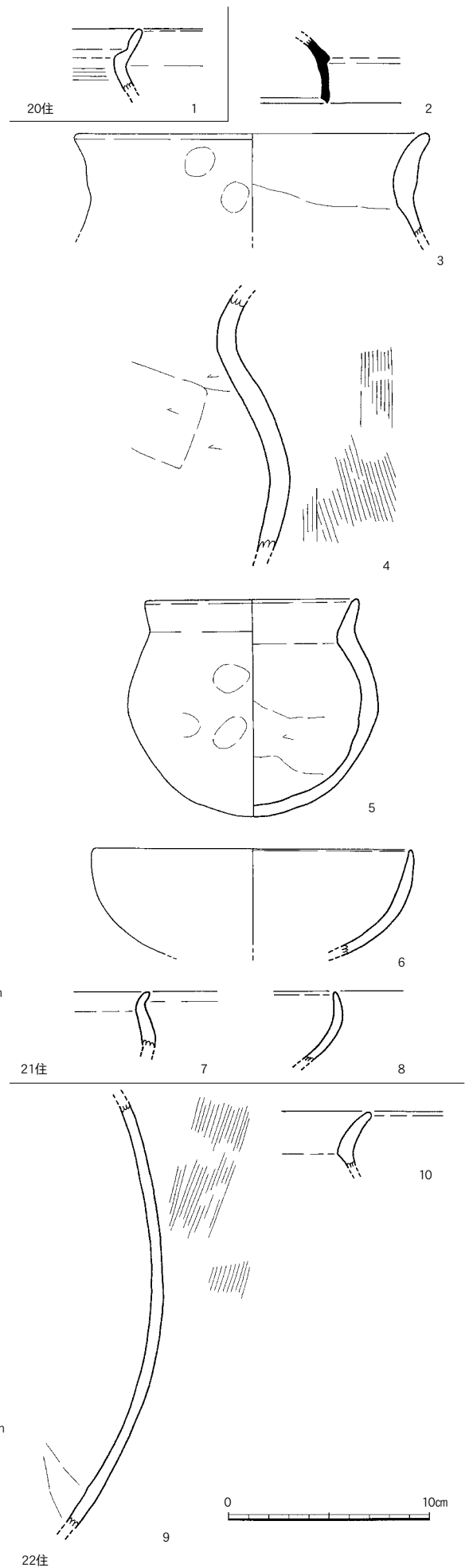


第36図 20・21号竖穴住居実測図 (1/60)

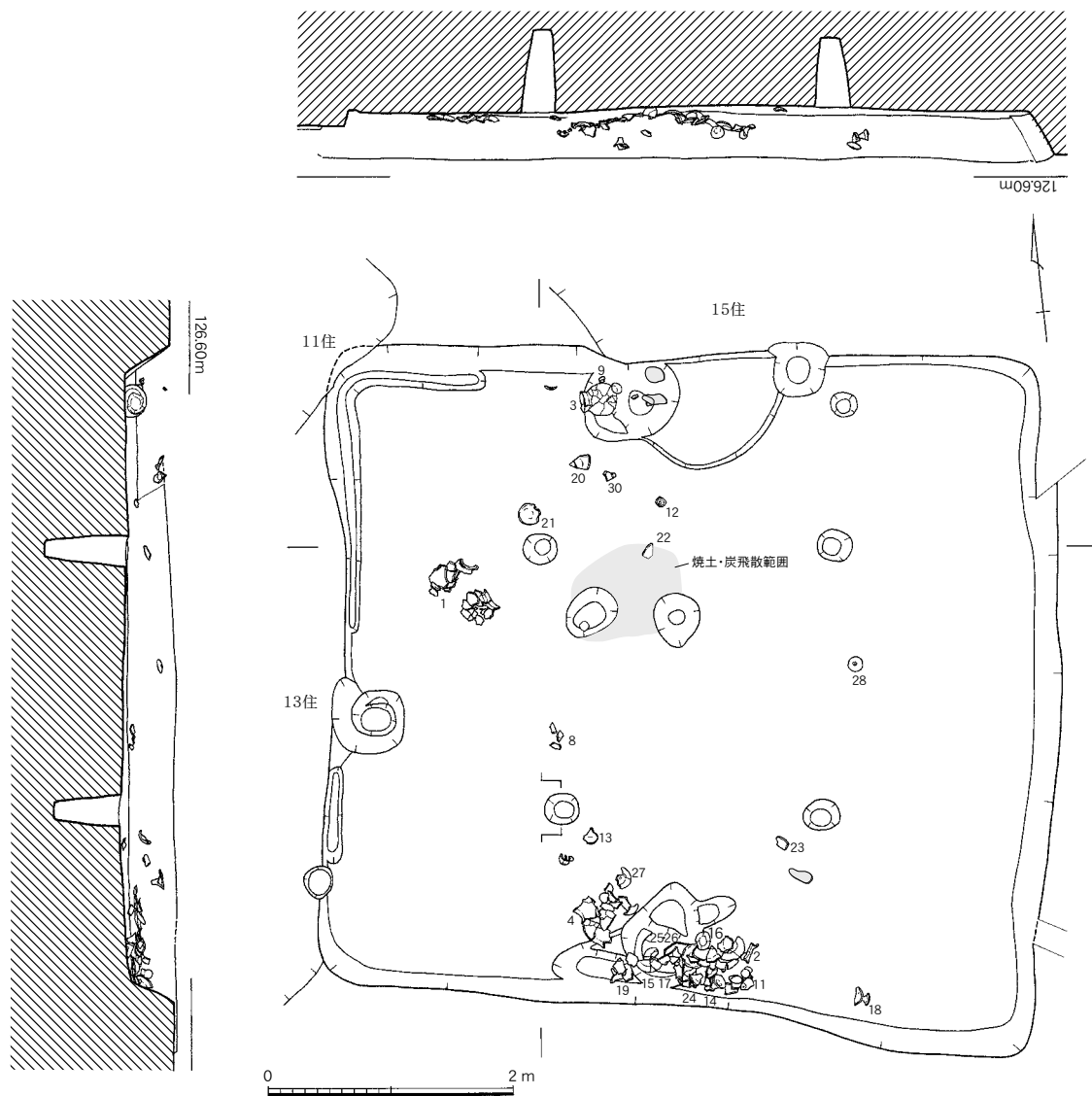




第37図 22号竪穴住居・カマド実測図 (1/60、1/30)



第38図 20~22号竪穴住居出土遺物実測図 (1/3)



第39図 23号竪穴住居実測図 (1/60)

が見られた。両袖石間の距離は約70cm、袖の長さは約100cmを測る。両袖抜き取り痕の間に火床面が見られ、その上部に支脚痕が見られる。また、天井石に用いられたと思われる片面の焼けた凝灰岩製の石がカマド手前に見られた。

**出土遺物 (第35図、図版19)**

1は土師器甕である。頸部は丸みを帯び、口縁部は直線的に外反する。2～4は土師器甕で、2は比較的小型である。5は土師器甕である。6～10は土師器椀である。このうち8は口縁部が外反する。11は土師器鉢、12は土師器小型甕か。13は土師器高坏で、坏底部は明瞭に屈曲する。14は土師器高坏脚破片である。

**20号竪穴住居 (第36図、図版10)**

調査区西側にて検出され、2・18・19号住居に切られる。確認面での規模は南北軸約4.5m、東西軸約4.0m、床面までの深さ約10cmを測り、方形を呈する。床面は地山整形で、深さ40cm程度の支柱穴が4本確認されており、北東壁に周溝が巡る。カマドは確認されなかった。

**出土遺物 (第38図、図版19)**

1は土師器甕である。

### 21号竪穴住居（第36図、図版10）

調査区南側にて検出され、西側は攪乱を受けている。調査時は切り合いを十分に把握出来なかったため27号住居を切るかのように捉えていたが、整理時に住居の特徴から27号住居に切られるものと判断した。また、14・28号住居を切っている。確認面での規模は南北軸約4.6m +  $\alpha$ 、東西軸約4.5m、床面までの深さ約10cmを測り、方形を呈する。深さ20cm程度の支柱穴が4本確認され、南東壁には屋内土坑が見られ、多くの遺物が廃棄されていた。

### 出土遺物（第38図、図版19）

2は須恵器杯蓋で天井部との境に突起状の段を有し、口縁端部は沈線を有する。3は土師器甕である。口縁部は緩やかに外反する。4は土師器甕の胴部破片で、頸部は緩やかに屈曲する。5は土師器小型甕である。6～8は土師器椀か。うち7は口縁部が小さく外反する。

### 22号竪穴住居（第37図、図版10）

調査区南側にて検出され、東側は攪乱を受けている。8号住居に切られ、27号住居を切っている。確認面での規模は南北軸約4.9m、東西軸約3.9m +  $\alpha$ 、床面までの深さ数cmを測り、方形を呈する。床面は地山整形で、深さ15cm程度の西側の支柱穴が2本確認された。

カマドは住居北壁内側に付設される。東側の袖が残り、深さ5cm程度の袖石・支脚抜き痕跡が見られた。袖石間の距離は約60cm、袖の長さは約75cmを測る。カマド内には土器の廃棄が見られ、祭祀の可能性が伺える。

### 出土遺物（第38図、図版19）

9は土師器甕の胴部である。10は土師器甕の口縁部である。

### 23号竪穴住居（第39図、図版11）

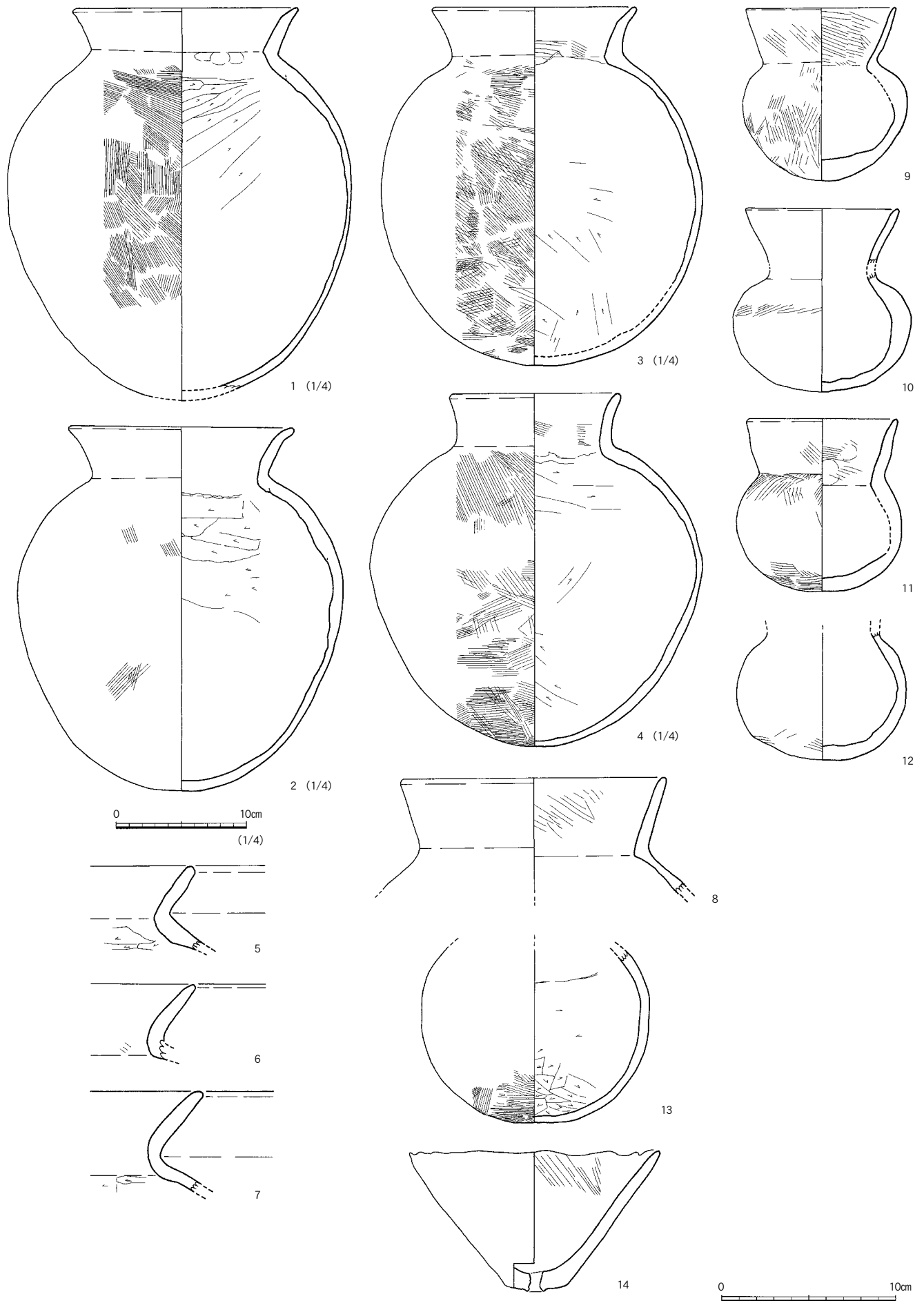
調査区中央部にて検出され、13・15号住居に切られる。確認面での規模は南北軸約5.3m、東西軸約5.9m、床面までの深さ約45cmを測り、方形を呈する。床面は地山整形で一部貼床が施されており、西壁側に周溝が巡る。深さ60cm程度の支柱穴が4本確認され、遺物は北壁・西壁側にそれぞれ完形の個体が廃棄されている以外は、南壁下に大量にまとまって廃棄されていた。この南壁の廃棄部周辺は窪んでおり、南面土坑であると想定される。

北側にも一部窪みが見られ、その中に焼土の飛散が確認された。当初カマドの存在を疑ったが、カマドを示す明確な痕跡は確認出来なかった。

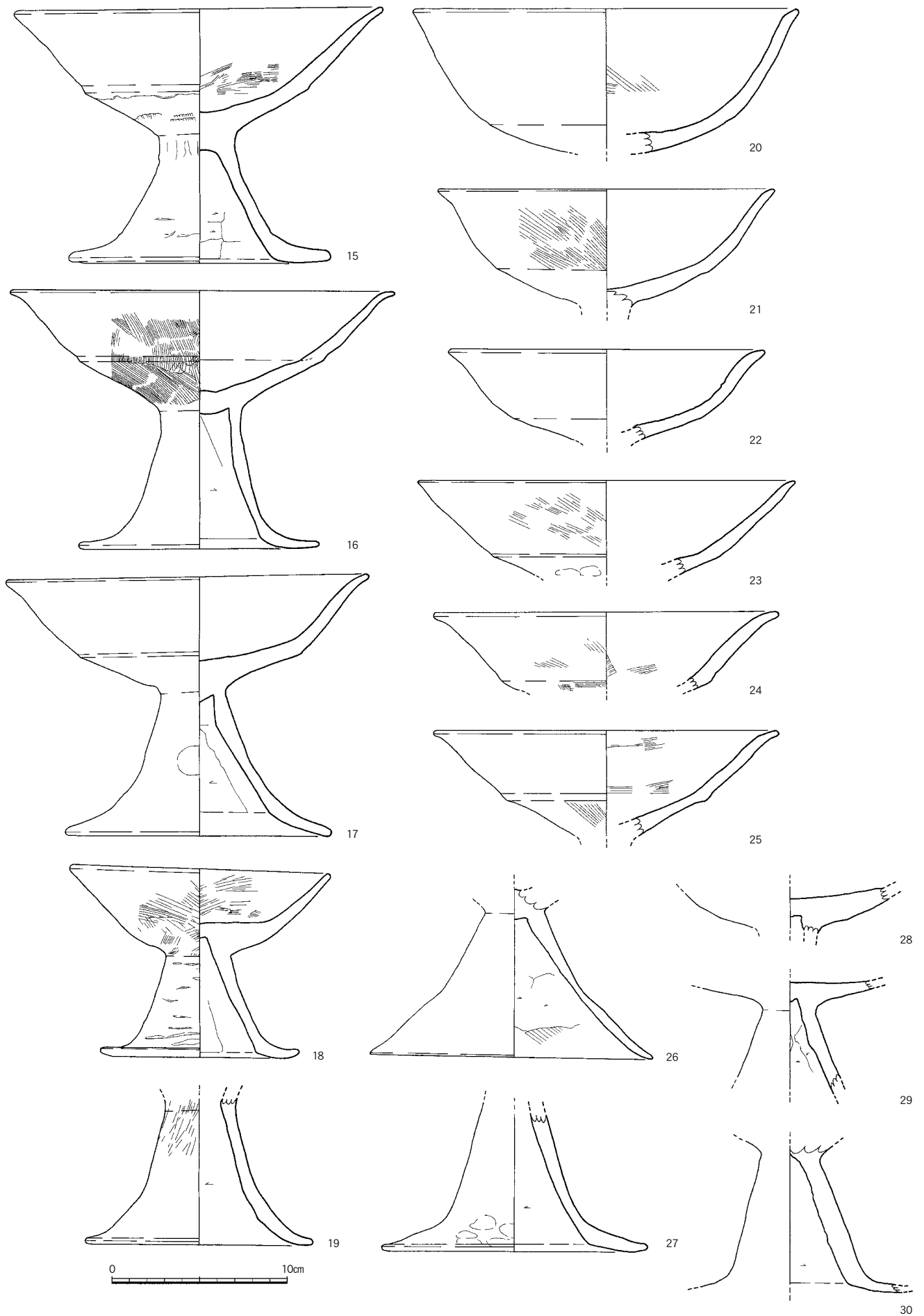
また、焼土の飛散は住居内の数箇所で見られ、中央より北西にずれた箇所、南側土器廃棄箇所東側に確認できた。この廃棄された埋土内には炭・焼土の混在が確認できた。このうち、住居中央に近い位置で焼土が確認された周辺には、床面に炭が広がることから、地床炉の可能性が高いと考えられるのに対し、その他の箇所では埋土内に炭等の痕跡が確認される事から、廃棄時の祭祀行為に伴う可能性が想定されよう。

### 出土遺物（第40・41図、図版19）

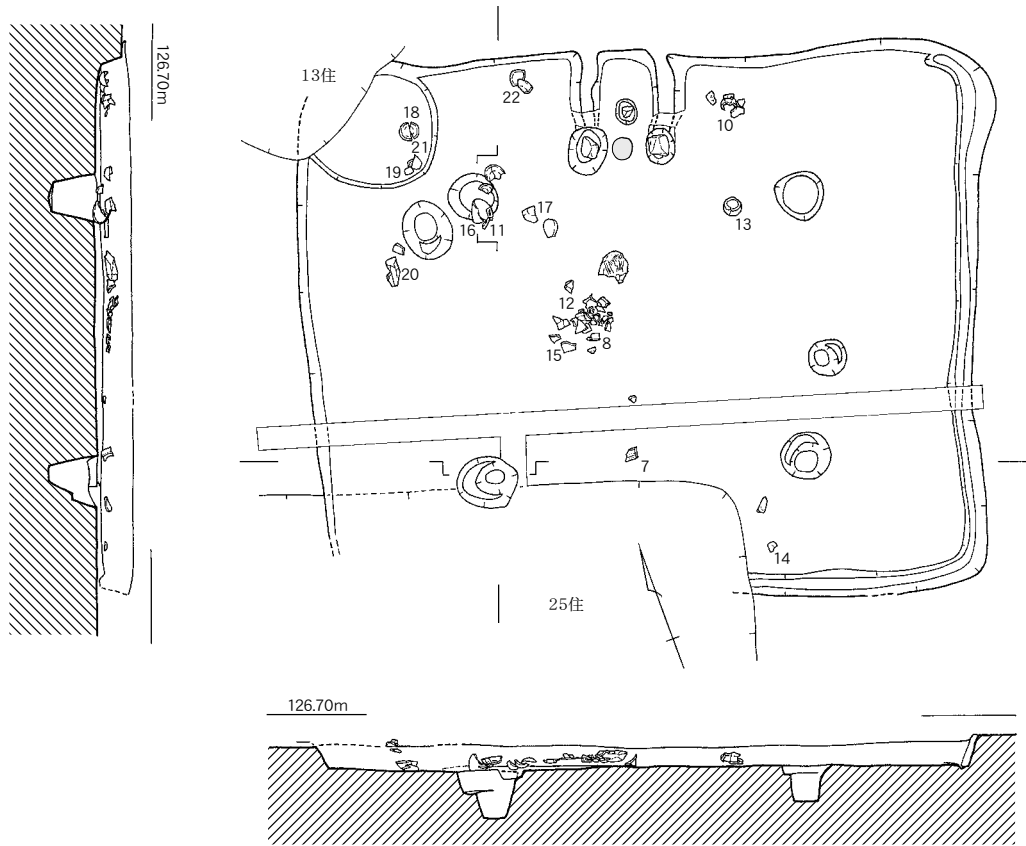
1～8は土師器甕である。ほぼ完形の1～4では胴部は球形に近いプロポーシオンを呈する。口縁部はいずれも頸部を明瞭に屈曲させて直線的に外反するが、4など丸みを帯びるものも見られる。9～12は小型丸底壺である。いずれもやや厚みがある作りで、調整もハケや指圧痕が残る粗製品である。口縁径が胴部最大径より小さい。13は小型甕の胴部か。球形を呈する。14は土師器甕である。鉢型を呈し、底部に単孔が施される。15～30は土師器高坏である。その殆どが南面土坑付近で確認された。いずれも坏体部に明瞭な段を有しており、ハケメ痕が残るが、20などは坏部が湾型に立ち上がる。脚部との接合は充填方法を用いたと思われるもの（17・29）が見られる。脚端部が屈曲して外反するもの（15～18・27・30）が大半を占めるのに対し、客部がスカート状に開くもの（19・26）などが見られる。



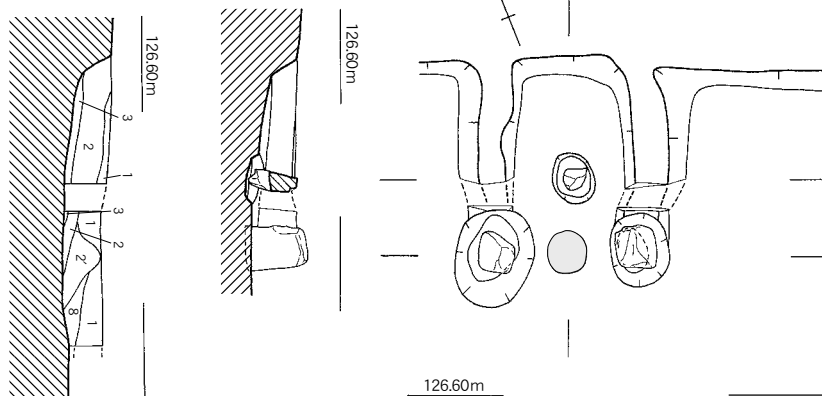
第40图 23号竖穴住居出土遗物实测图① (1/3、1/4)



第41图 23号竖穴住居出土遺物実測図② (1/3)

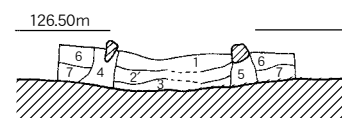
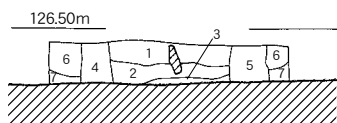
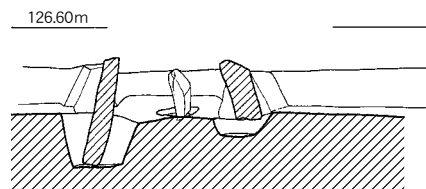


0 2 m

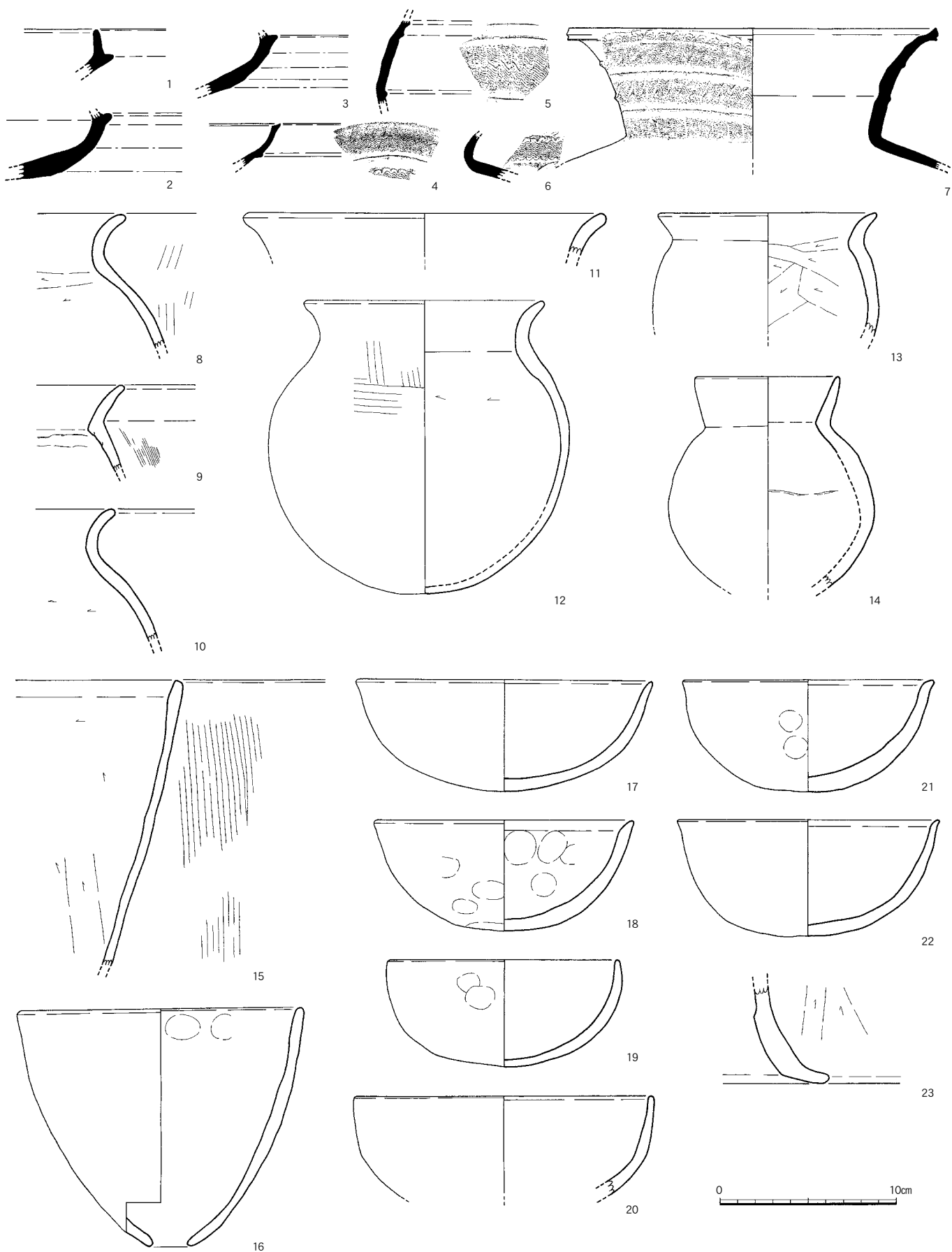


- 24住
- 1 淡褐色土
  - 2 暗褐色土・焼土多く含む
  - 2' 褐色土・焼土・炭多く含む
  - 3 暗灰色粘土・焼土・炭混
  - 4 灰黄褐色砂質粘土
  - 5 暗灰褐色砂質粘土
  - 6 淡黄褐色土
  - 7 暗褐色土
  - 8 暗灰褐色土

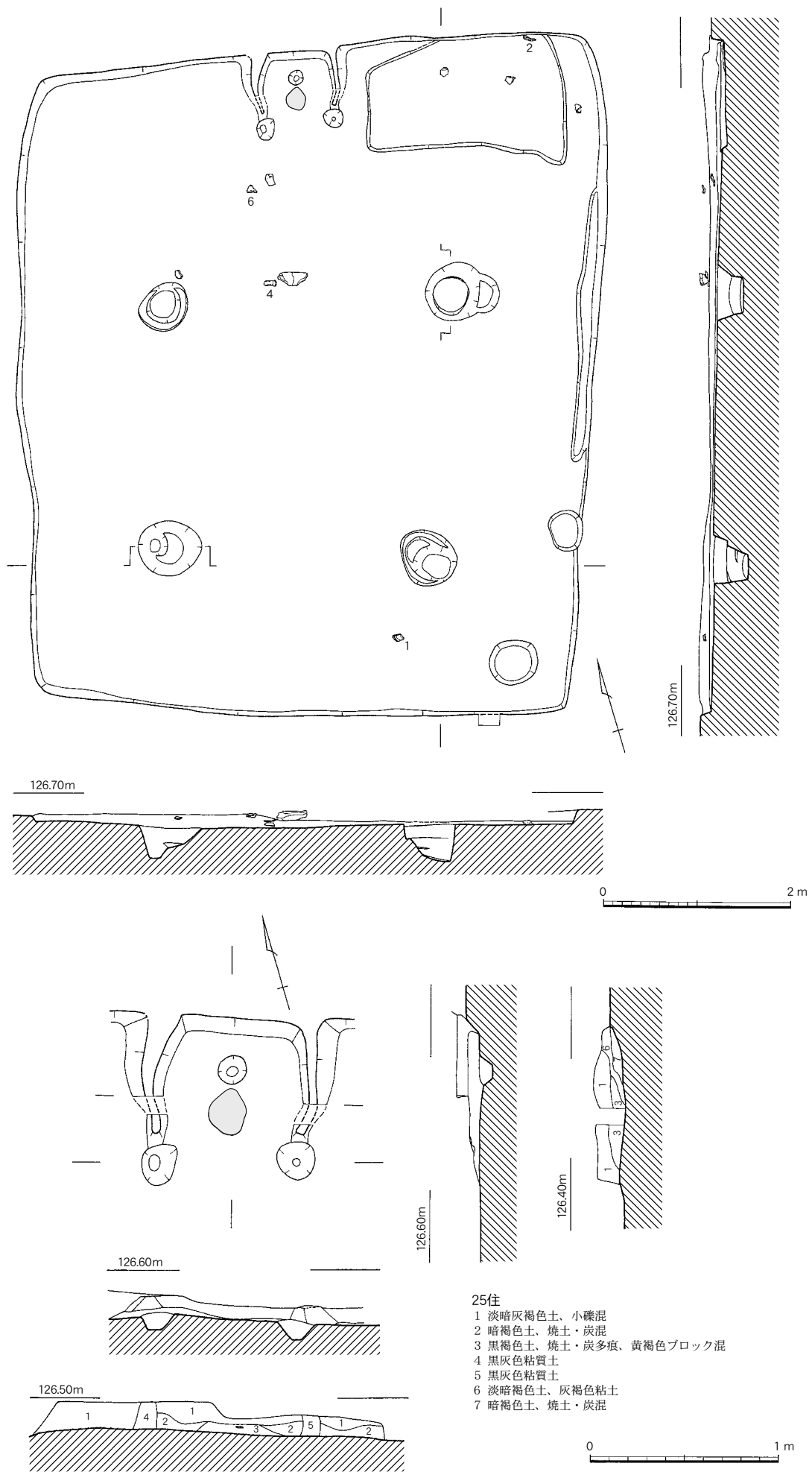
0 1 m



第42図 24号竖穴住居実測図 (1/60、1/30)

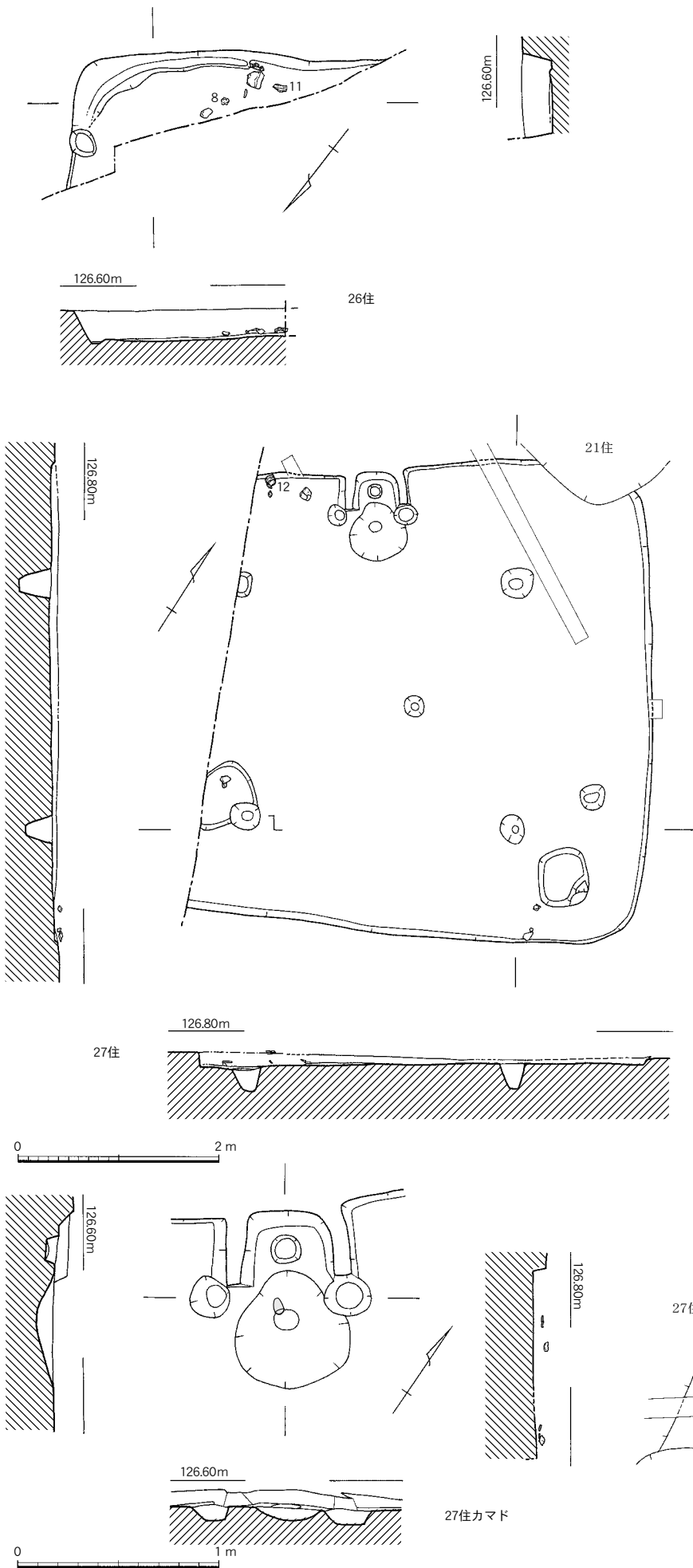


第43图 24号竖穴住居出土遺物実測図 (1/3)



第44図 25号竪穴住居実測図 (1/60、1/30)





**24号竪穴住居 (第42図、図版11)**

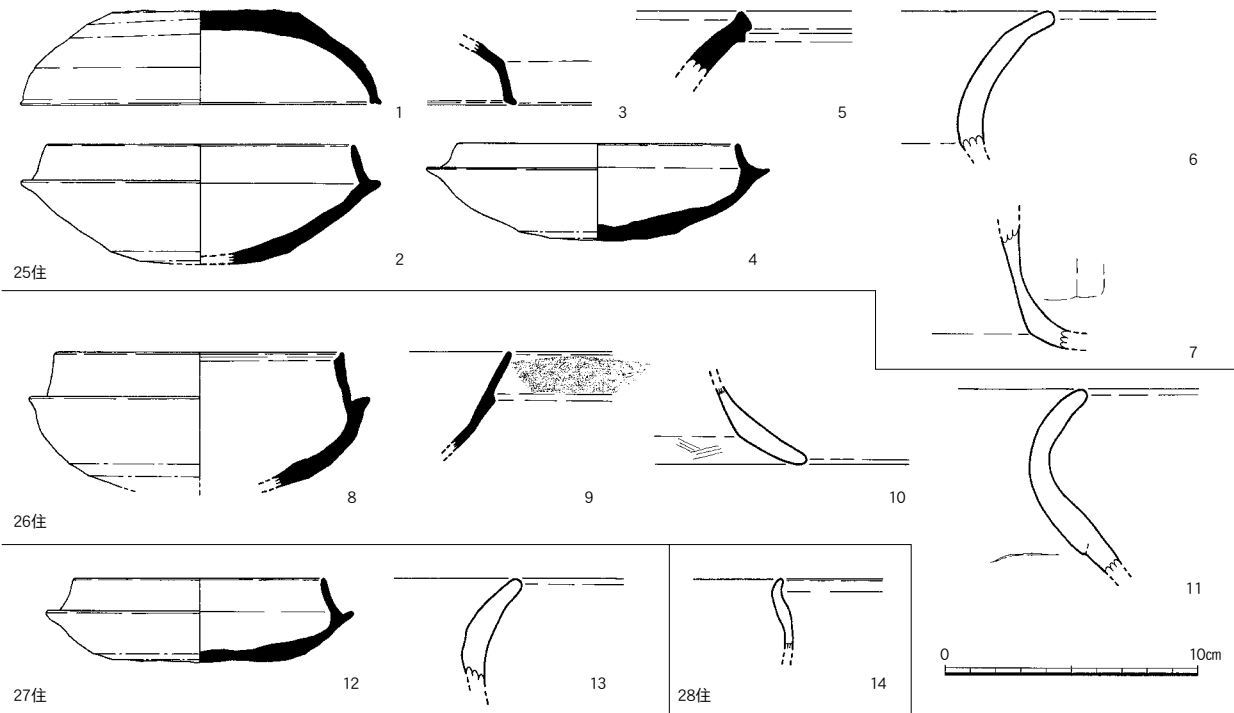
調査区西側にて検出され、13・17・25号住居に切られる。確認面での規模は南北軸約5.4m、東西軸約4.4m、床面までの深さ約20cmを測り、長方形を呈する。床面は地山整形で、一部貼床が確認された。東壁側に周溝が巡り、深さ35cm程度の支柱穴が4本確認され、住居北西隅には浅く凹む円形状の屋内土坑が見られた。遺物は住居跡中央部および北西隅の屋内土坑周辺からまわって出土した。

カマドは住居北壁内側に付設される。黄褐色・灰褐色粘土の両袖が残存し、先端には安山岩及び凝灰岩製の袖石が見られた。両袖間の距離は約55cm、袖の長さは約75cmを測る。両袖抜取り痕の間に火床面が見られ、火床面と壁との間に凝灰岩製の支脚が見られた。焼土・炭などが多く見られる3層上面に埋土と想定される2層がブロック状に堆積し、その上面に土器類が幾つか見られたことから、カマド祭祀行為が行われた可能性が考えられる。

**出土遺物 (第43図、図版20・21)**

1～3は須恵器坏身である。うち1は口縁部が小さく立ち上がる。4

第45図 26～28号竪穴住居実測図 (1/60・1/30)



第46図 25～28号竪穴住居出土遺物実測図 (1/3)

は須恵器甕か。口縁下部に段を有し、その下面に波状文が見られる。5は須恵器壺か。小さな突帯によって区切られた文様帯に波状文が施される。6も須恵器壺の肩部か。波状文が施される。7は須恵器広口壺の口縁部で、口縁端部が窪み、突帯によって形成される文様帯にはそれぞれ沈線文が施される。8～14は土師器甕である。口縁部は明瞭な頸部を形成せず、緩やかに外反する。15は土師器甕である。16は土師器甕で深い鉢状を呈する。底面には比較的大きな単孔が施される。17～22は土師器椀である。口縁部は小さく外に外反するもの(17・18・21・22)と上方に立ち上がるもの(19・20)の2種類が見られる。23は土師器高杯の脚部である。

#### 25号竪穴住居 (第44図、図版12)

調査区南側にて検出され、17号住居に切られ、24号住居を切る。確認面での規模は南北軸約7.2m、東西軸約6.2m、床面までの深さ約15cmを測り、長方形を呈する。床面は地山整形で、一部貼床が確認された。東壁側に周溝が巡り、深さ30cm程度の支柱穴が4本確認され、住居北東隅には方形状の屋内土坑が付設される。

カマドは住居北壁内側に付設される。黒灰色粘土の両袖が残存し、先端には深さ10cm程度の袖石抜き取り痕が見られた。両袖間の距離は約75cm、袖の長さは約80cmを測る。両袖抜き取り痕の間よりやや壁よりに火床面が見られ、火床面と壁との間に支脚の抜き取り痕跡が見られた。3層及び6層に灰色・黄色粘土ブロックが見られ、カマド破壊時の痕跡と思われる。

#### 出土遺物 (第46図、図版21)

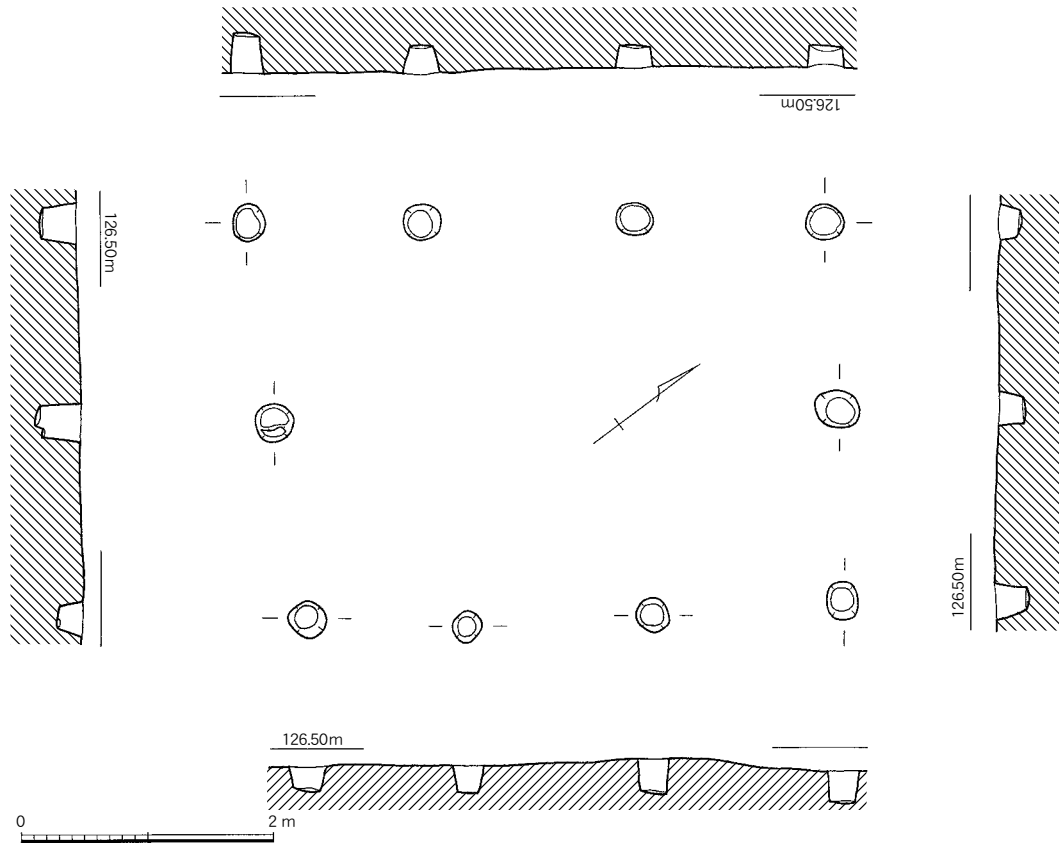
1・3は須恵器杯蓋である。口縁部端部を平坦に仕上げる。2・4は須恵器杯身である。口縁部は上方に立ち上がる。5は須恵器甕の口縁部か。6は土師器甕である。口縁部が緩やかに外反する。7は土師器高杯の脚部である。

#### 26号竪穴住居 (第45図、図版12)

調査区西端にて検出され、大半が調査区外にかかっている。確認面では方形住居の東端が検出されており、床面までの深さ約30cmを測る。床面は地山整形で、周溝が一部巡る。

#### 出土遺物 (第46図、図版21)

8は須恵器杯身で口縁部は長く直線的に立ち上がり、端部に小さな段を有する。9は須恵器甕か。口縁下部に波状文が巡る。10は土師器高杯の脚部である。11は土師器甕で、口縁部が緩やかに外反する。



第47図 1号掘立柱建物実測図 (1/60)

#### 27号竪穴住居 (第45図、図版13)

調査区南側にて検出され、南端が調査区外にかかり、22号住居に切られ、21号住居を切る。確認面での規模は南北軸約4.8m、東西軸約4.6m、床面までの深さ約10cmを測り、方形を呈する。床面は地山整形で、深さ30cm程度の支柱穴が4本確認される。

カマドは住居北壁内側に付設される。両袖が残存し、先端には深さ10cm程度の袖石抜き取り痕が見られた。両袖間の距離は約60cm、袖の長さは約40cmを測る。両袖抜き取り痕の間に窪みがあり、その一部に火床面が見られる。支脚の抜き取り痕跡は窪みの上面に見られた。

#### 出土遺物 (第46図、図版21)

12は須恵器坏身である。口縁部は上方に立ち上がる。13は土師器甕の口縁部で、緩やかに外反する。

#### 28号竪穴住居 (第45図、図版13)

調査区南側にて検出され、南端が調査区外にかかり14・21・27号住居に切られ、北側は削平を受ける。床面までの深さ約10cmを測り、方形を呈する。支柱穴・カマド・土坑類は確認できず、明確に住居に付随する施設を確認出来なかった。

#### 出土遺物 (第46図、図版21)

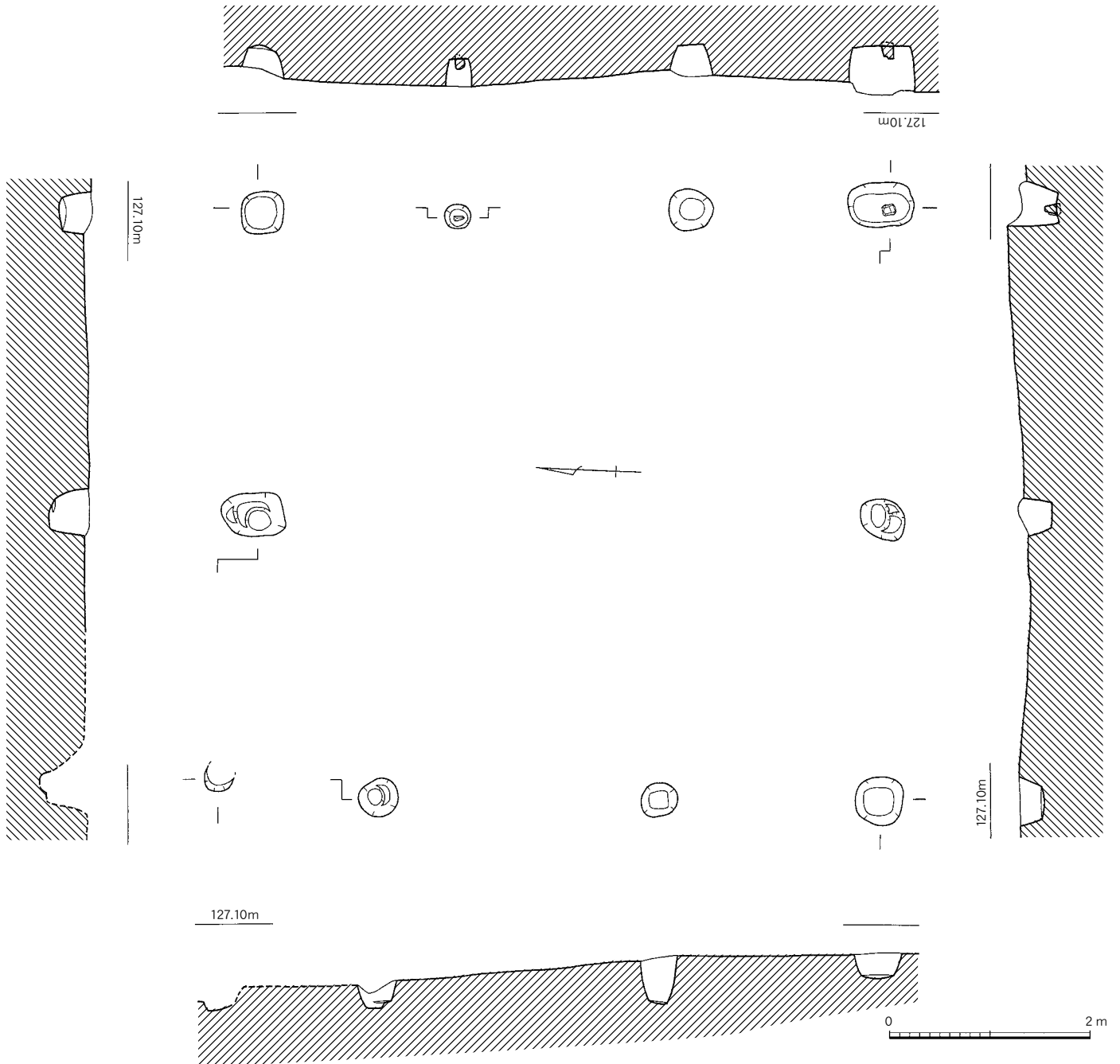
14は土師器椀である。口縁部は小さく外反する。

## 2. 掘立柱建物

2棟検出されており、埋土は1号が褐色土・2号は灰色土を呈し、時期は不明である。

#### 1号建物 (第47図、図版13)

調査区西端で検出された2間×3間の建物である。26号住居跡を切っている。梁行方向の柱穴間の距離は約1.5



第48図 2号掘立柱建物実測図 (1/60)

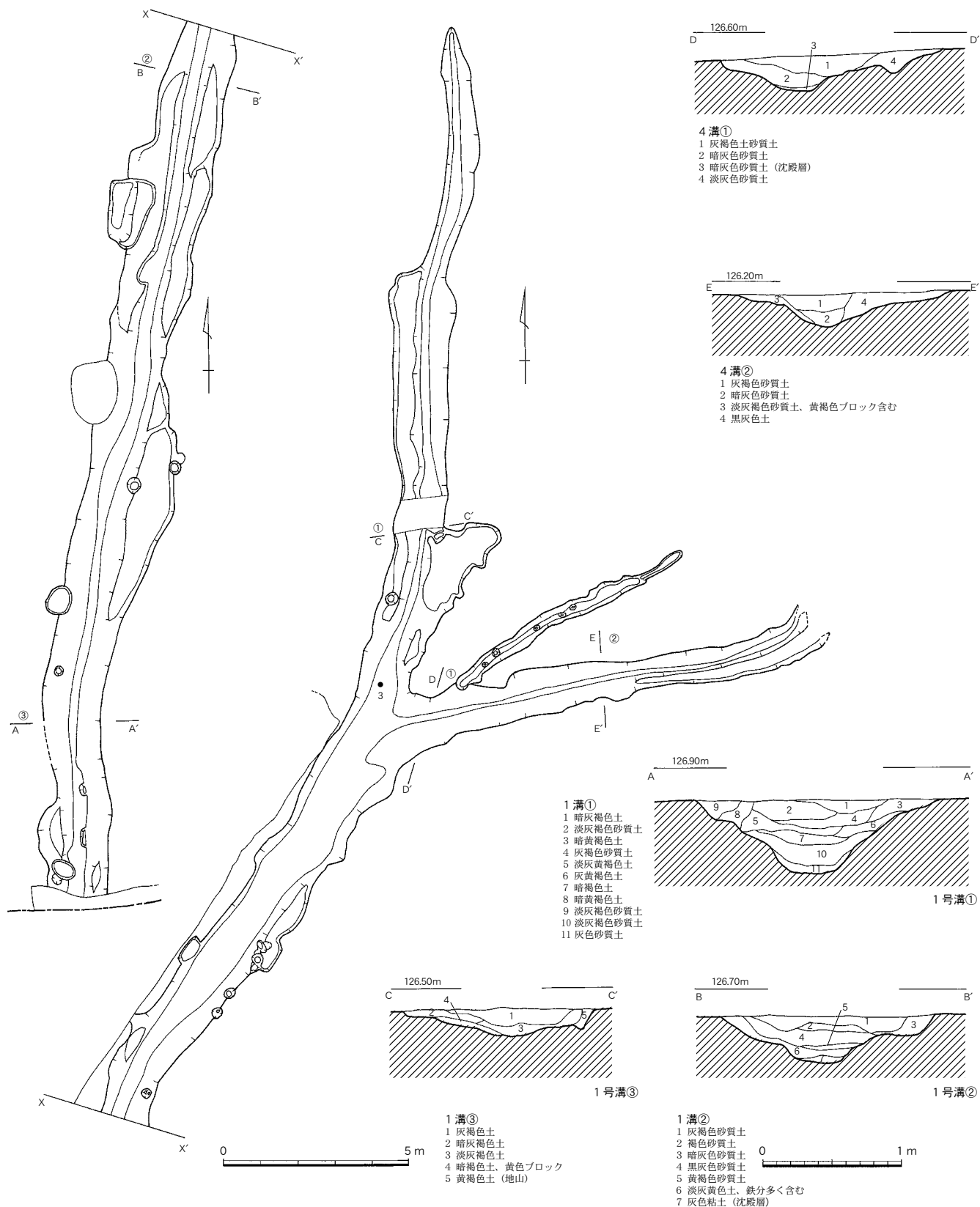
m、桁行方向の柱穴間距離は約1.5mを測り、心々距離で南北長軸約4.5m、東西短軸約3mを測る。検出面での柱穴の掘方は径約30cm程度の円形を呈し、深さは深いもので30cmを測る。遺物の出土は見られなかった。

### 2号建物 (第48図、図版13)

調査区西端で検出された2間×3間の建物である。8・28号土坑を切っている。梁行方向の柱穴間の距離は約2m、桁行方向の柱穴間距離は約3mを測るものの、西梁行側の柱穴間が一定ではない。心々距離で南北長軸約4.5m、東西短軸約3mを測る。検出面での柱穴の掘方は径約30cm程度の円形を呈し、深さは深いもので30cmを測る。遺物の出土は見られなかった。

### 3. 溝

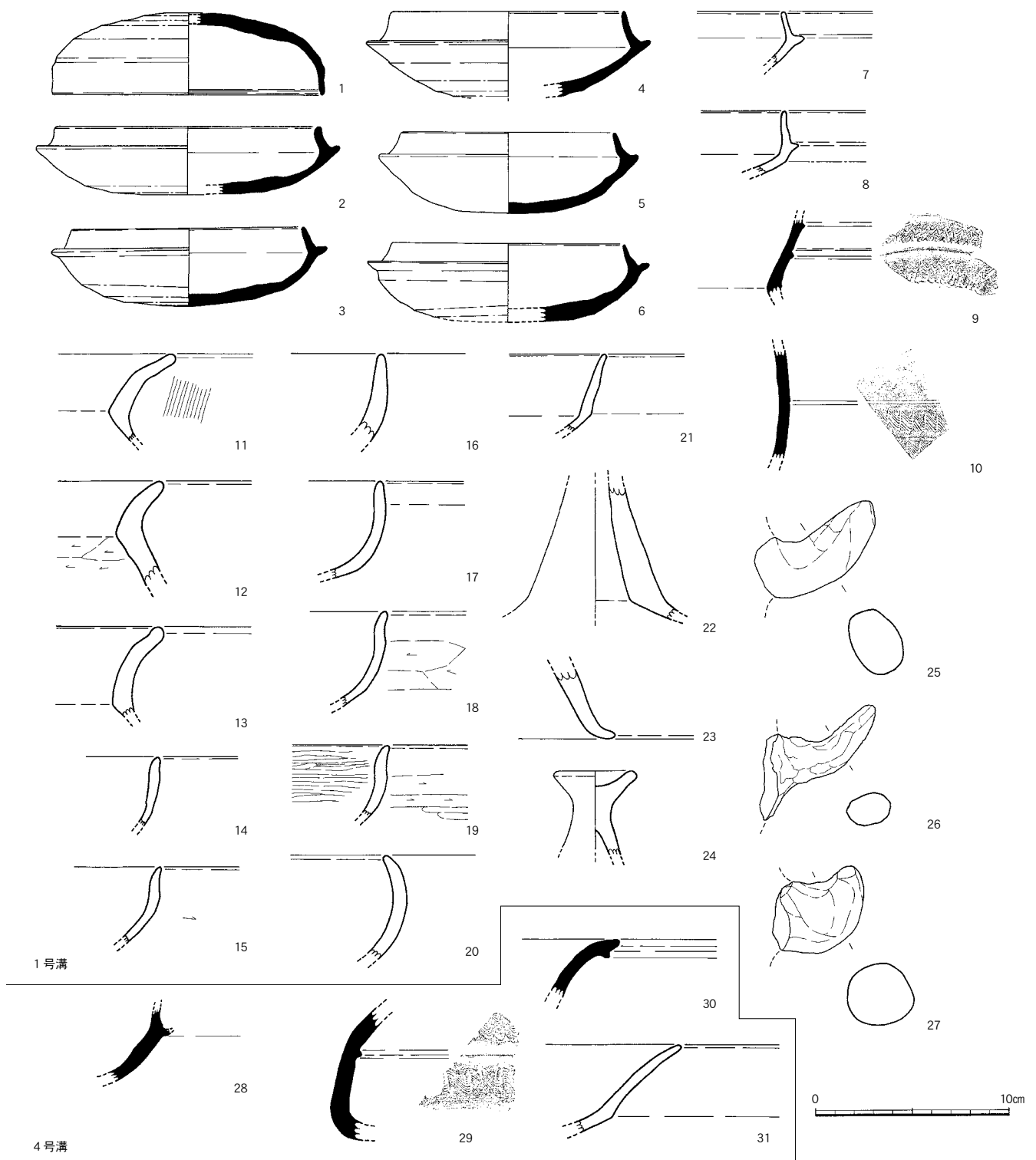
全部で9条が検出され、いずれも南北あるいは東西に軸を揃えるものが多い。出土遺物の特徴から、古墳時代後期と古代に区分出来そうである。



第49図 1・4号溝実測図 (1/150、1/40)

1号溝 (第49図、図版13・14)

調査区を北から南に流れる溝である。北側窪地付近は浅く、4号溝と合流したのちやや蛇行しながら南に向かうほど深くなる。調査区内での長さ約55m、検出面での幅は大きな所で約2.5m、断面形は逆台形状を呈し、北

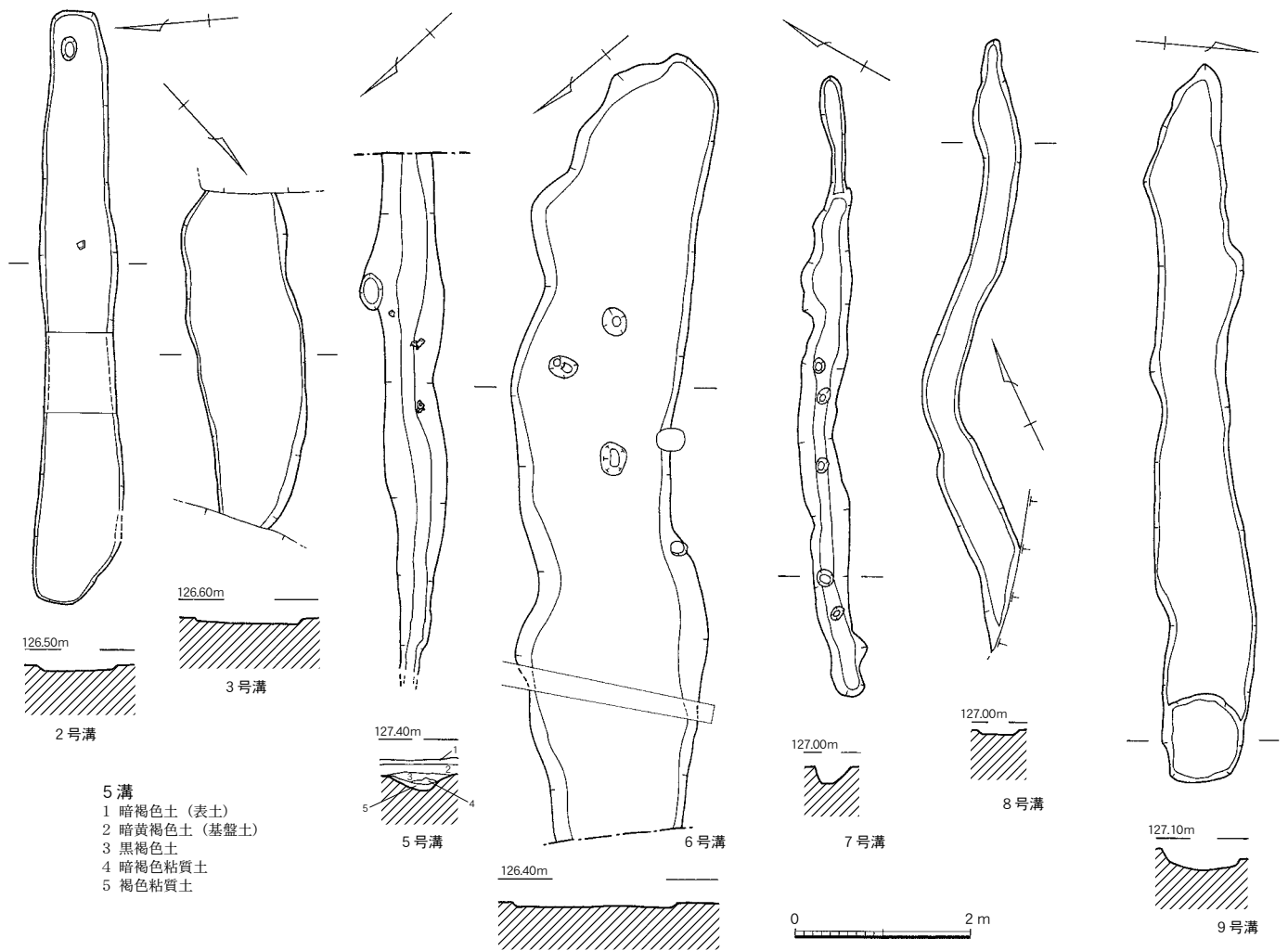


第50図 1・4号溝出土遺物実測図 (1/3)

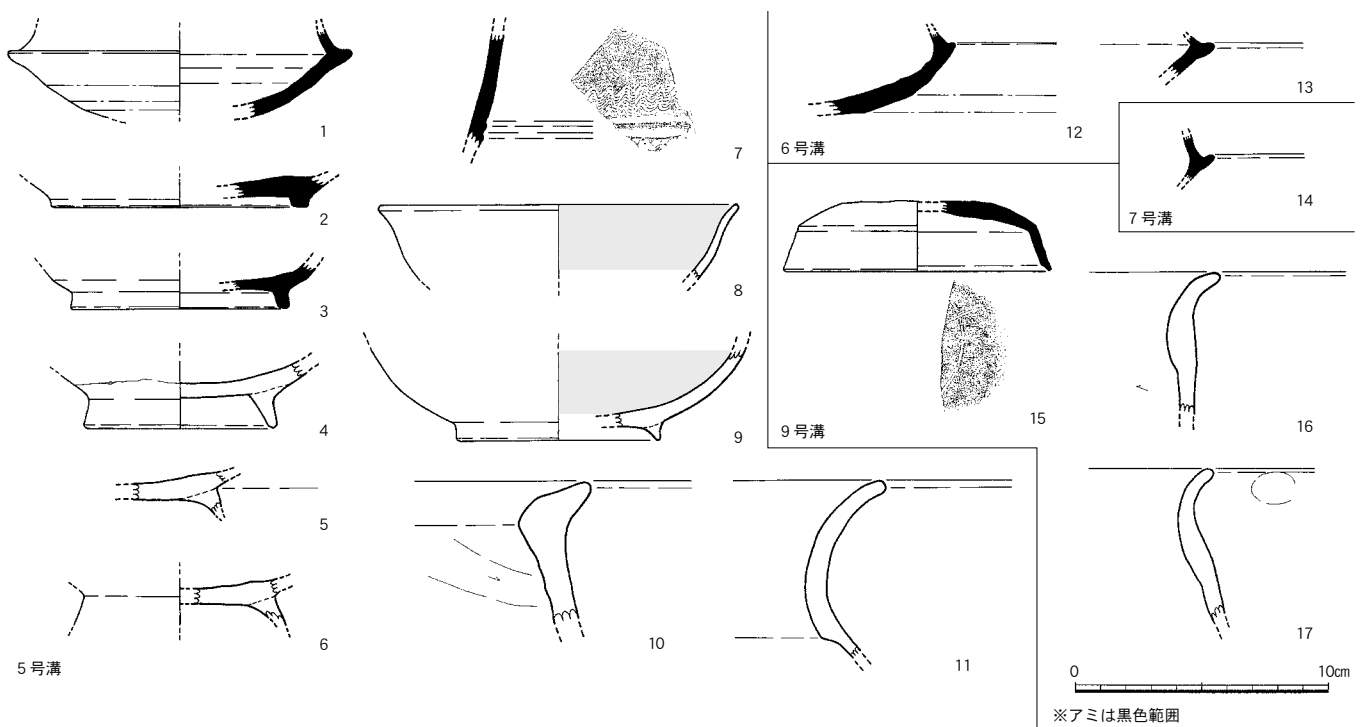
側での深さ約20cm、南側での深さは約60cmを測る。鉄分堆積と沈殿層が一部見られることから、当初は緩やかな水流が想定される。その後、上層の砂質土の堆積状況から水量が増加したものと考えられる。

**出土遺物 (第50図、図版21)**

1は須恵器坏蓋である。口縁部や丸みを帯びて内湾し、端部に小さな段を有する。2～6は須恵器坏身である。口縁部は外反しながら立ち上がり、端部は丸みを帯びる。7・8は須恵器坏身であるが、焼成が悪く赤みを帯び



第51図 2・3・5～9号溝実測図 (1/80)



第52図 5～9号溝出土遺物実測図 (1/3)

る。うち8は口縁部が上方に立ち上がり、比較的シャープな作りである。9は須恵器壺か、頸部との境に波状文が巡る。10は甗の胴部か。11～13は土師器甕である。頸部を明瞭に屈曲させ、口縁部は外反する。14～20は土師器椀である。口縁部は小さく外反するものが大半で、20のみ内傾する。21～23は土師器高坏である。21は口縁部、22・23は脚部か。24は土師器のミニチュア器台か。25～27は土師器の把手である。いずれもケズリにて調整される。

#### 2号溝 (第51図)

調査区を西側にて検出された溝である。2・12号溝に切られる。東西方向に浅く窪んでおり、長さ約6.8m、幅約1mを測る浅い流路か。遺物の出土は見られなかった。

#### 3号溝 (第51図)

調査区を西側にて検出された溝である。南北方向に浅く窪んでおり、長さ約3.8m、幅約1.3mを測る浅い流路か。遺物の出土は見られなかった。

#### 4号溝 (第49図、図版14)

調査区を東から西に流れる溝である。7号溝に切られ、北側窪地付近は浅く、西側は4号溝と合流する。調査区内での長さ約12m、検出面での幅は大きな所で約1.4m、断面形は浅いレンズ状を呈し、深さ約20cmを測る。沈殿層が一部見られることから、当初は緩やかな水流が想定される。

#### 出土遺物 (第50図、図版21)

28は須恵器坏身である。29は須恵器壺か。波状文が巡る。30は壺の口縁か？ 31は土師器高坏である。

#### 5号溝 (第51図、図版14)

調査区を東から西に流れる溝である。調査区内での長さ約6m、検出面での幅は大きな所で約80cm、断面形は浅いレンズ状を呈し、深さ約20cmを測る。鉄分沈殿が見られず、埋土の大半が沈殿層であることから、当初から緩やかな水流が想定される。

#### 出土遺物 (第52図、図版22)

1は須恵器坏身で、6世紀代のものである。2・3は須恵器坏身である。3は底部の屈曲があまく、高台がやや長い特徴を持つ。4～6は土師器坏身である。高台は長く外に開く。7は須恵器壺か。8・9は黒色土器である。8は口縁部が小さく外反し、9は胴部が丸みを帯びる。いずれも内面が黒色に仕上げられている。10・11は土師器甕である。10は頸部をケズリにより作り出し、11は口縁部が外湾する。

#### 6号溝 (第51図、図版15)

4号溝に併行する溝で、長さ約9m、幅約2.2mを測る浅い流路か。

#### 出土遺物 (第52図、図版22)

12・13は須恵器坏身である。

#### 7号溝 (第51図)

4号溝を切る溝で、長さ約7m、幅約30cmを測る。断面形は逆台形を呈する。溝底に小穴が多数見られる。

#### 出土遺物 (第52図)

14は須恵器坏身である。

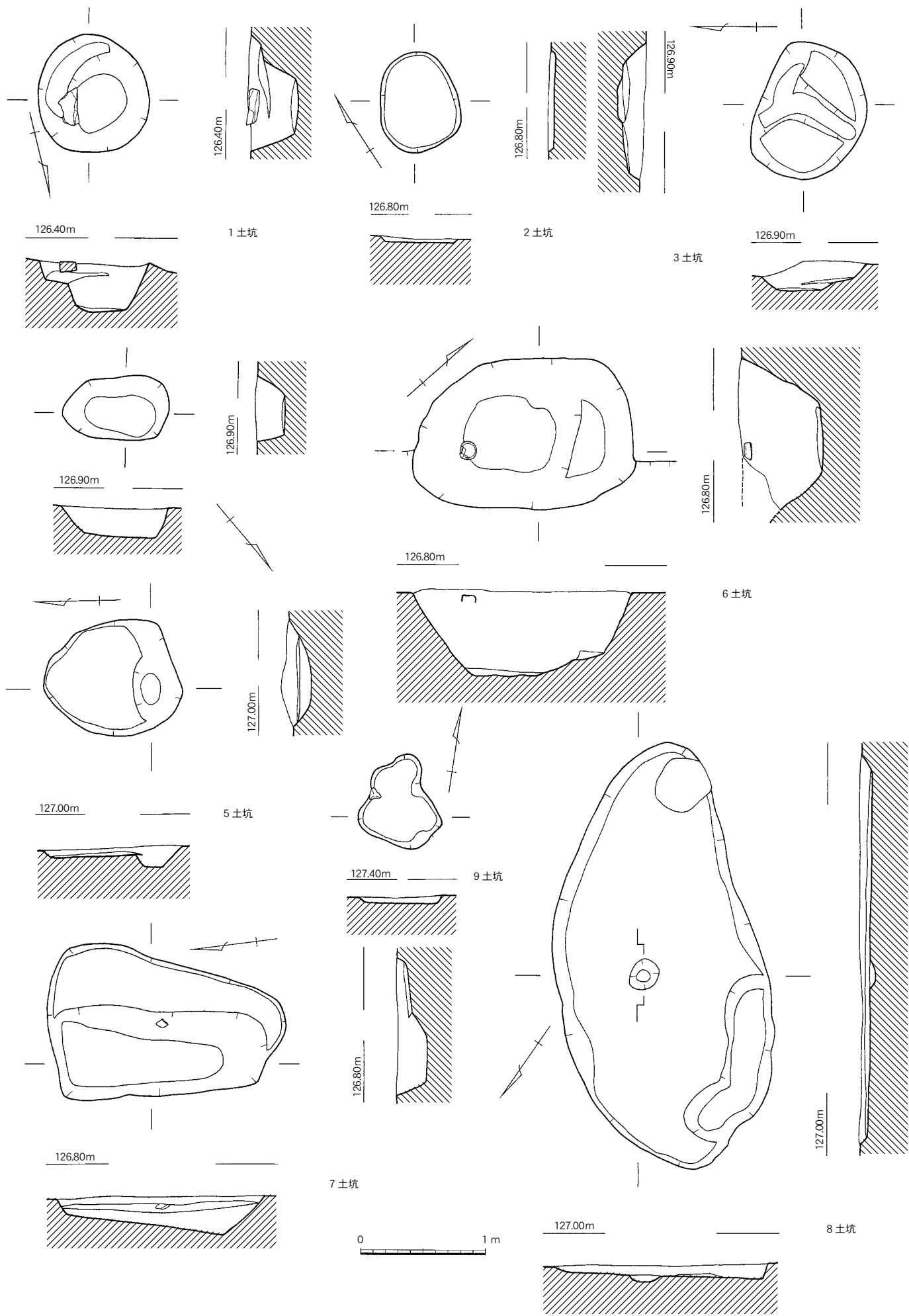
#### 8号溝 (第51図)

調査区中央で検出された溝で、1号溝に並行して流れ南半は削平を受ける。長さ約7m、幅約30cmを測る。断面形は浅いレンズ状を呈し、蛇行する。

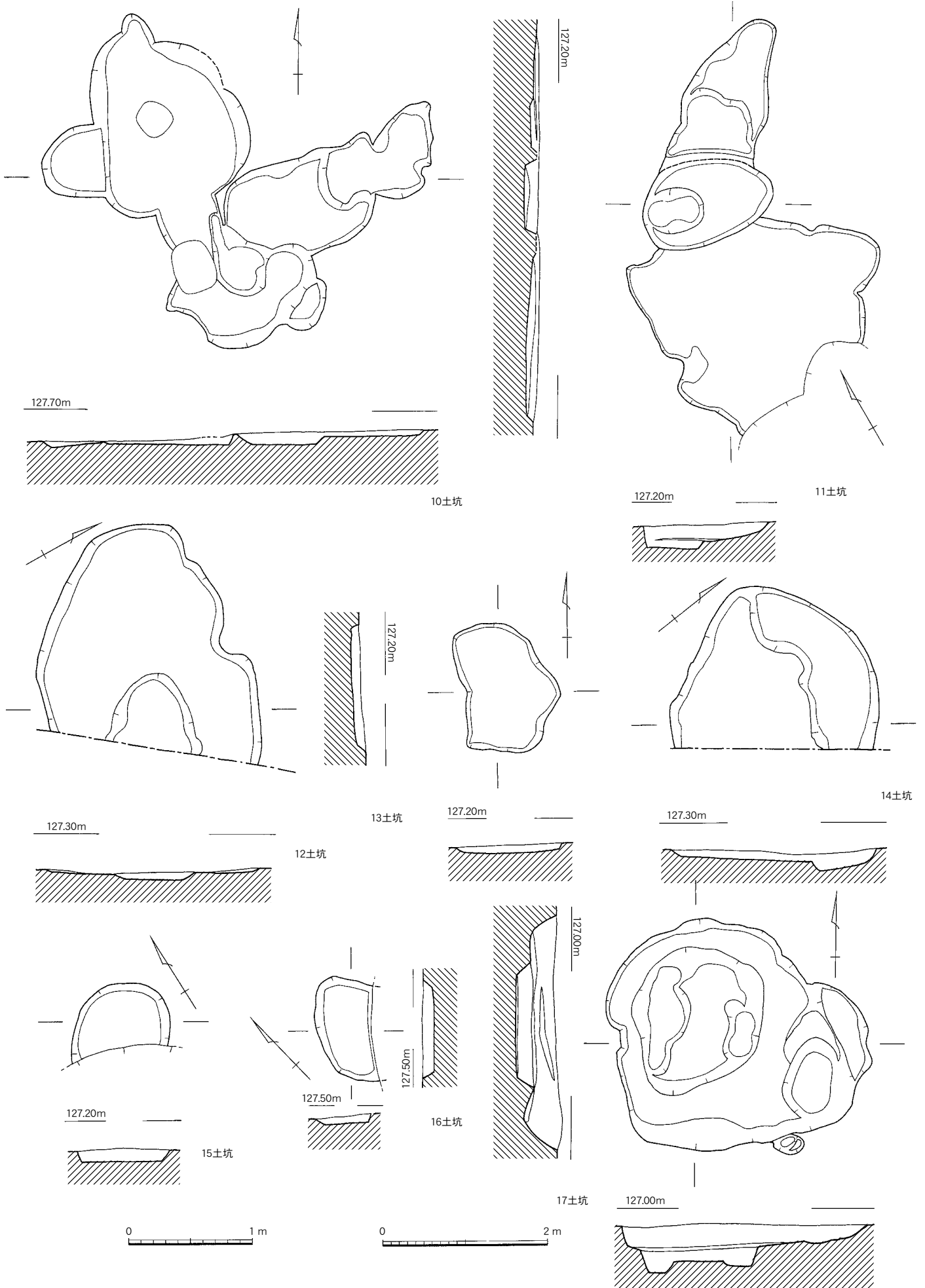
#### 9号溝 (第52図)

調査区中央で検出された溝で、4号溝に並行して流れる。長さ約7m、幅約1mを測る。断面形は浅いレンズ





第53图 1~8号土坑实测图 (1/40)



第54图 10~17号土坑实测图 (1/40)

状を呈する。

#### 出土遺物（第52図、図版22）

15は須恵器坏蓋である。天井部との境は明瞭に屈曲し、口縁端部には内部に段を有する。16・17は土師器甕の口縁部である。口縁部は緩やかに外湾する。

#### 4. 土坑

土坑は多数検出されたが、大半が調査区西側に集中していた。大半の形状が不定形で、切り合い関係にあるものが多く見られる。その形状は様々で深さもまちまちであるが、埋土は灰褐色土のものが多く見られる。なかでも、遺物の出土が見られたものを中心に報告する。

##### 1号土坑（第53図）

調査区西側にて検出され、6号溝を切る。確認面での規模は径90cmの円形を呈し、深さ約40cmを測る。南側にテラス状の段を持ち、逆台形状を呈する。

##### 2号土坑（第53図）

調査区南側にて検出され、1号溝を切る。確認面での規模は南北軸約80cm、東西軸約65cmの楕円形を呈し、深さ数cmを測る。遺物の出土は見られなかった。

##### 3号土坑（第53図）

調査区南側にて検出され、9号住居に近接する。確認面での規模は南北軸約90cm、東西軸約1.1mの楕円形を呈し、深さ約20cmを測る。遺物の出土は見られなかった。

##### 4号土坑（第53図）

調査区南側にて検出され、27号土坑に近接する。確認面での規模は南北軸約90cm、東西軸約50cmの楕円形を呈し、深さ約20cmの断面逆台形を呈する。

##### 5号土坑（第53図）

調査区南側にて検出された土坑で、確認面での規模は南北軸約1.1m、東西軸約90cmの楕円形を呈し、深さ約20cmを測る。底面はテラス状を呈し、柱穴状を呈する。

##### 6号土坑（第53図、図版15）

調査区南側にて検出され、1号溝を切る。確認面での規模は南北軸約1.8m、東西軸約1.2mを測り、北側にテラスを持ち段状に落ちており、深さ約65cmを測る。埋土上面にはほぼ完形の椀が見られた。

##### 7号土坑（第53図）

調査区南側にて検出され、1号溝を切る。確認面での規模は南北軸約1.9m、東西軸約1.2mを測り不整形を呈する。東側にテラスを持つ段状の底面で、深さ約30cmを測る。遺物の出土は見られなかった。

##### 8号土坑（第53図）

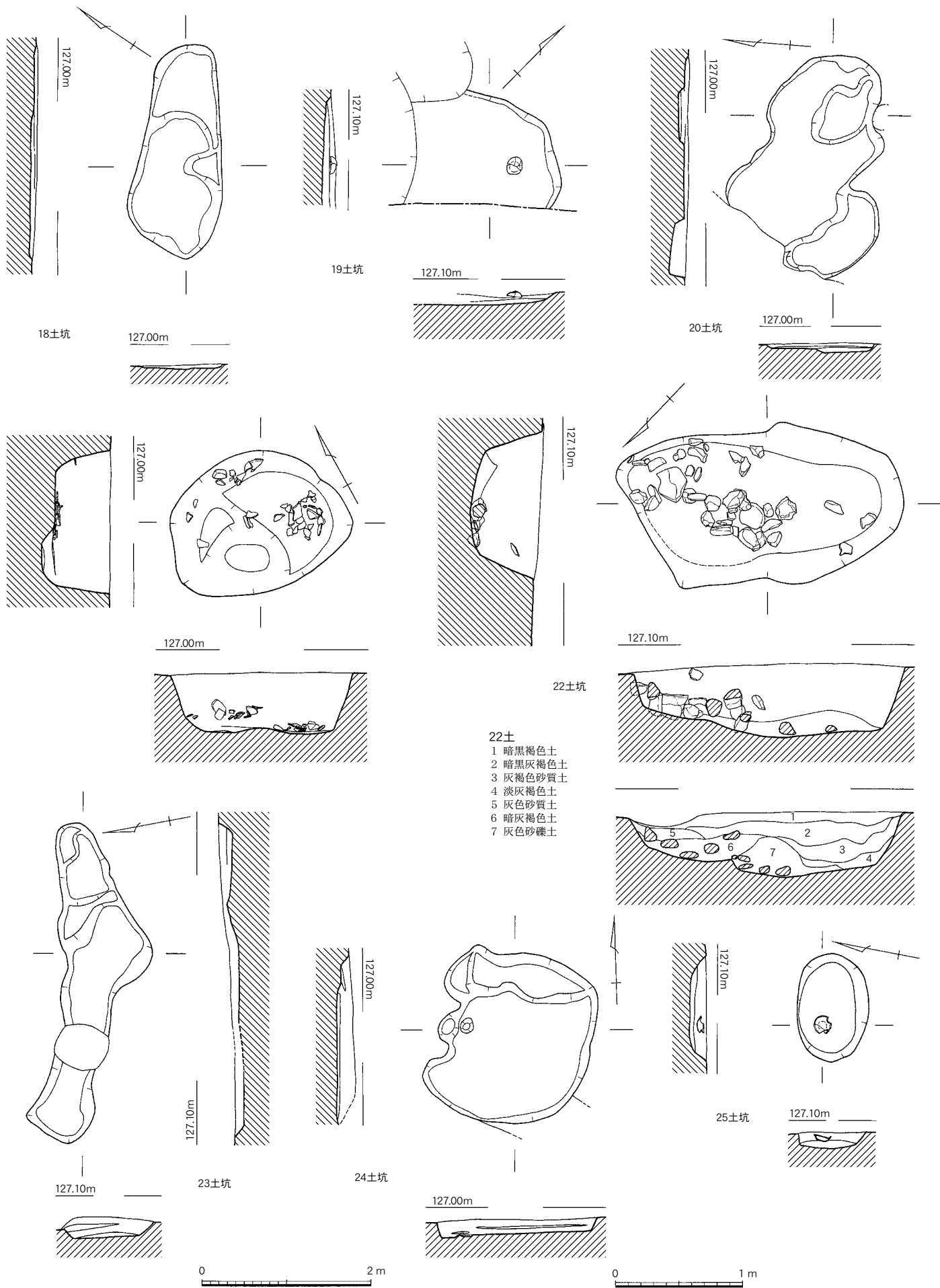
調査区東側にて検出された土坑で、2号建物に切られる。確認面での規模は南北軸約3.4m、東西軸約1.8mの不整形を呈する。底面は比較的平坦で深さ約10cmを測る。

##### 9号土坑（第53図）

調査区東側にて検出された土坑である。確認面での規模は南北軸約65cm、東西軸約75cmの不整形を呈する。底面は比較的平坦で深さ約数cmを測る。遺物の出土は見られなかった。

##### 10号土坑（第54図）

調査区東側にて検出された土坑で、2号建物に切られる。複雑な掘り込みが複数行われた複雑な形状を呈し、最大長が4.3mの規模を有する。底面は平坦で深さ約20cmで浅い段状を呈する。



第55図 18~25号土坑実測図 (1/40)

#### 11号土坑（第54図）

調査区東側にて検出された土坑で、14・15・16・19号土坑に切られる。複雑に掘りこまれており、10号土坑と同様に掘り込みが複数行われた形状を呈する。底面は比較的平坦で深さ約20cmを測る。

#### 12号土坑（第54図）

調査区東側にて検出された土坑で、東半が調査区外に伸びる。確認面での規模は南北軸約1.8m、東西軸約1.8m +  $\alpha$  の不整形を呈する。底面は平坦で中央部に凹みがある。遺物の出土は見られなかった。

#### 13号土坑（第54図）

調査区東側にて検出された土坑で12号土坑に近接する。確認面での規模は南北軸約1m、東西軸約80cmを測り、不整形を呈する。底面は平坦を呈する。遺物の出土は見られなかった。

#### 14号土坑（第54図）

調査区東側にて検出された土坑で15・16・19号土坑を切る。確認面での規模は南北軸約2.5m、東西軸約2 +  $\alpha$  mを測り、楕円形を呈する。底面はテラス状の段を呈する。

#### 15号土坑（第54図）

調査区東側にて検出された土坑で、14号土坑に切られ、11号土坑を切る。確認面での規模は南北軸約50 +  $\alpha$  cm、東西軸約80cmを測り、楕円形を呈する。底面は平坦で深さは約10cmを測る。

#### 16号土坑（第54図）

調査区東側にて検出された土坑で、14号土坑に切られ、11号土坑を切る。確認面での規模は南北軸約90cm、東西軸約50 +  $\alpha$  cmを測り、楕円形を呈する。底面は平坦で深さは約10cmを測る。

#### 17号土坑（第54図）

調査区東側にて検出された土坑で24号土坑に切られる。確認面での規模は南北軸約2.8m、東西軸約3.2mを測り、不整形を呈する。深さは約50cmで複数の掘り込みが見られる。

#### 18号土坑（第55図）

調査区東側にて検出された土坑で21号土坑に近接する。確認面での規模は南北軸約1.7m、東西軸約75cmを測り、不整形楕円形を呈する。深さは約数cmでテラス状の落ち込みが見られる。

#### 19号土坑（第55図、図版15）

調査区東側にて検出された土坑で14・16号土坑に切られる。確認面での規模は南北軸約1.2 +  $\alpha$  m、東西軸約90 +  $\alpha$  cmを測り、不整形楕円形を呈する。深さは約数cmで浅いレンズ状を呈する。埋土上にはほぼ完形の椀が見られた。

#### 20号土坑（第55図）

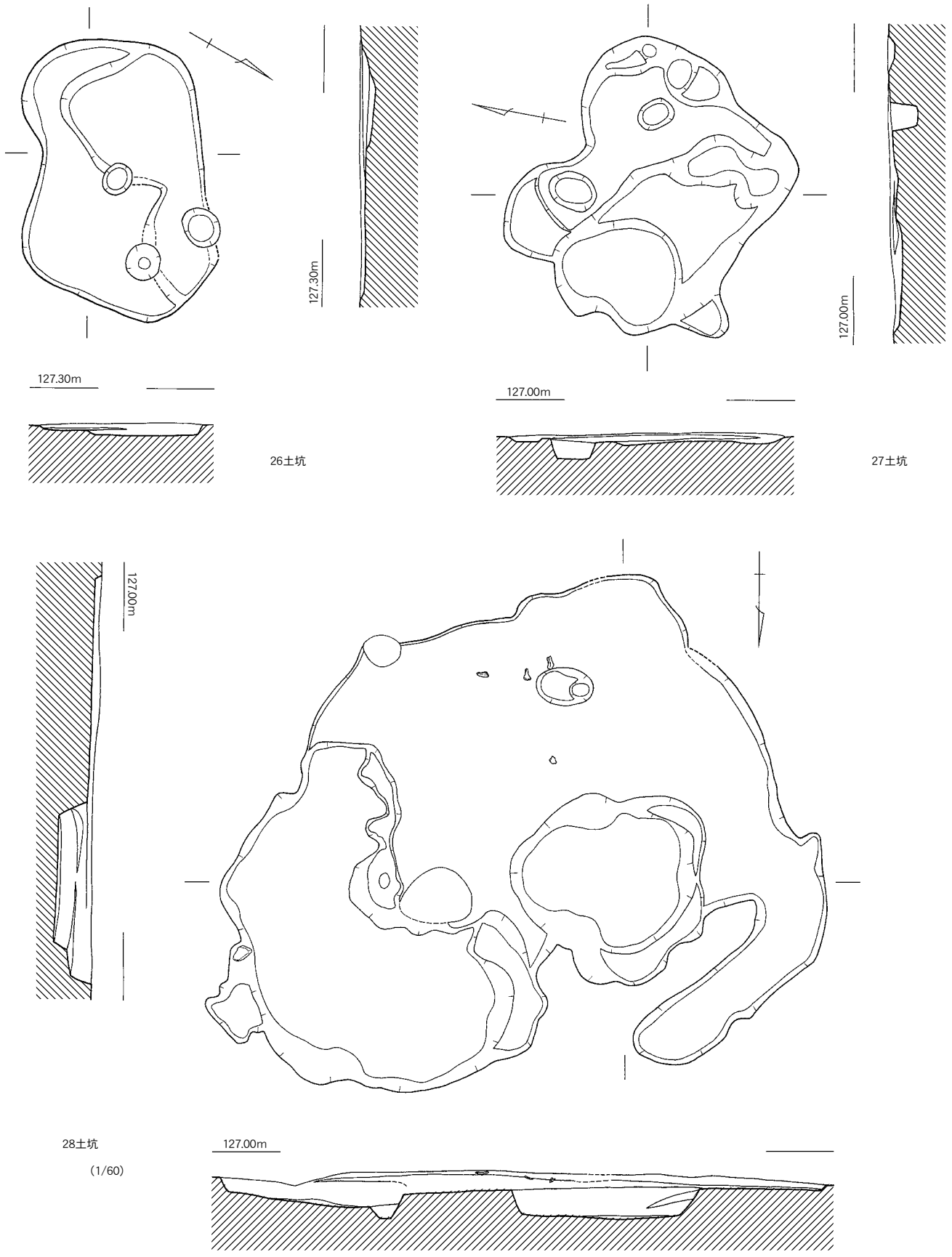
調査区東側にて検出された土坑で、28号土坑に切られる。確認面での規模は南北軸約1.2m、東西軸約1.8 +  $\alpha$  mを測り、不整形楕円形を呈する。深さは約数cmで底面は平坦で一部落ち込みが見られる。遺物の出土は見られなかった。

#### 21号土坑（第55図、図版15）

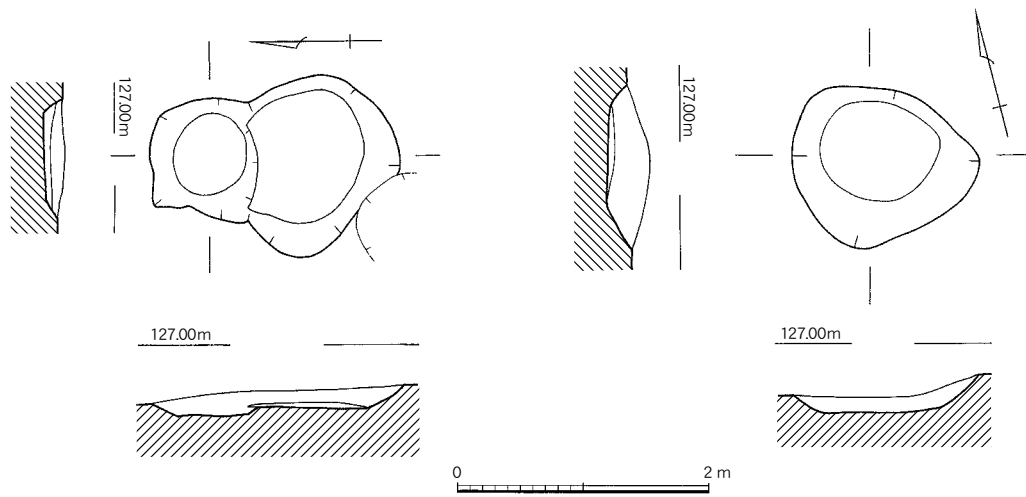
調査区東側にて検出された土坑で、7号住居を切る。確認面での規模は南北軸約1.1m、東西軸約1.4mを測り、不整形楕円形を呈する。深さは約50cmで底面はテラス状の落ち込みが一部見られる。底の部分には石がまとまって廃棄されていた。

#### 22号土坑（第55図、図版15）

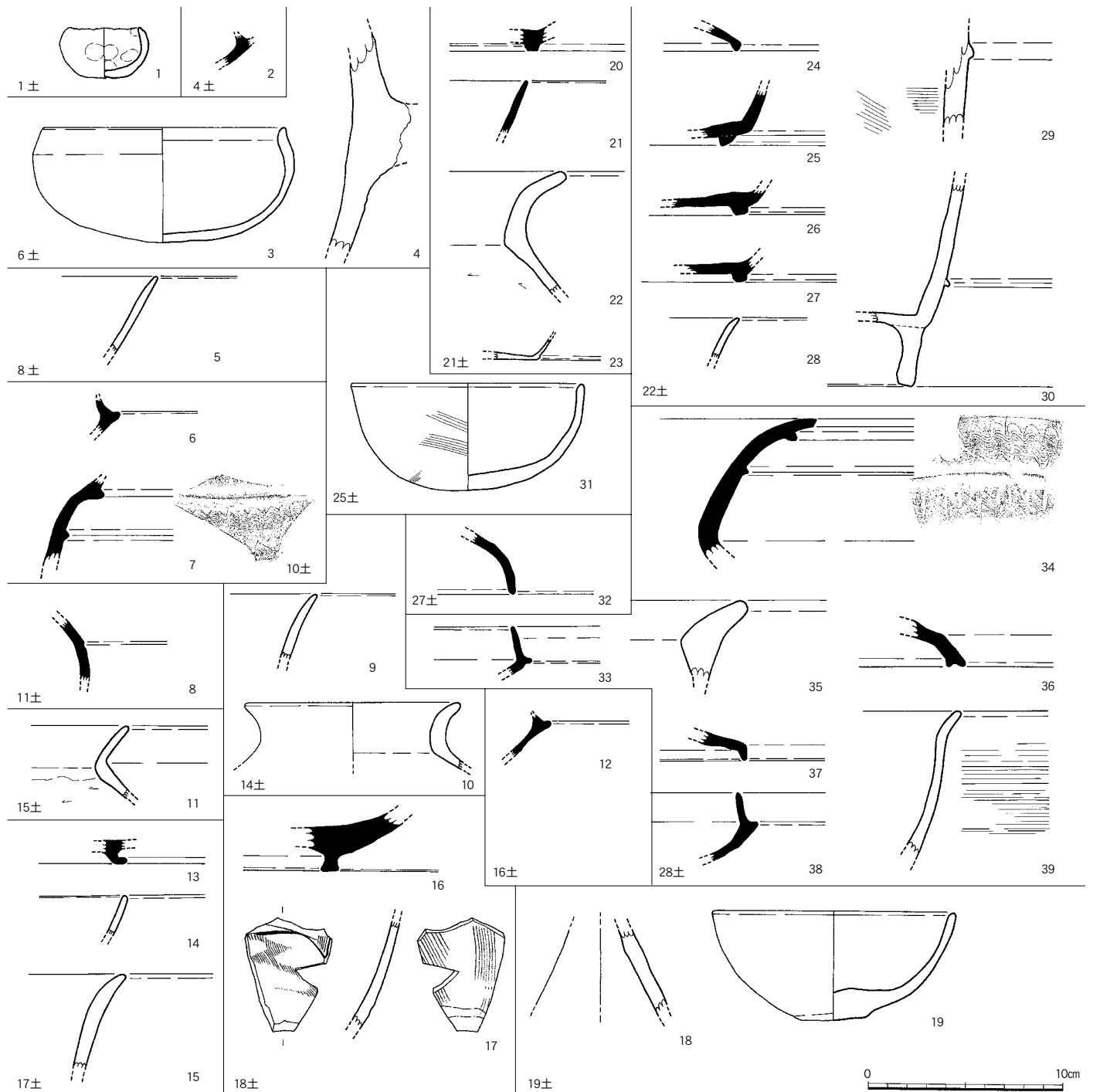
調査区東側にて検出された土坑で21号土坑・7号住居に近接する。確認面での規模は南北軸1.3m、東西軸約2.3mを測り、不整形楕円形を呈する。深さは約60cmで底面は浅いレンズ状を呈していた。埋土はブロック状の互



第56图 26~28号土坑实测图 (1/40、1/60)



第57图 29~30号土坑实测图 (1/40)



第58图 土坑出土遺物实测图 (1/3)

層堆積状を示しており、埋め戻しによる埋没と思われる。底面付近には多数の石が廃棄されており、中には五輪塔の塔身の破片も見られた。

#### 23号土坑 (第55図)

調査区東側にて検出された土坑で11号土坑に近接する。確認面での規模は南北軸約2.5m、東西軸約80cmを測り、不整形を呈する。深さは約10cmで浅いレンズ状を呈する。遺物の出土は見られなかった。

#### 24号土坑 (第55図)

調査区東側にて検出された土坑で7号土坑に近接する。確認面での規模は南北軸約1.4m、東西軸約1.4mを測り、不整形を呈する。深さは約10cmで浅いレンズ状を呈する。遺物の出土は見られなかった。

#### 25号土坑 (第55図、図版15)

調査区東側にて検出された土坑で11号土坑に近接する。確認面での規模は南北軸約60cm、東西軸約80cmを測り、楕円形を呈する。深さは約10cmで浅いレンズ状を呈する。

#### 26号土坑 (第56図)

調査区東側にて検出された土坑で11号土坑に近接する。確認面での規模は南北軸約60cm、東西軸約80cmを測り、楕円形を呈する。深さは約10cmで浅いレンズ状を呈する。遺物の出土は見られなかった。

#### 27号土坑 (第56図)

調査区東側にて検出された土坑で4号土坑に近接する。確認面での規模は南北軸約2.2m、東西軸約2.2mを測り、不整形を呈する。深さは約数cmで浅いレンズ状を呈する。

#### 28号土坑 (第56図)

調査区東側にて検出された大型の土坑で20号土坑に近接する。確認面での規模は南北軸約5.4m、東西軸約6.6mを測り、不整形を呈する。深さは約20cmで、一部土坑状に落ちる箇所が見られる。

#### 29号土坑 (第57図)

調査区東隅にて検出された土坑である。確認面での規模は南北軸約1.3m、東西軸約1mを測り、不整形を呈する。深さは約10cmで、底面は平坦を呈する。遺物の出土は見られなかった。

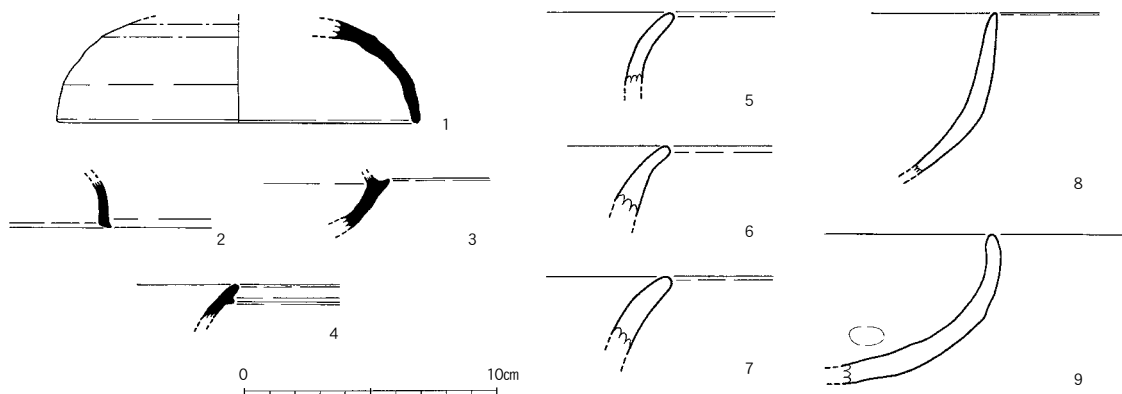
#### 30号土坑 (第57図)

調査区東隅にて検出された土坑で29号土坑に近接する。確認面での規模は南北軸約80cm、東西軸約1mを測り、楕円形を呈する。深さは約15cmで、底面は浅いレンズ状を呈する。遺物の出土は見られなかった。

#### 土坑出土遺物 (第58図、図版22)

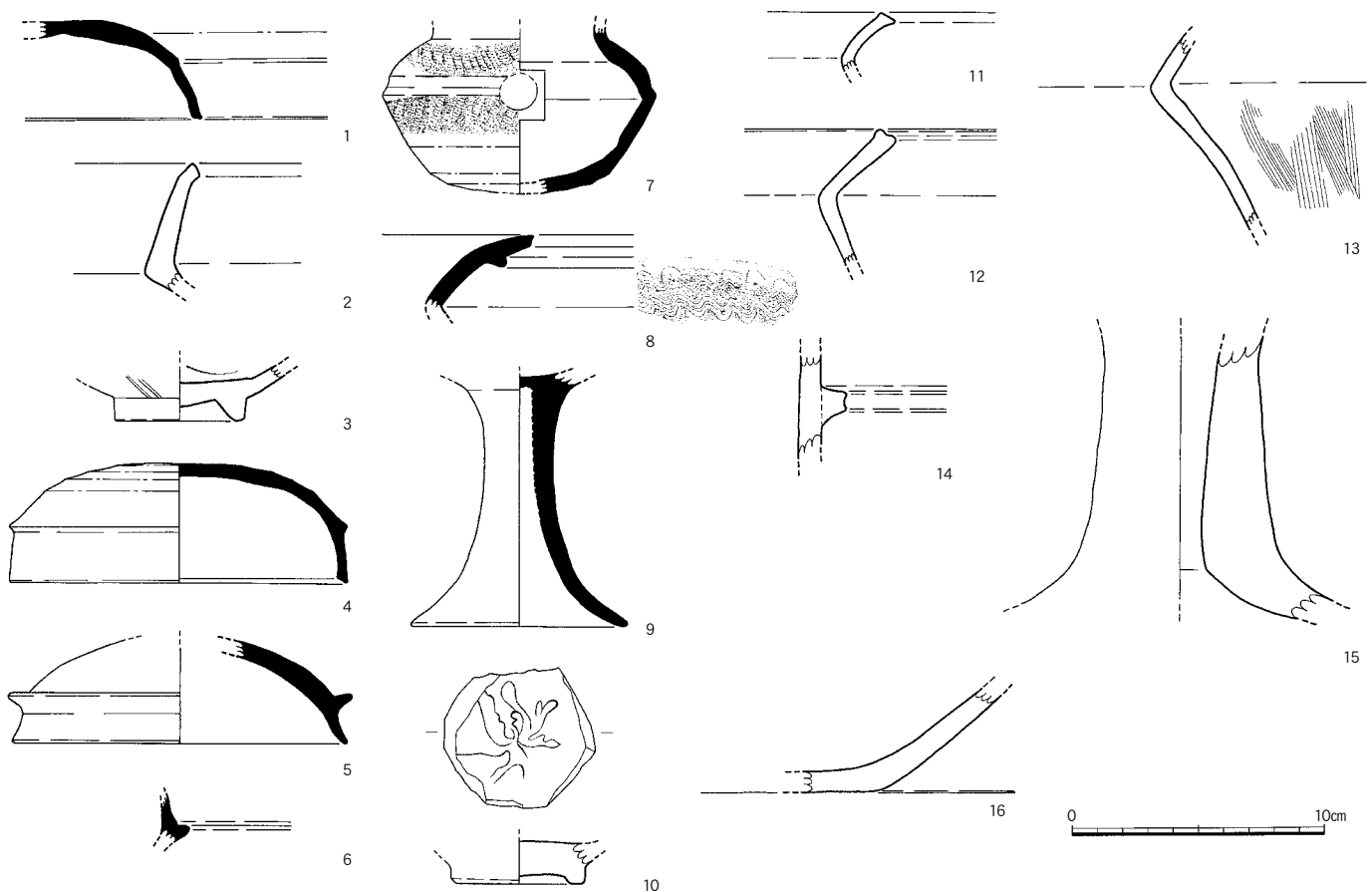
土坑より出土した遺物を一括して紹介する。

1は1号土坑より出土した手捏土器である。2は4号土坑より出土した須恵器坏身である。3・4は6号土坑より出土した。3は土師器碗である。口縁部は内傾する。4は土師器甕か甑の胴部である。5は8号土坑より出土した土師器高坏の口縁部である。6・7は10号土坑より出土した。6は須恵器坏身である。7は須恵器甕



第59図 柱穴出土遺物実測図 (1/3)





第60図 その他の遺物実測図 (1/3)

である。文様帯の間には波状文が施される。8は11号土坑より出土した須恵器甕か。沈線が巡る。9・10は14号土坑より出土した土師器甕である。11は15号土坑より出土した土師器甕である。12は16号土坑より出土した須恵器坏身である。13～15は17号土坑より出土した。13は須恵器坏身の高台部分である。外側へ折り曲がる。14は青磁碗の破片である。15は土師器甕である。16・17は18号土坑より出土した。16は須恵器坏身の高台部分である。底部屈曲が明瞭ではない。17は同安窯系青磁碗の胴部破片である。18・19は19号土坑より出土した。18は土師器高坏の脚部である。19は土師器碗である。20～23は21号土坑より出土した。20は須恵器坏身の高台部分。21は須恵器坏身の口縁部。22は土師器甕で、23は青磁碗の底部破片である。24～30は22号土坑より出土した。24は須恵器坏蓋で断面が小さく下方に下り曲がる。25～27は須恵器坏身の高台部分である。28は青磁碗の破片か。29は火鉢の胴部か。30は火鉢の底部で脚が見られる。31は25号土坑より出土した土師器碗である。口縁部は上方に立ち上がる。32は27号土坑より出土した須恵器坏蓋である。端部は丸みを帯びる。33～39は28号土坑より出土した。33は須恵器坏身である。34は須恵器甕である。口縁直下に文様帯を形成し、波状文が巡る。35は土師器甕である。36は須恵器坏蓋である。口縁部に小さく逆刺が形成される。37は須恵器坏蓋である。口縁部が下方に折れ曲がる。38は須恵器坏身である。39は土師器の鉢か。口縁部が外湾する。

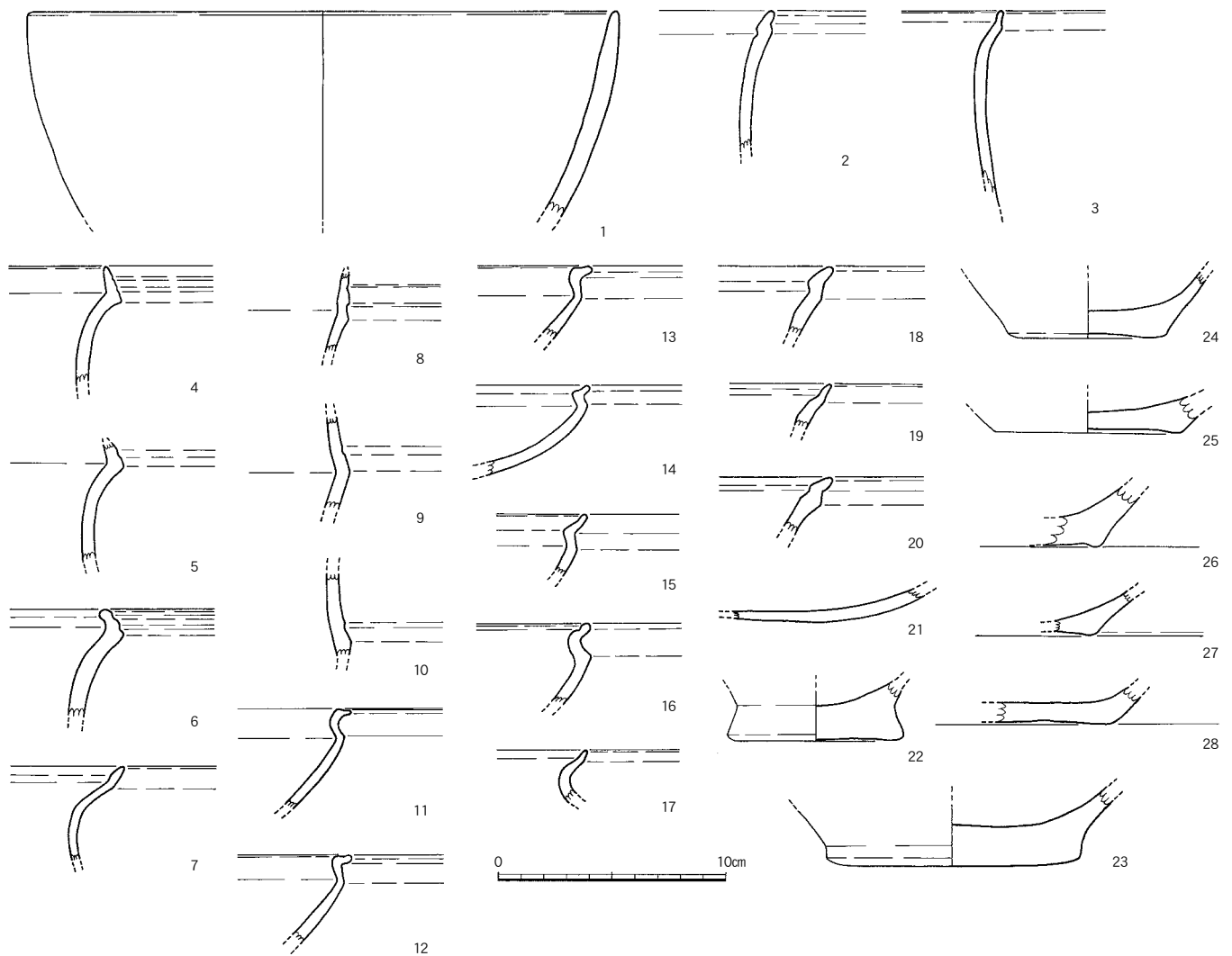
## 5. 柱穴

調査区内から多数の柱穴が検出された。遺物が包含される柱穴も多く、ここでは主な遺物について紹介する。

### 出土遺物 (第59図、図版22)

出土柱穴については観察表を参照いただき、ここでは器種毎に区分けして紹介する。

1・2は須恵器坏蓋である。1は端部が丸みを帯び、2は端部が平坦面を形成する。3は須恵器坏身である。



第61図 縄文土器実測図 (1/3)

4は須恵器甕か。5～7は土師器甕の口縁部である。8・9は土師器碗か。8は口縁部が上方に立ち上がり、9は僅かに内湾する。

## 6. その他の遺物

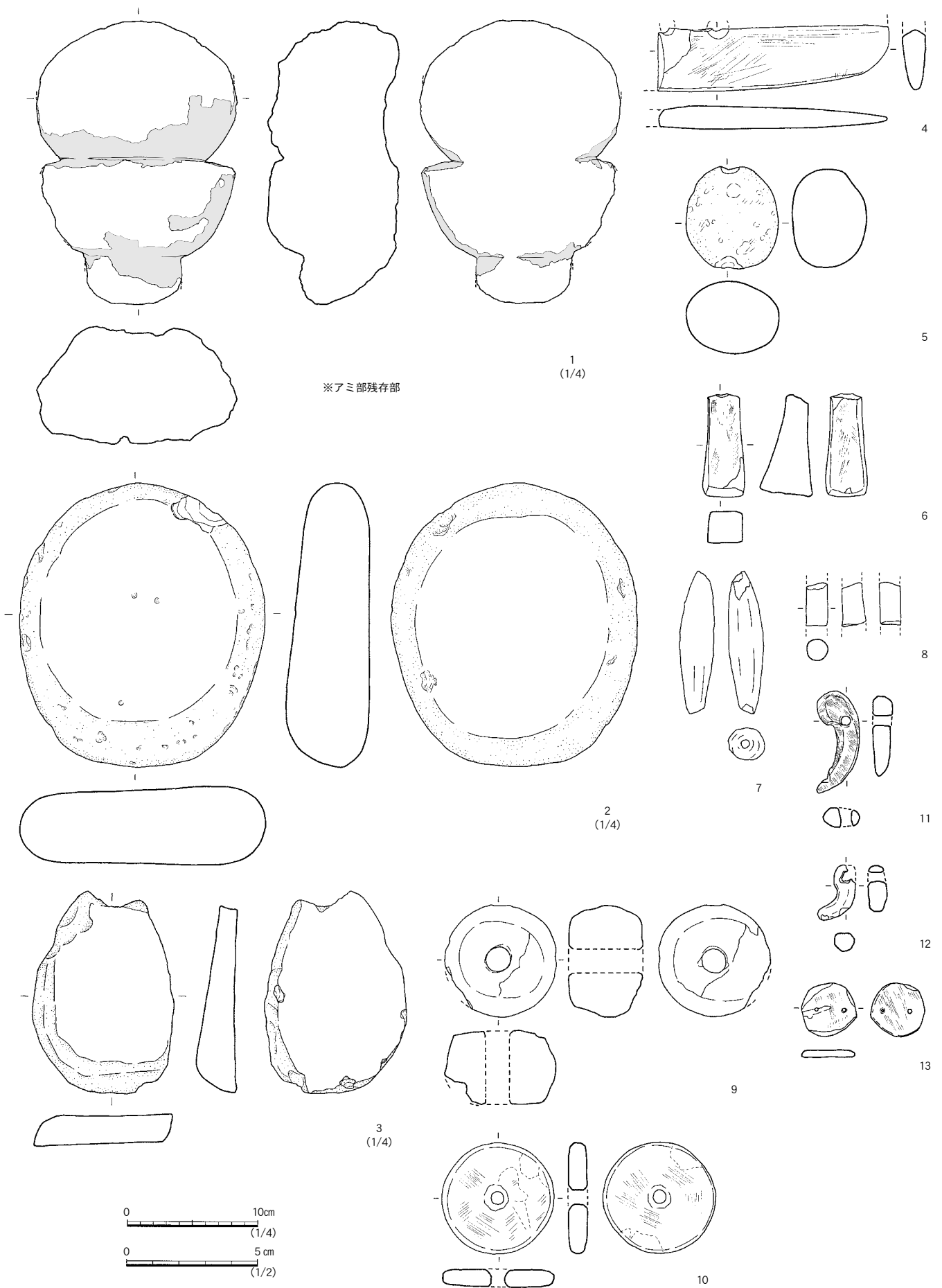
ここでは水田層・各遺構、包含層あるいは排土中から出土した遺物等について個別に概説する。なお、各遺構から出土した縄文土器・弥生土器については、遺構に伴わないと想定されることから一括して説明することとする。また石器については各遺構に伴うものもあるが、器種別の説明を行うものとする。出土遺構については観察表を参照いただきたい。

### 水田層出土遺物 (第60図、図版22)

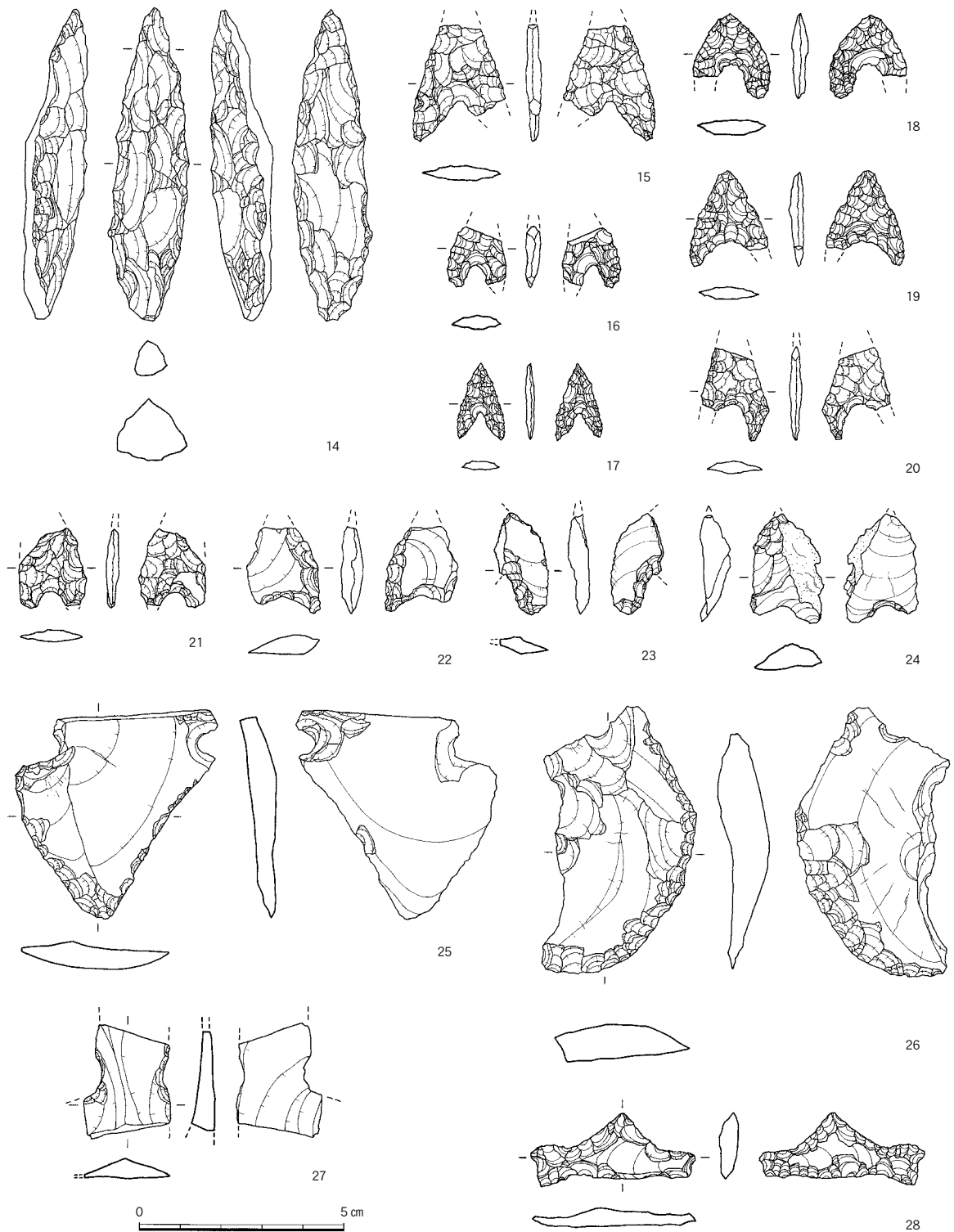
1～3は調査区北側トレンチにおいて確認された水田層より出土した遺物である。1は須恵器坏蓋である。口縁部端部は内傾する。2は土師器の甕である。端部が小さく外反する。3は青磁碗の底部である。

### 須恵器・土師器 (第60図、図版22)

4は須恵器坏蓋である。天井部は丸く、口縁部との境の稜はやや丸みを帯びる。口縁部端部は内傾する。5は須恵器有蓋高坏の蓋である。天井部は丸みを帯び、口縁部との境には外に長く伸びる突起が見られる。全体的に外に開き、口縁部は僅かに外湾する。かなり古式のものである。6は須恵器坏身の口縁部である。7は須恵器甕で



第62図 石器類実測図① (1/2、1~4は1/4)

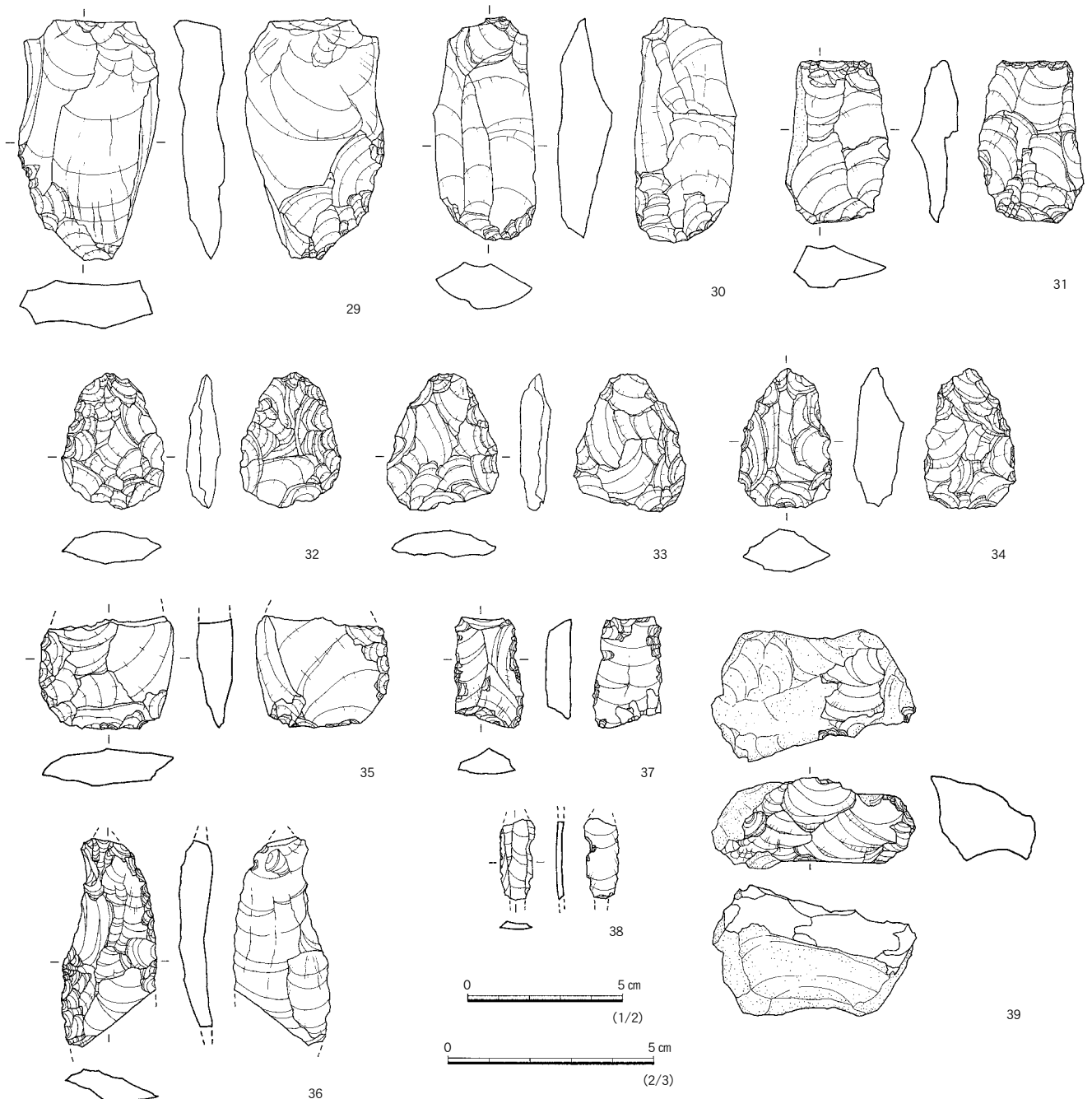


第63図 石器類実測図② (2/3)

ある。肩部と胴部に列点文が見られる。8は須恵器甕である。口縁下部に波状文が巡る。9は須恵器高杯の脚部である。口縁部は緩やかに外に開く。10は青磁碗である。内面見込みに花卉状の文様が施される。11～13は弥生土器甕である。口縁部はくの字状に外反し、12は端部が持ち上がる。14は弥生土器甕の胴部か。断面台形状の突帯が巡る。15は弥生土器の支脚か。16は弥生土器壺の底部か。平底である。

縄文土器 (第61図、図版23)

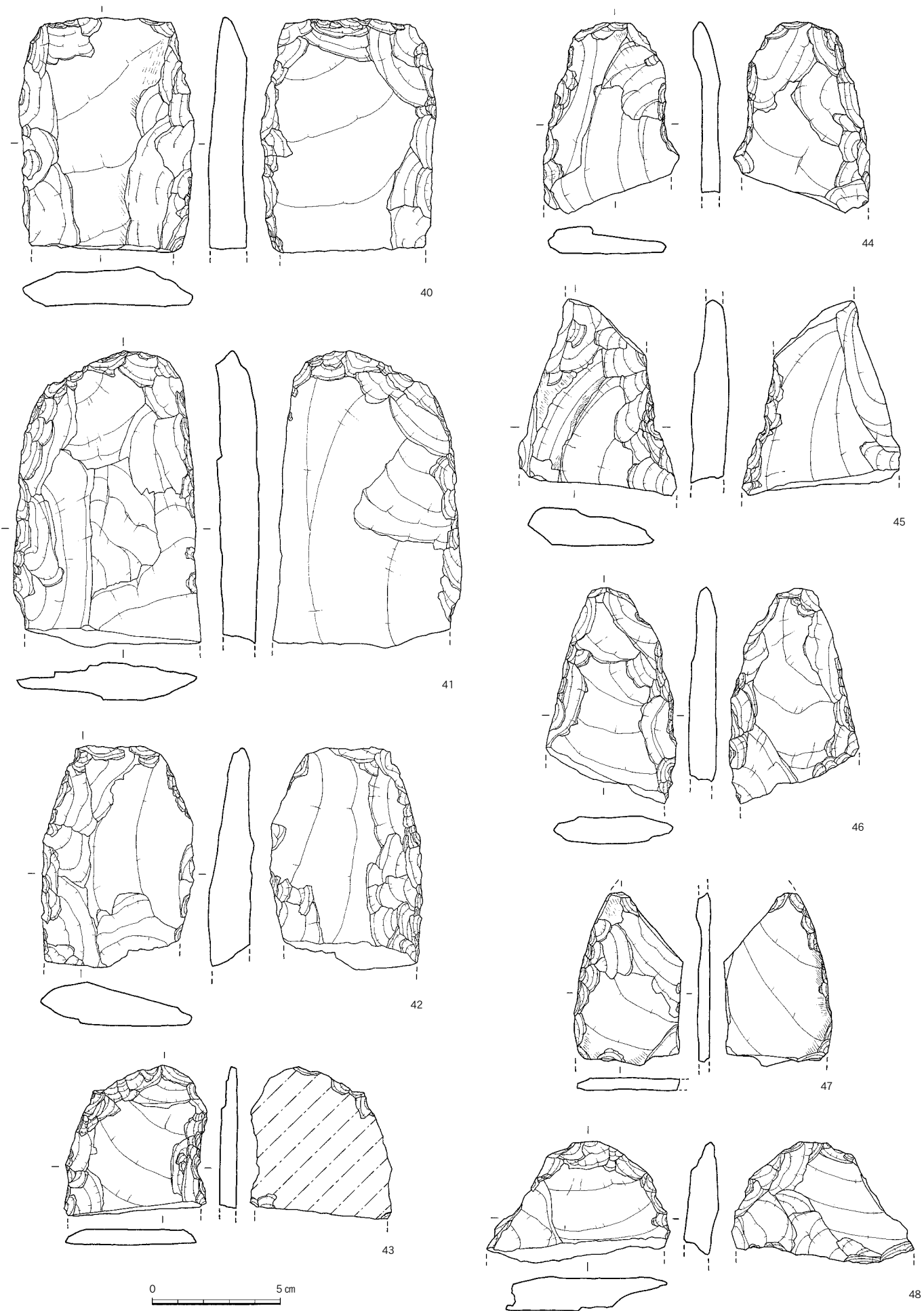
各遺構より出土した遺物であるが、古墳期の遺構に伴うものが多く、ここでは一括して解説する。なお、どれ



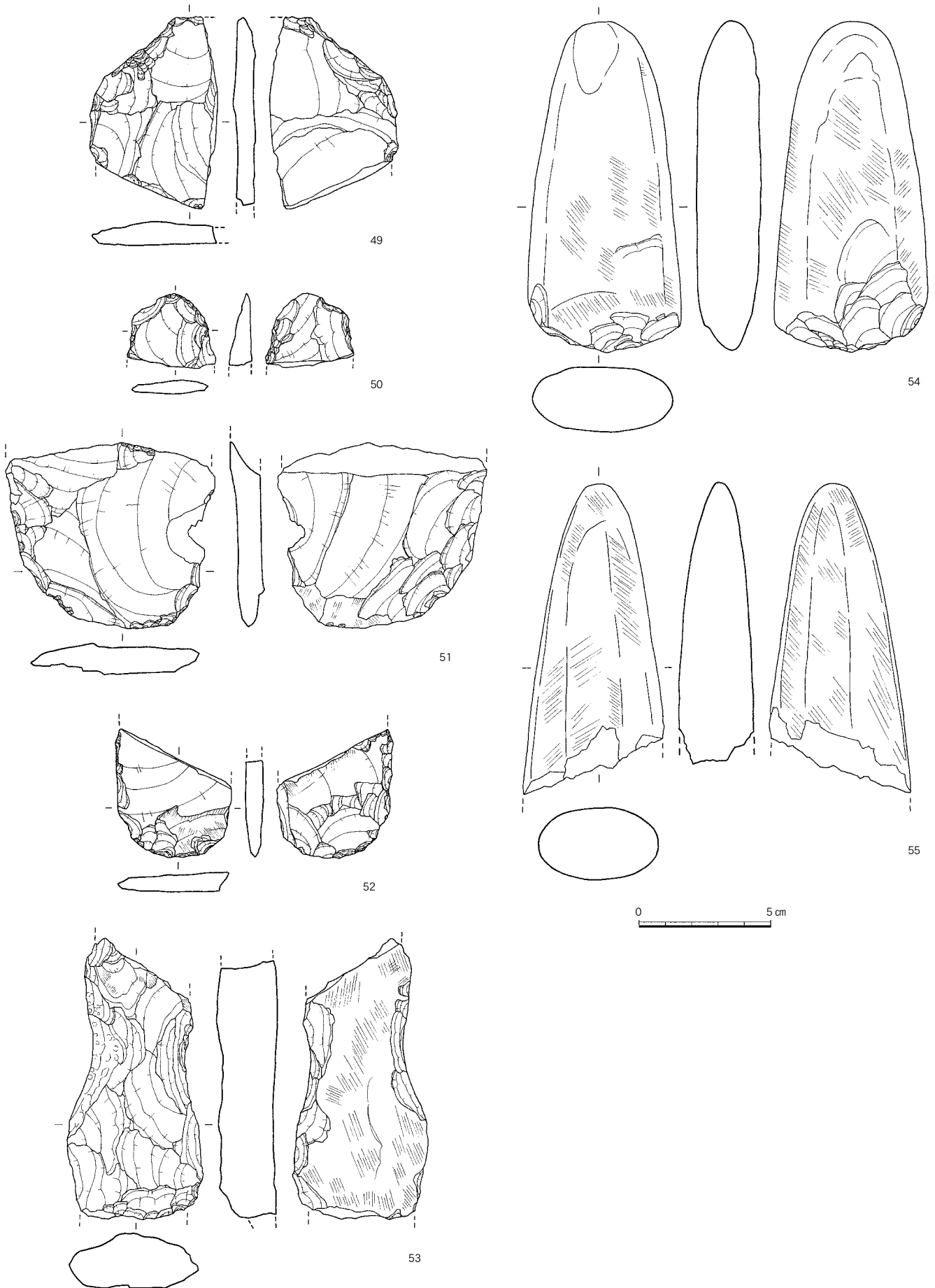
第64図 石器類実測図③ (2/3、12のみ1/2)

もローリングが著しく器壁が荒れているものが多い。ただ、5・8・14・19などには一部ミガキ調整が施されていることから、精製土器であると思われる。

1は粗製の鉢である。2～3は深鉢型土器か。2は口縁内面に段を作るもので、頸部は外反する。3は口縁部を折り曲げ段を付けるものである。4～6は深鉢型土器か。口縁部を内傾させて文様帯を作出し、沈線を巡らせる。7は深鉢型土器で頸部が湾曲し、口縁部は小さく折り曲がる。8は深鉢型土器口縁端部か。外面に凹線が施される。9・10は深鉢型土器の胴部屈曲部か。11～16は浅鉢型土器である。頸部を湾曲させ、口縁部は段を形成して外反し、玉縁状口縁を形成する。17～20は浅鉢型土器か。口縁内面に段を作るもので口縁部は長く伸びる玉縁状を呈する。21は浅鉢の底部である。22～28は焼成から縄文土器底部と判断した。平底のものが多く、22・23などは若干外に張り出す特徴を有する。いずれも縄文時代後期後葉～末葉にかけての遺物か。



第65図 石器類実測図④ (1/2)



第66図 石器類実測図⑤ (1/2)

## 石器類 (第62～66図、図版23～25)

各遺構から出土した石器類を説明する。そのうち第62図1・3・6・10・12・13に関しては古墳時代の住居に伴う遺物と想定される。以下それぞれの遺物について解説する。なお、剥片石器類に関しては、他にも多数の出土が見られたが、なかでも特徴的な遺物に関して掲載する。

1は五輪塔の空輪・風輪部分である。下部に火輪への接合部のソケット部分が見られる。大半が風化のため欠けている。2は磨石である。上下表面が著しく擦れる。3も磨石か。上下両面が擦れる。4は石庖丁である。2孔の穿孔が見られ、全体を大幅に欠く。5は石錘である。上下両端を打ち欠いている。6は砥石である。上部を一部欠損する。7は土錘である。8は用途不明の石器である。円柱状をなしている。9・10は紡錘車である。9は厚みが大きく、10はかなり薄いつくりである。11は勾玉である。全体に丁寧に磨き上げる。12は土製勾玉である。穿孔上部を欠く。13は円盤状石器である。穿孔が2箇所施される。

14は三稜尖頭器である。全面を丹念に調整する。

15～23は石鏃である。15はやや大きめの個体で脚も長い。16～21は丁寧な作りで脚は比較的長い。22～24はいわゆる剥片鏃の類か。粗雑なつくりである。

25～27は石匙か。基部に抉りが施されており、石匙状の整形を行っている。うち25は一旦欠損したのち再利用したものと思われる。26は右側縁部を丁寧に刃部調整している。27は基部のみである。28は不明石器である。全体に丁寧に調整を施し、突出部を形成する。

29～35は安山岩製の剥片石器である。29は縦長剥片の先端部に二次加工が施される。30・31は楔形石器で、上下両極に密集した剥離痕が見られる。32～34は全面に二次加工が丹念に施された剥片である。あるいは尖頭状石器の未製品の可能性も考慮される。35は上面を欠くが、下端と両側面に二次加工が施される。36・37は縦長剥片の両側面に丁寧な二次加工が施されている。うち37は剥片下端部に調整が施される。38は小型の縦長剥片である。側縁部に使用痕が見られる。39は石核である。自然面が残り、側面に比較的小型の剥片を取り出ししている。

40～52は偏平打製石斧である。40～50は基部と思われる。40～43は短冊形を呈しており、うち40・41は比較的大型なものである。これらは端部に丁寧な二次加工が施されており、刃部の可能性もある。ただし、平坦面を形成せず、明瞭な使用に伴う欠けなども検出されにくいことから、ここでは基部として報告する。44～47は基部に向かって窄まる撥状を呈する。48～50は基部破片である。51・52は一部擦れ痕が見られることから刃部の破片と考えられる。53は両側縁部に抉り状の調整が施される打製石斧で基部を欠く。刃部は欠損したのちに再利用のために調整が施される。54は磨製石斧である。刃部は欠損ののちに調整が加えられる。55は磨製石斧である。刃部を欠く。



## 第4章 町ノ坪遺跡B区の植物珪酸体分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

### (1) はじめに

町ノ坪遺跡は、有田川流域に位置し、条里地割の存在が想定されている。今回、B区の発掘調査の際に中世の水田層と想定される土層が認められた。そこで植物珪酸体分析を実施し、稲作の消長に関する情報を得る。

### (2) 試料

分析試料として、土層3の第5層(a)と第6層(b)、その東方に見られた第3層(c)、第4層(d)、第5層(e)、第6層(f)、第7層(g)、および土層1の第3層(h)、第5層(j)、第6層(k)、第7層(i)から各層1点ずつ(計11点)土壌試料が採取されており、全点について植物珪酸体分析を行う。

※採取地点については第5図に示す。

### (3) 分析方法

各試料について過酸化水素水・塩酸処理、沈定法、重液分離法(ポリタングステン酸ナトリウム、比重2.5)の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。これをカバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、プリウラックスで封入してプレパラートを作製する。400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部(葉身と葉鞘)の葉部短細胞に由来した植物珪酸体(以下、短細胞珪酸体と呼ぶ)および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体(以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ)を、近藤・佐瀬(1986)の分類に基づいて同定・計数する。

分析の際には、分析試料の乾燥重量、プレパラート作成に用いた分析残渣量、検鏡に用いたプレパラートの数や検鏡した面積を正確に計量し、堆積物1gあたりの植物珪酸体含量(同定した数を堆積物1gあたりの個数に換算)を求める。

結果は、植物珪酸体含量の一覧表で示す。また、各種類の植物珪酸体含量とその層位的変化から稲作の様態や古植生について検討するために、植物珪酸体含量の層位的変化を図示する。

### (4) 結果

結果を表2、図67に示す。各試料からは植物珪酸体が検出されるものの、保存状態が悪く、表面に多数の小孔(溶食痕)が認められる。以下に、各地点毎に産状を述べる。

土層3第5層(a)と第6層(b)ともにイネ属が認められ、その含量は第6層(b)が多い。第5層(a)の短細胞珪酸体が約2,000個/g、機動細胞珪酸体が約1.3万個/gであるのに対して、第6層(b)の短細胞珪酸体が約1万個/g、機動細胞珪酸体が約2万個/gである。なお、第5層(a)では、イネ属の籾殻に形成される穎珪酸体も認められる。イネ属は、ヨシ属や不明キビ型とともに産出が目立つ。この他に、ネザサ節を含むタケ亜科、コブナグサ属やスキ属を含むウシクサ族、イチゴツナギ亜科なども認められる。第5層と第6層(b)では植物珪酸体含量(堆積物1gあたりの個数)が異なるものの、各種類の割合や産状は似ている。また、イネ科起源の他に、樹木起源珪酸体第IVグループ(近藤・ピアスン,1981)が検出される。第IVグループは、網目模様の付いた紡錘形を呈する。

その東方の第6層から第3層(c～g)にかけても、各層でイネ属が認められる。イネ属の含量は、短細胞珪酸体が1,700-4,500個/g、機動細胞珪酸体が1,000-1.8万個/gの範囲で変化し、第6層から第3層(c～g)にかけて増減を繰り返す。この増減は、植物珪酸体含量の層位的な変化と同様である。また第6層(g)、第5層(f)、第3層(e)でイネ属穎珪酸体も認められる。イネ属は、a・bと同様に、各層で産出が目立つ。この他に検出される種

類もa・bと同様である。しかし、a・bと産状が異なり、ヨシ属が少なく、ネザサ節を含むタケ亜科の産出が目立つ傾向が見られる。

土層1でも第3層(h)、第5層(j)、第6層(k)、第7層(i)からそれぞれイネ属が認められる。その含量は第3層(h)で最も多く、短細胞珪酸体が約7,000個/g、機動細胞珪酸体が約1.2万個/gである。最も少ないのは第5層(j)であり、短細胞珪酸体が約160個/g、機動細胞珪酸体が約800個/gである。第6層(k)と第7層(i)では、短細胞珪酸体が約2,000個/g未満、機動細胞珪酸体が約8,000個/g前後である。また、イネ属類珪酸体が第6層(k)と第3層(h)で認められる。イネ属は、第5層(j)を除いてヨシ属やタケ亜科とともに産出が目立つ。この他に検出される種類は、北壁試料と同様である。また、a・bと同様にヨシ属の産出が目立つ。

## (5) 考察

今回の分析結果をみると、イネ属の葉部や籾殻に形成される植物珪酸体が検出されている。その含量は層間、層内ではばらつきが大きく、層的に増加・減少といった変遷傾向がみられない。水田土壌については、イネ属の機動細胞珪酸体が5,000個/g程度検出されれば、過去に安定した水田稲作が行われたと推定されている(杉山,2000)。ただし、畦畔など水田に関連する遺構が検出されている場合でも、機動細胞珪酸体含量が数百-1,000個/g程度の事例もあり(古環境研究所,1999;パリノ・サーヴェイ株式会社,2002)、5,000個/g程度という値はあくまで目安であるといえる。このような植物珪酸体含量の変動は、土壌への植物体供給量の違いを反映していると思われ、その要因として、耕作期間や生産性の違いが想定される。すなわち、各層位における耕作期間や生産量の違いが各層の植物珪酸体含量に反映されると考えられる。また、イネ属珪酸体の埋積過程や埋積後の保存状態、耕作時の攪乱による下方層位への移動なども考慮する必要がある。

以上のことから、各層位ともに水田耕土として利用されていた可能性が高いといえる。なお、水田遺構面の耕作土を平面的に分析すると、イネ属植物珪酸体の含量にばらつきが見られることが多い(当社未公表資料)。今回の分析結果のように、同一層位内でのばらつきが大きかったり、層の上下でのばらつきが大きかったりすることが、今後過去の水田耕作の指標となる可能性があり、今後注目していきたい。また、周辺の古植生変遷や地形発達過程の検討、イネの他の部位(花粉や種実)の検出状況の検討など、他の調査手法の併用も、今後必要になると考えられる。

ところで、イネ属以外の種類に着目すると、ヨシ属やネザサ節、コブナグサ属やススキ属、イチゴツナギ亜科などが検出されており、これらが調査区周辺に生育していたと思われる。また、樹木起源の植物珪酸体もわずかに認められる。今回の植物珪酸体分析結果では、樹木起源の珪酸体が多産する。今回検出されたIV型は、モクレン属、シイノキ属など多くの種類の葉に形成されると考えられている(近藤、ピアスン, 1981)。西日本地域では、土壌中から樹木起源の植物珪酸体が多産することがしばしばあるが(杉山, 1999)、今回もこの一例といえよう。樹木珪酸体は、カシやシイなどのほか、クスノキ科の葉にも作られることから(杉山,1999,2000など)、検出された樹木起源の珪酸体は、当時周辺の森林を構成していた照葉樹林に由来すると思われる。

なお、層位によって、ヨシ属やネザサ属などの含量に違いがみられる。ヨシ属は湿潤な場所に生育する種類であり、ネザサ節などのタケ亜科には比較的乾いた場所に多く生育する種類が多い。このような差は、局地的な環境や水田土壌の供給状況などを反映している可能性がある。今後、珪藻分析による堆積環境に関する検証などを行い、改めて検討していきたい。

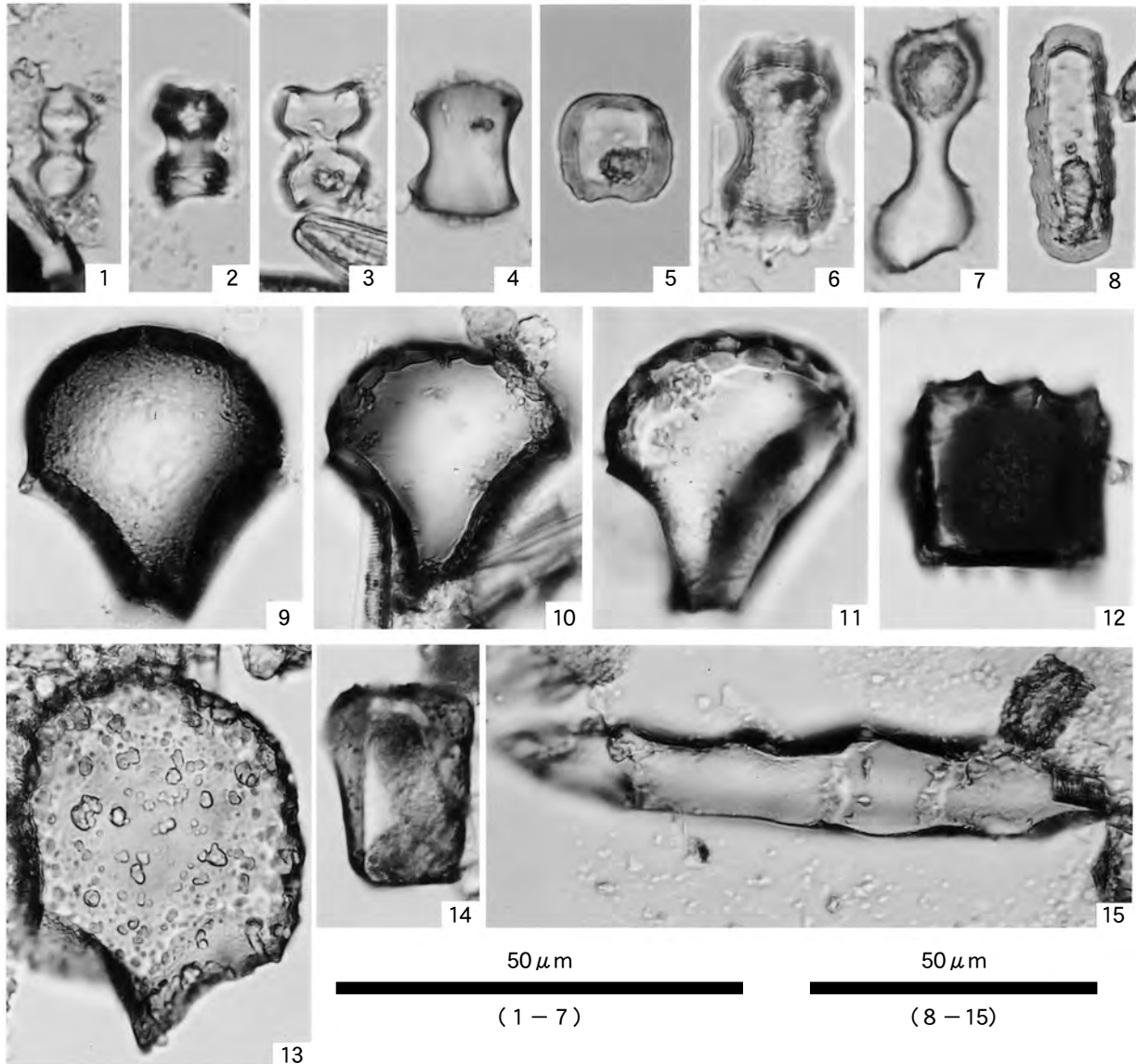
## 《引用文献》

- 近藤 鍊三・ピアスン 友子,1981 樹木葉のケイ酸体に関する研究(第2報)双子葉被子植物樹木葉の植物ケイ酸体について. 帯広畜産大学研究報告,12, 217-229.
- 近藤 鍊三・佐瀬 隆,1986 植物珪酸体分析,その特性と応用.第四紀研究,25,31-64.
- 古環境研究所,1999 プラント・オパール分析から見た静清バイパス関連諸遺跡.静岡・清水平野の埋没古環境情報 「考古学的調査と自然科学分析資料・建設省地質調査資料から見た古環境の様相」—一般国道1号線バイパス埋蔵文化財発掘調査1984~1993—,財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所,83-86.
- バリノ・サーヴェイ株式会社,2002 横手南川・横手湯田遺跡の自然科学分析.財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第292集「横手南川端遺跡・横手湯田遺跡 北関東自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第11集 第1分冊(本文編)」,財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団,133-155.
- 杉山 真二,1999 植物珪酸体分析からみた九州南部の照葉樹林発達史.第四紀研究,38,109-123.
- 杉山 真二,2000 植物珪酸体(プラント・オパール).辻 誠一郎編著 考古学と自然科学3 考古学と植物学,同成社,189-213.

第2表 植物珪酸体含量

種 類	(X10 <sup>3</sup> 個/g)										
	土層3							土層1			
	第5層	第6層	第3層	第4層	第3層	第5層	第6層	第3層	第7層	第5層	第6層
試料番号 地点	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k
イネ科葉部短細胞珪酸体											
イネ族イネ属	2.1	10.3	4.5	2.1	3.5	1.7	2.9	6.9	1.8	0.2	1.1
タケ亜科ネザサ節	0.6	1.6	8.5	1.4	7.8	0.9	0.4	1.0	1.0	1.5	0.5
タケ亜科	1.2	6.3	3.1	0.4	2.1	0.4	3.5	2.1	0.3	5.7	1.2
ヨシ属	2.2	18.1	0.6	0.5	5.6	1.8	3.3	4.1	3.4	7.8	3.2
ウシクサ族コブナグサ属	1.4	1.2	0.1	0.1	1.8	0.4	0.7	0.8	1.0	-	1.0
ウシクサ族ススキ属	1.1	3.5	2.6	0.3	5.6	0.6	1.9	1.7	1.1	-	0.4
イチゴツナギ亜科	0.4	1.6	2.6	0.3	6.7	0.6	0.2	0.7	0.3	0.3	0.6
不明キビ型	3.1	18.5	8.9	5.4	25.8	4.8	6.2	12.0	8.3	3.1	5.2
不明ヒゲシバ型	1.1	4.7	1.7	0.6	1.8	0.2	0.2	1.8	2.7	1.0	1.1
不明ダンチク型	0.7	2.8	4.3	1.4	6.4	1.7	1.3	2.9	3.3	1.5	0.9
イネ科葉身機動細胞珪酸体											
イネ族イネ属	13.0	20.5	4.1	1.0	10.2	4.6	18.1	12.3	9.8	0.8	7.3
タケ亜科ネザサ節	0.2	0.8	1.9	0.1	2.1	0.4	0.8	0.4	0.1	0.5	0.2
タケ亜科	1.0	3.5	0.5	-	2.8	0.4	3.3	0.7	1.6	3.1	1.3
ヨシ属	2.7	9.9	0.5	-	4.2	-	3.0	2.0	7.0	11.5	3.4
ウシクサ族	1.1	1.6	0.2	-	8.1	-	1.4	0.6	1.7	0.6	0.7
不明	2.4	7.1	3.7	0.1	13.1	2.1	4.2	3.8	3.4	4.4	2.6
珪化組織片											
イネ属類珪酸体	0.3	-	0.2	-	-	0.2	0.1	0.1	-	-	0.2
樹木起源珪酸体											
第IVグループ	1.8	2.8	-	-	-	-	-	-	0.8	-	0.7
合 計											
イネ科葉部短細胞珪酸体	13.8	68.6	37.0	12.5	67.0	13.2	20.6	34.0	23.5	20.8	15.4
イネ科葉身機動細胞珪酸体	20.4	43.4	10.9	1.2	40.6	7.5	30.9	19.7	23.6	20.8	15.5
珪化組織片	0.3	-	0.2	-	-	0.2	0.1	0.1	-	-	0.2
樹木起源珪酸体	1.8	2.8	-	-	-	-	-	-	0.8	-	0.7
総 計	36.3	114.8	48.2	13.7	107.6	20.9	51.7	53.9	47.9	41.7	31.7





- |                             |                            |
|-----------------------------|----------------------------|
| 1 イネ属短細胞珪酸体 (土層3-第3層c)      | 9 イネ属機動細胞珪酸体 (土層3-第3層c)    |
| 2 イネ属短細胞珪酸体 (土層3-第6層g)      | 10 イネ属機動細胞珪酸体 (土層3-第6層g)   |
| 3 イネ属短細胞珪酸体 (土層3-第6層b)      | 11 イネ属機動細胞珪酸体 (土層3-第6層b)   |
| 4 ネザサ節短細胞珪酸体 (土層3-第3層c)     | 12 ネザサ節機動細胞珪酸体 (土層3-第3層c)  |
| 5 ヨシ属短細胞珪酸体 (土層3-第6層b)      | 13 ヨシ属機動細胞珪酸体 (土層1-第5層j)   |
| 6 コブナグサ属短細胞珪酸体 (土層1-第3層h)   | 14 ウシクサ属機動細胞珪酸体 (土層3-第5層f) |
| 7 ススキ属短細胞珪酸体 (土層3-第3'層e)    | 15 樹木起源第IVグループ (土層1-第6層k)  |
| 8 イチゴツナギ亜科短細胞珪酸体 (土層3-第3層c) |                            |

写真 3 植物珪酸体

## 第5章 求来里地区における村落遺跡調査

別府大学文化財研究所

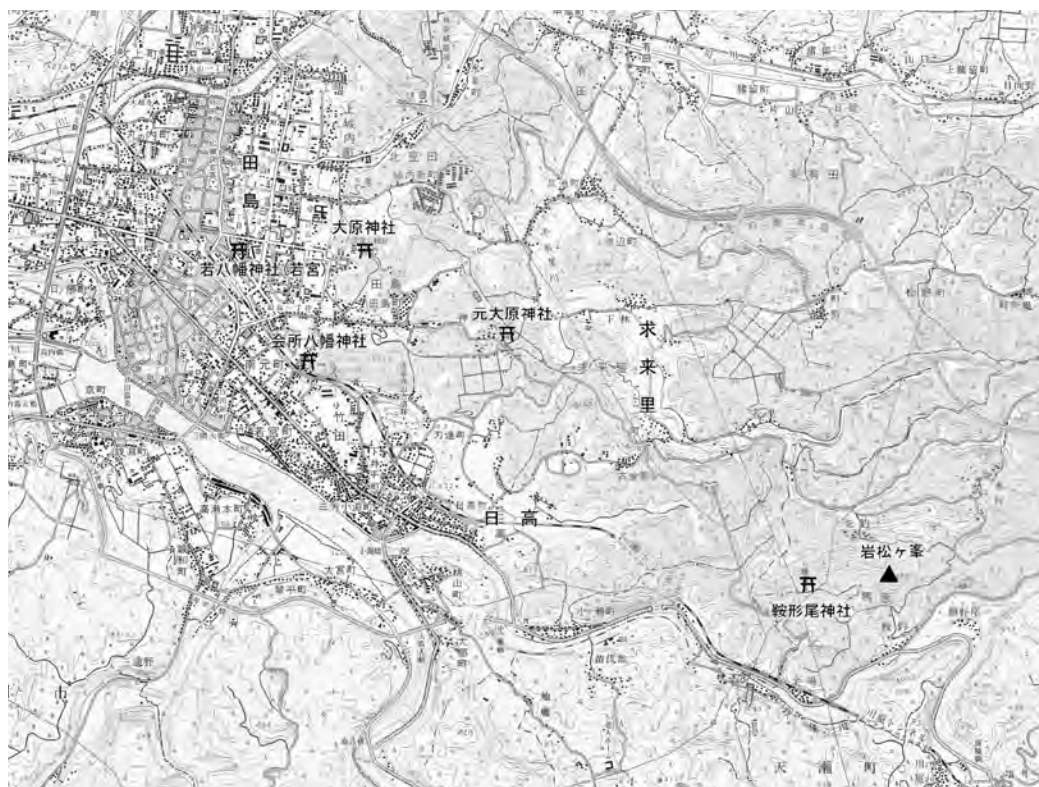
飯沼 賢司・園田 大・高 陽一

### (1) はじめに

町ノ坪遺跡のある大字求来里地区は、大分県日田市市街地の東部、有田川の支流求来里川の流域に位置する。この地区の地形環境は、求来里川によって形成された南北にのびる谷状地形、その谷を囲む尾根で構成され、その尾根には、いくつかの馬蹄状になった侵食地形が点在している。この地域では、このような馬蹄状になった侵食地形を迫と呼び、字名や通称地名などになっている。また、歴史文化的環境としては、大原と呼ばれる尾根状台地の上には、大原神社（大原八幡宮）の前身である元大原神社が鎮座しており、住宅地化といった開発なども進行していないため石造物や小祠施設などがいくつか点在していることから、景観的には保存状況が良い地域であると言える。

しかし、平成14年度からの圃場整備事業によって、水田や用水路・水懸かりといった耕地景観は変化している。この圃場整備に伴って字町ノ坪を中心に遺跡発掘調査事業が行われ、その一環として別府大学文化財研究所への委託研究として村落遺跡調査が実施された。調査内容としては圃場整備によって景観が変化してしまう求来里川一帯の耕地景観を中心に、隣接地である田島地区の水利灌漑状況・通称地名・祭礼行事などを現地踏査・聞き取り調査の手法を用いて記録化することと、古文書調査などを実施した。

求来里は大原の元宮の時代から大原八幡宮の祭礼の中核を担う村であり、現在も祭礼で重要な位置を占める集落である。大原八幡宮は、江戸時代はじめに現在の場所に移る以前は、大原の元宮の地（杉原）に鎮座しており、さらに、前には「岩松ヶ峯」に祀られたという（『豊後国志』）。馬原の鞍形尾の八幡社は、「岩松ヶ峯」と見られ、大原の神は、馬原から市街地へ延びる大原の舌状台地をヤマからサトへ移動した。この台地の周辺の集落は、尾根状台地の地下水を本来の水を水源としてきた。この観点から、この台地の北の求来里だけではなく、南の日高、西の田島を調査地区に入れることにした。



第68図 調査区周辺地図

## (2) 調査の経緯

### 1. 調査の目的

「町ノ坪遺跡発掘調査事業に伴う村落遺跡調査」は、別府大学文化財研究所が日田市教育委員会の委託によって平成16年度より2ヶ年度にわたって実施した。その背景にあったのは、平成14年度から圃場整備事業にともなう開発が進行したために、求来里地区における農村景観の急激な変貌である。

今回の調査では現地表面に残る水路灌漑・地名に関する悉皆調査として、求来里の現況を正確に記録することを目標とした。

### 2. 調査の組織

調査体制の構成は以下の通りである。(平成17年度当時の職名・所属)

調査責任者	飯沼 賢司 (別府大学文化財研究所長・別府大学教授)
調査員	園田 大 (別府大学文化財研究所研究員・同日田歴史文化研究センター研究員) 高 陽一 (別府大学文化財研究所非常勤研究員・同大学非常勤講師)
調査者	野村智史、石倉太介、笠岡総一、三谷紘平、細井雅希 (以上、別府大学大学院生)、 松井公男、高瀬眞實、鍛冶谷定之 (以上、日田市内在住)
事務局	別府大学文化財研究所、別府大学日田歴史文化研究センター

本調査の実施にあたっては、別府大学教授飯沼賢司を中心とし、文化財研究所の所員を調査員として調査体制を組織構成した。なお調査体制には、別府大学大学院生の他に数名の日田市内在住者も新たに調査協力者として加え、調査の効率化をはかった。そして調査期間中は、大学と地元による役割分担調査又は合同調査を目指すようにした。調査のコーディネーターおよび本報告書の村落追跡調査の原稿編集は、園田 大が担当した。

### 3. 各年度における調査の経過と内容

【平成16年度】

#### 調査の経過

1月18日・2月4日：予備調査	井堰・水路の確認調査
2月10・11日：第1回目の調査	求町の小字図作成、石原井堰の水路灌漑調査
2月22日：第2回目の調査	第1回目の補足調査、神来町・求町の文化財分布調査
2月26・27日：第3回目の調査	求町の小字図作成、平島井堰の水路灌漑調査
3月7日：第4回目の調査	第2回目の補足調査、神来町・求町の文化財分布調査

#### 調査の内容

平成16年度は予備調査として実施された。調査期間は1月から3月までの2ヶ月間である。

#### ○平成16年度の調査項目

##### 求来里地区の調査

- ア. 求町の水路灌漑調査と地名調査
- イ. 上記に付随する小字名とその範囲
- ウ. 求町、神来町の文化財分布調査

平成16年度の予備調査を実現するために、2月10日の調査前の検討会では上記の調査項目が検討・決定された。求町を選定した理由は、調査対象地域の中で水利上の上流に位置していること、また圃場整備や宅地造成が進んでいる隣の神来町に比べて景観が比較的保全されていることがあげられる。

調査は予備を含めて計5回行われ、大学側と地元側の役割分担での調査がなされた。その結果、調査項目の内、アとイは大学側よっての調査が、それに伴いウは地元側により調査が実施された。



## 【平成17年度】

### 調査の経過

- |                   |   |
|-------------------|---|
| 6月11日：16年度の補足調査   | 求来里川周辺の通称地名や屋号と圃場整備によって失われた向かい井路と前井路からの水利灌漑の状況を聞き取り調査で確認した。   |
| 7月19日：第1回目の予備調査   | 神来町の屋号調査  |
| 7月28日：第2回目の予備調査   | 神来町の水路灌漑調査  |
| 8月15日：第3回目の予備調査   | 神来町の水路灌漑調査  |
| 9月23～25日：第1回目の調査  | 神来町の水路灌漑・地名・文化財調査、元宮周辺の地名・古道の調査、9月25日の大原神社の仲秋祭（放生会）で、御旅所となっている田島宮太夫（ミヤンテ・ミヤダユウ）の若八幡神社（若宮）のあたりで、氏子の聞き取りを行う。大原神社境内と廣瀬資料館所有の「小ヶ瀬井路絵図」を調査   |
| 10月15・16日：第2回目の調査 | 田島地区の水路調査、東寺地区の文化財調査、古金地区の現状踏査。大原神社が鎮座する大字田島地区と大字日高地区の字東寺付近を調査対象地域に設定した。二つの地域はともに、元大原神社が鎮座する尾根の枝葉部に位置しており、尾根との関わりにおける水利利用のあり方を明らかにするため調査を行った。大字田島地区では北境に大字北豆田が接しており、双方ともに水利利用において関与しあっているため、その点も踏まえた形で調査を行った。 |
| 1月10～12日：第3回目の調査  | 古金地区の水路灌漑調査、東寺地区と小ヶ瀬井路の現状踏査。9月25日の聞き取りの調査で確認した「ムクムク谷」の湧き水（モクモク水）からの水利灌漑範囲の調査を実施した。  |
| 1月23日：第4回目の調査     | 東寺地区の水路灌漑調査。10月の調査の補足として、字東寺付近の水利灌漑範囲の調査を実施。1月10～12日の調査と対応させることで、中野川の水源を確認した。モクモク水と大字日高地区の字小迫から流れる谷水の合流点を確認した。  |
| 1月26日：第5回目の調査     | 大原神社での大原の社家日記、祭礼記録などの古文書調査。   |
| 2月11～13日：第6回目の調査  | 求来里の水路灌漑補足調査、中野川とその周辺の調査、各地区の小字図作成。特にモクモク水と東寺堤からの水路および字小迫から谷水の合流点付近の調査を行うことで中野川の旧流路などを確認した。   |

### 調査の内容

平成17年度は本調査として実施された。調査期間は7月から2月までの8ヶ月間である。

#### ○平成17年度の調査項目

##### <1>求来里地区の調査

- エ. 神来町の水路灌漑調査と地名調査
- オ. 上記に付随する小字名とその範囲
- カ. ウの補足調査

## ＜2＞求来里地区周辺地域の調査

- キ. 元大原神社、大原神社の確認調査
- ク. 大原神社の祭祀調査
- ケ. 大原神社所有の古文書の調査
- コ. 廣瀬資料館所蔵の小ヶ瀬井路絵図の調査
- サ. 東寺地区と古金地区の水路灌漑調査
- シ. 旧籍図を使用した田島地区の水路復元調査
- ス. 中野川と小ヶ瀬井路の水路調査
- セ. サ、シ、スに付随する小字名とその範囲

平成17年度の本調査を実現するにあたって、5月22日の調査検討会では大学側と地元側による会合で、調査方針についての確認が行われた。そして調査方針として、＜1＞求来里地区の神来町調査と＜2＞求来里地区周辺地域の調査、の2種類の調査項目が打ち出されたのである。すでに神来町は圃場整備や宅地造成が前年度から進行していたため、現地よりも聞き取り主体の調査となった。しかし、求町と神来町2町内での調査成果のデータのみでは、求来里地区の歴史を検証するには非常に不十分であった。そこで神来町調査の終了後には、調査の一環として、求来里地区の周辺地域にも着手することにした。したがって、求来里地区の歴史を解明するには、その作業の前提として、周辺地域の調査が必要不可欠であった。特に中世の大原八幡の実像に迫ることが、求来里の歴史、日田の歴史を解明する重要なポイントとなった。そこで、大原神社の古文書の調査、大原の祭礼、大原周辺の水がかりの調査を実施した。

調査は4回の補足予備を含めて計10回行われた。先に＜1＞が大学側と地元側での合同調査によって実施された。続いて＜2＞は役割分担により、ク・ケ・セが大学側に、サとシが地元側により調査が行われることになった。残りの項目であるキ・コ・スは合同調査によってなされた。

2ヶ年を通じて、本調査では大学側と地元側による共同調査により、求来里地区とその周辺地域を含んでの幅広い現地調査とその検証を行い、一定の見通しを得ることができたと思う。そしてこの共同調査により、多くの調査項目を打ち出したことも大きな成果である。しかし、今回は地域における現況を正確に記録することを主としたために、現地表面の記録作成に留まってしまった。そのために、調査成果のデータ収集とその整理に終始せざるをえなかった。したがって、残された問題も少なくはない。

例えば、地名の変化・技術の普及・耕地形態・祭祀形態・都市計画など、村落景観をみていくうえで数多くの問題が未解決のままである。また、考古学および文献史学による総合調査の成果を活かした地域の歴史にも究明することができなかった。これらの諸条件は、比較的豊富な資料を踏まえないと容易に解決できないだけに、今後各分野での成果を待たなければならない。また、日田市の中心部（都市部）とその周辺部（農村部）とを対比させ、両者の相違点を抽出する作業も残された重要な課題でもある。

## 4. 調査の協力

本調査の実施にあたり、求町・神来町在住の方々をはじめ、以下多くの地元関係者、関係機関にお世話になりました。記して謝意を表します。

安藤正則、宇野龍頼、曾根エイ子、曾根ハル子、長尾 昇、橋本 敦、橋本國房、深町イソノ、宮崎 實、若杉竜太、渡辺 誠、大原八幡宮、日田市税務課、日田市土地改良区、日田市文化財保護課、廣瀬資料館

(文責 園田)

### (3) 求来里地区現況調査（字町ノ坪付近を中心に）

この章では、平成14年度からの圃場整備事業によって景観が変化する字町ノ坪周辺の水田を中心にした地域を現地調査することで水利・地名・信仰形態の現況を記録化した成果を報告する。

圃場整備によって水路や水田が変化する地域の現況を記録化するため、求来里川が流れる谷状の地域を調査の範囲として設定した。この調査範囲を中心に水利調査や、それに伴う地名や信仰形態などを聞き取り調査などで確認した。地名に関して、小字の位置と領域は日田市文化財保護課から入手した地番図と、『日田市史』に所収してある「日田市域大字別字一覧」とを併用させながら地形図に記載し、それをもとに通称地名を書き加える形で調査を行った。

#### 1. 水利調査

圃場整備対象となった求来里川周辺の水田の水利灌漑調査を行った。調査を始めた時点において、JA日田市求来里支所を堺にして、下流側の水田は圃場整備が進行していたため、上流側の水利調査を優先して行った。その後、圃場整備によって現況を失っていた水田は地番図を対応させながら、聞き取り調査で水利灌漑の様相を復原することにした（第69図）。

#### ① 川から取水する水田灌漑について

##### 石原井路

石原井堰から取水する水路の通称である。求来里川左岸の水田を灌漑しており、その範囲は字石原・着来の水田と字辰の迫の一部の水田を灌漑し、やがて求来里川へと落ちていく。

##### 平島井路

平島井堰から取水する水路の通称である。この水路は二つの井堰によって求来里川右岸の水田を灌漑している。上流部の井堰は平島井堰と呼ばれ、通称地名である冷淵まで水路が流れる。そして、冷淵付近で、現在はポンプ給水になっている無名の井堰から取水した水路と合流している。冷淵以降の水路は公民館の建設や水利改善に伴う工事によって暗渠状の水路となっているため、正確な水利の現況を把握することができなかつたため、地番図と聞き取り調査で確認することにした。さらに、この水路は字片峰と字平島の境にある迫から流れ来る水路と合流することで水量を増し、下流の字平島一帯の水田と字町ノ坪の一部の水田を灌漑している。



写真4 平島井堰

##### 前イゼからの水路

圃場整備によって現況を失っているため、地番図などを利用した聞き取り調査で灌漑範囲を確認した。この水路は求来里川を挟んだ対岸にある水田を灌漑する向い井堰の水路と同じ井堰から取水するという。この井堰も圃場整備の一環とした河川改修のため失われており、構造の実態を明らかにすることができないが、前イゼと向い井堰といった名称から、おそらく同一の井堰から取水する水路を区分するために便宜的な名称として使用されるようになったものではなかろうかと思われる。

前イゼの灌漑範囲は字町ノ坪・小西にいたる水田であるが、水路の途中で字室にあたる迫地形から流れて来る水路と合流することで水量を増やしている。

##### 向い井堰からの水路

圃場整備が進行しているため、地番図などを利用した聞き取り調査で灌漑範囲を確認した。この水路は字金田・

烏帽子の水田を灌漑している。

## ② 迫地形における水田灌漑について

①では求来里川の水を利用して灌漑する水田の実態を明らかにしたが、求来里地区の水田には川からの水を利用しない水田がいくつか存在する。それらの水田はすり鉢状になった迫と呼ばれる地形に点在しており、堤を築いて天水や湧水などを貯めて灌漑する構造をもっている。そのためここでは溜池を堤と呼んでいる。迫地形はまわりを尾根によって囲まれた自己完結的な環境になっているため、多くの迫は字堺の一面となっている。ここでは字ごとの迫地形における水田灌漑を明らかにする。

### 室

かつては室堤を築いて灌漑していたが、道路拡張工事によって失われている。現在は通称地名の室迫から流れ出る天水と湧水点の水を合流した水量でもって灌漑しているが、耕地整備によって水田景観は変っている。また、聞き取り調査によると耕地整備以前の室迫は湿地帯であった。おそらく尾根から集まってくる天水などが原因であったと思われる。

### 蛇迫

蛇迫の水田も耕地整備によって以前と変っている。迫の上部も宅地造成によって環境が異なっているが、天水などの水が流れ込むという迫地形の特徴から十分な水が流れ出ており、水源は確保されている。しかし、堤がいくつか築かれていることから、迫の上部から流れ出る水量だけでは限界があったと思われる。

## 2. 地名調査

### ① 求来里地区における通称地名

求来里地区一帯の字ごとの領域は、日田市文化財保護課から地番図を入手し、日田市史に所収されている「日田市域大字別字一覧」と対応させることで、小字の境界を地形図に記入することで確認した（第69図）。ここでは聞き取り調査で得た通称地名を小字ごとにまとめて記載する。

片 峰：冷淵（つめたふち）・箸本

石 原：柳淵

着 来：カワバタ・正風寺（しょうふうじ）・とんとん・むくむく谷

平 島：町原（まちのぼる）・三丈淵（みたけぶち）

辰の迫：三丈淵（みたけぶち）・タツノサコ・ウシロサコ

町ノ坪：ミズトオシ

室 : 室迫（むろのさこ）

金 田：蔵元

下 林：ウエンミノ

小 西：小西ノ上・小西ノ下・蛇ヶ淵

烏帽子：坂下・トラブチ・テラノシタ

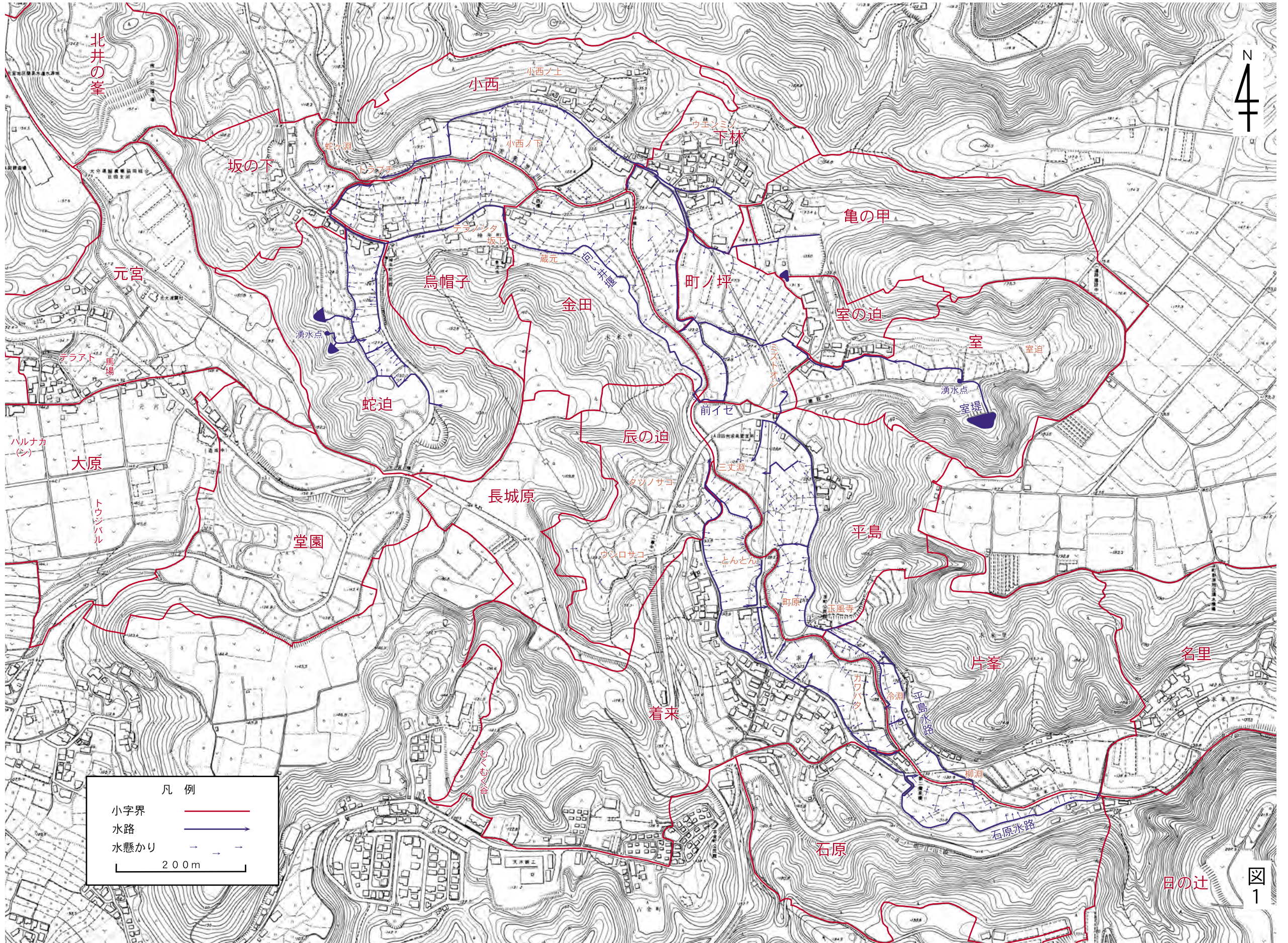
元 宮：テラアト・馬場

塚 脇：サガル（サガリ）・下バル

大 原：ハル（ン）ナカ・トウジバル・ヒョウタン堤

### ② 屋号の確認

屋号（家の名）としては、通称地名を併用しているものと思われるものもあれば、同氏間との間を区分するために用いられるものもある。また、足立氏の場合、明治末から大正にかけて本分家に分かれたらしく、その時の当主の名前の頭文字にカネ（直角）の記号や山型の記号を冠して呼ぶようになったといわれる。ここでは屋号と



第69図 求来里水利・字図

して確認できるものをすべて第3表にまとめることにした。

第3表 屋号確認表

小 字	屋 号	家 主	番 地	備 考
片 峰	カジヤ	梶原照男	1853 - 2	
	デミセ	松尾 勇	1858	
	鍛冶谷 (カジヤ)	松尾新吾	1859	
	向出店 (ムカイデミセ)	河津清吉	766 - 2	
	箸本	橋本雅文	1865	宅地周辺の通称地名でもある
着 来	新家	梅木幹雄	841	
	カネキ	足立幸男	921	先祖は喜太郎の喜を冠する
	ヤマジュウ	足立正行	920	足立家本家・先祖は十右衛門
	イリジュウ	足立虎雄	900	
	ヤマショウ	足立義夫	921	
	カネモ	足立美鶴	912	先祖はモクジロウ
室	本家	室 眞幸	1648 - 1	
下 林	シタ	鍛冶谷定之	1461 - 1	
小 西	ホリタ	穴井 勉	1351	
烏帽子	新宅	穴井生海	1134 - 4	
	本家	穴井之伊	1097	
	山根	穴井喜久男	1133-1	
坂の下	サカンワキ	羽田敏男	1251	
元 宮	ワゼ (カミともいう)	桑野イソノ	438	
	シタゼ (シモともいう)	桑野晴芳	440	
	本家			
	ヤネウチ	伊藤由則	445	
	シタノヤシキ	桑野一生	339	
	マルニ	穴井昭二	415-3	

### ③ 求町と神来町について

求来里地区は近世の史料から求来里村と称されているが、この地域の人たちは求来里地区を求町・神来町と二つの地域区分を設定している。この地域区分については小字に表記されていないため、求・神来は通称地名的なものと考えられる。求町と神来町の区域分けはJ A求来里支所を境に、北部を求町として南部を神来町として、それぞれ公民館をもつ自治会を形成している。推測ではあるが、求・神来という地名に字名里を加え、三つの地域をまとめた地名を名づける際に、それぞれの地名にちなませることで求来里としたのではないだろうか。近世期中世末期のころの文書を写されたものと思われる史料から求来里村が確認できる（史料8～10）。この史料を素直に見れば、すでに中世末期から求来里という一つの共同体単位が神来・求という共同体を併合した存在であることが窺える。このように、村落という共同体構造の変遷を考える上でも求来里地区は重要な地域であるといえよう。

### 3. 信仰遺跡調査

ここでは、求来里地区の人たちが信仰の対象としているものをまとめることにし、第70図で位置を示した番号をふった。

#### ① 石造物・文化財調査 ※ ( ) 内の番号は第70図中の番号と対応する。

##### 日の辻

###### 稲荷(1)

木造の祠の中には、右肩に稲を担ぎ、左手に鎌をもつ石像が安置されている。

###### 稲荷(2)

山中へとつづく参道の奥に注連縄をはった巨石があり、稲荷様の御神体として付近の住民から祭られている。

##### 片 峯

###### 庚申塔(3)

集落の裏山、階段を登った小丘にある。石祠型で相輪を有している。正面に「猿田彦太神」右側面に「求来里村 氏子中」左側面に「寛政七年 卯 三月吉日」とある。現在では周辺の10軒の家によって2ヶ月に1回庚申講が行われている。

###### 天満宮石祠(4)

松尾弘幸氏宅の庭に松尾家で祀った天満宮である。この天満宮の起源は不明であるが、家を川の対岸から建て替える際に天満宮も現地に移動した。

###### 石祠残欠(5)

松尾新吾氏宅裏に塔身を欠失した石祠がある。祭神・由来はともに不明。

##### 平 島

###### 正風寺跡(6) (写真5)

求町公民館がある場所は正風寺の跡といわれ、裏山に石造物がいくつか残っている。大きく3つの群に分かれ、最下部(A域)に地蔵堂・大師堂、中部(B域)に無銘磨崖板碑・薬師磨崖仏、最上部(C域)に磨崖板碑1号・磨崖板碑2号に分類できる(史料1・2)。

地蔵堂・大師堂は崖面に龕を造り、それぞれ石造地蔵菩薩像、石造弘法大師像を安置され、覆屋がかぶされている。周りに小型の龕や五輪塔残欠などがある。薬師磨崖仏は小型の磨崖仏で、脇に脇侍と思われる顔のみ彫られた仏がある。磨崖板碑は3基の板碑を確認。「永禄九年」(1566)の銘と、阿弥陀三尊の種字の他に結縁と思われる数人の名前が確認できるが、摩滅してよく読めない部分があるため、拓本をとる必要があると言えよう。

また、正風寺に雪舟が訪れたという伝承があり、石造物と何か関係するものと思われるが確認することはできない。

###### 辻堂(7) (写真6)

日田新四国第三十三番札所と書いてある。石造弘法大師2体、木造地蔵菩薩1体、十一面観音像1体。中央の1体は地蔵と思われるが、棟木に書いてある「本尊 薬師如来」(史料3)である可能性もある。

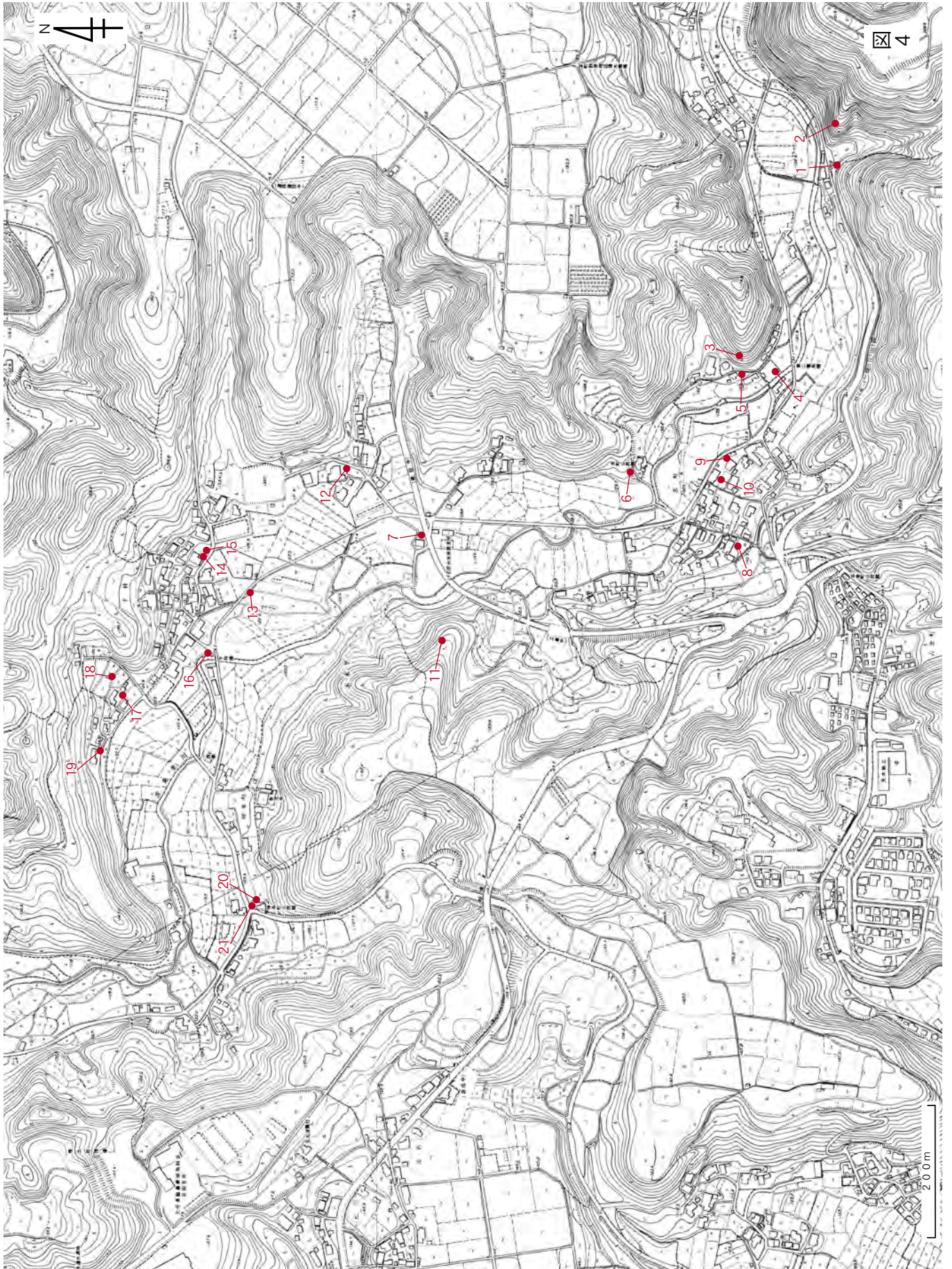
##### 着 来

###### 観音堂(8)

堂内中央に安永7年(1778)銘のある十一面観音像が安置されている。石碑(史料4)と木札(史料5)に



写真6 辻堂

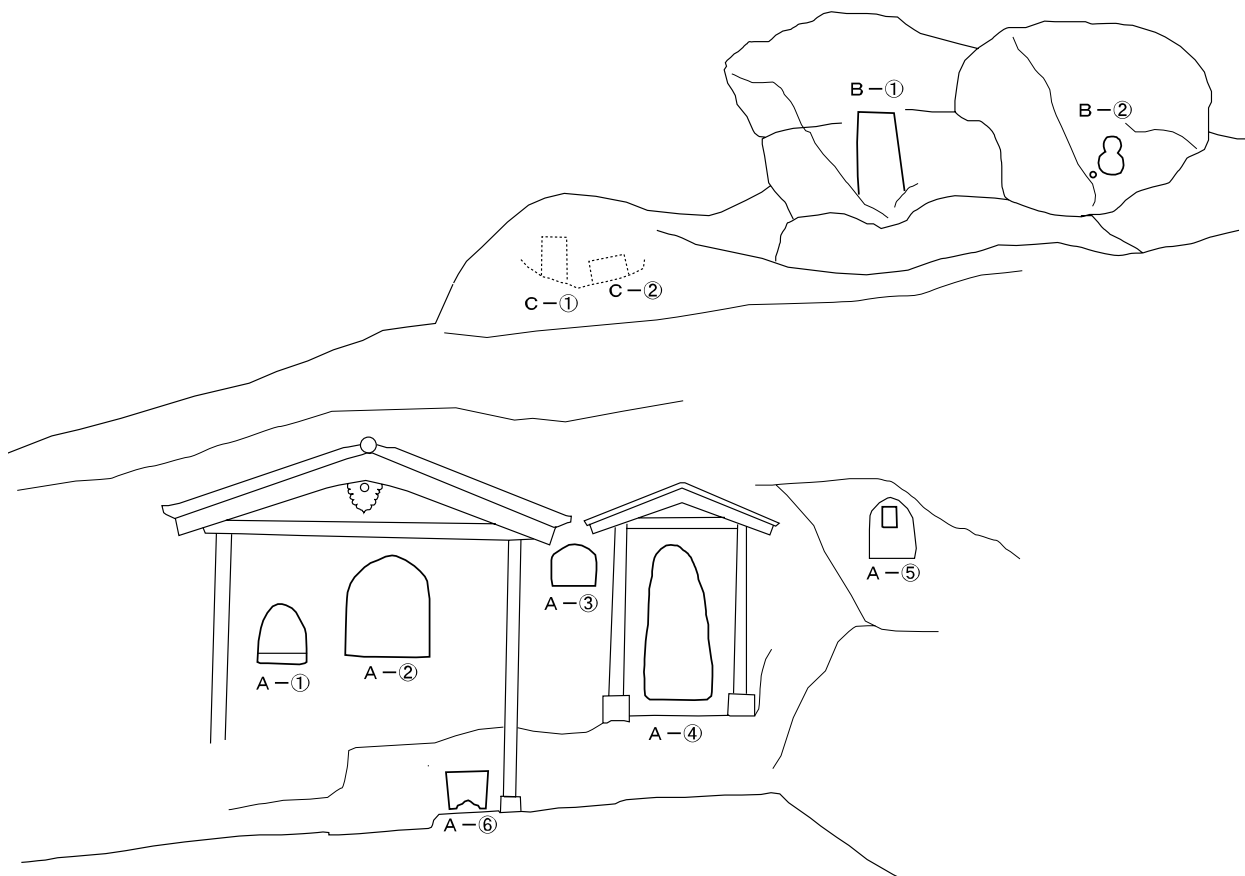


第70图 求来里文化財分布图





写真5 正風寺跡全景



第71図 正風寺跡模式図



A-①：弘法太師坐像  
龕の高さ59cm・底部幅50cm



A-②：弘法太師坐像  
龕の高さ100cm・底部幅86.5cm



A-③：弘法太師坐像  
龕の高さ48.5cm・底部幅44cm



A-④：地藏菩薩立像  
龕の高さ166cm・底部幅65cm



A-⑤：仏龕  
龕の高さ62cm・底部幅47cm



A-⑥：水盤（安政六年銘）  
龕の高さ34cm・底部幅39cm



B-①：磨崖板碑  
高さ125cm・幅68cm



B-②：磨崖薬師如来像  
龕の高さ60cm・底部幅40cm



C-①：磨崖板碑（永禄九年銘）  
高さ68cm・幅36.5cm



C-②：磨崖板碑  
高さ45.5cm・幅43cm

は享和2年(1802)の銘があり、内容は観音堂を再建したとある。他に弘法大師像、石が安置されている。

#### 稲荷石祠(9)

橋本雅文氏宅庭に石祠の稲荷がある。「お稲荷さん」と呼ばれ、明治2年(1869)頃火事があり、その後、火事を除ける為にと建立された。明治3年の一揆の時、守ってくれたという伝承もある。

#### 恵比寿石像(10)

梶原浩司氏宅庭にある。木の祠の中に石像の恵比寿を安置している。

#### 辰の迫

#### お伊勢様(11)

尾根の先端に位置する場所に小社が立てられている。平成12年に屋根修復の記念碑があり、そこには宮柱として足立正行氏(着来)・伊藤学氏(下林)・伊藤文吾氏(元宮)・梶原宏氏(石原)の名前があった。宮柱と呼ばれる5人の住所から氏子圏が求来里地区全体にわたるものと思われるが、宮柱の実態については再調査しなければならない。おそらく祭礼行事などにおける世話役のことであろうと思われる。伊勢信仰については後述することにした。

#### 室

#### 庚申塔(12)

自然石の庚申塔で「天保四年癸巳四月吉日」(1833)の銘が彫られている。

#### 町ノ坪

#### 大師堂(13)

石像弘法大師像1体、観音像1体(写真7)が安置されている。

#### 下林

#### 天満宮石祠(14)

伊藤志利氏宅庭にある。銘文は無く起源も不明である。塔身は後に補ったものと思われる。

#### 庚申塔・燈籠(15)

「天保七年四月吉日 下林氏子中」(1836)銘の自然石庚申塔と、天保7年(1836)銘の燈籠台、天保12年(1841)銘の燈籠がある。

#### 石祠・石碑(16)

下林橋の下、畑地の中に石祠があり、その隣に草木に埋もれた石碑があるが、何かは不明。

#### 小西

#### 稲荷(17)

宇野広志氏宅庭に「慶応四年辰八月二日」銘の石祠がある。

#### 宝篋印塔(18)(写真8)

基壇部には享和3年(1803)の銘(史料6)があるが、隅飾などの特徴から中世後期の宝篋印塔のものと考えられる。塔身部は笠部・基壇部と比べて石質が異なっている。おそらく銘文に記されている享和3年の時に塔身部が改められたものと思われる。豪潮は江戸時代後期における肥後国の僧で、道俗教化のため八万四千の宝篋印塔の造塔を発願したと言われる。日田においても十数基の宝篋印塔を造塔するため訪れたとあり、このことを親交のあった広瀬淡窓が記録している。現在でも豪潮造塔の宝篋印塔はいくつか残っているが、それら



写真7 町ノ坪太子堂観音像 高さ約15cm

は隅飾の特徴から江戸時代のものであることが分かる。求来里地区における宝篋印塔は特徴から中世のものであることは間違いない。おそらく豪潮は無縁化したであろう既存の宝篋印塔を供養することで、豪潮が発願した宝篋印塔の造塔数に加えたのではないだろうか。そのため基壇部の銘文に「謹誌」という形で記したと考えれば、この宝篋印塔と銘文の意味との関係につじつまが合う。

#### 庚申塔(19)

自然石の庚申塔で「猿田彦大神」「弘化五年申二月吉日 小西氏子」(1848)の銘がある。

烏帽子

#### 豊前坊 (写真9)・角柱碑(20)

神来町公民館の横に文化14年(1817)銘が刻まれた豊前坊と呼ばれる石祠がある(史料7)。銘文には「開眼供養師英彦山谷口坊永」とあることから、仏像が安置されていたものと考えられるが、石祠の中には「べしみ」と呼ばれる能面があった(写真10)。銘文から彦山関係の信仰があったと思われるが、豊前坊の名前の由来については不明である。

おそらく彦山関係僧侶に関連して豊前から来た坊主という意味合いで名づけられたのではないだろうか。豊前坊そばには「天保五年甲午八月吉日 求来里村氏子中」(1834)銘のある角柱碑が2基ある。

#### 庚申塔(21)

自然石に「猿田彦大神」と刻まれた庚申塔がある。



写真8 小西宝篋印塔



写真9 豊前坊と呼ばれる石祠



写真10 べしみ(豊前坊石祠内)

## ② 元大原神社と求来里地区との関係について

求来里地区は元大原神社の氏子圏に組み込まれていることから、元大原神社との関わりをもった伝承を聞き取ることができた。元大原神社が現在の場所に遷座して以降も、求来里地区は氏子として属しており、大原神社の神輿が行幸する際は求来里地区の住民が代々かつぎ役を担っていたと伝えられている。

また、字着来の橋本雅文氏からの聞いた伝承では八幡神が示現した場所と伝えられる大字馬原地区に鎮座している鞍形尾神社から元大原神社へ遷座する際、神輿の担ぎ役（神人であろうか）が名里で昼食をとり、食後に箸を地面に刺したところ、たちまち大木となったため、その場所を箸本と言われるようになり、橋本雅文氏の屋号に用いられるようになったと言われる。また、室真幸氏からは元大原神社は会所神社まで行幸する儀式があったと聞き取ることができた。

このように、大原神社と求来里地区とは深い関係があることが窺える。そして示現した場所である鞍形尾神社は、元大原神社が鎮座する台地から続く尾根の奥に位置していることから、求来里地区の開発の歴史には、この大原神社の遷宮伝承と深い関わりがあるのではないだろうかと思われる。このことを踏まえて、求来里地区の実態を明らかにするためにも大原神社を中心とした開発のあり方を明らかにする必要があると思われ、求来里地区での調査範囲を拡大することにした。この調査成果については(4)で後述することにした。

## (4) 元宮と大原八幡社周辺の調査

前章では町ノ坪遺跡発掘調査事業に伴う村落遺跡調査として大字求来里地区の町ノ坪周辺とした谷地形に限定して水利・地名・信仰形態を明らかにした。そのなかで信仰形態としては、求来里地区の住民が元大原神社の氏子圏に所属していることがわかった。元大原神社は現在の場所に鎮座している大原神社の前身で、伝承や文献史料などから近世初期頭にかけて現在の場所に移動したことが確認できる。祭礼においては、現在の大原神社と元大原神社は別々に行っているが、求来里地区では元大原神社だけでなく大原神社の祭礼にも深く関与している。また、第68図を見てわかるように、現在の大原神社と元大原神社は一つの尾根上に鎮座しているなかで、求来里地区はその尾根の枝葉部分に位置していることがわかる。このことから、求来里地区における開発の歴史は、大原神社の信仰形態と深く関わりをもっていることが推測できる。そのため、ここでは大原神社を中心とした求来里地区をも包括する広領域な調査範囲を設定することで、その水利・地名・信仰形態などを明らかにしようと思う。

元大原神社を中心とした地域を見ると、大字求来里地区以外には、大字田島地区・大字北豆田地区・大字日高地区・大字馬原地区が該当する。このように調査対象が広領域であるため、地形の特徴を踏まえたうえで元大原神社を中心とした付近に調査範囲を設定した。

調査地図としては、日田市文化財保護課から地番図を入手し、『日田市史』に所収してある「日田市域大字別字一覧」から、調査対象地域の小字の境界を地形図に記載することで、小字ごとにおける通称地名を書き加えるかたちで地名調査を行った。

水利調査は元大原神社付近に接している田島地区と日高地区の迫地形を範囲とした地域で実施し、元大原神社周辺に重点を置いた。祭祀調査としては馬原地区に鎮座する鞍形尾神社から元大原神社に遷座したという縁起由来を踏まえながら実施した。また、祭祀調査の主を担う大原神社には、多くの文献史料を所蔵していることから、一部ではあるが文献調査を実施した。

### 1. 水利調査

#### ① 大字田島地区

大字田島地区（大字北豆田の一部を含む）は日田市の中心部に位置している。宅地化の進行や用水路廃棄など

のため、現地での調査は困難をきわめた。そこで、日田市税務課から明治年間に作成された旧地籍図のコピーを入手し、それをもとに現在の地形図に記入することで水利灌漑体系の復原を試み、不明な箇所は現地調査や聞き取り調査で補う形で調査を行った（第72図）。

### 小ヶ瀬井路を中心とした水利灌漑

田島地区で最も重要な用水は小ヶ瀬井路である。小ヶ瀬井路の主要水路は第72図中のアーイーウーエを結ぶラインである。ここからいくつかの支水路が西向きに分岐しており、エ以降は隣接の大字南豆田地区へと流れていく。旧地籍図でも主要水路は現在の位置と変わるところはなく、溝幅も太く記載されていることから、当時においても現在と同様の規模の水路であったことが窺える。

注目すべきは、主要水路から分岐する支水路どうしの間隔が約105メートル前後の等分になっており、条里型地割りの様相を呈していることである。この点を考慮して小ヶ瀬井路以前の水利状況とを対応させる必要があると思われる。

### つみ堤を中心とした水利灌漑

小ヶ瀬井路より高地の水田地帯は、堤の貯水を利用した水利灌漑を行っていたことが、旧地籍図によって確認することができることから、現地調査と対応して個々別の堤を明らかにする。また、堤には名称のあるものと無いものがあるため、地図上では便宜上アルファベットで分類した。

#### (イ) 堤A・B

産八幡神社に位置する堤A・Bは、現在は堤としての跡を残すだけである。聞き取り調査によると、通称「田始池」と書いて「タジメイケ」と呼ばれ、かつては農業用水として付近の水田を灌漑していた。旧地籍図には堤が一つしか記載されていないことから、地形環境から考えると一つの堤として利用可能な場合もあったものと思われる。また、この堤からの流れる水路は堤Lへとつながっているため、場所が大字日高地区の字後山にあるが、田島地区周辺の堤ということで記載した。

#### (ロ) 堤C・D・E

堤C・D・Eは周辺の迫地形上に位置する水田を灌漑し、小ヶ瀬井路に入る。しかし現在は宅地化のため、三つの堤と水田は残っていない。

#### (ハ) 堤F

聞き取り調査によると堤があったといわれる。現在は畑地となっているため、堤の跡は確認できなかった。

#### (二) 堤G・H・I・J

現在は陸上競技場になっているため、これらの堤とその周辺の水田は確認することができない。四つの堤からの水路は土バミ堤から流れる水路と合流し、一部が城内大原堤へと流れる流路をもっていた。

#### (ホ) 堤K

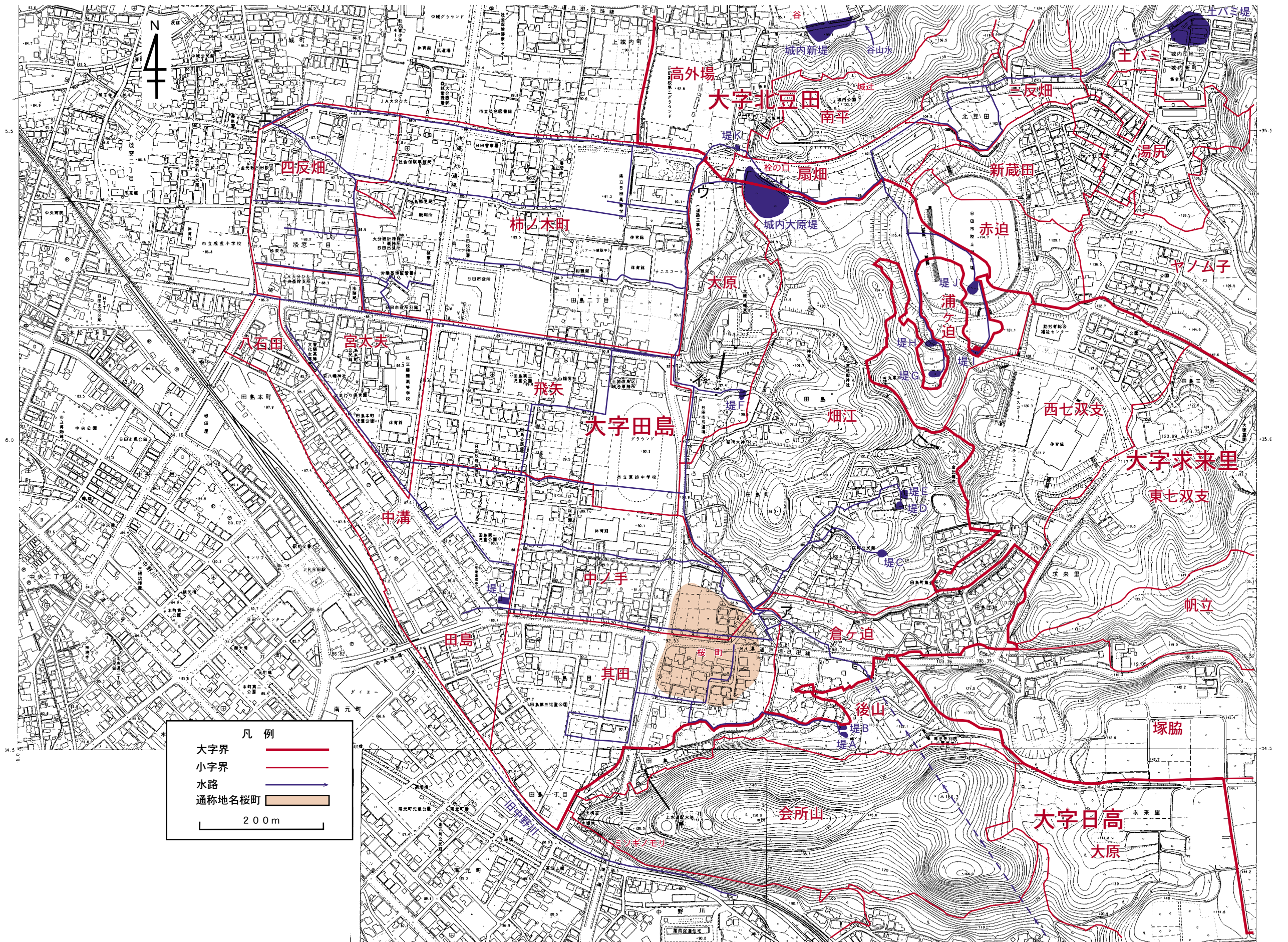
現在宅地や道路になっているため、確認することができない。

#### (へ) 堤L

現在は自動車整備工場になっているため、堤を確認することができない。この堤から流れる水路は飛矢溝と呼ばれていた。

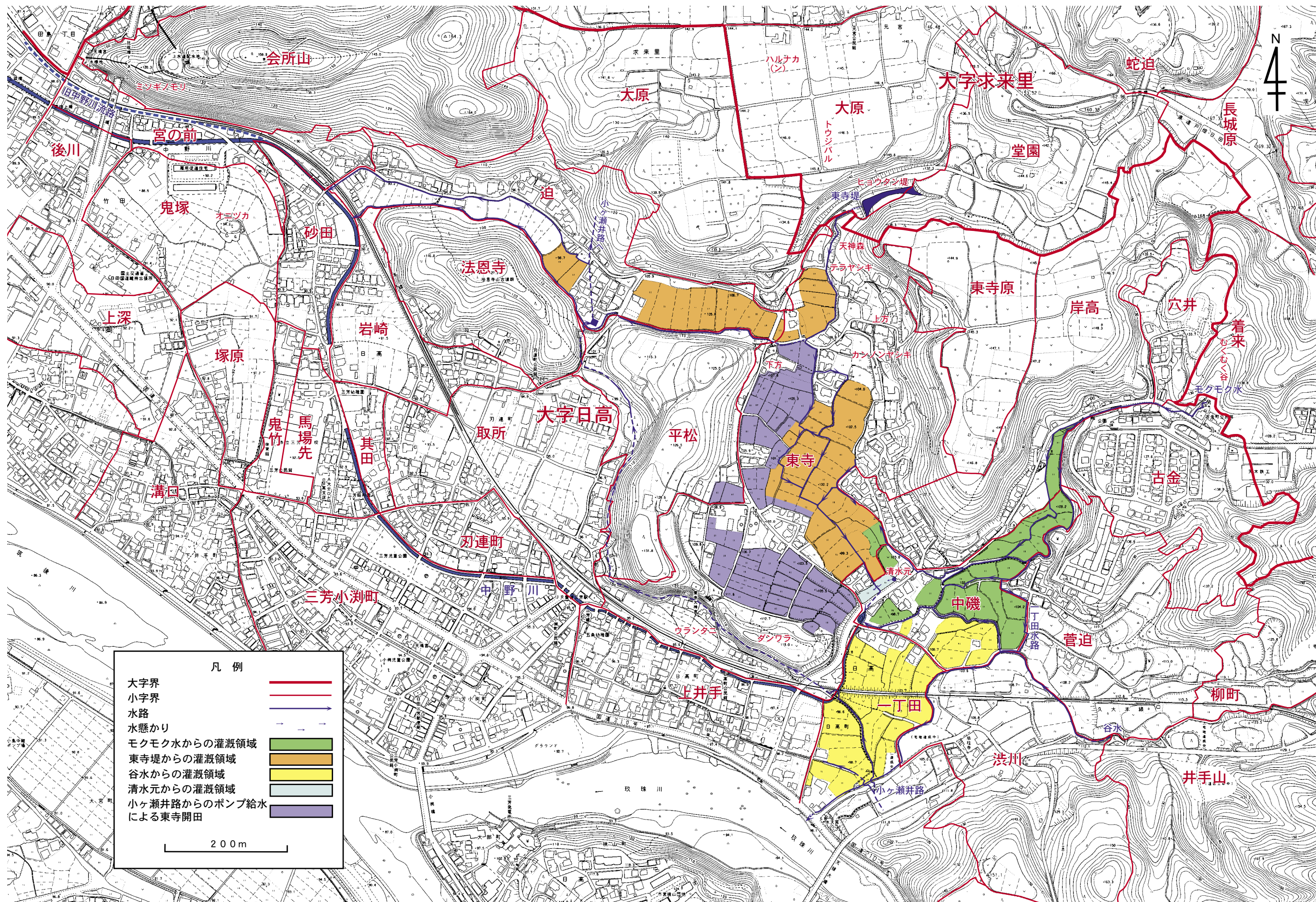
#### (ト) 城内大原堤

この堤は現在も残存しているが、水量が豊富でないため、堤前の数枚の水田を灌漑する程度である。聞き取りによると、小ヶ瀬井路以前は、この堤によって田島地区と北豆田地区の水田を灌漑していたという。宝暦年中の絵図には「御公領田島村・城内村立会堤」とあることから、小ヶ瀬井路開削以前の主要な水源であったことが窺える。宝暦絵図に描かれた堤には東西に朱線が引かれており、「立会堤」の名称からして水量や普請負担の比率



第72図 田島 水利・字図





第73図 古金・東寺堤 水利・字図

が定められていたものと思われる。この比率については、明治初期の「日田郡村誌」に田島村が7分、北豆田村が3分と記載されている。

(チ) 土バミ堤

現在は城内団地となっているため、確認することができない。この堤からの水路が下方の城内大原堤に流入している。

(リ) 城内新堤

現在この堤はゲートボール場になっており、かつては八坂神社付近の水田を灌漑していた。また、この堤の上部には谷水によって灌漑される小規模な水田がある。この水田は八坂神社と大原神社に米を奉納されるための水田であることが聞き取り調査で確認することができ、神田としての性格をもった水田であることが窺える。

## ② 大字日高地区周辺

大字日高地区の字東寺・古金周辺は、元大原神社が鎮座する尾根の枝葉部に位置する迫地形で、道路整備が進んでいるものの水田景観は良好の場所である。ここでは、地元の協力が得られたため、主要な水源とその水利灌漑範囲を明らかにすることができた。以下、それぞれの水源ごとにまとめた形で水利状況を説明する（第73図）。

### むくむく谷からの湧き水（通称、モクモク水）

字古金こがね付近にある通称地名「むくむく谷」には、地元の人たちから「モクモク水」と呼ばれている湧水があり、下方の迫状になっている水田地帯を灌漑している。主要水路は字古金に由来して通称「古金川」と呼ばれている一方で、下流の字一丁田の水田を灌漑する「谷水」とよばれる水路と合流しているため「一丁田水路」とも呼ばれている。



写真11 むくむく谷の湧水点（モクモク水）

### 清水元

字中磯に「清水元」と呼ばれる湧水点があり、水量が少ないため付近の二枚の水田のみを灌漑する程度である。

### 東寺堤

大字求来里字大原内の大字日高字東寺と堺を接する場所に東寺堤がある。この堤は地元の人たちから「ヒョウタン堤」と呼ばれ、字中磯一帯の水田と法恩寺山古墳群付近へといたる水田を灌漑している。字中磯一帯には昭和30年代にかけて小ヶ瀬井路からポンプ給水することで畑地を水田化した「東寺開田」と呼ばれる水田があるため、聞き取り調査で「東寺開田」以前の灌漑状況を明らかにした。

また、字中磯の水田を灌漑した落ち水としての水路と「モクモク水」の水路が合流することで中野川となっていることが確認でき、法恩寺山古墳群方面の水田を灌漑する水路も中野川に落ちる構造になっていることがわかった。

### 字小迫からの谷水

字一丁田一帯の水田を灌漑する水路は「谷水」とよばれる。この「谷水」は大字日高地区の東方にある字小迫にある尾根からにじみ出る水が集まることで、一定の水量をもって一帯の水田を灌漑している。落ち水の水路は「モクモク水」の水路と合流し、やがて東寺堤からの水路とも合流することで中野川と呼ばれる小河川となり西方へと流れる。

## 小ヶ瀬井路の流路

日高地区を流れる小ヶ瀬井路は「モクモク水」および東寺堤からの水路や中野川とは直接合流することがなく、立体交差の形をとっている。この地区における小ヶ瀬井路はほとんど隧道で掘り通しており、法恩寺古墳群付近で支水路が北西方向に流れることで、その付近の水田を灌漑しているだけである。

## 中野川の流路

中野川は「モクモク水」と東寺堤からの水路と「谷水」が合流して形成された小河川である。しばしば洪水を発生していたため、現在は河川改修の流路になっている。そこで、旧来の中野川の流路は聞き取り調査を行い、旧来の中野川の流路はJR久大線の線路沿いを流れていたことが確認できた。

## 2. 地名調査

### ① 求来里地区（字元宮周辺）

元大原神社に関する遺称地を確認するため、字元宮を中心とした求来里地区の尾根状台地一帯を調査から、小字地区ごとに通称地名をまとめ、地図上に記載することにした（第69・72・73図）。求来里地区における地名調査の成果は(3)でまとめているので、ここでは省略する。

### ② 田島地区

田島地区は元大原神社が鎮座する尾根と会所山の尾根の間に形成された迫地形が扇状に広がった日田盆地東部の平地に位置する。小字ごとは地番図をもとにして第72図に記載した。中には字界が不明なところもあり、その場合は記入をせず、おおよその領域がわかるような地図での記載をした。聞き取り調査では「桜町」という通称地名を確認することができた。この地名は小字畑江・倉ヶ迫・其田一帯といった広範囲にわたった特徴のある地名で、元大原神社の門前町の遺称地であることを大字求来里字室の迫の室氏から聞き取ることができた。

### ③ 大字日高地区

大字日高地区は元大原神社が鎮座している尾根と玖珠川の間に位置している。この一帯の水田は小ヶ瀬井路で灌漑される字取所の水田と字迫の水田一帯以外は、尾根迫からにじみでる湧水や堤などによる水で灌漑される水田が多い。また、字東寺とよばれる寺名を遺称とする地名もあることから、元大原神社の神宮寺との関与が推測される。以上のことがらを留意した上で地名調査を行った。小字ごとの領域は地番図をもとにし、通称地名とともに第73図に記入した。ここでは小字ごとの通称地名を記載する。

東 寺：テラヤシキ・カンノンヤシキ・上方・下方・天神森・ダンワラ・ウランタニ・清水元

※東寺はツウジ（辻を語源）とも呼ばれている

会所山：ミソギノモリ

## 3. 信仰遺跡調査

### ① 求来里地区（字元宮周辺）

元大原神社から道を挟んだ場所で、通称地名「テラアト」には元大原神社の祭礼における仮所が置かれている。「テラアト」の地名からして元大原神社の神宮寺跡であることが窺える。仮所の近くには神木の杉があったといわれ、現在は失火による焼失で切り株痕を残すのみである。

また、「テラアト」には東北方面に向かう鳥居と東南方面に向かう二つの鳥居がある。東北方面の鳥居は元大原神社を遥拝しており、東南方面は地図上で確認すると大字馬原に鎮座する鞍形尾神社がある。このことから、鞍形尾神



写真12 鞍形尾神社

社から元大原神社へ遷宮した社伝を考え合わせると、東南方面に向かう鳥居は鞍形尾神社を遥拝する性格をもったものであったと思われる。

## ② 日高地区

### 東寺周辺

「テラヤシキ」には、大字北豆田に所在する西光寺が字東寺の「テラヤシキ」にあったと西光寺の縁起で伝えられている。字東寺という名称は西光寺に由来するといわれるが、東寺をツウジと読むことで辻の意味に通じるという場合もあることから、東寺の名称に関しては定かではない。しかし、元大原神社の神宮寺との関連としても考え合わせると、東寺の地名は興味深いものであるといえよう。

また、「テラヤシキ」付近には大神宮とよばれる小社があり、付近の長尾家と坂本家の氏神として毎年11月15日に甘酒祭を行っている。大神宮は伊勢信仰の社であり、求来里の字辰の迫に鎮座する「お伊勢さま」と同じように近世期の幕吏赴任に伴う信仰流行によって造営されたものと思われる。

「天神森」には注連縄を張っていた古大木があったが、現在は倒木によって存在しない。

観音堂は「カンノンヤシキ」から現在の場所に移動したと言われ、天正年間に田尻半左衛門鎮長という人物によって建てられたと伝えられている。

渡辺誠氏宅裏の台地状の丘陵地を「ダンワラ」と呼んでおり、その東南斜面にある東寺横穴墓からは中国漢代の金銀錯嵌珠竜文鉄鏡が発掘された場所と言われている。丘陵の台地部には近世建立の東寺大神宮が鎮座しており、また鏡が出土した場所はJ R久大線拡張の際に破壊されたと言われている。

### よそやま 会所山

会所山の南麓には「ミソギノモリ」とよばれる場所がある。この場所の傍には旧中野川が流れており、この水を使って会所神社で行う祭祀のための潔斎を行っていたと伝えられている。

## ③ 伊勢信仰について

大字求来里字辰の迫にある「お伊勢さま」とよばれる小社や大字日高字東寺にある大神宮と字平松の東寺大神宮などは、『日田市史』に紹介された明治12年（1879）に日田郡域の伊勢信仰遥拝所をまとめた「日田郡境外遥拝所明細帳」に記載されている。『日田市史』によれば、遥拝所の多くは享保年間から寛政年間の近世後期にかけて建立されており、中には幕吏の命により勧請したものもあることから、幕府が伊勢信仰を奨励したものと思われるとある。

## 4. 文献調査

『大分県文化財調査報告 第66輯 天領日田の文化財』（大分県教育庁文化課、1984年）には、大原神社所蔵の文書関係をまとめたものと思われる、江戸時代末期の「大原八幡宮舊来の年中行事」が所収されている。そこには、八月七日に行われる塩井神事と呼ばれる祭礼における潔斎として求来里地区の字坂ノ下付近の求来里川で行われるとあり、八月十三日からの放生会の祭礼においては、古金谷のむくむく谷から川蜷を捕って、頓宮として設定された字宮太夫（ミヤンデ）にある若宮で放生の儀式を行うとある。現在の放生会は大原神社境内の池で行われており、この報告書で紹介されている放生会は江戸時代における儀式の内容であることが分かる。



写真13 会所八幡神社

また、この報告書には大原神社が所蔵する文書は紹介する程度でしか記載されていない。そのため、今度の調査の一環として、大原神社において文献調査を行った。大原神社所蔵とされる文書類としては、①卷子状の「大原神社八幡宮縁起」(写真14)と、②江戸時代から記載された「大原日記」と題名されたり無題となっていたりする冊子状のもの、そして、③後世による文書を書き写して所収した冊子といった三つに分類することができる。膨大な文書の量ということもあって、調査した一日だけではすべてを把握することができなかつたため、大原神社の祭礼が周辺地域と関わりをもっている内容を記載している箇所を抽出し、デジタル画像に保存したものを活字化する作業を行った。とくに③の文書内容としては、後世による書写したものをさらに書写した内容のものも多いが、内容によっては「社家衆」「市別當」や中世的土地所有および徴税単位としての「名(みょう)」の名称をもったものなどの記載があり、中世の頃まで遡及することが可能な箇所があることが分かった。このことから、おそらく大原神社が所蔵していた中世文書を近世もしくは近代の頃に書写したのものが、それを③の冊子を編纂する際に書写したものであろうと考えられる。大原神社は第2次大戦後の混乱期において文書類や宝物類が散逸してしまったため、③の冊子は、散逸する以前の文書を確認する上でも重要な資料であることがわかった。

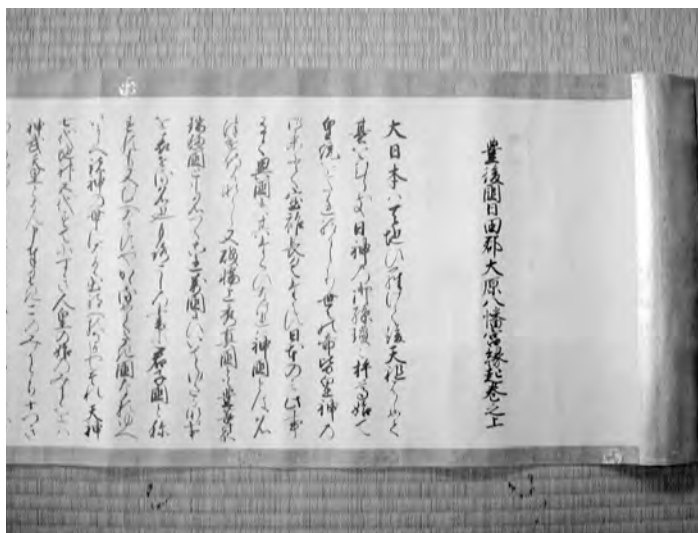


写真14 大原神社八幡宮縁起

③の冊子は「奉納物二関スルモノ」「祭儀二関スルモノ」「寺社家二関スルモノ」「撰社末社社参二関スルモノ」「願届二関スルモノ」「土地二関スルモノ」「營繕二関スルモノ」「由緒縁起二関スルモノ」「雑」とあり、ここでは「祭儀二関スルモノ」に所収された一部の内容を活字化した(史料8～10)。

そのなかに所収されている文書には大原神社に遷座する以前の元大原神社における放生会などの儀式について記載されている(史料8・10)。この史料から、中世のころの放生会は会所神社を仮所として儀式を行っていたとあるが、江戸時代では宮太夫にある若宮神社を仮所としており、現在は大原神社境内の池で放生会を行っている。近代以降、境内に池をつくって放生会を行うようになったのは、八幡信仰の特徴上、放生会は仏教儀礼であったため、近代以降の国家的政策であった神仏分離の動きに応じて、放生会の儀式が神社境内において行われるようになったことがわかる。中世から近世にかけて放生会の儀式場所が変遷したことについては考慮しなければならないであろう。ここでは史料紹介だけで終え、変遷のあり方については考察編で詳しく記述することにした。

「行事帳写」(史料9・写真14)には、中世的土地所有および徴税単位として使用された「名(みょう)」の名称を持ったものがある。日田市域においては中世の史料が希少で、「名(みょう)」の存在に至ってはほとんど確かな史料はなかった。「名(みょう)」の存在が明らかにされることは、今後の日田市における中世史研究を進展させることが可能であると思われる。そこで記載されている「名(みょう)」の遺称地として考えられる場所を一覧表にし、掲載することにした(第4表)。この表から調査対象地区において、ほぼ確定できる名(みょう)をあげれば、「鬼武」(日高地区字鬼竹)・「刃連中臣名」(日高地区字刃連町)・「畑江久吉名」(田島地区畑江)・「田嶋名」(田島地区)があることが明らかになった。

(文責 園田 大・高 陽一・三谷紘平)

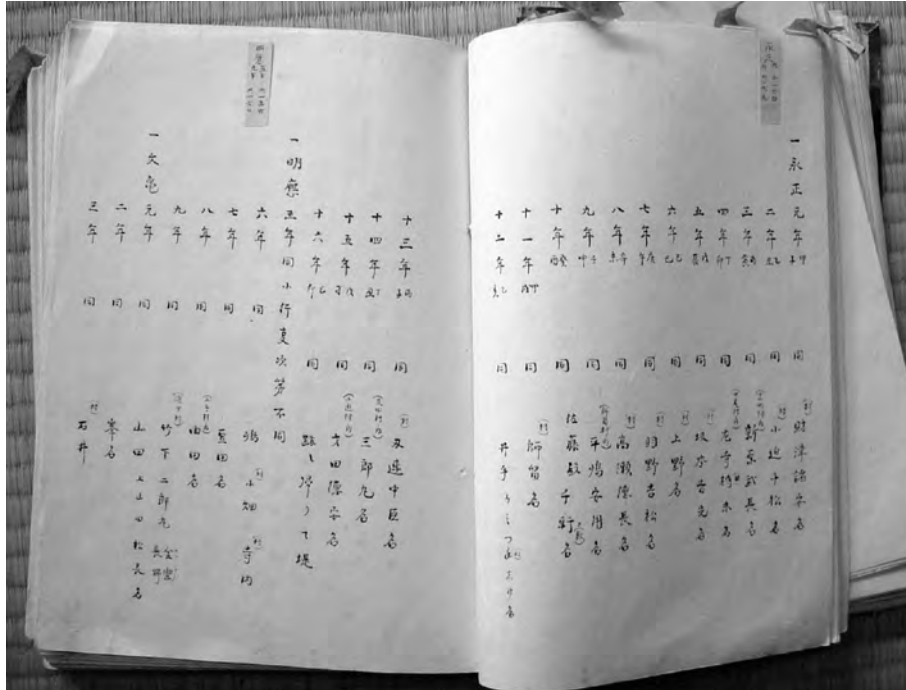


写真15 行帳帳写

第4表 「行帳帳写」記載の名(みょう)一覧表

番号	名(みょう)	比定地		村		
		大字	小字・通称※	正保郷帳	元禄郷帳	天保郷帳
1	鬼武	日高	鬼竹			
2	二串鬼松名	二串		二串村	二串村	二串村
3	大内田名	友田	大内田	友田村	友田村	友田村
4	石松	有田	石松町※	石松村	石松村	石松村
5	池邊弥長名	有田	池辺町※	池辺村	池部村	池部村
6	草場吉次名	三和	草場野			
		渡里	清岸寺町草場※	草場村	草場村	草場村
		西有田	草場の原			
7	石田小寒水安長名	有田	石田	小寒水村	小寒水村	小寒水村
8	財津諸安名	有田	財津畑			
		三和	財津※	財津村	財津村	財津村
9	小迫千松名	小迫		小迫村	小迫村	小迫村
10	新原武長名	十二町	新原※			
11	左寺持末名	有田	佐寺(中尾町※)	中尾村	左寺村	左寺村
12	坂本吉光名	西有田	坂井町坂本※	坂本村	坂本村	坂本村
13	上野名	上野				上野村

14	羽野吉松名	三和	天神町羽野※	羽野村	羽野村	羽野村
		北豆田	羽野殿屋敷			
15	高瀬徳長名	高瀬		高瀬村		
		夜明	高瀬			
16	平嶋安用名	求来里	平島			
		東有田	平島※	平島村	平島村	平島村
17	佐藤殿千軒名					
18	師留名	東有田	諸留町※	諸留村	諸留村	諸留村
19	井出かみつねしげ名	東有田	井出ノ上			
		高瀬	井出迫			
		日高	上井手	上井手村	上井手村	上井手村
		下井手町		下井手村	下井手村	下井手村
20	刃連中臣名	日高・刃連町		刃連村	刃連村	刃連村
21	三郎丸名	友田	三郎丸	友田村	友田村	友田村
		大肥	三郎丸			
22	才田徳安名	小迫	才田※			
23	豆田名	豆田				
24	由田名	西有田	夕田	夕田村	夕田村	
25	山田上山田松長名	山田		山田村	山田村	山田村
26	峯名	三和	峯			
27	石井	石井		石井村		
28	宮ノ庄					
29	入江岩松名	友田	入江※	入江村	入江村	入江村
30	荻鶴半三郎名	友田	荻鶴			
31	畑江久吉名	田島	畑江			
32	石井ノ郷司	石井		石井村		
33	なりとみ名					
34	成重貞清	三和	成重			
		三和	貞清			
35	田嶋名	田島		竹田村	田島村	田島村
36	有田ノ郷司	有田		有田郷		
37	用松名	三和		用松村	用松村	用松村
38	竹田名	竹田		竹田村	竹田村	竹田村
39	よあつミ名					

## (5) 考察 大原神社における祭祀共同体と地形的環境との関わりについて

－同一尾根地形上に見られる祭祀施設の存在位置に注目して－

### 1. 迫地形－地名調査の成果から－

筆者は以前から侵食地形のことを谷もしくは迫といった二つの呼び方があるという疑問にたち、大分県の直入郡・大野郡（現竹田市・豊後大野市）での調査で一つの考察を行った。そこで明らかになったことは、迫に限っては、尾根が小規模ながら馬蹄状に侵食された地形のことを表現していることが多く、字や通称地名として迫名が用いられていることであった。さらに迫の特徴としては湧水点（直入郡・大野郡ではイノコと称す）を基点にした自己完結的な水田構造となっていることである。一方、谷地形とは大規模な侵食地形のことを指すことが多く、水田面積も広大で川灌漑などを利用した複雑な水利がめぐらされている特徴がある<sup>(1)</sup>。このような谷・迫の便宜的な区分が求来里地区の地名調査でもあてはめることができるかを明らかにしたい。

求来里地区における字で迫名をもつものは辰の迫と蛇迫で、通称地名としては辰の迫にあるタツノサコ・ウシロサコと、室にある室迫を聞き取ることができた。蛇迫は尾根が馬蹄状に侵食された形そのものを字塚としている。辰の迫は二つの迫を一つにした字となっており、北側の迫を字名となったタツノサコと呼び、南側の迫をウシロサコと通称地名となっている。室迫の場合、室という字全体が馬蹄状地形になっていることから、字そのものを室迫と呼んでいた可能性もある。

一方、谷に関する地名であるが、求来里地区では見られないが、隣接の日高地区に流れる中野川の源流となる二つの流路のことを谷水・モクモク水と呼んでいる。谷水は字小迫を水源とし、周辺の迫からの水を集めてできた流路のことを指していることから、この流路一帯のことを谷として意識していたものと思われる。モクモク水については求来里地区の字着来の通称地名であるむくむく谷からの湧水を水源としているが、地形的には迫状になっているにもかかわらずむくむく谷と呼ばれている。中野川の源流である一つの流路のことを谷水と呼んでいることを考え合わせると、モクモク水も谷水の一つという意識があり、その水源という意味から谷地名的な名称が当てられたのではないだろうか。地名自体がむくむくなのかモクモクなのか呼ぶ人によって異なっていることから、谷としての表記があっても明らかな判断をするわけにはいかないものであると言えよう。いずれにせよ、今回の調査対象地域においても馬蹄状になった侵食地形の多くを迫として呼んでいるということになっており、それらの迫の水が集まって一つの川となり、その川から取水して灌漑する地域のことを谷として意識されていることが確認できた。

### 2. 尾根と大原神社

尾根の上は洪水の心配がない安定的な土地であるため、台地上は古くから天水を利用した畑地が開かれてきた。求来里地区に見られる尾根上の台地状地形に広がる畑地での水資源は、現在は給水ポンプによる散水であるが、以前の状況は基本的に雨水に依存していた。一方、台地の下には地下水があり、これが湧水として迫の奥から出て、ここに溜池などがつくられる。また、このような環境に元大原神社が鎮座しており、氏子圏を見ると現在の大原神社も合わせると、鎮座する尾根を基幹とすれば枝葉部にあたる場所の集落を範囲としており、求来里地区もその中に包含されている。このことから大原神社とくに元大原神社と尾根上における開発の歴史に注目する必要があるように思われる。

大原神社の祭神は八幡神で、その縁起によれば、天武天皇の9年（680）に刃連郷岩松ヶ峯（大字馬原字鞍形尾）に八幡神が示現し祭ったとある。現在、その場所には鞍形尾神社が鎮座している。慶雲元年（704）ころに求来里地区の字元宮に遷宮せよとの託宣によって元大原神社に鎮座し、貞観元年（859）には日田郡司である大蔵永弘によって日田郡惣社として社殿を大規模に造営したといわれる<sup>(2)</sup>。



大原神社は、鎌倉期からは大友氏の庇護をうけるようになる。大原神社が所蔵している「祭祀二関スルモノ」の中に、後世の写しではあるが、室町期において、大友一族で日田殿と呼ばれた大友親常ひたどん ちかつねが大原神社を再興し、会所山の麓で放生会の儀式を行ったとある（史料11）。また、この史料には日田郡25名（みょう）が年次の祭礼に関与したとあることから、日田地域における名（みょう）が宮座的な存在であった可能性がある。これまで日田地域の名（みょう）については中世当時の史料が希少であるため定かではなかったが、この「祭祀二関スルモノ」では日田地域の名（みょう）の位置がわかるように記載されている。この史料自体の検討は今後に任せるとして、日田地域での中世史研究発展のため、この史料に現れた名（みょう）とその位置を表4にまとめてみた。

その中で、興味深い名（みょう）として田島地区の字畑江に比定できる畑江久吉名である。現在の字領域は大原神社の境内を南北に縦断して、東に字畑江があり、西に字大原が設定されている。字大原には大原神社が鎮座しているため、この字界は近世期の遷座以降のもののように窺え、もともとは畑江として一つの領域であった可能性がある。このように考えると、畑江としての領域にはいくつかの迫が集約した地形環境であることが見える。大分県直入郡・大野郡での調査結果では、いくつかの迫を集約する尾根を一つの単位とした名が設定されていたものが多く、第76図のような模式図を作った<sup>(3)</sup>。この第76図と字畑江の地形（第72図）を見比べると、字畑江内の地理的環境も尾根の中に迫がいくつか形成されている点で共通していることが分かる。この字畑江全体に畑江久吉名を比定できるかどうかは不明であるが、名（みょう）と迫地形との関わりを考える際、検討に値する一つの事例であることが言える。

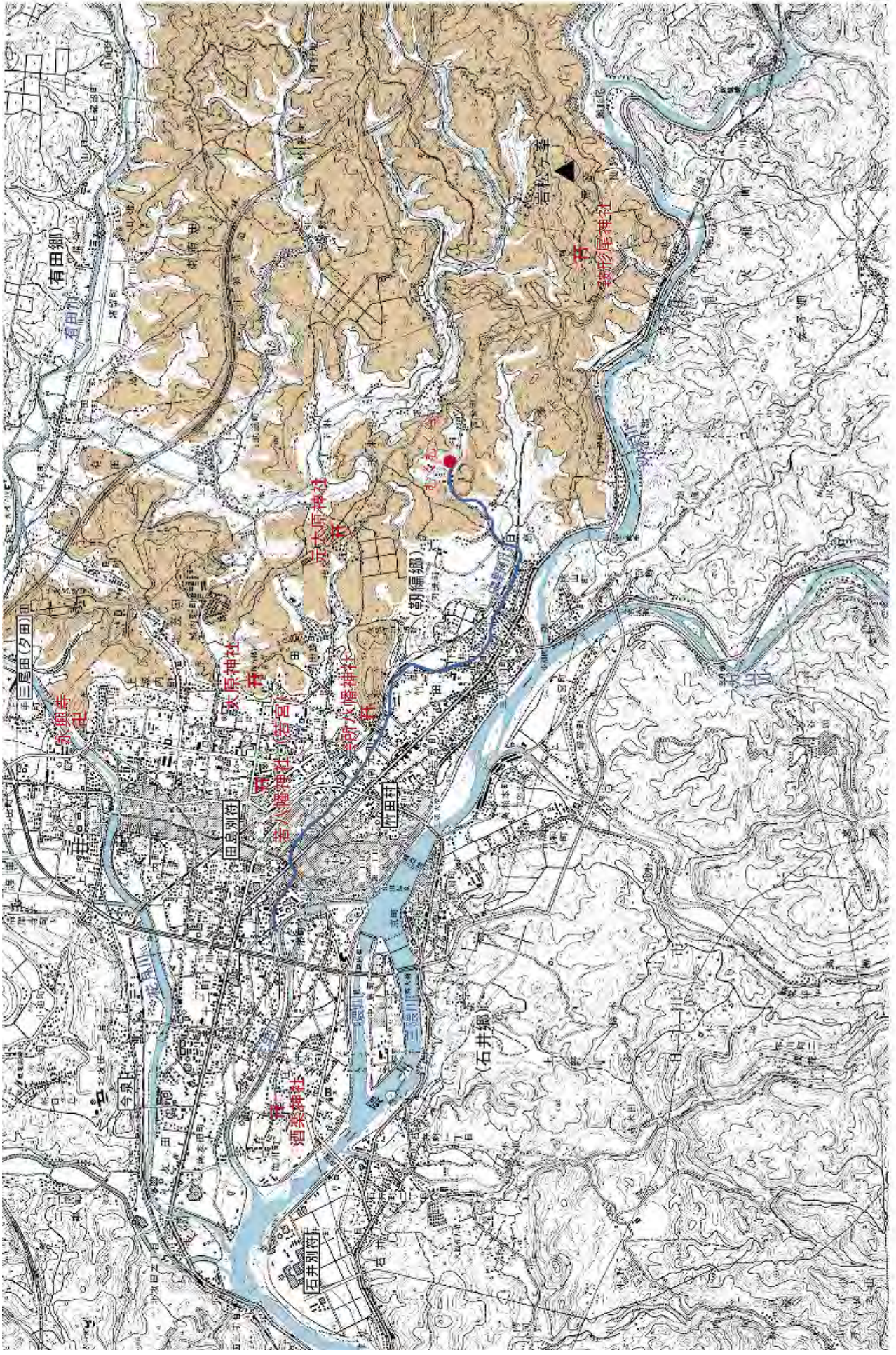
近世以降、寛永元年（1624）から、日田藩主石川忠総が現在の大原神社に遷宮したとある。この時に楼門にある応長2年（1312）銘の善神王やいくつかの社宝も移されたとあり、祭礼行事も大きく変化したものと思われる。それについては後述することにした。

元大原神社と、鞍形尾神社は同一の尾根に鎮座しており（第74図）、また字元宮にある仮所には鞍形尾神社を遥拝する鳥居がある。縁起には大蔵永弘が本来あった元大原神社を北へと移転させたとあることから、鞍形尾神社を遥拝する鳥居の場所に本来の元大原神社があったと考えられる。

八幡神が示現し、元大原神社が遥拝する鞍形尾の岩松ヶ峯の存在は、古代において水源そのものを象徴したのものとして意識されていたのではないだろうか。なぜなら、岩松ヶ峯から派生する尾根には、いくつかの湧水があり、その湧水によって形成された谷や迫といった侵食地形で水田耕作を行っている。つまり水田経営をしていく上において、尾根からの水は貴重な水源であったと言えよう。直入郡・大野郡での調査では湧水とは地下を流れる水脈が表出したものであり、古代・中世においても気脈などという概念をもつ陰陽道や神仙思想といった影響の知識や経験などによって漠然とではあるが水脈を意識していたのではないだろうかと考えている。また、地下水脈の上にある尾根に設置された祭祀施設などは、このような水脈を意識して水源を象徴するための存在であったと考えている。この考え方で調査対象地域を見てみると、岩松ヶ峯や鞍形尾神社・元大原神社は周辺地域における全体的な水源としての象徴的存在であったと考えてもよい。このような思想が大原神社での祭祀儀礼に影響を与えた可能性は高い。次節では八幡信仰で重要な祭祀儀礼の一つである放生会の儀式を、大原神社の場合とをあわせて明らかにすることで、大原神社一帯における開発の歴史を見ていこうと思う。

### 3. 中世の大原神社の放生会について－大原神社所蔵「祭祀二関スルモノ」所収文書の検討から－

大原神社所蔵『祭祀二関スルモノ』所収の大原八幡三所由来（史料11）には、文明6年（1474）に大友親常が大原神社を再興し、会所山の麓で放生会を行ったという記載がある。会所八幡神社の縁起によれば、もともとは久津媛命が本拠にしていた会所山中腹に社殿を造立したとある。その後、延喜8年（908）に会所山西方二町ばかりに楼門を建立したが、天慶元年（938）7月の洪水によって流失したと伝えている。その場所は現在の会所八幡神社に当たると思われ、『日田神社蒐集録』（日田市ふるさとの歴史を訪ねる会編）の聞き取り内容によると、



第74図 日田市地形図

楼門の礎石が明治7年ころまであったとあるが、今回の調査では、その場所を明らかにすることができなかった。

『豊西説話』には、延喜8年(908)に建立した楼門の側に善神王社を勧請したとある。天慶元年(938)の洪水の際に楼門と同時に善神王社も流れたが、御神体は徳瀬で掘り出され、その場所に社殿を建て勧請した。徳瀬にある酒楽神社が善神王の御神体が掘り出された場所にあたるということだが、江戸時代初期に大原神社が遷宮した際、同時に善神王も移され、隨身として楼門に勧請されたとある。いつごろ徳瀬の酒楽社から大原社に戻ってきたのか不明であるが、隨身の胎内銘は応長2年(1312)の年号といわれている。



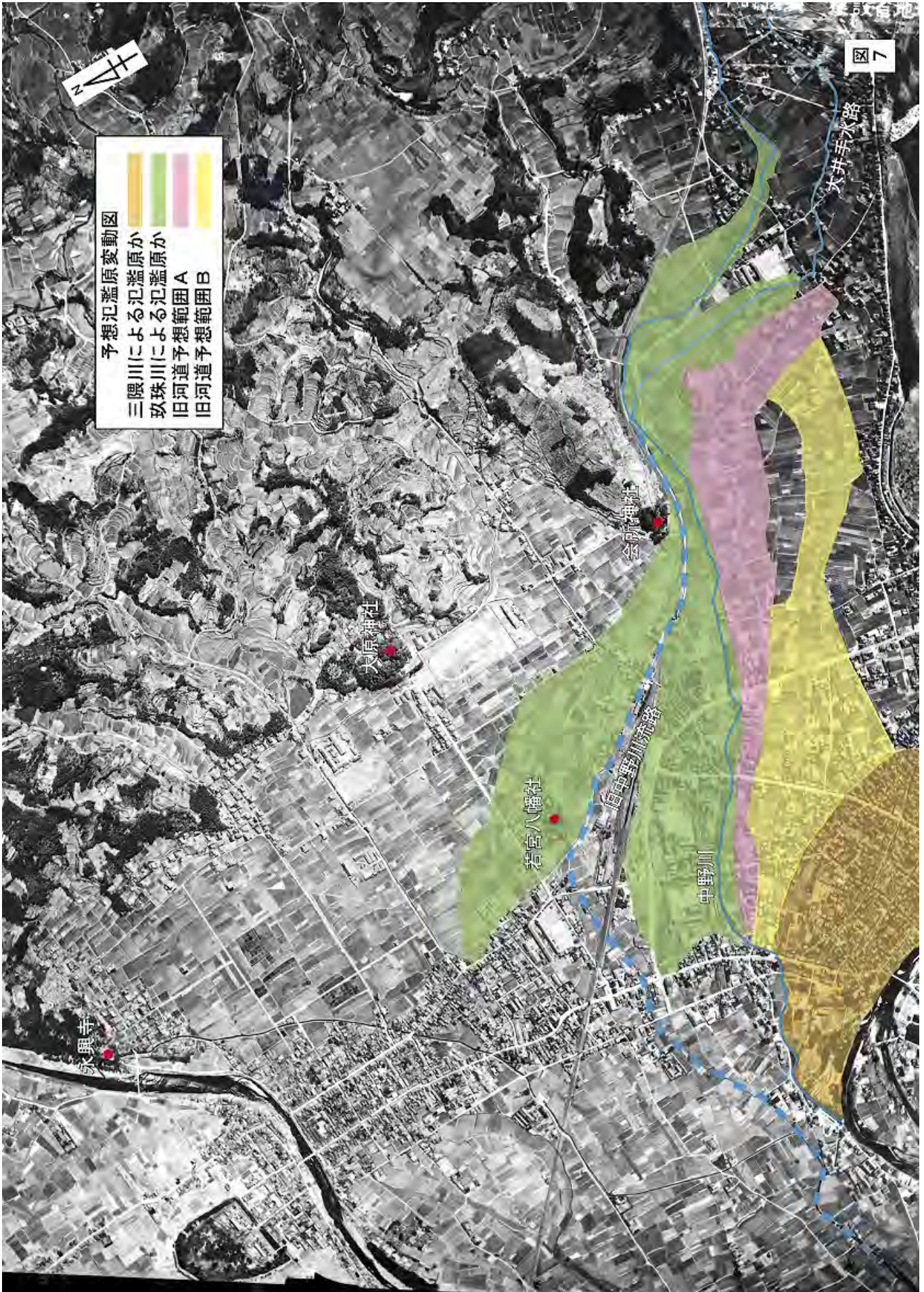
写真15 酒楽神社

会所八幡神社は久津媛伝説がある会所山の麓にあることから、もともとは八幡神でない祭神を祭っていたと思われ、八幡信仰の広がりとともに八幡神と合祀されることで、会所八幡神社と言う現在の名称でよばれるようになったものと考えられる。求来里地区とその周辺は古代において刃連郷があったことから、元大原神社や会所八幡神社の場所には、古代の開発と深く関わりを持った前身的な祭祀施設なる存在があったように思われる。それは、岩松ヶ峯から派生する尾根上に位置していることを考えれば、岩松ヶ峯を水源とする共通の意識に立った祭祀構造で、まさに日田の開発者として現れる久津媛のような地元神であらわすことで、祭っていたのかもしれない。

大原八幡宮縁起では、貞観元年(859)に日田郡司の大蔵永弘が元大原神社を造営したとあるが、大蔵永弘ら日田郡司大蔵氏が台頭してきた年代は少し時代を下った11世紀のころである。実際、奈良時代では日下部氏が日田郡司として見える。このことから、縁起における天武天皇の9年(680)に岩松ヶ峯(大字馬原字鞍形尾)に八幡神が示現し祭ったとあり、慶雲元年(704)ころに求来里地区の字元宮に遷宮せよとの託宣によって元大原神社に鎮座したとあるが、このころにおける八幡信仰の広がりには疑わしいと言えよう。むしろ、その後の八幡信仰が定着した際に由来付けとして設定された縁起である可能性がある。

中世の荘園開発の場合、領主である寺社の信仰が鎮守というかたちで現地に定着するケースが多いことが、『大分県日田盆地における開発史的研究』(飯沼執筆分)で指摘されている。『八幡宇佐宮御神領大鏡』では、天喜2年(1054)に宇佐宮領であった肥前国藤津郡の桑垣を大宰府領であった日田郡五箇所の桑畑を相博(交換)したとあることが、日田における宇佐宮領に関連する初見の史料である。日田五箇所には田島地区に比定される田島別符があることから、天喜2年以降に田島地区に近い元大原神社で八幡神が合祀された可能性が高くなる。しかし、貞観元年に元大原神社を郡社として現在の場所に移築大造営したという縁起も考えれば、この時に八幡神を合祀した可能性も否定しにくい。いずれにしても、八幡信仰との結びつきについては貞観元年から天喜2年との間を前後するころにあてはまることになるだろう。そして、天喜2年以降、日田五箇所を請け負った大蔵氏が台頭し、それまでの豪族であった日下部氏は衰退していくのであるが、このことは両者の開発史的な側面が窺える歴史的事象と言えよう。

このように、八幡信仰が結びつく以前においては日下部氏による祭祀形態が支配していたものと思われる。やがて台頭してきた大蔵氏によって、日下部氏の勢力は一掃され、支配の正統性を根拠付けるために大蔵氏は既存の祭祀構造を受け継ぐ必要性があったのではないだろうか。そして、そのような歴史的背景が大蔵氏による元大原神社の造営という縁起という伝承を生み出した可能性がある。



第75図 日田航空写真

日田大蔵氏は宇佐宮領である日田五箇所を請け負うが、その五箇所の一つに田島地区に比定される田島別符がある。この地区は現在開発が進み環境が激変しているが、昭和20年代撮影の航空写真を見てみると、条里的区割の水田が広がっている。永興寺のある尾根丘から高瀬本町の金毘羅社を線で結ぶと、条里区割的な水田の道と重なり合う。さらにこの基軸線から東西約100メートルの間隔で同様の南北をつなぐ道を確認することができることから、まさしく古代条里制の水田の名残りであることが言える。このことから、条里区割の設定方法としては見通しが良く麓からでも確認できるような丘陵から直線を導き出し、それを基軸線として平行・直行をすることで、条里を設定したのかもしれない。

この地域の水田構造としては、近世末期において小ヶ瀬井路が灌漑していたが、以前は玖珠川から取水した大井手の水路によって灌漑されていた。この大井手の水路は中野川と結びついて会所八幡神社の傍を流れ田島地区へと至っていたが、第75図で流路を示すように、田島地区の東部は流路より高地であるため小ヶ瀬井路ができる近世末期までは尾根からの水を堤で貯水してから灌漑していたことが調査の成果からわかった。

したがって、すでに『大分県日田盆地における開発史的研究』で指摘されているように、古代の条里制施行の段階では、大井手、中野川、庄手川のルートに旧河道があり、会所八幡神社付近に取水口があり、田島の条里地区に水が供給されていたと考えられる。平安中期までには、河道の主線は、南の現在の河道の位置に移動したが、会所八幡神社すなわち大原神社の善神王社の位置は水信仰の上で聖地的役割をもち、この場所で大原八幡宮の放生会が11世紀の末承保元年（1074）から始まったといわれ、中世を通じて行われた。



写真16 廣瀬資料館蔵「小ヶ瀬井路絵図」

室町時代において、会所八幡神社の傍を流れる中野川は金河と呼ばれ、放生会を行う場所として設定されていた（史料8）。中野川源流に字古金があることから、金河は「コガネガワ」と読んだとみられる。字古金のちかくにあるむくむく水は、コガネガワと呼ばれていたものと思われる。いつのころから中野川と呼ばれるようになったかは定かでない。また、このむくむく谷では、放生会で使用するカワニナを採集していることから、放生会という儀式においても尾根からの水を水源とする意識があったということになる。

また、やや推測の話になるが、会所八幡神社の会所の読みである「よそ」は「会」をする「所」を意味し、放生会をする場所ということから地名ができたものとも考えられる。なお、会の読みを放生会の「会（YE）」とし、所は変体かなで「そ」と読むことができることを合わせれば、当初は会所を「Y E S O」のような発音をしていたのかもしれない。やがてYの発音が強調されて呼ばれるようになれば「よそ」と呼ぶようになったと考えることができ、このように推察すれば、会所八幡神社の読み方は十分に説明できると言えよう。

このように会所山の西端は田島地域の水田を灌漑するための水路との関わりにおいて重要な場所であったということになる。また、その場所は元大原神社の楼門と善神王社が設置されており、楼門があったと思われる場所より北側には元大原神社の門前町と伝えられる桜町という地名があることから、この楼門から元大原神社までは一つの境内地であった可能性はある。善神王社は八幡神の隨身として主に門を守る神である。おそらく、八幡信仰と結びついたとき元大原神社の前身的祭祀施設と後に会所八幡神社と呼ばれる祭祀施設とを一つにするためのからくりとして用いられたのではないだろうか。

ここまで水路と祭祀施設関係に注目して考察すると、田島地域の水田は古代においては日下部氏といった豪族が尾根からの水と、同じ尾根からの水であるコガネカワに、当中野川から庄手川方面に流れていた玖珠川からの水を取水し、田島の条里部分を開発していたと考えられる。

やがて、縁起に伝える善神王社が流失する天慶年間の洪水が、このあたりの景観を変化させたと思われる。航空写真から作成した図7を参照すると会所山と三隈川の間には、いくつかの旧河川跡を確認することができる。天慶年間の洪水だけでなく、いくつかの洪水が発生したと考えられる。これらの洪水によって、それまで灌漑していた条里方面の水田と中野川の間にくらかの微高地が形成されたため水路を通すことが不可能になったと思われる。現在では中野川からの水路は字宮太夫の若八幡神社のところから灌漑を行っており、それよりも東部は小ヶ瀬井路を使用していたことから近世期においても、このあたりは玖珠川から取水する大井手の水路でもって灌漑できなかった場所であったといえる。

宇佐宮領日田五箇所は桑畠であった。中世的荘園世界において桑畠は氾濫原を耕地化するための最初の行程であるといわれることから、氾濫原の跡と思われる旧河川跡一帯に日田五箇所の田島別符を設定することができる。そのときに宇佐宮領を象徴するため五箇所各地に若宮八幡社を造営しており、氾濫原跡にある宮太夫の若宮の位置からでも田島別符を設定することができる。天喜2年以降、この地の開発を請け負った大蔵氏はやがて台頭していき日田郡司を世襲するようになる。一方、それまでの日田郡司であった日下部氏が衰退していったのは、天喜年間の洪水を代表するような天災によって日下部氏が基盤としていた条里水田地帯が荒廃するという環境変化に原因があったものと思われる。

このように考えると、元大原神社と会所神社に八幡信仰が結びついたのは、天喜2年に善神王社が流失する以前と考えても差支えがないものと思われる。国家神的存在となっていた八幡神を郡司という律令官人の末端に属する日下部氏が自らの祖先神を祭っていた祭祀施設と合祀することで郡社としての立場を強化する勧請を行った可能性も高くなる。その後、天災によって衰退した日下部氏に替わって大蔵氏が台頭してきた際、日下部氏の勢力を一掃するとともに、日下部氏の祖先神社というより郡社として伝統的由来をもち始めていた元大原神社を勢力下におくためにも、大蔵氏の正当性を強調した元大原神社の縁起へと改編が行われたように考えることができる。

いずれにしても、今回の調査において、史的に不足な地域として考えられてきた求来里地区は広範囲な視点で考察することで、開発史的な位置づけとして重要な場所であることが確認できた。今後は、この調査成果を発展するためにも、大原神社における文書類の整理・解説が重要性をもっていることが言えよう。また、今後の名(みょう)の存在においても検討する価値があることから、今回の調査としては、これまで古代から中世にかけてはやや不明確であった日田地域における歴史に一つの灯明を照らした成果があったと考えている。

(文責 高 陽一)

## (6) むすびにかえて

本稿は、求来里川流域の圃場整備にともない、平成16年度から平成17年度に実施された求来里地区と周辺地区の村落遺跡調査の調査成果である。村落遺跡とは、埋蔵文化財遺跡とは異なり、地下に埋蔵されている遺跡ではなく、現在われわれの目の前に見えている村落の景観生活を包摂する歴史的総体として遺跡を把握する調査である。しかし、われわれは学際的に全てを把握する能力をもっているわけではない。しかし、できる限り多方面、ここでは地名、水利灌漑、信仰遺跡、地形、文献の方面から調査を実施した。

今回の調査成果について要約すると以下ようになる。

- ① 本調査では、圃場整備が行われた求来里川流域の地名、灌漑、石造物などの信仰遺跡を中心に記録保存を行った。しかし、圃場整備地区だけでなく、大原の丘陵の反対側の田島、及び日高地区の灌漑、地名調査をも実

施した。これらは、環境歴史学の視点から神社と水源との関係に注目したためである。考察編でも詳細に述べたように、日田郡の惣鎮守である大原八幡宮の八幡神をはじめ刃連郷岩松ヶ峯（大字馬原字鞍形尾）に示現し、元大原の地に移り、江戸時代の初め、現在の社地に社殿を定めた。この神の移動は、求来里川と中野川に挟まれた馬原から城内の永興寺に至る大原の尾根丘陵を意識している。この尾根は、古代から地下水脈の通るところと意識されていたと見られ、水系・灌漑体系を調査すると、神社との関係、その祭礼において尾根の地下水の湧水点や川からの取水取水口が意識されている。

大原神社は谷の奥の水源の地にあり、中世の大原八幡の放生会は、大原の門の神である善神王社（現会所山の八幡宮）の前の古金川に蜷が放たれた。その蜷は古金川の水源地むくむく谷で日高地区の水田は関係がないように見えるが、大原の尾根の地下水を通して、両地区は密接に結びついている。古代・中世の人々は見えている川の水だけではなく、むしろ見えない地下の水を意識し、大原社の祭礼をかたちづくってきたのである。

- ② この調査では、現地に残されている文書、特に、①で述べた調査の要となっている大原八幡宮の社家に伝来してきた文書を調査した。『大原日記』とよばれる社家日記をはじめ社家に伝えられてきた文書・記録を短い期間ではあったが、宮司家の御配慮で拝見、調査することができた。『日田市史』でも十分調査されていないものであり、全容については今後の調査を期したいが、本報告書では、中世大原社の関係の文書の写を中心に翻刻し照会することにした。

日田市域には、ほとんど中世文書が残されていないことは、渡辺澄夫編『豊後国荘園公領史料集成』をみても明らかである。今回紹介した延徳年中の大原八幡大菩薩放生会次第、天正4年の行事帳などは日田荘の名（みょう）の名などがみえ、中世の祭礼の様相が復元できる貴重な史料であり、日田、大原八幡宮の歴史研究に新しい光を当てるものになると考える。

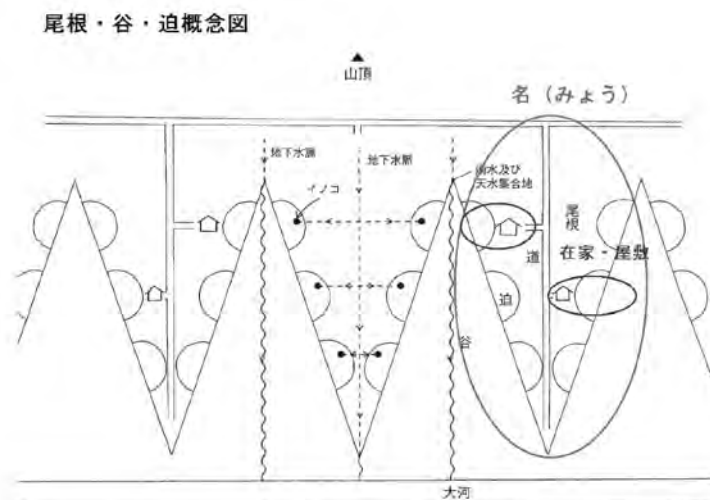
- ③ 本調査は飯沼賢司指導の下、文化財研究所の研究員園田 大・高 陽一が大学院生などを動員し、実施した。石造物などの調査は、別府大学日田歴史文化研究センターの園田 大研究員【文化財研究所兼務】が地元松井公男、高瀬眞實、鍛冶屋定之の協力を得て、地元参加型の調査ができた。大学が単に上から調査を行うだけではなく、地元と調査員を組織し、その人たちの協力で完成することができたことは大きい成果だと考えている。

（文責 飯沼賢司）

註1 高 陽一「尾根と迫地形に特徴づけられる地域の開発と共同体—大野荘志賀村の直入郷三宅名—」（飯沼賢司研究代表『環境歴史学的視点に立つ中世荘園研究—大分県直入・大野郡域を中心に—』の考察編に所収、2006年）

註2 飯沼賢司「古代から中世における日田盆地の自然環境と開発」（中村賢二郎研究代表『環境歴史学の視点に立つ都市及び農村の開発史的研究—大分県日田盆地における開発史的総合研究』、2001年）

註3 注1で筆者は、まず谷と迫の区分を行うための模式図を作った。その後、大分県地方史研究会中世史部会の例会（2006年8月26日）において、この調査研究報告を行った。そのときに報告書に記載した模式図を用いて名（みょう）の設定模式図を作成した。ここでは、そのときに使用した模式図を図6として掲載する。



第76図 尾根・谷・迫概念図

都石三九郎殿

維天和二壬戌八月三日

宮司精浄坊 真宥

松平大和守様御内入寫之上申候

寛永十一年戌年大原宮假築石壇也、豊西舊記卷末此石壇八貞享四年丁卯年迄之卜

現二石壇砌柱二彫付有之、寛永戌年卜八誤ナリ

豊西記話卷一

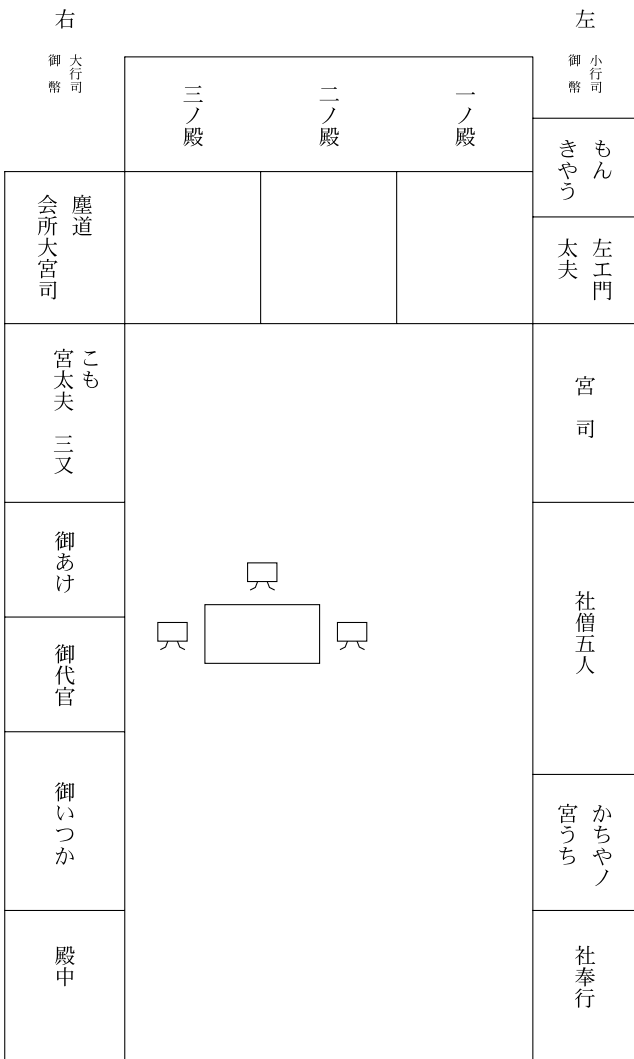
史料11 大原八幡三所由来

大原神社所藏「祭儀  
二関スルモノ」所収

橋本建熊氏藏

文明六年甲午年、大友親常公當宮再興の時、神輿造立有て、會所山の麓金河の流水の辺に頓宮を興し、神こし白幣御幸あり、これによりて郡内廿五名、年次に祭礼怠なし

補遺 史料9内の図



(文責 飯沼賢司・高陽一・園田大)



宮太夫日向守重澄 判  
祭文太夫神三郎

史料10

大原八幡宮御祭之次第

大原神社所藏「祭儀  
二閱スルモノ」所収

橋本建熊氏藏

大原八幡宮御祭之次第

正月一日 御供廿八膳并御酒

同 五日 弥勒御祭り

同 七日 若菜之祭御供廿八膳并御酒

同 十五日 御供同断

二月卯日 鎮祭御供同断

三月三日 御供同断

五月五日 御供同断

六月朔日 荒和祭御池迄  
御幸御座候

八月十四日 朝御供同夕御供兩度二  
五十六膳

同 十五日 右同前

九月九日 御供廿八膳并御酒

十一月初卯日鎮祭右同断

十二月十五日御供右同断

一 神前二正月門松并節木ケ申事

八月放生會御神事之次第

一大饗 三本 おけ二盛り申候

同小饗四百五拾本かわらけ二盛申候

一 み子三人二小神三つ帶三筋扇三本  
末ひろ

疊紙三つ白粉箱三つ指笠三本御神事以後小袖とあふき八戻り申候

一 相撲取二被遣候錢二拾四貫文

一 あけ 白直衆二折ゑほし二而馬乘

一 名あけ二昏支度右同前弓口矢ヲ持  
馬二乘

右何モ侍衆役

一通シ之馬三疋白直衆二折ゑほし

右八御馬や衆ノ役

一 御名代白狩衣二立ゑほし

御供廿人程おりゑほし二すわう袴

一 御一紋之御供二老人白直衆二折ゑほし乘馬

一 殿中之御供二老人 支度同前乘馬

一 御幸之時會所下宮二而

折四膳木銚子二貳本蜷拵ノ用

一 御輿上草二こと

一 疊 三疊 大宮司宮司み子三人御渡被成候

一 こも 杓枚 祭文太夫二御渡し被成候

一 田樂水旱之事

一 神前定燈之事

一 大行事小行事幣二貳本

七月七日ヨリ八月十三日迄社役仕候

一 清祓之事

元和拾年

世戸口宗印

子五月十四日

同孫左衛門 判

同孫介

り生竹十一把焼申候、敷物ハ近代まちのハかりやもち余り神來過候へハ我屋ニ何も罷歸候、

一同十五日役之事、先村渡り社家衆、何も御幣を指出し、大行事ハ先、小行事ハ跡、小鳥居より下棧敷三間程差下り候て、夫より願の屋の御前にて人形舞、社家衆何も小素袍のま、罷出候、人形舞二人斗狩衣立ゑほしにて候、人形舞の座のこも、刃連殿より其後濱出御神ハ御輿ニ被召候、時の歌めつらしき物ミ手にしからしやハ所の紅葉とかや秋の夜の月何も役者残被出候、社家ハ役者計ニテ候、

図(後掲)

御濱出ニ御幣ハ小行事、先御友<sup>儀</sup>左エ門太夫、大行事ハ跡、御友宮太夫、先濱出之役之事、塵道参折ニ榊葉入持御神を清め申候、其後大宮司・宮司・命婦三人を清め申し候、其後者ゆし罷出榊葉六ツ折扇ニ入社僧六人ニさハラせ候、其後塵道折ニ前木銚子取くし放生事、先の清めのことし、其後者由し参り放生事、社僧六人ニさハラせ候、其後宮太夫罷出清め申次第、一番御あけ、二番殿様、三番社奉行、四番御いつか、五番殿中、其後三又罷出蛭(蛭カ)の折木の折木銚子取具し参る事、清めの次第也、其後宮司罷出候て、表向其後田樂、其後御神を宝殿に移し奉候、其後傳供の立様御宝殿ハ宮司大宮司、一との、二殿、三殿、杉一、小神子ハ平殿上

塵道、二の階、其次三又宮太夫、田中八郎五郎、石井次郎九郎、祭文太夫、藤馬太夫、万<sup>馬</sup>太夫、七人ハ拜殿、其次六郎三郎、其次民部太夫、其次石井百太夫、其次新座中四人、又下六人の次第、山神太夫、其次彦太夫、其次住吉太夫、其次小野芹刈太夫、其次矢部民部太夫、其次御供の立様、次第拜殿の両打より、左一ハ御あけ、二番殿様、三番御いつか、四番殿中、右ハ社奉行各御持候幣之事、會所大宮司拵拜殿ニさハラせ候、以上五本也、一丸幣四本ハ小幣渡申次第宮太夫取三侯ニ渡候、夫より御あけ、二番殿様、三番社奉行、四番御いつか、五番殿中、傳供の立様如此也、其後行事渡し之事、先宮太夫其後左エ門太夫乗申處ハ高瀬殿の御棧敷の下より乗申候、又馬の渡し受取ハ御馬屋の衆被渡候、を又社家の者二人ツ、参り請取候、市渡りのことし、其後當時の馬を清め申事、宮太夫参り尾かミに四手を拝申候、先くはう口け一度田樂添申候、其次各上二度田樂添申候、其後御相撲三番過候へハ、御神ハ神輿にめさせ申候、御還幸何も何も先ずさりにて候、御神も一の殿、二の殿、三の殿、大行事、小行事の幣も皆々先まさりにて候、又大原へ御着候て傳具の立様、一番殿様、二番御いつか、三番殿中、四番御あけ、又右の両打ハ、社奉行傳具過候へハ、何も何も御下向にて候、頓而十五日の夜御注進、あけハ両行事共ニあけ申候、社家座之事、十六日七日なり、

八月十日の家ミとて候、つれ共近代ハなく候、佐藤山城守殿永正九年<sup>ミツノヘサネ</sup>のとし九月十日被召候、

天正四年<sup>チ</sup>五月廿三日此行事帳書写候

しの馬は、何も同馬にて候、先一の命婦を馬のせ門の両打より、二もちかちか迄御馬屋の者二人は、にて馬のせも三足入候へ、社家の者二人宛出合候て、請取申候、二殿三殿一枚子神子も同前宮太夫左エ門太夫何も馬に乗廻渡し受取、同前なり、

一同十三日宮太夫請取申物大行事より弓掛一具太刀一腰杵一足弓懸、かけなかし太刀と杵、御祭過候へ、返し候、同石井次郎九郎人形舞大行事より請取候、物面の絹三尺五寸かけなかし弓懸一具かけなかし杵一足、八歸候、又小行事より祭文太夫請取候、初行事渡しの弓懸一具、太刀一腰、杵一足、太刀と杵、御祭過候へ、返し申候、弓懸、かけなかしにて候、同馬太夫請取候、物面の絹三尺三寸、弓懸一具、鎧小手、杵一足、面の絹と弓懸、かけなかし、小手と杵、歸す、

同十三日一渡り役之事、行事渡其次神子三人一殿二殿三殿に乗せ申候、其次宮太夫左エ門太夫其次人形舞、其次田樂、其次御相撲、

一同十四日打迎之事先小行事、参り御酒給候、夫より行事屋の饗膳の数四十二膳也、其内四膳、大饗卅八膳の半分、より立饗半分、形ます饗御幣の御前八三種肴、又人形舞の瓶子一具、清酒行事渡しの瓶子、一具馬あしの瓶子かきかき何も被請候へ、島目五十文宛秣引物以下之事、宮太夫七人二四五文ツ、其中二左エ門太夫斗五十文、兩行事共、五十文宛、又行事渡しの祝詞、小行事、宮太夫、大行事、左エ門太夫、又大行事の行事渡し、宮太夫、祝詞、祭文太夫、又行事屋の被物こもにて候、左のひら、宮太夫、右のひら、祭文太夫、中座、三又にて候、こも給候、又小行

事のこも、左、宮太夫、右、田中八郎五郎、又行事渡の八なよね白米一升ツ、瓶子の数兩行事共、同前にて候、又行事屋にていむしろ四枚多きし受取申候て、一枚三又、一枚宮太夫、一枚石井次郎九郎、一枚新座、又小行事にて四枚出候を、三又一枚、宮太夫一枚、右島太夫一枚、新座一枚、夫より下宮へ御幣をつけ申候事、先馬打の次第、先八まふさ、其次大行事の御幣、其次宮太夫、其次小行事の御幣、其次左エ門太夫、其次田中八郎五郎、其次石井次郎九郎、其次藤馬太夫、其次馬太夫光けとな、六人二如此申四人、其次六郎三郎、其次民部太夫、其次石井百太夫、其次新座に六人、其次羽田山神太夫、其次彦太夫、其次住吉太夫、其次五郎三郎、其次矢部式部太夫、其次弥太夫、其次三侯の馬打、御下も御上もいつもあとまで候、夫より會所宮二御幣つけ申候て、刀連殿より觀式瓶子一双、清酒料六前、一前宮太夫、一前左衛門太夫、一前石井次郎九郎、一前田中八郎五郎、一前藤馬太夫、一前新座、折々土器三ツ、手かけへ候、其外、皆々なかけ、土器一重ツ、夫より大原二御幣をつけ申候、御供上候、夫より社家衆大原迄、何もひた、れ又御下には狩衣立烏帽子何も跡まし一番まふさ、二番御きやう、三番獅子、四番五郷の郷司、五番社家衆跡、つきりにて京下六人より先、乗被申候、十七人も如此神子三人も跡まさり三との二殿一殿八幡御三鉢もあとまさりにて候、其次田樂昔は會所山の下のたをに浮殿を作り、神樂を立、せいふの歌三謡申候、夫より下宮、つけ申候へ共、近代はなく候、宮、つけ候て、せいふの歌三、其後刃連殿より社家衆のうまいめされ候、其後沙汰のかミとて神樂を舞申候、薪八求来里よ

九年 同 (渡里村竹下次郎丸)

金樂  
長野

一文亀元年 同 山田上山田松長名

二年 同 峯名

三年 同 (村)石井

一永正元年 同 宮ノ庄

二年 同 (友田村ノ内)入江岩松名

三年 同 (口)萩鶴半五郎名

四年 同 (田島村ノ内)畑江久吉名

五年 同 (村)石井ノ郷司 なりとみ名

六年 同 (用松村ノ内)貞清成重

七年 同 (村)田嶋名

八年 同 有田ノ郷司

九年 同 (村)用松名

十年 同 (村)竹田名

十一年 同 よあつミ名

一先七夕星勸請之事、  
十二年 同 跡三歸りて寺内

紙三帖 白米三升 瓶子一双 蘭筵三枚

■九日八二百文にて候

折三前 盃臺一ツ 木銚子一ツ 四方物一ツ

大行事も小行事も星の前の入めハ同前にて候、大行事の前三俣給候、

小行事の前宮太夫給候、又小行事の瓶子片々三又給候、

一八月十一日御幣挾之事、

厚紙六帖 小紙一束 白米三升 瓶子一双

清酒■請■五百文候 銚子ハ木申給候

芋一め 蘭筵一枚 折三前 盃臺 木銚子一本

四方物一ツ 大行事小行事同前にて候、大行事の前三又給候、又御幣調禄

大行事ハ紙数九十枚十二下、小行事紙数七十枚下り、同前其外への挾紙幣

串の長サ尺大行事ハ一丈二尺、小行事ハ一丈一尺、又行事屋之事、大行事

ハ五尺間五間つま三間、小行事五尺間三間つま二間、敷物こもにて候、

一同十三日永興寺にて市渡り之事、

御幣ハ幣指替添計にて差来候、先御幣を門に差入申事、小行事ハ先大行事

跡にて候、門の入ハたつの歌三ツ、其後御幣の立様、大行事ハ左、小行事

ハ右、又社家衆の座居の次第、先横疊三疊、一番の疊ハ一の命婦、二番の

疊二の命婦、三番の疊三の命婦、神子三人は高つきの折にて候、すき一小

神子ハ折にて候、又社家衆の座居の事、こも七枚、左ハ宮太夫、其次田中

八郎五郎、其次右馬太夫、右座の次第石井の次郎九郎、其次祭文太夫、又

行事渡し申て以後ハ祭文太夫上ニ居候、其次藤馬太夫下十人ノ内新座ハ中

座にて候、社家衆何も罷出申候、其外之社家何れも其下ニ居申候、又社家

二召つかいれ候者、御さうしき一人御りき又さうしきの支度ゑほしひた、

れりきハときんゆいけき又神子五人の馬之事、同宮太夫左エ門太夫行事渡

本書松野村庄屋より来

在判

本書陳屋廻村千原此右之門寫、

享保廿乙午年八月廿七日寫者也、

橋本参河守公達

三年  
癸亥

同 (村)石田小寒水安長名

一 永正元年  
子甲

同 (村)財津諸安名

二年  
乙丑

同 (村)小迫千松名

三年  
丙寅

同 (十二町村ノ内)新原武長名

四年  
丁卯

同 (中尾村ノ内)左寺持末名

五年  
戊辰

同 (村)坂本吉光名

六年  
己巳

同 (村)上野名

七年  
庚午

同 (村)羽野吉松名

八年  
辛未

同 (村)高瀬徳長名

九年  
壬申

同 (口口村ノ内)平嶋安用名

十年  
癸酉

同 佐藤殿千軒名

十一年  
甲戌

同 (村)師留名

十二年  
乙亥

同 井手かみつねしけ名

十三年  
丙子

同 (村) 刃刃連中臣名

十四年  
丁丑

同 (友田村ノ内)三郎丸名

十五年  
戊寅

同 (小迫村ノ内)才田徳安名

十六年  
乙卯

同 跡二歸りて堤

一 明應五年同小行事次第不同

六年

嶋 (村)小畑 (村)寺内

七年

豆田名

八年

(上手村ノ内)由田名

行事帳寫書

史料9 行事帳寫

大原神社所藏「祭儀  
二開スルモノ」所収

橋本建熊所藏

九刃豊後國日田郡大原八幡宮御行事次第不同是ハ肥前打入此かミ之儀也

一 明應五年  
ひのへ たつ

大行事堤

六年  
丁巳

同 鬼武

七年  
戊午

同 (村)二串鬼松名

八年  
己未

同 (友田村ノ内)大内田名

九年  
庚申

同 (村)石松

一文龜元年  
辛酉

同 (村)池邊弥長名  
いづな

二年  
壬戌

同 (村)草場吉次名

官、次ニミやはしら、其次一家乃御供、次に殿中の御供まで、いつれも、いけるを御はなち候、其後宮僧之三よかし、罷出、さか柴を取て、ぐ僧六人に香水

□□□□いらせ候、次に宮司役として、高座へ上り行事候、其後びれい罷出候て、獅子舞田楽ニて候、其後神之かり殿に御上り候へハ、てんぐうに御立候、次

第前のごとし、御供上り候て、後三候より役として、小幣を数多持候て、あけにはすくにまいらせ候、御代官、宮柱一家之御供ニ、いつれもかいしゆくか請

取参と候、其後又長ノ屋ニ御着候、座之くらい、昨日に替申候、左の一番に御代官、其次に一家之御供、次ニ殿中之御供、右壱番に宮柱、あけハよこたゝミにて候、

しき物ハ前乃ごとし、盃もまへのごとし、二こん目にきゆうをあけ申候、御代官と宮柱ハ八種のきゆうにて候、よハにつけのきゆうにて候、盃の数ハ五こんにて候、

其後長ノ屋のまへ乃じん屋々々ハ、先宮ノ太夫左門太夫、両人大行事小行事のきゆうし渡にて候、其後人形舞、次にとをし馬三疋にて、三番にて候、其次あけ

の役一番、次に名あけの役、二ばんにて候、其後相撲ハ拾貳番すもふ過候へハ御登候、其次第御下り同前ニ而候、本宮に御着 てんぐうに御立候、次第

前のごとし、さてお供をあけ申候、其後亦長ノ屋ニ御着候、此時ハ、東座上にて候、左一番に御代官、次ニ一家之御供、次ニ殿中之御供、右一はんニ宮柱、今度ハ、

あけハ殿中の次に御座候、盃の次第始のごとし、二こん目にハ、きゆうをあけ申候、まへのごとく御代官・宮柱ハ、八種のきゆうにて候、よハにつけのきゆうに

て候、五献廻候へハ、御立候、各家々のやうに、御帰被成候、  
一 殿様御社参之時、祝詞を宮ノ太夫申上候、奉幣三候請取、宮柱に渡し、宮

柱の手より殿様江上申候、

一 御ふくをめさせ候事、日本のにしきをそう乃市たち申候、宮柱の手傳ニて候、

一 御鉾進之次第  
よろいかふと人馬きるものゝ類、

上十五日ハ 鍛冶屋□□□  
下十五日ハ 鍛冶屋□□□

一 太刀かたな鏡弓鏑なきなた  
上十五日ハ 大宮司  
下十五日ハ 宮司

何も請取申上候也、

神馬預り申覚、  
一ノ殿御馬ヲ 新原弾正

二ノ殿御馬 鍛冶屋右近丞  
三ノ殿御馬 世戸口民部

一 御祭之時、御馬之かい口之事、田嶋三拾町よりまくさ稻壱反ニ拝ミにぎりつゝ、苅申候、しきの御祭礼之時ハ、竹田三拾町、右同前ニきり申候、

一 八月十五日いまつり之時、ミろく迄御下被成候、御幸次第、右同所ニ候、  
一 六月晦日なごしの御祭之時ハ、御池のはたまで、御下被成候、しやけ衆、

何も御供如右ニて候、  
此書延徳年中書立之寫也、

鍛冶屋右馬助

六番	御幣
七番	一殿二殿三殿
八番	ぢんだう
九番	けんけふ <small>御ほこもち候</small>
十番	御馬
十一番	御こし
十二番	びれい
十三番	大宮司
十四番	宮司
十五番	宮僧六人
十六番	宮ぼしら
十七番	宮うち
十八番	御あげ
十九番	名あけ
廿番	御甲
廿一番	御きせなが
廿二番	こんれい
廿三番	御代官
廿四番	一家御供
廿五番	殿中之御供

以上如此なり

下宮に御着被成候へは、てんくうに御立候次第、屋形左の一番ハ、大行事之御幣、其次にあけ、其次御代官、其次に一家之御供、其次に殿中之御供、右一番小行事之御幣、其次に宮柱にて候、其後まうさを先として、ほしや、おりくたり御供を上<sup>ケ</sup>申候、其次長乃屋に御着候、御仕立ハ刃連方より、被申候、あけハよこたゝミにて候、屋形左ハ宮柱、右ハ御代官、其次に一家御供、其次に殿中之御供、御代官ハ對座に而候、御とも兩人ハ、こもを御敷候、御盃之次第、本宮の長ノ屋同前三て候、御酒廻候へハ、座敷々々ニ御帰候、其後夜とのまでニて候、たてあかしハ、求来里拾壹町より拾壹把出し、同十五日早朝各高瀬川江御出、垢離を被召候、市別當様をこしらへたくさかなにして、御酒を申候也、次ニはま出の次第御供之儀ハ、御幸之時、同前ニて候、はま御着候へハ、御輿三たい乃御まへに□□、一との二との三との、三人居候、左壺番に大宮司、其次に宮司、其次に宮僧六人、其次に宮柱、同宮うちにて候、いつれもたゝミにて候、宮司大宮司のすミに左衛門太夫、こもふたへにをり敷居候、右壺番ニぢんだう三俣ふしや衆、何もこもをしき居候、其次にあけ、其次に御代官、其次に一家之御供、其次に殿中御供まで候、いつれもたゝミにて候、其次ぢんだうが役にて、さかしばをもち、御輿三たいをいんし申候、其次に宮ノ太夫罷出、又さかしばをとりもち、あけより御代官、次ニ宮柱、其次ニ一家之御供、其次殿中御ともをきよめ申候、其後亦ぢんだう罷出、折一膳に河蜷を入、又一膳には米を入候て、左の手に取ぐし、右の手に木てうしを持、先一殿二殿三殿いけるをはなち申候、其次に三俣罷出、まへのことく折ニせんを、左の手に取具し、右の手に木てうしを持って、あけより御代

六親眷属  
法園万霊  
同生極楽

(塔身部)  
種字(タラーク)  
享和三癸亥

歳春吉回

遍照金剛

豪潮謹誌

(西面)

(塔身部) (基壇部)

種字(キリーク) 種字(シツチリア)

(北面)

(塔身部) (基壇部)

種字(ア) 能於此塔

一香一花

礼拝供養

八十億劫

生重罪

一時消滅

史料7 烏帽子豊前坊石祠銘 求来里字烏帽子

文化十四年

丁丑八月吉日

開眼供養師英彦山谷口防永

施主 仁

喜三治

組合中

史料8 大原八幡大菩薩放生會次第

大原神社所藏『祭儀  
二関スルモノ』所収

橋本建熊氏藏

九芴豊後國日田郡大原八幡大菩薩

放生會之次第

八月十四日大行事小行事御幣を本宮へ着申候、而御供を上ケ申候、其後御代官長ノ屋、御着被成候、御仕立ハ宮柱より小宮司ニ申拜用意仕候、先代者、七献にて候得共、近来已五こんニ候、御座敷之様、十四日ハ西座上巳て候、御あけハ横たミ、こもの上に、こぎとふたへにをりしき、屋形右者、御代官御たミ壹疊、其次に一家乃御供、其次に殿中□□□疊より、少シあいをき候て、こもをしき候、左ハ宮柱御代官と対座ニたミを敷候、あけ乃御まへは、かしハらけまハリ、さかつきハ、初献ハ御代官御はしめしニて、其後宮柱、其後一家之御供、次に殿中之御供、二こんめハ宮柱始候而、其後御代官、次に御一家御供、其次に殿中乃御供、三こんめハ初こんのことし、四こんめハ、二こん目のことし、五献目ハ又しよこんのことし、其次に手水代まいらせ候、宮仕ハ兩人なり、刀連方より老人出申候へは、宮柱より下宮長ノ屋に宮仕老人合力申候、吹々、御幸次第之事、

一番 御先ニまふさ

貳番 こきやう大こ

三番 ししかしら

四番 御鉾郷司役

五番 ほしや



史料編

史料1 正風寺跡磨崖板碑銘(1号) 求来里字平島

※史料1・2 ○内

于時永祿九年

『日田金石年史(上)』(武石繁次・日田

○佐○九年○)

教育委員会一九七三年)を参考

(十二月廿)九日

史料2 正風寺跡磨崖板碑銘(2号) 求来里字平島

(種字・サ)

妙春禪定□(尼)

妙林禪定□(尼)

(種字・キリーク)

玉琳□□□(禪定□)

(種字・サク)

史料3 平島辻堂棟木銘 求来里字平島

木換 室 文吾 大工 北豆田 池永作市

明治三十五年□□十日 上棟

第三十三番 雪蹊寺

本尊 薬師如来

史料4 着来観音堂自然石碑銘 求来里字着来

(種字・キリーク)

十一面観世音菩薩

十一月六日

安永七歳

史料5 着来観音堂木札

求来里字着来

天下和順日月清明

風雨以時災厲不起

奉再建観音堂一字

御代官羽倉権九郎殿

国豊民安兵戈無用

于時享和二壬戌年

崇徳興仁務集豊穰

三月廿九日

願主梅木氏 源兵衛

再建野村氏 得兵衛

當所

同 連中

同 一門中

同 宇野氏市郎次實貞

同 苗重助實重

史料6 小西宝篋印塔銘 求来里字小西

(東面)

(基壇部)

伏冀

天下太平

国家安全

風雨順時

五穀能登

造塔施主

(塔身部)

種字(ウン)

(南面)

(基壇部)

## 第6章 まとめと考察

3章までにおいて報告された内容をもとに、本章では各遺構の時期について検討を加え、4・5章の報告内容も加味した上で、遺跡の性格について検討する。また、本遺跡において良好に確認されるカマドの導入過程と住居の構造変化について、市内の報告済み遺跡の資料をもとに分析を行う。

### (1) 町ノ坪遺跡の遺構の時期と性格について

今回の調査において確認された遺構は住居29軒・溝9条・掘立柱建物2棟・土坑30基・柱穴多数である。また第4章の結果から、調査区北東側の落ち込み部は水田であった可能性が想定されている。そこで、各々の遺構から出土した遺物及び遺構の特徴から時期比定を行うが、土器の詳細な特徴などについては主要なものに限って触れることとする。なお、時期比定には他地域における土器編年を当該地域に一元的に当てはめてよいのかという問題は残るが、現時点で市内における当該期の土器編年が確立されていないため、土師器については資料的に豊富な筑後川流域を中心とした重藤氏<sup>註</sup>の編年、田崎氏<sup>註</sup>の土師器編年を参考とする。また、須恵器については田辺氏<sup>註</sup>の陶器編年、山本氏<sup>註</sup>の古代の須恵器編年を参考にした。これら基本とした文献以外にも多数参考としたものがあるが、それらについては個別に触れるものとする。これらの編年をもとに時間軸を設定し、該当する遺構を並べたのが第5表である。これは各編年論文において示される時間軸の対応関係を筆者が整合させたもので、以下この時間軸を用いて時期別に詳細に触れてゆく。

#### 1. 遺構の時期比定について

旧石器～縄文時代には遺構は確認されないものの遺物の流れ込みが確認されている。17号住居出土の後期旧石器時代の所産と想定される三稜尖頭器や第61図の浅鉢や鉢の端部の特徴から縄文時代後期後葉～末期頃に比定<sup>註</sup>される土器などである。また、第63～65図の石鏃や剥片石器・打製石斧などもこの時期に伴うものと想定され、第62図5の石錘や11の勾玉もこれらと同時期の可能性があろう。第3章(2)の基本層序の検討結果や上述のように流れ込みの遺物が多く見られることから、弥生～中世期の地表面である黄褐色砂質土層は後期旧石器時代～縄文時代後期の遺物包含層であると考えられる。この層は砂性が高いことから、求来里川の氾濫に伴う堆積層の可能性が高く、周辺に生活跡が所在したものと予測される。剥片石器類や打製石斧・磨製石斧など多様な道具類や勾玉等が見られることから拠点的な集落の可能性が考えられよう。いずれにしても今後の調査例の増加を待つて検討する必要がある。

弥生後期～古墳前期では、土師器の椀・高坏が出土した19号土坑が該当し、遺物の出土は見られないものの10号住居もベッド状の段を有する構造的な特徴からほぼ同時期と推測される。隣接するD区では弥生後期の住居が8軒確認されており、A・C区でも弥生期の遺構が見られ、調査区周辺に弥生～古墳前期の遺構が広がっていた可能性が高い。

古墳時代中期前半には23号住居が該当する。重藤編年3B期に当てはまる高坏・甕・小型丸底壺の良好なセットを有する地床炉の住居である。カマド導入の直前期と考えられる。

中期中葉には重藤編年4期の土師器が出土している19・24号住居、小破片のため詳細不明であるが4～5期に相当する6号住居、15号土坑が該当する。いずれもカマドが導入された住居で、なかでも24号住居は小型丸底壺が小型甕に入れ替ると共に椀（坏）が多数出土する4期の良好なセット関係が見られる。ただし、単孔の弥生的鉢形甕を伴っている点ではやや古い要素を有している。また、初期須恵器が出土している点でも編年上の指標となりうる資料である。第43図7の広口壺は、小田富士雄氏<sup>註</sup>の指摘から朝倉産と推察されるもので、口縁端部の形態や波状紋がやや繊細に整っている特徴などから陶質土器が出土した池の上墳墓群<sup>註</sup>のIV式に該当するも

第5表 町ノ坪遺跡出土遺構変遷一覧

年代	0	400				500				600				700				900		1200			
時期区分	弥生後期～古墳前期	古墳中期				古墳後期				飛鳥		奈良		平安	中世								
		前半		中葉		後半		前半		後半		前半	後半										
本論区分		5C前		5C後		6C前		6C後① 6C後②		7C		8C											
土師器編年	重藤 田崎	高三瀨～2期		3A	3B	4		5		6		7		I		II		III		IV			
須恵器	田辺			TK 73	TK 216	TK 208	TK 23	TK 47	MT 15	TK 10	MT 85	TK 43	TK 209	TK 217									
	大宰府															IA	IB	II	III	IV	V		
10住・19土																							
23住																							
19住																							
24住																							
6住・15土																							
20住																							
21・26住																							
4・8・15・18住・6土・14土																							
18・2A・7・9 11・16・22・27住 1・4溝																							
1・5・12・25住・9溝																							
13・17住																							
17住・4・10・16 25・27土・6・7溝																							
21・28土																							
5溝																							
18土・22土																							

※表中の黒は確実な所属期間を表し、灰色は所属時期が明確ではないものの、凡そ時期の比定が可能な範囲を示しているものである。



第77図 時期別遺構変遷図 (1/500)

のと考えられる。その他小破片ばかりであるが、ほぼ同時期のものであろうか。九州の初期須恵器の成立過程をまとめた小田氏<sup>註</sup>の見解に従えば、池の上IV式は定形化段階の須恵器で、伽耶式土器の特色を強く継承し、朝倉窯で作られたものということになる。時期的対応では小田編年I-B期、陶邑編年<sup>註</sup>I型式3～4段階に相当するものと指摘されており、TK208からTK23に該当するものであるが、土師器編年との関係も考えた場合、TK208の範疇に収まるものと考えたい。

中期後半には時期比定の決定的根拠にやや欠ける20号住居、須恵器が出土した21・26号住居が該当する。土師器は重藤編年5期か。21・26号住居出土の須恵器はTK47に相当するものか。なお、4号住居はTK23・47期の須恵器脛や重藤編年3B期の単孔甕が出土するものの、いずれも上面に浮いているため埋没時の混ざり込みと判断し、15号住居との切り合い関係から後期前半と捉えている。

後期前半には住居数が極端に増加する。重藤編年6期には8・15・18号住居、6・14号土坑が該当する。うち15号住居はMT15と思われる須恵器が出土しているが、その他の須恵器はTK10期と考えられるため時期幅を長く捉えている。また前述の4号住居もこの時期に該当するものか。TK10期には2・7・9・11・16・27号住居が該当する。また、小破片のため時期比定の困難な22号住居もこれらの住居跡との切り合い関係から同時期であると考えられる。1・4号溝は4号溝にやや古めの遺物が認められるものの、概ねTK10期に収まるものであろう。いずれにしても概ね後期前半の新しい段階のTK10期に住居数が極端に増加する。北東側落ち込み部の水田層ではMT15の須恵器が出土しており、少なくとも古墳時代後期前半から利用が開始され、中世にかけて継続的に使われたと想定される。

後期後半には、引き続き住居が見られ、1・5・12・25号住居、9号溝がMT85期に該当する。続いて13号住居がTK43期に該当するものであろうか。また出土遺物からは詳細な時期比定が困難な17号住居は、切り合い関係からこの時期に該当するものと考えられよう。この時期には住居数が徐々に減少すると想定される。また、小破片が多く明確な時期比定が困難であるものの概ね6世紀代と位置づけられるものには4・10・16・25・27号土坑、6・7号溝などがある。いずれにしても集落の構築ピークは6世紀までで、7世紀にかかる遺構は見られないようである。

古代では21・28号土坑が8世紀代に該当し、5号溝は一部混ざり込む遺物が見られるが、土師器の特徴から9世紀中頃～後半に位置づけられるものであろうか。

中世には同安窯系青磁碗が見られた18号土坑が12世紀後半、五輪塔の風輪・空輪部分が出土した22号土坑は、8世紀代の須恵器が見られるものの、青磁や瓦器などから14世紀代に捉えておきたい。

さて、以上時期別に変遷を捉えたのであるが、これを反映したのが第4表、第77図である。さて、これに基づいて本遺跡の特徴を概観してみたい。

## 2. 遺跡の性格と特徴

本遺跡において生活の痕跡が確認されるのは、後期旧石器時代～縄文時代後期においてである。河川氾濫に伴う遺物包含層の存在は、求来里川が度々氾濫を繰り返していたことを物語ると共に、より氾濫の影響の少ない段丘上に集落跡が存在していた可能性を想起させる。このことを示すように周辺の町ノ坪遺跡D区<sup>註</sup>・名里遺跡<sup>註</sup>などでは当該期の遺物包含層の存在が認められており、求来里平島遺跡<sup>註</sup>からは縄文時代後期末の住居跡が確認されている。包含層出土の石器の多様性なども併せて考えると、求来里川流域に縄文時代の集落跡が脈々と広がっていた可能性が考えられよう。そしてこの遺跡一帯の河川氾濫の影響は、少なくとも弥生時代後期には少なくなり、住居が建てられるようになる点から、比較的安定した土地利用が可能となったものと推測される。しかし、弥生時代後期には隣接するD区において竪穴住居などが確認されるものの、その後の古墳時代前期の明確な遺構は見られないなど土地利用に空白時期が生じるようである。

続く古墳時代中期から再び集落が本格的に営まれるようになる。ここで注目されるのはカマド導入期及びその後の様相が見て取れる点である。カマド導入時期等については後に触れることとするが、少なくともカマド導入後の5世紀中頃以降継続的に土地利用が行われるようになり、6世紀前半にはピークを迎えることとなる。この時期には集落域は調査区東側へも広がるようになり、より広範な土地利用が行われたことを示している。なかでも注目されるのは1・4号溝と北東側落ち込み部の存在である。第4章の分析から、北東側落ち込み部堆積層は水田であった可能性が指摘されている。この落ち込み部が何時形成されたのかは不明であるが、少なくとも6世紀前半から湿地状の窪み部を利用した水田として使われていたものと推測されよう。この水田からの水を求来里川へと流す水量調整の役割を担っていたのが、集落を分断して流れる1・4号溝である。埋没土層の観察から一定量の水量が予測される。第5章の水利調査の結果では、この周辺は湧水点からの灌漑地域で、現況でも求来里川へと向かう水路などが確認されており、1・4号溝はその起源となる可能性も考えられよう。いずれにしても、6世紀前半段階に水田利用が開始されるとともにその灌漑施設などが整備されたことにより、集落規模が拡大したと思われる。また1・4号溝には集落を区分する意味もあった可能性がある。6世紀前半に溝の東側に若干居住域が広がる以外は住居の殆どが溝の西側にのみ見られ、東側には土坑などが集中することから、溝の東西で土地利用方法が異なっていた可能性が指摘出来る。

その後6世紀後半にかけて住居は構築されなくなり、徐々に集落利用が縮小していくが、古代・中世の遺構も少量ながら認められ、水田利用は継続していた可能性が高い。ここで注目されるのは調査区を東西に流れる5号溝の存在で、これまでの南北方向とは異なり落ち込み部に平行して作られる点である。この溝は浅く、水量も豊富ではなかったことから水田区画溝として構築された可能性が考えられる。すなわち、自然地形を利用しながら行ってきた水田灌漑整備が本格化した可能性が指摘出来るのである。

さて、上述のとおり本調査区における集落利用が極端に減少していくなかで、6世紀後半～7世紀前半にかけては本遺跡にかわって求来里平島遺跡<sup>註</sup>や名里遺跡など求来里川の上流域に集落が形成される。続く7世紀後半～8世紀には再び本遺跡周辺の町ノ坪遺跡A・C区<sup>註</sup>や金田遺跡<sup>註</sup>などで集落の存在が確認されており、本遺跡の空白期を埋めるように求来里川流域において、集落が特定地域を移り住んでいくものと思われる。これは古墳時代中期以前においても弥生中期～後期では小西遺跡<sup>註</sup>・金田遺跡、古墳前・中期では金田遺跡などの遺跡で集落の存在が認められており、同様の傾向が継続していたものと思われる。その後、中世期には流域全体に遺構が認められ、流域の開発が広域に及んだものと考えられよう。このような特徴を示す求来里川一帯での土地利用状況を詳細に検討するうえで、本調査で明らかとなった古墳から古代の水田の開発状況や土地利用状況は、有用な成果を示していると考えられる。

## (2) 日田地域におけるカマド導入とカマド・住居構造の変遷過程

### 1. カマドの導入について

本遺跡の特徴とも言える初期カマドの導入過程についてここでは触れる事とする。この導入期の良好な資料を提供しているのが23号住居と19・24号住居の土師器の良好なセット関係である。カマドが導入される19・24号住居の資料から、少なくとも重藤編年の4期にはカマドが屋内施設として採用されていたと言える。なかでも24号住居出土の須恵器から、少なくともTK208段階に絞り込む事は可能であろう。従って本遺跡例ではTK208期ないしそれ以前のTK73～216前後、すなわち重藤編年4期以後に導入されると言えよう。では、日田地域全体における状況を確認するために、市内の初期カマド導入前後の事例を検討してみよう。市内における3B期の地床炉の事例は幾つかあり、近郊では金田遺跡1次5・10・15号住居、3次214号住居などが挙げられ、小型丸底壺を有する良好な3期のセット関係が見られる。そのほか手崎遺跡<sup>註</sup>1号住居、陣ヶ原辻原遺跡<sup>註</sup>4号住居、

石ヶ迫遺跡<sup>3</sup>7号住居、口が原遺跡<sup>4</sup>4号住居、一丁田遺跡<sup>5</sup>6号住居などが挙げられ、なかでも陣ヶ原辻原遺跡・手崎遺跡例などは良好な3期の土師器のセット関係を示す地床炉の住居である。次にカマドが導入されている住居跡の内、4期ないしそれより若干古い3B期の可能性のあるものとして、金田遺跡1次8・16号住居、3次212号住居が挙げられ、甕・高坏のセット関係から4期の特徴を有している。ただ、これらのセットの中に小型丸底壺が見られ小型甕が出現しない点や初期の蜂の巣状の蒸気孔を有する平底甑が見られることなどから、3B期に上る可能性がある市内でも最古のカマド導入例と言えよう。そのほか、確実に4期に該当するものとして、大肥遺跡3・4号住居、求来里平島遺跡1号住居、金田遺跡1次9・17・18・20号住居などに類例が見られる。この時期には小型丸底壺は見れず、中型直口壺のみとなるとともに小型甕が出現しており、またカマド導入の事例数もかなり増加する。以上のように見てくると、確実にカマドが導入されている住居の大半は4期以降ということになり、一部3B期の須恵器出現以前に遡る可能性のあるものが見られるということになる。これは、初期カマドの導入例の豊富な筑後川中流域においても、3期に遡る可能性のある塚堂遺跡<sup>6</sup>7号住居古段階等の多数の住居にカマドが導入されている状況とほぼ一緒で、この地域のカマド導入時期に言及した重藤氏<sup>7</sup>も、確実にカマドが導入されるのは4期以降であるが、カマド・甑の出現、朝倉古窯跡群における須恵器生産と製品の流通など新たな生活様式の変化の兆しが3B期に起こっていた可能性を指摘している。従って、地理的に影響を大きく受けていた可能性の高い日田地域も、この動向にほぼ連動していたものと推測されるのである。

また24号住居の朝倉窯産須恵器の存在は、日田地域まで製品が流通していたことを示しており、近接する金田遺跡<sup>8</sup>では陶呂産と考えられる初期須恵器が出土している。この須恵器の出現過程については今後の資料増加を待って検討する必要があるが、金田遺跡の3B期に遡る可能性のあるカマド付き住居には朝鮮系軟質土器などが伴い須恵器は見られないことから、現時点では須恵器の流入は4期以降と考えておきたい。また、これらとは別に朝鮮半島からの文化を示す資料のひとつである鍛冶関係では、3期の荻鶴遺跡<sup>9</sup>で鍛冶遺構、一丁田遺跡で鉄鋌が出土しており、カマド・甑、須恵器等の導入よりやや早いものと思われる。古墳時代中期は朝鮮半島の文物が流入し、生産技術や生活様式など社会に大きな変化をもたらされた時期である。カマド・甑や須恵器、鉄生産技術などの各文物の日田市内における受容に時期的なズレが生じていることから、朝鮮半島からの文化・文物は一遍に流入するものではなく、漸移的に3B～4期にかけて受容していったのではないかと捉えておきたい。少なくとも本遺跡の調査例はこの文化受容状況を解明する上での一助となる貴重な成果を示しているといえる。

## 2. カマド・住居構造の変遷過程

本遺跡においては5世紀から6世紀後半までの資料が揃っており、カマド導入から竪穴住居の衰退までの間、作り付けカマドが住居構造にどのような影響を与えたのかを検討する良好な資料を提供している。しかし、この間の日田地域におけるカマドの特徴及び住居構造の変遷についてはこれまで検討されてきていない。そこで、本遺跡を中心として、市内各地のカマド導入期の5世紀～竪穴住居衰退期の8世紀までの竪穴住居及びカマド資料を検討し、カマド導入から発展までの過程を検討してみたいと思う。

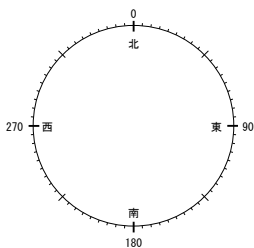
日田地域におけるカマド・住居の構造的な特徴を検討するうえでは、隣接する福岡県域の状況をまとめた小田氏<sup>10</sup>の研究や、筑後川中流域のうきは市堂畑遺跡の古墳～古代までの状況をまとめた大庭氏<sup>11</sup>の研究などが参考となる。氏らの研究では、「概ね6世紀後半から住居壁から突出するタイプのカマドが出現し、8世紀にかけて盛行すると共に煙道が長大化する。この流れに連動しながら竪穴部が縮小化し、床面中央にあった支柱穴が住居壁側に寄り、最終的に竪穴外・無柱穴化へと向かう」との傾向が示されている。このカマド構造が住居構造と連動すると共に同様な構造変化を示す点は、笹森氏<sup>12</sup>も指摘しており、全国的な動向と連動したものであると言えよう。しかし、この中では導入期前後の住居構造の変化動向には触れられておらず、またカマド設置方位やカマド規模などには触れられていない。そこで、先学の指摘事項を踏まえつつ日田地域の動向について、住居構造と

カマド構造に区別して分析と検討を行う。

対象とした住居は市内で確認される5世紀前半の地床炉の住居及びカマドを有する5世紀～8世紀の竪穴住居が出土した30遺跡162軒分の資料で、138項に挙げる報告書を参考とした。時期比定については、基本的に報告者の記述に従ったが、注1に挙げる文献を基に詳細時期比定を行った関係上、一部報告書の記述から変更したのものもある。時間軸の設定には第4表でまとめたものを使用し、重藤編年3B期を5C前（カマド導入前のもの）に限定し、導入後の3Bの可能性のあるものは5C後に含めた）、陶邑編年TK73～TK47までを5C後、MT15・TK10を6C前、MT85・TK43を6C後（分析によっては1・2として2期区分する）、TK209以降を7C、大宰府編年Ⅱ期からを8Cと任意に区分した。なお、紙面の都合上対象住居のリストを割愛した点をご許諾いただきたい。

### カマドの設置方位について

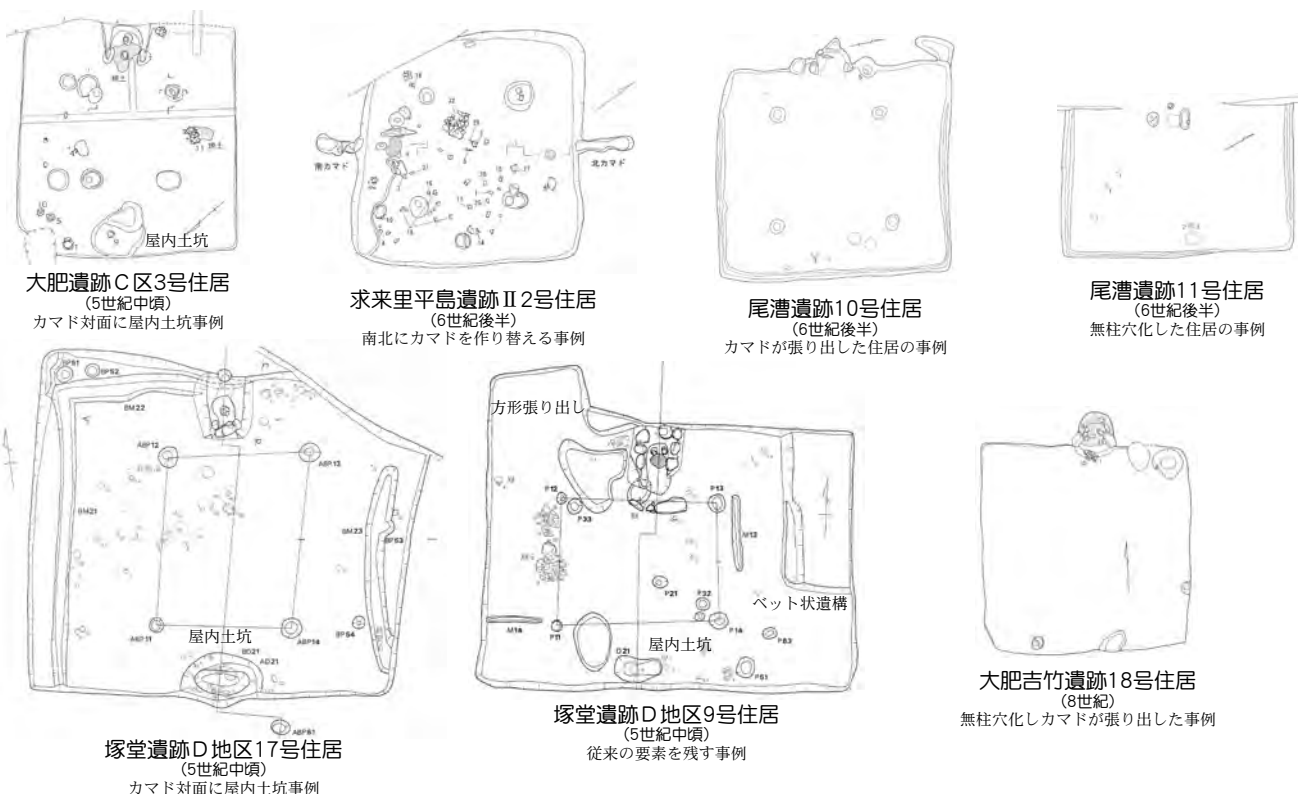
カマドの設置方位については北・西カマドや東カマドが一般的に多いと言われ、その設置規則によって地域性や集団間関係を指摘されることもある。しかし、そもそも方位の設定が明確ではなく、概ね北や西といった方位設定が使用される場合が多く、北西・北東などの曖昧なもの処理に苦慮するケースが見られる。そこで、第78図の方位角を使用して0度北・90度東・180度南・270度西と設定し、方位角にどのような傾向があるのか検討してみた。なお、カマドの設置方位角の計測には設置された壁に対する主軸角を利用し（隅カマドを除く）、



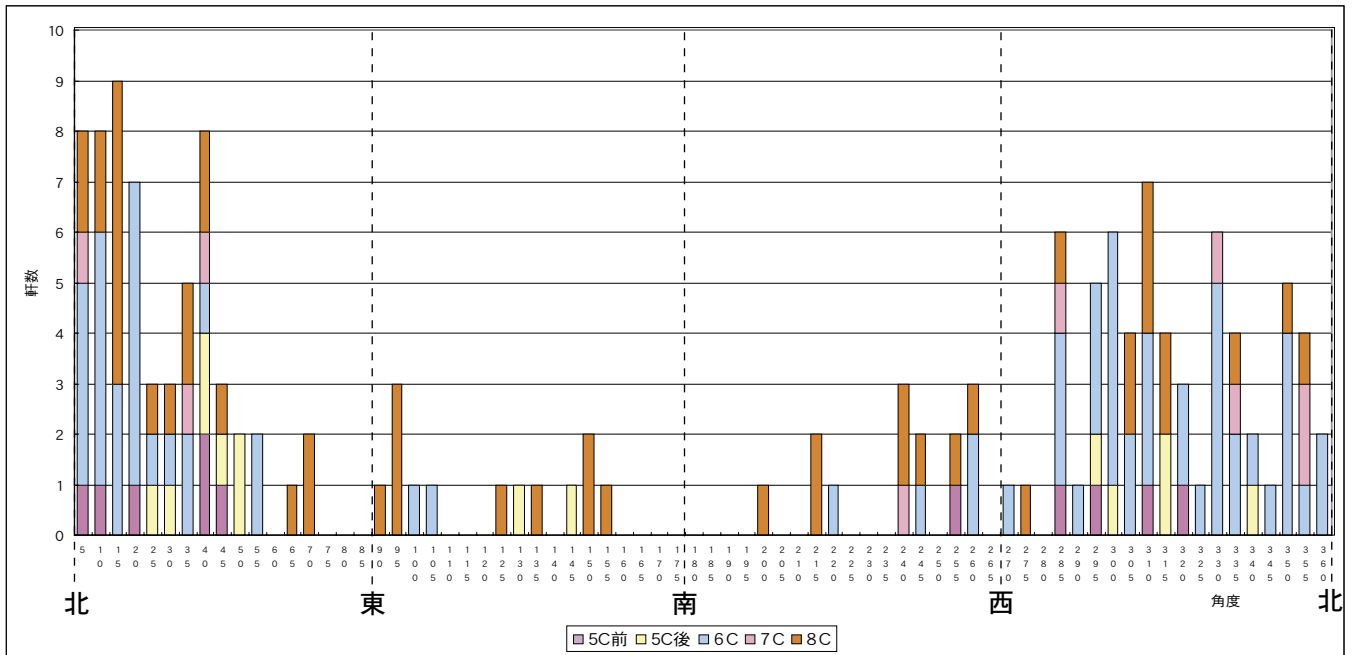
第78図 方位角模式図

5C前のもに関しては屋内土坑の対面壁に対する角度を主軸壁方向と仮定した。これは第79図に示すように、うきは市塚堂遺跡D地区第17号住居や市内の大肥遺跡C区3号住居の類例が示すように、従来の弥生的な屋内土坑の対面にカマドが設置された可能性が高いことからである。

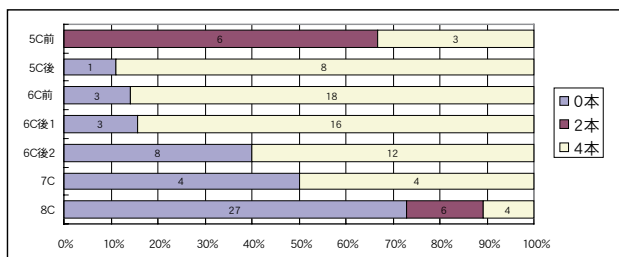
- さて、市内の遺跡を時期別にならべたものが第80図のグラフである。このグラフから
- ①カマド導入前の5C前と導入後の5C後以後では方位角に大きな差が見られない。
  - ②全体的には270度(西)～90度(東)の間に集中しており、幾つかのピークが数ヶ所見られるものの、



第79図 竪穴住居類例 (1/150)



第80図 主軸方位時期別度数分布図

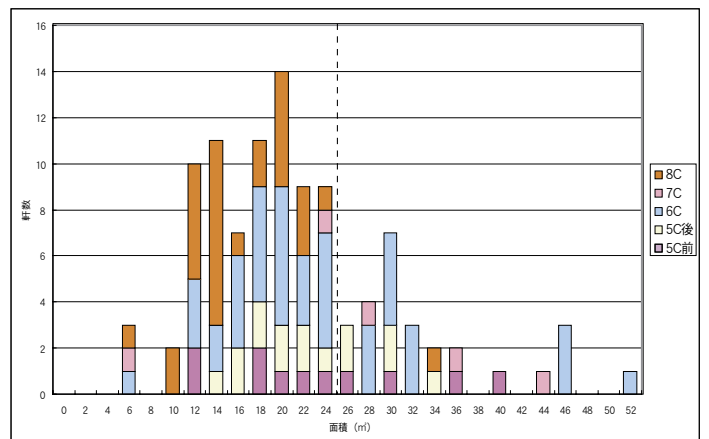


第81図 主柱穴配置時期別推移

第6表 主柱別竪穴規模推移表

時期	0本柱			2本柱			4本柱		
	面積	件数	標準偏差	面積	件数	標準偏差	面積	件数	標準偏差
5C前	0	0	0	18.9	6	4.93	34.1	3	4.44
5C後	14.8	1	0	0	0	0	21.9	6	4.13
6C前	15.4	2	3.03	0	0	0	23.7	11	9.28
6C後①	15.1	2	0.56	23	1	0	24.8	14	11.68
6C後②	23.4	1	0	0	0	0	25.9	9	8.71
7C	4.8	1	0	0	0	0	31.3	2	4.87
8C	13.3	12	4.37	18	5	5.79	16.2	3	4.34

※標準偏差は数値が大きい程個体間のバラツキが大きい。



第82図 竪穴規模時期別度数分布図

※面積計算は単純に長軸×短軸で計測しており、正確な値とは異なっている点をお断りしておく。

中には90～270度の所謂南向きカマドも見られるなど、一定の傾向を抽出するのは困難である。

といった2つの傾向が見られる。これらをまとめると、①の点からカマドの設置によって主軸方向に変化は生じておらず、住居の空間配置の基本原則は大きく変わってはいない。②より西～東の間がカマドの設置において好まれたと言えるのみで、時期別及び日田地域において特定方向への設置が規制されていたわけではないと指摘出来るよう。

したがって、カマドの採用にあたっては、弥生時代以来の伝統的な住居空間配置の中に新規の施設が組み込まれたものと思われ、笹森氏も指摘する全国的な動向と同一のものと言える。これは、第79図に示すうきは市塚堂遺跡D地区9号住居のように、方形張り出しやベッド状遺構という従来の屋内施設を有するものが見られる点からも肯定されよう。そして、これら弥生的な屋内施設は次第になくなり、南壁に設置されていた屋内土坑もカマド導入直後には、本遺跡24号住居のようにカマド脇へと場所を変えるようになることから、カマドの設置により住居空間を次第に変更することになったものと推測される。また、特定方向への規制の緩さは、本遺跡



11号住居のように住居拡張に伴いカマドも横にずらして再構築するものもあれば、第79図に示す求来里平島遺跡II 2号住居のように北側に設置されていたカマドが南側に作りかえられている例もあることなどからも肯定されうるものであろう。また隅カマドが導入期以後一定量認められることもその一例であらう。しかし、本調査区のように同一遺跡において軸をほぼ揃えるケースなども見られ、小地域内での趣向性があった可能性も完全に否定は出来るものではない。いずれにしてもさらに推し進めて議論するためには、屋内空間の利用意識や入口部との関係を論じる必要があるが、ここでは扱うだけの資料を有さないため今後の課題としておきたい。

### 主柱配置と規模

次に住居構造の変化を検討するため、主柱穴の配置と竪穴規模との関係を検討する。第81図のグラフは時期別の主柱配置の変化を示したものである。このグラフから、

- ① 5C前半と後半で2本と4本主柱が並存していたものが、カマド導入以後4本主柱が大半を占めるようになる。
- ② カマド導入以後ほぼ4本柱に統一された主柱配置は次第に無柱穴が増加し、TK43期には4割程度が無柱穴化し、8世紀にかけてほぼ無柱穴化する。

という2つの傾向が読み取れ、弥生時代以来の伝統的な住居の上屋構造がカマド導入によって大きく変化した可能性が高く、6世紀後半にはさらなる変化が生じた可能性がある。次にこの主柱穴の変化が竪穴規模とどのように関わっているのかを検討したのが第6表である。軒数の少ない時期もあるため動向が明確ではないものの、竪穴部平均面積・軒数・標準偏差を示している。この表から、

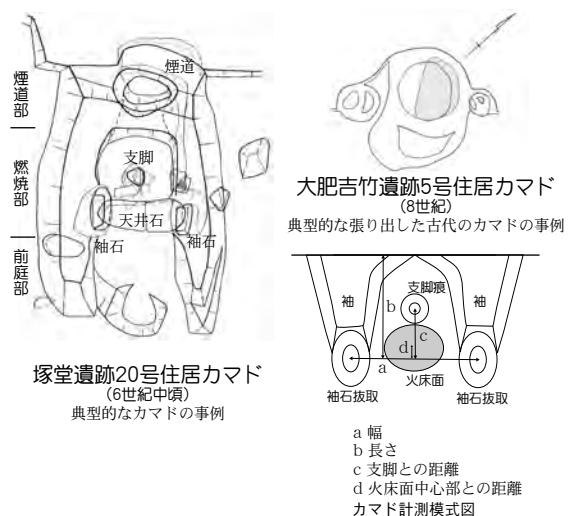
- ③ 5C前半段階では2本主柱で平均約19㎡、4本主柱で平均34㎡と竪穴規模の大小によって主柱数が異なっている。
- ④ 5C後以降の主柱配置では2本主柱が殆ど見られなくなり、5C後以降の4本主柱で20㎡台、無柱穴では10㎡台を示す。
- ⑤ 6世紀代において大半を占める4本主柱の面積の標準偏差の値が10前後と非常に大きく、同じ主柱配置でも規模にバラツキがある。これは4本主柱においても規模の大小が存在していることを示しており、6世紀においては規模と主柱配置が連動していない。

という3つの傾向が読み取れるのである。次に竪穴規模の時期別推移を示したのが第82図である。この図からは、

- ⑥ 8世紀を除く全ての時期を通じて25㎡を境に規模を大きく2分出来る。
- ⑦ 8世紀では25㎡以下に規模が集中する。

という2つの傾向が読み取れる。これら①～⑦の傾向をまとめると、①からカマドの導入によって4本主柱に集約されることで上屋構造に大きな変革が生じている可能性が高く、②⑦の点から無柱穴化や竪穴規模の小形化などさらに変化する可能性が高い。この点は第79図に示す尾漕遺跡10・11号住居において4本主柱と無柱穴化した住居がほぼ同時期の6世紀後半に確認されていることから、この変化は漸移的に発生したものと考えられる。また、⑥から各時期を通じて基本的に大小の規模の住居が存在した可能性が想定され、この規模の違いによって③④⑤のように2本・4本・無柱穴という主柱配置の違いが生じており、6世紀代において4本主柱の構造を変えることなく規模を違える住居が見られるのである。

このような動向は、カマドという排煙装置を有する施設を構造的に組み入れる必要性から上屋構造が変化した可能性を示唆しており、さらに導入後も6

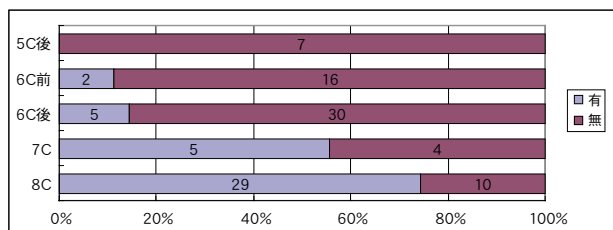


第83図 カマド類例 (1/60) と計測模式図

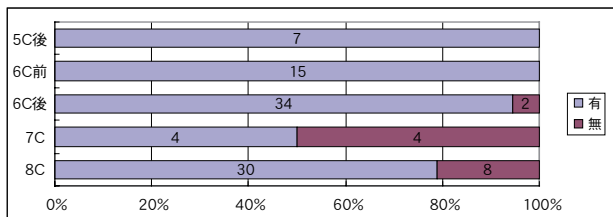
世紀後半から上屋構造を変化する必要性が生じたものと思われる。この点については後のカマド構造の検討で述べるが、いずれにしてもカマドの導入による影響は大きかったものと言えよう。しかし、竪穴規模については少なくとも8世紀に至るまでは支柱配置を変えながらも大小規模が存在し、8Cに至ると小規模のみに集約される傾向があり、この規模の違いについては細かな集落内配置などの検討が必要であり、今後の課題としたい。

### カマドの構造変遷について

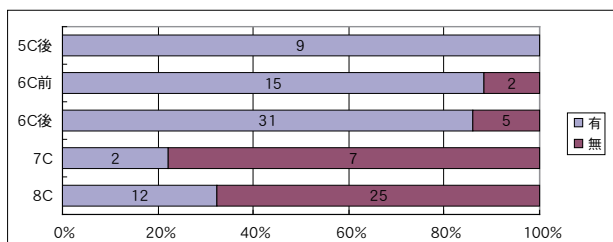
次に、このように住居構造に大きな影響を与えたと想定されるカマドの時期的変化について検討してみたい。カマドの構造を理解する上で市内には明瞭な類例がないため、第83図に示すきは市塚堂遺跡D区20号住居をもっとも典型的な例として挙げてみよう。これを見ると、前庭部まで粘土で被覆し、焚き口内側には袖石・天井石を埋め込み、甕を掛けるための支脚に石材を用い、煙道は竪穴部手前からやや外に向かって一体的に作られる。このような構造は日田地域においても共通していたと思われ、袖石・支脚に石材を利用するカマドが大半を占めていることから肯定されよう。これは、古代の住居においても第83図に示す大肥吉竹遺跡5号住居のように袖石の存在が認められており、継続的に利用されていたことを示している。しかし、カマドそのものが祭祀行為などによって破壊を受けているケースが非常に多く、前庭部範囲や袖の被覆状況などの全容をつかめる類例は非常に少ないと言わざるを得ない。そのため規模の検討などを困難にしているのである。そこで、前述のような構造の特徴の中でも日田地域で大半のカマドに袖石・支脚石が利用され、破壊が著しいものでも袖石の抜き取り痕が認められることに着目し、第83図の計測模式図に示すように、燃烧部の幅と長さ及び袖石間から支脚・火床面中心部までの距離を計測することで、カマドの主たる機能を担う燃烧部や掛け口などの位置が変化していないかを検討することにした。ただし、この検討からは前庭部を対象として除外しており、残存状況の悪さから燃烧部と煙道部の区分が明確でないものが殆どであるため、煙道が竪穴外に明瞭に長く張り出しているもの以外は燃烧



第84図 カマド張出の推移



第85図 袖石利用の推移



第86図 支脚石利用の推移

第7表 カマド計測値平均推移

時期	件数	a 幅	b 長さ	時期	軒数	c 袖石・支脚間	d 火床面
5C後	7	62.57	74.57	5C後	7	24	0
6C前	15	67.67	64.67	6C前	15	29.67	3
6C後	30	73.17	59.00	6C後	23	26.52	0.43
7C	4	70.00	53.75	7C	1	25	5
8C	25	63.00	51.96	8C	10	21.5	4.4
全体	81	67.28	60.79	全体	56	25.34	2.58

※単位はcm

第8表 煙道時期別推移

時期	有	無	総数	平均
5C後	1	6	7	5
6C前	5	10	15	60
6C後	10	27	37	50.7
7C	1	7	8	20
8C	3	31	34	21.7

※単位はcm

第9表 袖石利用石材軒数推移

時期	凝灰岩	河原石
5C後	3	2
6C前	4	3
6C後	9	5
7C	1	1
8C	2	6

※凝灰岩は加工されている事が多いため、凝灰岩と河原石の2者に区分し検討している。

第10表 支脚利用石材軒数推移

時期	凝灰岩	河原石	土器(高坏)
5C後	2	2	2
6C前	4	3	1
6C後	9	3	0
7C	0	1	0
8C	0	1	0

部の長さとして計測している点を断っておく。

さて、この規模の変化を示したのが第7表である。この表から、

- ① a幅・c袖石と支脚間距離・d火床面距離は時期的に変化が殆ど見られない。
- ② bの長さが時期が新しくなるほど短くなる。

という2つの傾向が読み取れる。このうち①から、カマドの導入以降、幅や掛け口・焚き口の構造は基本的に変わっていないことが判る。つまり、火床面の間のもっとも熱を受ける箇所には必ず袖石や天井石が設置されることで、カマド燃焼部壁体の破損を防ぐとともに燃焼効率を高める方法が古代までの間踏襲されていった可能性が高いと思われるのである。そして、もっとも床が被熱した面より20cm程奥壁側に支脚を設置し、煙道への空気対流によって高温の炎を受ける事の出来たこの位置（支脚位置）が掛け口として利用されていたものと想定されるのである。この構築の基本原理は古代に至るまで殆ど変わる事はなく、支脚が1個しか見られないことから、カマド掛け口は杉井氏<sup>註30</sup>が西日本の一般的な傾向として挙げる1つ掛けであると思われる。田中氏<sup>註31</sup>は古代の事例から、火床面直上と支脚上の縦並び2つ掛けを想定しているが、袖石や支脚・火床面の位置関係が古代までの間殆ど変わらないという今回の分析結果から、1つ掛けと捉えておきたい。また、②のカマドの長さが6世紀前半から次第に縮小化する傾向は、煙道部が竪穴内部のカマド壁体と一体的に構築されていたものから分離し、竪穴外の地山を掘り込んで作られるようになった結果を反映していると考えられる。前者は第83図の塚堂遺跡D区20号住居がその好例であり、後者は本遺跡12号住居が好例である。また、第79図尾漕遺跡10号住居のように、煙道と共にカマドそのものが竪穴外部に張り出すようになる例が見られる。そこでカマドの張り出しの時期的な変化を示したのが第84図である。これから、6世紀に若干数張り出しが見られるようになり、7世紀から8世紀にかけて殆どのカマドが張り出すようになる傾向が見られる。これは前述のカマドの長さが次第に縮小化して煙道が竪穴外に作られるようになる動向と時期的にほぼ連動している。カマドや住居の構築にとって重要な要素の一つが排煙装置であり、そのほかの基本構造に変化が生じていないことから考えると、カマドが竪穴内作り付けから竪穴外に次第に張り出すようになるのは、カマドの構造変化ではなく煙道の構築方法の変化に起因する可能性が高いと言える。

さて、前述のようにカマドの張り出しと煙道の構築方法が関係するものと想定したが、煙道そのものは実際には検出例が非常に少ない。第8表は煙道のデータであるが、煙道部は竪穴部の残存状況が悪いほど残りが悪いため、全体的に例が少ない。この少ないデータで確実な動向を推察するのは難しいものの、6世紀代では煙道部の長さが5～60cm平均であるのに対し、7・8世紀代では20cm平均と縮小化する傾向が見られる。これは小田氏が竪穴部の縮小化と煙道の長大化が連動することを理由に居住占有空間面積そのものに変化はないと指摘する動向とは異なっており、一概に、竪穴部の縮小化と煙道規模の長大化が連動するとは限らない可能性を指摘出来る。この点は筑後川中流域の例ではあるが大庭氏<sup>註32</sup>も同様の指摘をしている。

次に、前述の変化に伴いカマドに使用される材に変化がないか検討を行った。第85図は袖石の利用状況を時期別に示したものである。7・8世紀にかけて次第に袖石を利用しないカマドが若干増加するものの、大半が袖石を利用していることを示している。また、第9表に示すように、袖石に利用される石材は、加工した凝灰岩と未加工の河原石のどちらへの嗜好性は見出しにくく、近隣で入手可能な石材が利用された可能性が高いと思われる。（報告書によっては利用石材についての記載がないため極端に軒数が少なくなっている。）これに対し、支脚痕跡等の有無を時期別に示したのが第86図である。これから7・8世紀にかけて支脚の利用痕跡が殆ど見られなくなる傾向が読み取れる。また、第10表に支脚材の内訳を示しているが、6世紀後半に凝灰岩が好まれた可能性があるものの明瞭な傾向は見られず、土器を転用する支脚は6世紀前半までには見られなくなる。大庭氏<sup>註32</sup>は堂畑遺跡の事例を基に、8世紀に至ると支脚痕跡が確認されなくなり、堂畑遺跡3次第110・111号住居の土

器固定用粘土の痕跡などから、石製支脚から土器支脚へと変化した可能性を指摘している。日田地域では支脚に用いられた粘土塊などの存在は見られず不明な点が多いものの、8世紀においても石製支脚痕跡が見られる類例があることやこれまでの分析などから、カマドの基本構造はほとんど変わっていないものと推測される。とすれば、カマドの基本構造の変化によって支脚石や痕跡が見られなくなるのではなく、甕を支える方法が変化した可能性を考えておきたい。それは、大庭氏の言うような材の変化も考えられるが、移動式カマドのように甕を挿入するために円形状に構築されたであろう掛け口そのもので甕を支えていた可能性がある。土器などの支脚材の痕跡が殆ど検出されないことから、この可能性は強いものと思われるが、類例が少なく今後の検討課題としたい。

#### カマド祭祀について

今回はカマド祭祀行為についての検討は行っていない。日常容器や祭器などがカマド内に破棄され、明瞭に祭祀の痕跡が確認されればカマド祭祀と位置づけることも出来るが、土層の観察などから破壊を受けている可能性が高いものを祭祀と位置づけるか検討の余地があると考えられるからである。この破壊には本遺跡7号住居のように天井石を手前に引き倒しているものもあれば、袖石や支脚などを完全に除去してしまうものや石材は残存したまま壁体を破壊するものなど多様な形態を呈していると思われる。また、他地域の事例では破壊後に粘土を被覆する行為などが見られるものの、市内では明瞭な痕跡は見られない。このように多様な破壊行為が、単に廃棄行為に伴うものであるのか、それとも祭祀に伴うものであるのか特に現場での詳細な観察と類型化が必要となってくると思われるのである。カマドの定着によって竈神が宿ると考えられるようになり、カマドが神聖化されるようになると共にカマド祭祀が一般化するようになるとの指摘などには異論はないが、まずは祭祀の形態そのものを考える必要がある。この点は今後の分析課題としたい。

#### おわりに

さて、以上のように住居の変遷とカマドの構造について検討してきた結果をまとめると、

1. カマド導入期には、弥生的な従来の住居構造の中に炉に変わる屋内施設としてカマドが取り入れられた可能性が高いが、特定壁を占有し排煙施設を設置するという物理的な問題から、上屋構造や空間配置を変更する事を余儀なくされたため、屋内土坑の位置が変化し、主柱配置が4本柱へと収斂した可能性が考えられる。
2. カマド設置方向に関しては強い規制が働いていなくて、主軸に関する考え方は従来の考え方をある程度踏襲していた可能性がある。また、8世紀を除いて竪穴部規模に大小の違いが見られるようであり、これは前時代から引き継がれたものであると推測される。
3. 6世紀以降になると顕在化する主柱配置の変化、カマドの張り出しの増加やカマドと一体化していた煙道部の分離、竪穴部の小規模への集約などの変化傾向は、ある程度運動していた可能性が高いと思われる。しかし、それぞれの変化は6世紀から7世紀にかけて次第に生じており、同時に全ての変化が生じているわけでもないようである。これは、ある要因のもとに次第にカマド構築や住居構造方法に変化を及ぼさざるを得なくなったためと思われる、その主要因として排煙の問題を考えたい。カマドにおける燃焼部と煙道部の分離が少なくとも6世紀前半から始まっていた可能性があるのに対し、主柱穴配置の変化がやや遅れた6世紀後半から生じていることから、排煙施設の変化が住居構造変化の要因となった可能性を肯定するものと考えられよう。つまり、排煙方法の変化によりカマドの位置が変化し、排煙や空間配置などに関連する上屋構造構築要素となる竪穴規模や主柱配置なども次第に変更する必要性が生じ、試行錯誤を繰り返しながら7世紀から8世紀において新たな住居構造やカマド構造が統一的に採用されるようになったものと推測しておきたい。
4. 全時期を通じてカマドに使用される石材などに変化は見られないが、支脚が7～8世紀代には殆ど利用されなくなる傾向が見られ、これは掛け口における甕を支える方法が変化した可能性が考えられる。

以上のような大まかな動向を今回の分析から読み取ることが出来た。しかし、あくまで日田地域のみでの傾向であるためこれらの動向が他地域と同一かどうかは今後の検討が必要であると感じている。また、明らかとなっ

た動向でもその原因が何によるのか今回の分析では明らかに出来なかったものや今後の課題としたものも多く、分析や対象資料に抜けなどもあることは否めない。これらについては住居空間の利用方法などの検討を推し進めて議論する必要があり、さらに検討を深めていきたいと思う。

最後に、今回の検討を行うにあたって、同僚の若杉竜太氏・比嘉えりか氏には様々なご協力とご教授をいただいた。記して感謝申し上げたい。

- 註1 重藤輝行 「仁右衛門畑遺跡を中心とした浮羽郡の古墳時代土師器編年」 吉田東明編『仁右衛門畑遺跡』I 浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告第12集 2000  
「福岡県における古墳時代中期～後期の土師器」 『古墳時代中・後期の土師器-その編年と地域性-』 第5回九州前方後円墳研究会発表要旨資料 2002  
「筑後川流域における古墳時代集落の展開-特に浮羽地域を事例として-」 平成19年度九州考古学会総会研究発表要旨・資料集 2007  
※重藤編年に関しては2000年のものと2002年のもので区分単位及び須恵器との並行関係に若干の違いが生じているが、2007年資料において2002年論文を踏襲する形で解消しており、氏の編年観に関しては今後これを使用するものとする。
- 註2 田崎博之 「Ⅲ干潟遺跡出土土師器の編年-特に土師器を中心として-」 『干潟遺跡Ⅰ』 福岡県文化財調査報告書第59集 福岡県教育委員会
- 註3 田辺昭三 「須恵器大成」 角川書店 1981  
『陶邑古窯址群Ⅰ』 平安学園考古学クラブ 1966
- 註4 山本信夫 「北部九州の7～9世紀中頃の土器」 『古代の土器研究-律令的土器様式の西東-』 古代の土器研究会第1回シンポジウム資料集 1992
- 註5 家根祥多 「土器の交流(晩期を中心に)」 『本州西部地域における文化交流の諸問題』 第9回中四国縄文研究会発表資料 1998
- 註6 調査指導にお越しいただいた際に実見頂き御教授いただいた。
- 註7 橋口達也 『池の上墳墓群』 甘木市文化財調査報告第5集 1979
- 註8 小田富士雄 「九州の須恵器」 『世界陶磁全集2・日本古代』 1979  
「須恵器の源流-九州地方-」 『日本陶磁の源流-須恵器出現の謎を探る-』 柏書房 1984  
「須恵器文化の形成と日韓交渉-解説編-西日本初期須恵器の成立をめぐる-」 『古文化談叢』 第24集
- 註9 中村浩 『和泉陶邑窯の研究-須恵器生産の基礎的考察-』 柏書房 1981
- 註10 今田秀樹 「2.町ノ坪遺跡D区」 『平成17年度(2005年度)日田市埋蔵文化財年報』 日田市教育委員会 2007
- 註11 今田秀樹 「4.名里遺跡」 『平成19年度(2007年度)日田市埋蔵文化財年報』 日田市教育委員会 2007
- 註12 土居和幸 『求来里平島遺跡』 日田市埋蔵文化財調査報告書第38集 日田市教育委員会 2002
- 註13 行時桂子 『求来里平島遺跡Ⅱ』 日田市埋蔵文化財調査報告書第77集 日田市教育委員会 2007  
若杉竜太 「3.求来里平島遺跡E・F区」 『平成17年度(2005年度)日田市埋蔵文化財年報』 日田市教育委員会 2007  
原田昭一 「求来里平島遺跡D区」 『一級河川求来里川河川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』 大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書第31集 大分県教育庁埋蔵文化財センター 2008
- 註14 土居和幸 「7.町ノ坪遺跡A～C区」 『平成15年度(2003年度)日田市埋蔵文化財年報』 日田市教育委員会 2004
- 註15 松本康弘・田中裕介 「金田遺跡1・3次調査区」 『一級河川求来里川河川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』 大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書第31集 大分県教育庁埋蔵文化財センター  
若杉竜太 「4.金田遺跡」 『平成16年度(2004年度)日田市埋蔵文化財年報』 日田市教育委員会 2005
- 註16 若杉竜太 「5.小西遺跡・町ノ坪遺跡D区」 『平成16年度(2004年度)日田市埋蔵文化財年報』 日田市教育委員会 2005
- 註17 田中裕介 「手崎遺跡」 『日田市高瀬遺跡群の調査2』 一般国道210号日田バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ 大分県教育委員会1998
- 註18 「陣ヶ原辻原遺跡」 『日田市高瀬遺跡群の調査』 一般国道210号日田バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ 大分県教育委員会1995
- 註19 行時桂子編 『石ヶ迫遺跡』 日田市埋蔵文化財調査報告書第49集 日田市教育委員会 2004
- 註20 吉田博嗣 『口が原遺跡』 日田市埋蔵文化財調査報告書第17集 日田市教育委員会 1998
- 註21 渡邊隆行編 『一丁田遺跡Ⅱ』 日田市埋蔵文化財調査報告書第83集 日田市教育委員会 2008
- 註22 馬田弘稔編 『塚堂遺跡Ⅰ』 一般国道210号線浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告第1集 福岡県教育委員会 1983  
副島邦弘編 『塚堂遺跡Ⅱ A地区』 一般国道210号線浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告第1集 福岡県教育委員会 1984  
馬田弘稔 『塚堂遺跡Ⅳ D地区』 一般国道210号線浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告第4集 福岡県教育委員会 1985
- 註23 重藤輝行 「仁右衛門畑遺跡を中心とした浮羽郡の古墳時代土師器編年」 吉田東明編『仁右衛門畑遺跡』I 浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告第12集 2000

- 註24 若杉竜太 『求来里の遺跡Ⅱ 金田遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第89集 日田市教育委員会 2009
- 註25 行時志郎編 『荻鶴遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第9集 日田市教育委員会 1995
- 註26 小田和利 「北部九州のカマドについて」『文化財学論集』文化財学論集刊行会 1994
- 註27 大庭孝夫 「堂畑遺跡におけるカマドの在り方について」『堂畑遺跡Ⅲ』一般国道210号線浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告第23集 福岡県教育委員会 2005
- 註28 笹森建一 「竪穴住居の使い方」『古墳時代の研究2 集落と豪族居間』雄山閣出版株式会社 1990
- 註29 この点は同僚の比嘉えりか氏とのディスカッションから知見を得て分析を行った。そのなかで弥生後期～古墳時代前期の方形住居において2本主柱と4本主柱の2種類が見られ、その違いは規模による可能性が高いとご教授いただいた。
- 註30 杉井健 「竈の地域性とその背景」『考古学研究』第40巻第1号 考古学研究会 1993
- 註31 田中裕介 「調査の成果と課題 第2節奈良時代 2-1以降各説②竪穴建物跡」『日田市高瀬遺跡群の調査 上野第1遺跡』一般国道210号日田バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ 大分県教育委員会 2001
- 註32 註27に同じ
- 註33 註27に同じ
- 註34 佐々木隆彦 「IV総括にかえて 1 竈祭祀考—北部九州を中心として—」『松木遺跡Ⅰ（下巻）』那珂川町文化財調査報告書第11集 那珂川町教育委員会 1984

#### 《報告書》

- 『石ヶ迫遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第49集 日田市教育委員会 2004
- 『一丁田遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第68集 日田市教育委員会 2006
- 『一丁田遺跡Ⅱ』日田市埋蔵文化財調査報告書第83集 日田市教育委員会 2008
- 「上野第1遺跡」『日田市高瀬遺跡群の調査3』一般国道210号日田バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ 大分県教育委員会2001
- 『内ノ下遺跡・大行事遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第33集 日田市教育委員会 2002
- 『尾漕遺跡（第2次調査区・第5次調査区）』大分県文化財調査報告書第112輯 日田市教育委員会 2000
- 『尾漕遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第30集 日田市教育委員会 2007
- 『大肥遺跡Ⅱ—B・C区の調査の記録—』日田市埋蔵文化財調査報告書第66集 日田市教育委員会 2006
- 『大肥中村遺跡Ⅰ』日田市埋蔵文化財調査報告書第62集 日田市教育委員会 2006
- 『大肥吉竹遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第48集 日田市教育委員会 2004
- 「金田遺跡1・3次調査区」『一級河川求来里川河川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』大分県教育庁埋蔵文化財センター報告書第31集 大分県教育庁埋蔵文化財センター 2008
- 『求来里平島遺跡Ⅱ』日田市埋蔵文化財調査報告書第77集 日田市教育委員会 2007
- 『求来里平島遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第38集 日田市教育委員会 2002
- 『平島遺跡D地点・塔ノ本古墳・祇園原遺跡2次・長迫遺跡C地点・長迫遺跡D地点・尾漕遺跡6次』日田市埋蔵文化財調査報告書第28集 日田市教育委員会 2001
- 『葛原遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第39集 日田市教育委員会 2002
- 『葛原遺跡Ⅱ』日田市埋蔵文化財調査報告書第53集 日田市教育委員会 2004
- 『口が原遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第17集 日田市教育委員会 1998
- 『郷四郎遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第82集 日田市教育委員会 2007
- 『佐寺原遺跡・尾漕遺跡群・有田塚ヶ原古墳群』九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書(9) 大分県教育委員会 1998
- 「陣ヶ原辻原遺跡」『日田市高瀬遺跡群の調査』一般国道210号日田バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ 大分県教育委員会1995
- 『惣田遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第8集 日田市教育委員会 1994
- 『長者原田迎遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第5集 日田市教育委員会 1992
- 「長者原遺跡」『日田地区遺跡群発掘調査概報Ⅱ』日田市教育委員会 1987
- 「手崎遺跡」『日田市高瀬遺跡群の調査2』一般国道210号日田バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ 大分県教育委員会1998
- 『西有田赤ハゲ遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第7集 日田市教育委員会 1992
- 『日田条里上手地区Ⅲ・高瀬条里永平寺地区・尾部田遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第34集 日田市教育委員会 2001
- 『本村遺跡3次』日田市埋蔵文化財調査報告書第51集 日田市教育委員会 2004
- 『山口遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第20集 日田市教育委員会 2000

第11表 出土土器観察表①

図版番号	遺構名	種別	器種	法量 (cm)			調整		胎土	焼成	色調		備考	
				口径	底径	器高	外面	内面			外面	内面		
第7図	1	1住	須恵器	坏身	-	-	2.75	回転ナデ	回転ナデ	CE	良好	灰	灰	
第7図	2	1住	須恵器	坏身	-	-	2.30	回転ナデ	回転ナデ	BE	良好	灰	灰	
第7図	3	1住	土師器	甕	(13.30)	-	11.50	ハケ目	行・跡目・ナリ	ACG	良	橙・にぶい橙	褐灰・灰白	
第7図	4	1住	土師器	小型甕	(12.40)	-	11.90	行?調整不明瞭	行?調整不明瞭	ABCE	良	褐灰	褐灰	
第7図	5	1住	土師器	甕	-	-	6.60	行?調整不明瞭	行?調整不明瞭	ABC	良	橙	橙	
第7図	6	1住	土師器	高坏脚	-	-	7.30	行?調整不明瞭	ナリ?調整不明瞭	ACD	良	橙	橙・にぶい橙	
第9図	1	2住	須恵器	坏蓋	-	-	2.85	回転ナデ	回転ナデ	C	良	灰白・黄灰	灰白	
第9図	2	2住	須恵器	坏身	-	-	2.95	回転ナデ	回転ナデ	C	良好	灰白	灰白	
第9図	3	2住	須恵器	坏身	(12.95)	-	3.30	回転ナデ・行	回転ナデ	C	良好	明青灰	灰白	
第9図	4	2住	須恵器	高坏脚	-	-	4.90	回転ナデ	回転ナデ	C	良好	灰	灰	2箇所透かし
第9図	5	2住	須恵器	高坏脚	-	-	8.35	回転ナデ	回転ナデ・しぼり痕	C	良好	灰白・オリーブ黒	オリーブ黒・黄灰	2箇所透かし
第9図	6	2住	須恵器	甕	(14.40)	-	6.20	回転ナデ	回転ナデ	C	良好	灰白・灰	灰白・灰・橙	
第9図	7	2住	土師器	甕	(16.60)	-	9.55	行・指頭痕・跡目	行・跡目・ナリ	ABC	良	橙・灰黄褐	橙・灰黄褐	
第9図	8	2住	土師器	甕	(11.80)	-	4.20	行?調整不明瞭	行・跡目?	AC	良	褐灰・灰黄褐	灰褐・灰白	
第9図	9	2住	土師器	甕	-	-	7.30	調整不明瞭	調整不明瞭	ABC	良	橙・にぶい黄橙	にぶい橙・にぶい黄橙	
第9図	10	2住	土師器	甕	-	-	3.90	ナデ?	ナデ?	ABC	良	灰黄褐・浅黄橙	にぶい橙	
第9図	11	2住	土師器	甕	-	-	4.90	調整不明瞭	調整不明瞭・工具痕?	ABC	良	橙・浅黄橙	橙・浅黄橙	
第9図	12	2住	土師器	甕	-	-	7.80	調整不明瞭	調整不明瞭・ナリ?	ABC	良	橙	橙・にぶい橙	
第9図	13	2住	土師器	甕(把手)	-	-	8.95	ナリのち行	ナデ	ABC	良	にぶい黄橙	浅黄橙	
第13図	1	4住	須恵器	甕	(8.60)	-	10.20	回転ナデ・ハナリ・行・櫛描列点文	回転ナデ	BCE	良好	青灰・灰	青灰・灰	
第13図	2	4住	須恵器	坏身	-	-	3.00	回転ナデ	回転ナデ	E	良好	灰	灰	
第13図	3	4住	土師器	甕	(17.50)	-	5.80	行?調整不明瞭	行?調整不明瞭	ABCDE	良	にぶい黄橙	にぶい黄橙	
第13図	4	4住	土師器	甕	(18.00)	-	12.10	行・跡目?・指頭痕	行・ナリ	ACEG	良	橙・にぶい橙	にぶい橙	底部穿孔
第13図	5	4住	土師器	碗	(13.70)	-	7.70	ヨナデ・指頭痕・行?	指頭痕・行	ABCDE	良	橙	橙	
第13図	6	4住	土師器	高坏?	(13.80)	-	5.10	行?調整不明瞭	行?調整不明瞭	ABCDE	良	橙	にぶい黄橙	
第13図	7	4住	土師器	碗	-	-	5.00	行?調整不明瞭	行・ナリ	ABCE	良	橙	橙	
第13図	8	4住	土師器	手捏	4.60	-	3.60	指頭痕・行	指頭痕・行	ACE	良	浅黄	にぶい黄橙	
第13図	9	5住	須恵器	坏身	-	(5.40)	3.05	回転ナデ・回転ハナリ	回転ナデ・行	BC	良	明赤褐・灰白	浅黄橙	須恵器生焼け
第13図	10	5住	土師器	甕	-	-	4.40	調整不明瞭	調整不明瞭	ABCG	良	浅黄橙・黒褐	灰白	
第13図	11	6住	土師器	小型壺	-	-	6.90	ナデ	ナデ	ABC	良	橙・にぶい橙	にぶい橙	
第13図	12	6住	土師器	碗	-	-	3.40	ナデ	ナデ	ABCG	良	にぶい橙	にぶい橙	
第16図	1	7住	須恵器	坏蓋	-	-	3.50	回転ナデ・回転ハナリ	回転ナデ	BCE	良好	灰	灰	
第16図	2	7住	須恵器	坏身	(13.20)	-	4.70	回転ナデ・回転ハナリ	回転ナデ・不定行	C	良好	灰	灰	内面へ記号
第16図	3	7住	土師器	甕	(19.50)	-	6.10	ヨナデ・行	ヨナデ?調整不明瞭	ABCG	良	にぶい黄橙	浅黄橙	
第16図	4	7住	土師器	甕	(19.40)	-	8.60	ヨナデ・行	ヨナデ・行・ナリ?のち行	ABCE	良	橙・にぶい黄橙	にぶい黄橙	
第16図	5	7住	土師器	甕	(13.60)	-	5.80	ヨナデ・行	ヨナデ・行・ナリ	ABCE	良	橙	灰褐	
第16図	6	7住	土師器	甕	-	-	5.20	行?調整不明瞭	行?調整不明瞭	ABC	良	にぶい黄橙	浅黄橙	
第16図	7	7住	土師器	甕	-	-	5.60	ヨコナデ	ヨナデ・ナリ	ABCE	良	にぶい黄橙	灰白・褐灰	
第16図	8	7住	土師器	甕	(17.40)	-	19.60	ヨナデ・跡目	ヨナデ・ナリ	ABCEG	良	にぶい黄橙	にぶい黄橙	
第16図	9	7住	土師器	甕(底部)	-	-	12.20	跡目・行	ナリ・行	ABCEG	良	灰黄褐	にぶい黄橙	
第16図	10	7住	土師器	甕	(28.80)	(10.20)	32.45	ヨナデ・行・跡目・一部工具痕	行・ナリ	ABCE	良	にぶい橙	黒褐	
第16図	11	7住	土師器	甕(把手)	-	-	7.50	ナリ・行	ナデ	ACE	良	にぶい黄橙	黒	
第16図	12	7住	土師器	不明土製品	-	-	6.60	ナデ	ナデ	C	良	明赤褐・にぶい橙	明赤褐・にぶい橙	
第18図	1	8住	土師器	甕	(14.80)	-	5.85	ヨナデ・行・一部跡目	ヨナデ・行	ACDE	良	にぶい黄橙	にぶい黄橙	粘土接合痕
第18図	2	8住	土師器	甕	-	-	5.40	ヨナデ・行?調整不明瞭	ヨナデ・行?調整不明瞭	ABC	良	浅黄橙	浅黄橙	
第18図	3	8住	土師器	甕	-	-	3.40	ヨナデ・行?調整不明瞭	ヨナデ・行?調整不明瞭	ABCE	良	にぶい褐	にぶい褐	
第18図	4	8住	土師器	甕	-	-	7.50	行・一部指頭痕	ナリのち行	ABC	良	褐灰・にぶい褐	褐灰・橙	
第18図	5	8住	土師器	高坏	-	-	3.65	ヨナデ・行?調整不明瞭	ヨナデ・行?調整不明瞭	ABCD	良	にぶい橙	にぶい橙	
第18図	6	9住	須恵器	坏蓋	-	-	3.10	回転ナデ・回転ハナリ	回転ナデ・行	BCE	良好	灰・灰白	灰・黄灰	
第18図	7	9住	土師器	甕	-	-	3.65	ナデ	ヨナデ・ナリ?	ABCE	良好	浅黄橙・にぶい黄橙	褐灰・にぶい黄橙	
第18図	8	9住	土師器	輪羽口	-	-	3.70	ナデ	ナデ	ABC	良	灰白・灰	橙・灰褐	
第18図	9	10住	須恵器	坏身	-	-	1.90	回転ナデ・行	回転ナデ	C	良好	青灰	青灰	
第21図	1	11住	須恵器	坏蓋	(14.75)	-	4.60	回転ナデ・回転ハナリ	回転ナデ・行	BCE	良好	灰	青灰・明赤褐	
第21図	2	11住	須恵器	坏蓋	14.80	-	4.50	回転ナデ・回転ハナリ	回転ナデ・行	BCE	良好	灰・灰白	灰	
第21図	3	11住	須恵器	坏蓋	(14.20)	-	4.00	回転ナデ・回転ハナリ	回転ナデ・不定行	ACEG	良	灰白・灰黄	灰白	
第21図	4	11住	須恵器	坏蓋	15.30	-	4.65	回転ナデ・回転ハナリ	回転ナデ・一部行	BCE	良好	灰白・灰	灰白	
第21図	5	11住	須恵器	坏蓋	-	-	3.75	回転ナデ	回転ナデ	BCE	良好	灰白・青灰	灰白	
第21図	6	11住	須恵器	坏蓋	-	-	4.25	回転ナデ・回転ハナリ	回転ナデ・行	AC	良	灰白・にぶい黄橙	灰白・にぶい黄橙	須恵器生焼け
第21図	7	11住	須恵器	坏身	(12.20)	-	4.55	回転ナデ・回転ハナリ	回転ナデ	ABCE	良	浅黄橙・橙	灰白・褐灰	須恵器生焼け
第21図	8	11住	須恵器	坏身	(12.00)	-	5.15	回転ナデ・回転ハナリ	回転ナデ・行	ABC	良好	淡黄・橙	浅黄橙	須恵器生焼け
第21図	9	11住	須恵器	坏身	(12.70)	-	4.85	回転ナデ・回転ハナリ	回転ナデ・行	BCE	良好	灰・灰白	灰・黄灰	外面へ記号

法量の単位はcm。( ) 書きは、残存と復原を表す。

胎土：A角閃石 B石英 C長石 D赤色粒子 E白色粒子 F黒色粒子 G雲母 H砂粒

第12表 出土土器観察表②

図版番号	遺構名	種別	器種	法量 (cm)			調整		胎土	焼成	色調		備考	
				口径	底径	器高	外面	内面			外面	内面		
第21図	10	11住	須恵器	坏身	-	-	3.20	回転子・回転ハカスリ	回転子・子	C	良好	灰白	明黄褐色・灰白	
第21図	11	11住	須恵器	坏身	-	-	2.65	回転ナデ	回転子・子	CE	良好	灰白	灰白	
第21図	12	11住	須恵器	壺? 甗?	(12.20)	-	7.85	回転子・波状紋	回転ナデ	BCE	良好	灰・灰白	灰・灰白	
第21図	13	11住	須恵器	甗	-	-	6.80	回転子・回転ハカスリ	回転ナデ	ABCE	良	浅黄褐色・橙	にぶい黄褐色	須恵器生焼け
第21図	14	11住	土師器	甗	13.75	-	11.45	子子子・子	子子子・子	AC	良好	灰白・灰褐色	にぶい黄褐色・灰褐色	
第21図	15	11住	土師器	甗	15.00	-	18.95	子子子・子	子子子・子	ABC	良	にぶい赤褐色	にぶい褐色・褐色	粘土接合痕
第21図	16	11住	土師器	甗	(21.20)	-	6.65	子子子・一部子子子・子	子子子・一部子子子・子	AC	良	浅黄褐色・褐色	灰白・灰	
第21図	17	11住	土師器	甗	-	-	4.10	ヨコナデ	子子子・子	ABCE	良	橙・浅黄褐色	橙	
第21図	18	11住	土師器	甗	13.10	-	7.25	子子子・子	子子子・子	ABC	良	にぶい橙	にぶい褐色・褐色	粘土接合痕
第21図	19	11住	土師器	甗	-	-	3.60	子子子・子	子子子・子	ABC	良好	橙・にぶい橙	橙	
第21図	20	11住	土師器	甗	-	-	3.30	子子子・子子子・子	子子子・子	ABC	良好	にぶい橙	にぶい橙	
第21図	21	11住	土師器	甗	-	-	4.60	子子子・子	子子子・子	AC	良好	灰褐色・にぶい橙	浅黄褐色・にぶい橙	
第21図	22	11住	土師器	甗	-	-	4.00	子子子・子	ナデ	ABC	良	にぶい褐色・にぶい黄褐色	にぶい橙	
第24図	1	12住	須恵器	坏蓋	(15.40)	-	4.00	回転子・一部子	回転子・不定子	BCE	良好	灰	灰	
第24図	2	12住	須恵器	坏蓋	-	-	3.00	回転ハカスリ・回転子・子	回転子・子	BC	良好	灰黄	灰白	
第24図	3	12住	須恵器	坏身	-	-	2.30	回転子	回転子	BC	良好	灰白	灰	
第24図	4	12住	須恵器	坏身	-	-	3.90	回転子	回転子?調整不明瞭	C	良好	灰褐色	橙	
第24図	5	12住	土師器	甗	(22.90)	-	15.90	子子子?調整不明瞭	子子子?調整不明瞭	ABCE	良	灰白	灰白	
第24図	6	12住	土師器	甗	20.60	-	32.85	子子子・子子子のち一部子	子子子・子子子のち一部子	ACE	良	黄褐色	黄褐色	
第24図	7	12住	土師器	甗	-	-	34.00	子子子・子子子?調整不明瞭	子子子・子	ABCEG	良	にぶい黄褐色・灰白	褐色	外面底部黒斑
第24図	8	12住	土師器	甗	(23.40)	-	25.50	子子子・子	子子子・子	ABC	良	灰白	灰白・褐色	
第24図	9	12住	土師器	甗	(11.70)	-	12.35	調整不明瞭	調整不明瞭・工具痕?	ABCE	良	赤褐色	にぶい黄褐色	
第24図	10	12住	土師器	甗	-	-	5.70	子子子・一部指頭痕・子	子子子・子	ABC	良	黄灰・灰白	浅黄褐色	
第24図	11	12住	土師器	坏身	(12.60)	-	4.70	子子子・子子子?調整不明瞭	子子子・子子子?調整不明瞭	AC	良	橙	橙	
第26図	1	13住	須恵器	坏蓋	12.75	-	3.55	回転子・回転ハカスリ	回転子・子	CE	良好	灰黄・黄灰	黄灰	
第26図	2	13住	須恵器	坏身	(11.80)	-	4.00	回転子・回転ハカスリ	回転子・子	C	良好	灰白・青灰	灰白	内面ハ記号
第26図	3	13住	須恵器	坏身	(11.80)	-	4.40	回転子・回転ハカスリ	回転子・子	C	良好	灰白・灰	灰白・黄灰	内面ハ記号
第26図	4	13住	土師器	甗	(16.60)	-	9.15	子子子・子子子・子	子子子・子	ABCE	良	明赤褐色・にぶい橙	褐色・にぶい橙	
第26図	5	13住	土師器	甗	-	-	3.50	子子子	子子子・子	ACE	良	橙	黒褐色・にぶい橙	
第26図	6	13住	土師器	高坏脚	-	-	4.80	子子子・一部指頭痕	ケズリ	AC	良	橙・浅黄褐色	橙・淡褐色	
第26図	7	13住	土師器	高坏脚	-	-	3.40	調整不明瞭	調整不明瞭	C	良好	明赤褐色・橙	浅黄褐色	
第26図	8	13住	土師器	甗(把手)	-	-	6.45	ケズリ	ナデ	ABC	良	にぶい橙・褐色・灰白	浅黄褐色	
第28図	1	15住	須恵器	坏蓋	-	-	2.70	回転子	回転子	C	良好	灰白	灰白	
第28図	2	15住	須恵器	坏蓋	-	-	3.65	回転子・回転ハカスリ	回転子	C	良好	灰	青灰	
第28図	3	15住	須恵器	坏身	(14.20)	-	3.95	回転子・回転ハカスリ	回転子	C	良好	灰白	橙・灰	
第28図	4	15住	土師器	甗	(20.60)	-	15.30	子子子・子	子子子・子子子・子	ABCE	良	明褐色・にぶい黄褐色	褐色・灰黄	
第28図	5	15住	土師器	高坏	14.55	12.20	9.80	調整不明瞭・子子子	調整不明瞭・子子子・子	C	良	にぶい橙・橙	明赤褐色・浅黄褐色	
第28図	6	15住	土師器	甗	-	-	4.60	子子子・子	子子子・指頭痕	AC	良	橙・灰	橙・にぶい黄褐色	
第28図	7	15住	土師器	甗	-	-	4.70	子子子のち子	ミガキ	C	良好	にぶい橙・黄灰	にぶい橙	
第31図	1	16住	須恵器	坏蓋	(14.50)	-	3.75	回転子・回転ハカスリ	回転子・不定子	C	良好	灰	灰	外面ハ記号
第31図	2	17住	土師器	甗	-	-	7.60	ナデ?調整不明瞭	ケズリ	ABC	良	橙	にぶい黄褐色	
第33図	1	18住	土師器	甗	(14.00)	-	8.20	子子子?調整不明瞭	子子子・子	ACE	良	褐色・にぶい赤褐色	にぶい黄褐色	
第33図	2	18住	土師器	甗	(11.40)	-	9.40	子子子・子子子・一部調整不明瞭	子子子・子子子・子	ABC	良	橙	にぶい黄褐色	
第33図	3	18住	土師器	甗	-	-	8.20	子子子・子子子・子	子子子・子子子	ACE	良	橙	橙	
第33図	4	18住	土師器	甗	-	-	6.20	子子子	子子子・子	ABCG	良	にぶい橙・灰褐色	にぶい褐色	
第33図	5	18住	土師器	高坏	-	-	5.70	子子子?調整不明瞭	子子子?調整不明瞭	ACE	良	橙	灰白	
第33図	6	18住	土師器	甗	(10.60)	-	6.95	指頭痕・子子子?調整不明瞭	指頭痕・子子子?調整不明瞭	ACE	良	橙	灰褐色	
第33図	7	18住	土師器	甗	(10.00)	-	6.00	子子子?調整不明瞭	ナデ	ABC	良	橙	にぶい黄褐色	
第35図	1	19住	土師器	甗	(17.10)	-	15.15	調整不明瞭・子子子?	調整不明瞭・子子子?	ACE	良好	褐色・にぶい橙	褐色・にぶい褐色	
第35図	2	19住	土師器	甗	(14.10)	-	8.70	子子子?調整不明瞭	子子子・子	ABC	良好	赤褐色・橙	褐色・橙	
第35図	3	19住	土師器	甗	-	-	11.00	調整不明瞭	ケズリ	ACE	良	にぶい橙・灰褐色	褐色・にぶい橙	
第35図	4	19住	土師器	甗	-	-	10.15	子子子・子子子?	子子子・子子子のち子	ACE	良好	明赤褐色・橙	橙・浅黄褐色	
第35図	5	19住	土師器	甗	-	-	9.95	子子子・指頭痕・子	ナデ	ABC	良	にぶい黄褐色・褐色	にぶい黄褐色・褐色	
第35図	6	19住	土師器	甗	14.00	-	6.20	子子子・子子子・ミガキ	子子子・子	AC	良好	橙・灰褐色・灰	橙・灰黄褐色	
第35図	7	19住	土師器	甗	(14.80)	-	6.10	子子子・子子子のち子	子子子・子子子・一部子	ABC	良好	橙・浅黄褐色	にぶい橙	
第35図	8	19住	土師器	甗	14.55	-	5.30	子子子・指頭痕のち子	子子子・指頭痕	C	良好	浅黄褐色・灰白	浅黄褐色	
第35図	9	19住	土師器	甗	-	-	5.20	調整不明瞭	ナデ	ABC	良	橙・褐色	にぶい橙	
第35図	10	19住	土師器	甗	(14.70)	-	3.90	子子子?調整不明瞭	子子子?調整不明瞭	C	良	浅黄褐色・黄灰	浅黄褐色・黄灰	
第35図	11	19住	土師器	甗	(14.70)	-	6.40	子子子・子子子	ヨコナデ	ABC	良	赤褐色・灰褐色・浅黄褐色	褐色・橙	
第35図	12	19住	土師器	甗	-	-	4.30	調整不明瞭	ケズリ	C	良	赤褐色・灰白・にぶい褐色	褐色・にぶい橙	粘土接合痕
第35図	13	19住	土師器	高坏	(15.30)	-	5.60	調整不明瞭	ナデ	C	良	橙	浅黄褐色	

法量の単位はcm。( ) 書きは、残存と復原を表す。

胎土：A角閃石 B石英 C長石 D赤色粒子 E白色粒子 F黒色粒子 G雲母 H砂粒



第13表 出土土器観察表③

図版番号	遺構名	種別	器種	法量 (cm)			調整		胎土	焼成	色調		備考	
				口径	底径	器高	外面	内面			外面	内面		
第35図	14	19住	土師器	高环脚	-	-	3.10	ナデ?調整不明瞭	ナデ?調整不明瞭	AC	良	橙	橙・浅黄橙	
第38図	1	20住	土師器	甕	-	-	3.20	ナデ	ナデ・埴目のちナデ	ACE	良	橙	にぶい橙	
第38図	2	21住	須恵器	坏蓋	-	-	3.30	回転ナデ	回転ナデ	C	良好	灰	灰	
第38図	3	21住	土師器	甕	(17.30)	-	5.20	ヨナデ・指頭痕?調整不明瞭	ヨナデのちミガキ・ナリのちナデ	AC	良	橙	褐灰	
第38図	4	21住	土師器	甕	-	-	12.70	ハケ目	ナデ・ナリ	ABC	良	にぶい黄橙	灰黄	
第38図	5	21住	土師器	椀?	(10.40)	-	10.80	ナデ・指頭痕	ナデ・ナリのちナデ	ABCE	良	橙	橙	
第38図	6	21住	土師器	椀	(15.60)	-	5.30	ナデ?調整不明瞭	ナデ	AC	良	橙	にぶい黄橙	
第38図	7	21住	土師器	椀	-	-	2.70	ナデ	ナデ	AC	良	にぶい橙	にぶい橙	
第38図	8	21住	土師器	椀	-	-	3.50	ナデ?調整不明瞭	ナデ?調整不明瞭	AC	良	にぶい橙	にぶい橙	
第38図	9	22住	土師器	甕(胴部)	-	-	21.20	埴目のちナデ	ナリのちナデ?調整不明瞭	AC	良	にぶい黄橙	にぶい黄橙	外面煤付着
第38図	10	22住	土師器	甕	-	-	2.70	ヨナデ・埴目のちナデ	ヨナデ・ナリ・一部工具痕?	AC	良	にぶい橙	灰褐	
第40図	1	23住	土師器	甕	(16.95)	-	30.00	ヨナデ・埴目・ナデ	ヨナデ・指頭痕・ナリのちナデ	AC	良	灰白・灰褐・にぶい橙	浅黄橙・灰白・黒褐	粘土接合痕
第40図	2	23住	土師器	甕	16.85	-	28.05	ヨナデのちミガキ?・埴目のちミガキ?	ヨナデ・ナデ・ナリのちナデ	ABC	良好	にぶい橙・褐灰・にぶい褐	にぶい橙・橙・褐灰	粘土接合痕
第40図	3	23住	土師器	甕	15.35	-	27.55	ヨナデ・埴目のちナデ	ヨナデ・埴目・ナリのちナデ	AC	良好	浅黄橙・暗灰・にぶい橙	浅黄橙・橙・褐灰	粘土接合痕
第40図	4	23住	土師器	甕	12.70	-	27.15	ヨナデ・埴目	ヨナデ・埴目のちナデ・ナリのちナデ	AC	良好	にぶい橙・灰白・灰	灰白・褐灰	
第40図	5	23住	土師器	甕	-	-	4.75	ヨナデ・ナデ?	ヨナデ・ナデ・ナリ	ABC	良好	にぶい黄橙・褐灰・灰	浅黄橙・にぶい橙	
第40図	6	23住	土師器	甕	-	-	4.40	ヨコナデ	ナデ・埴目・ナリ?	AC	良好	浅黄橙	浅黄橙	
第40図	7	23住	土師器	甕	-	-	5.75	ヨコナデ	ヨナデ・ナデ・ナリ	C	良好	浅黄橙	にぶい黄橙・灰白	
第40図	8	23住	土師器	甕	(14.80)	-	6.70	ヨナデ・ナデ	ヨナデ・ナリ?・埴目のちナデ	AC	良好	灰白・橙	灰白	
第40図	9	23住	土師器	壺	8.55	-	10.10	ヨナデ・ナデ・埴目	埴目・ナリ?	C	良好	浅黄橙・灰黄褐・灰	灰・橙	
第40図	10	23住	土師器	壺	(8.60)	-	9.00	ヨナデ・ナデ・埴目	ナデ・ナリ・ヨナデ	C	良好	橙・浅黄橙・灰白	橙・浅黄橙	
第40図	11	23住	土師器	壺	8.50	-	9.90	ヨナデ・ナデ・埴目	ヨナデ・埴目・指頭痕・ナリ	AC	良好	橙・褐灰・にぶい橙	橙・にぶい黄橙	
第40図	12	23住	土師器	壺	-	-	7.40	ヨナデ・ナデ・埴目	ナデ・ナリ・一部調整不明瞭	C	良好	黒褐・灰白	黒褐・黄灰	
第40図	13	23住	土師器	壺	-	-	10.10	ナデ・埴目	ナデ・ナリ	AC	良好	橙・灰白	暗灰	粘土接合痕
第40図	14	23住	土師器	甗	14.25	-	8.10	ナデ	ナデ・埴目	C	良好	橙・浅黄橙	淡赤橙・灰白・浅黄橙	
第41図	15	23住	土師器	高环	20.70	14.90	14.60	ヨナデ・ナデ・埴目・工具痕	ナデ・埴目・ヨナデ・ナリ	AC	良好	灰白・黒褐	灰白・黄灰	
第41図	16	23住	土師器	高环	(21.65)	13.00	14.75	ヨナデ・ナデ・埴目・ミガキ	ヨナデ・ナデ・ナリ	AC	良好	浅黄・黄灰・灰白	浅黄橙・灰・灰黄	粘土接合痕・口縁部黒斑
第41図	17	23住	土師器	高环	20.30	15.10	14.95	ヨナデ・ナデ・指頭痕	ナデ・ナリ	AC	良好	橙・浅黄橙・黄灰	灰白・浅黄橙・黄灰	口縁部と底部に黒斑
第41図	18	23住	土師器	高环	14.40	11.25	11.00	埴目のちナデ・ナデ・工具痕	埴目のちナデ・ナデ・指頭痕・ナリ	AC	良好	浅黄橙・黄灰・灰	灰白・灰・にぶい黄橙	
第41図	19	23住	土師器	高环脚	-	12.95	8.40	ヨナデ・ナデ・埴目	ヨナデ・ナリ	AC	良好	浅黄橙	浅黄橙・褐灰	
第41図	20	23住	土師器	高环	(21.60)	-	8.15	ヨナデ・ナデ	ヨナデ・ナデ・埴目	AC	良好	灰白・浅黄橙・黄灰	にぶい橙・浅黄橙・黄灰	
第41図	21	23住	土師器	高环	19.00	-	6.90	ヨナデ・一部埴目	ナデ	ABCE	良	橙・浅黄橙	橙・灰白・暗灰	
第41図	22	23住	土師器	高环	(17.80)	-	5.15	ヨナデ・ナデ	ヨナデ・一部調整不明瞭	ACE	良	にぶい橙・褐灰	浅黄橙・橙	
第41図	23	23住	土師器	高环	(21.40)	-	5.40	ヨナデ・ミガキ?・指頭痕・埴目のちナデ	ナデ	C	良好	にぶい橙・灰	にぶい黄橙	
第41図	24	23住	土師器	高环	(19.00)	-	4.50	ヨナデ・埴目のちナデ	ヨナデ・埴目	AC	良好	橙・灰褐・灰	橙・灰白・黄灰	
第41図	25	23住	土師器	高环	(19.40)	-	6.05	ナデ・埴目のちナデ	ヨナデ・埴目・一部調整不明瞭	AC	良好	灰白・灰	灰白・褐灰・にぶい橙	
第41図	26	23住	土師器	高环脚	-	(16.00)	9.70	ナデ・埴目?・ヨナデ	ヨナデ・埴目・ナリ	CD	良好	にぶい黄橙	にぶい黄橙・にぶい橙	
第41図	27	23住	土師器	高环脚	-	15.10	8.50	ナデ・指頭痕	ナデ・ナリ	ABC	良好	にぶい橙・黒	にぶい橙・橙・黒	
第41図	28	23住	土師器	高环	-	-	2.65	ナデ	ナデ	ACE	良好	橙	にぶい橙	
第41図	29	23住	土師器	高环脚	-	-	6.45	ナデ	ナデ・ナリ	C	良好	浅黄橙	浅黄橙	
第41図	30	23住	土師器	高环脚	-	-	8.30	ナデ・一部ミガキ	ナデ・ナリ	AC	良好	にぶい黄橙・灰	にぶい黄橙	
第43図	1	24住	須恵器	坏身	-	-	2.50	回転ナデ・ナデ	回転ナデ	C	良好	灰白	灰	
第43図	2	24住	須恵器	坏身	-	-	3.75	回転ナデ・回転ヘナリ	回転ナデ・ナデ	AC	良好	淡黄	淡黄	
第43図	3	24住	須恵器	坏身	-	-	3.50	回転ナデ・回転ヘナリ	回転ナデ	C	良好	灰	灰	
第43図	4	24住	須恵器	壺	-	-	2.20	回転ナデ・波状紋	回転ナデ・ナデ	C	良好	灰	灰	
第43図	5	24住	須恵器	壺	-	-	4.80	回転ナデ・波状紋	回転ナデ	C	良好	灰	灰	
第43図	6	24住	須恵器	壺	-	-	1.90	回転ナデ・波状紋	回転ナデ・ナデ	C	良好	灰	灰	
第43図	7	24住	須恵器	広口壺	(20.80)	-	7.90	波状紋・ナリ	回転ナデ	BC	良好	灰	灰	
第43図	8	24住	土師器	甕	-	-	7.30	ヨナデ・埴目のちナデ	ナデ・ナリ	ABCE	良	にぶい橙	褐灰	
第43図	9	24住	土師器	甕	-	-	4.90	ヨナデ・埴目・ナデ	ヨナデ・ナデ	AC	良	にぶい黄橙	にぶい黄橙	粘土接合痕
第43図	10	24住	土師器	甕	-	-	7.50	ナデ	ナデ・ナリ	ABCE	良	にぶい黄橙	褐灰	
第43図	11	24住	土師器	甕	(19.80)	-	2.40	ヨコナデ	ナデ	ABC	良	橙	にぶい黄橙	
第43図	12	24住	土師器	甕	13.20	-	16.60	ヨナデ・埴目・ナデ	ヨナデ・ナリ・ナデ	ABCG	良	にぶい橙・褐灰	褐灰	
第43図	13	24住	土師器	甕	12.20	-	7.00	ヨナデ・ナデ	ナデ・ナリ	AC	良	橙	にぶい黄橙	
第43図	14	24住	土師器	壺	8.00	-	11.90	ナデ?調整不明瞭	ヨナデ・ナデ・ミガキ・指頭痕	ACE	良	橙	橙	粘土接合痕
第43図	15	24住	土師器	甗	-	-	16.10	ハケ目	ナデ・ナリ	ABCE	良	浅黄橙	浅黄橙	外面煤付着
第43図	16	24住	土師器	甗	15.80	-	13.50	ヨナデ・ナデ	ヨナデ・指頭痕・ナリのちナデ	ABC	良	にぶい黄橙	にぶい黄橙	外面煤付着・底部穿孔
第43図	17	24住	土師器	椀	(16.60)	-	6.40	ナデ	ナデのちミガキ	ACDE	良	橙・褐灰	橙	
第43図	18	24住	土師器	椀	14.40	-	6.30	ヨナデ・ナデ・指頭痕	ナデ・指頭痕	ACE	良	橙・褐灰	橙・褐灰	
第43図	19	24住	土師器	椀	12.80	-	6.10	ナデ・指頭痕・ナリ	ナデ・ミガキ	ACE	良	にぶい橙・にぶい黄橙	橙	

法量の単位はcm。( ) 書きは、残存と復原を表す。

胎土: A角四石 B石英 C長石 D赤色粒子 E白色粒子 F黒色粒子 G雲母 H砂粒

第14表 出土土器観察表④

図版番号	遺構名	種別	器種	法量 (cm)			調整		胎土	焼成	色調		備考	
				口径	底径	器高	外面	内面			外面	内面		
第43図	20	24住	土師器	椀	(16.70)	-	5.70	ナデ	炙りのちび	ABC	良	橙	橙	
第43図	21	24住	土師器	椀	14.00	-	6.40	ヨコナデ・ナデ・指頭痕	ナデ	ABC	良	橙	橙	
第43図	22	24住	土師器	椀	14.60	-	6.65	ナデ・炙り	ナデ	AC	良	橙	橙	
第43図	23	24住	土師器	高環脚	-	-	5.50	炙り・ヨコナデ	炙りのちび	AC	良	にぶい黄橙	にぶい黄橙	
第46図	1	25住	須恵器	坏蓋	(14.20)	-	3.75	回転ナデ・回転へんがし	回転ナデ・不定ナデ	BCE	良好	灰	灰	
第46図	2	25住	須恵器	坏身	(12.00)	-	4.70	回転ナデ・回転へんがし	回転ナデ・不定ナデ	CE	良好	灰	灰	
第46図	3	25住	須恵器	坏蓋	-	-	2.50	回転ナデ	回転ナデ	C	良好	黄灰	灰	
第46図	4	25住	須恵器	坏身	(11.00)	-	3.80	回転ナデ・回転へんがし	回転ナデ・回転ナデのちび	C	良好	黄灰・灰	灰	
第46図	5	25住	須恵器	甕	-	-	2.60	回転ナデ	回転ナデ・一部ナデ	BC	良好	灰	灰	
第46図	6	25住	土師器	甕	-	-	5.50	ナデ	ヨコナデ・炙り	AC	良	にぶい黄橙	にぶい橙	
第46図	7	25住	土師器	高環脚	-	-	4.20	へ目のちび・ナデ	炙りのちび・ナデ	AC	良	にぶい橙	浅黄橙	
第46図	8	26住	須恵器	坏身	(11.20)	-	5.30	回転ナデ・回転へんがし	回転ナデ・ナデ	BC	良好	灰	灰	
第46図	9	26住	須恵器	高環?	-	-	3.90	回転ナデ	回転ナデ	C	良好	灰	灰	
第46図	10	26住	土師器	高環脚	-	-	3.10	ナデ	ナデ・へ目のちび	C	良	浅黄橙	浅黄橙	
第46図	11	26住	土師器	甕	-	-	7.30	ナデ	ヨコナデのちび	ACDEG	良	にぶい橙	灰黄褐	粘土接合痕
第46図	12	27住	須恵器	坏身	(9.80)	-	3.35	回転ナデ・回転へんがし	回転ナデ・不定ナデ	C	良好	灰	灰	
第46図	13	27住	土師器	甕	-	-	4.30	ヨコナデ?調整不明瞭	ヨコナデ	AC	良	にぶい褐	褐灰	
第46図	14	28住	土師器	椀	-	-	2.80	ヨコナデ・炙りのちび	ナデ	AC	良	にぶい褐	明黄褐	
第50図	1	1溝	須恵器	坏蓋	(13.80)	-	4.20	回転ナデ・回転へんがし	回転ナデ・工具痕	C	良好	灰	灰	
第50図	2	1溝	須恵器	坏身	(13.50)	-	3.50	回転ナデ・回転へんがし	回転ナデ・不定ナデ	BCE	良好	灰	灰白	
第50図	3	1溝	須恵器	坏身	11.90	-	4.00	回転ナデ・回転へんがし	回転ナデ・不定ナデ	BCE	良好	灰	灰	
第50図	4	1溝	須恵器	坏身	(11.90)	-	4.40	回転ナデ・回転へんがし	回転ナデ	C	良好	灰	灰	
第50図	5	1溝	須恵器	坏身	(10.80)	-	4.20	調整不明瞭	回転ナデ・不定ナデ	C	良好	灰白	灰	
第50図	6	1溝	須恵器	坏身	(12.00)	-	4.10	回転ナデ・回転へんがし	回転ナデ・工具痕	BC	良好	灰	灰	
第50図	7	1溝	土師器	坏身	-	-	2.90	ヨコナデ	ヨコナデ	AC	良	浅黄橙	浅黄橙	
第50図	8	1溝	土師器	坏身	-	-	3.30	ヨコナデ・回転へんがし	ヨコナデ	C	良	にぶい黄橙	にぶい黄橙	
第50図	9	1溝	須恵器	壺	-	-	4.00	回転ナデ・波状紋	回転ナデ・ナデ	C	良好	灰	灰	
第50図	10	1溝	須恵器	壺?甕?	-	-	5.70	回転ナデ・波状紋	回転ナデ	C	良好	灰	灰	
第50図	11	1溝	土師器	甕	-	-	4.60	ヨコナデのちびへ目	ヨコナデ・ナデ	C	良	灰白	灰白	
第50図	12	1溝	土師器	甕	-	-	5.40	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデのちび・炙り	AC	良	にぶい褐	にぶい橙	
第50図	13	1溝	土師器	甕	-	-	4.70	ヨコナデ	ナデ・炙り?	AC	良	灰白	灰白	
第50図	14	1溝	土師器	椀	-	-	3.60	ナデ	ナデのちび	C	良	橙	橙	
第50図	15	1溝	土師器	椀	-	-	4.00	ヨコナデ・炙り	ナデのちび?	AC	良	橙	灰褐	
第50図	16	1溝	土師器	椀	-	-	4.60	ナデ	ナデのちび?	AC	良	にぶい黄橙	にぶい黄橙	
第50図	17	1溝	土師器	椀	-	-	5.00	炙りのちび	ナデのちび	AC	良	にぶい橙・浅黄橙	にぶい橙・浅黄橙	外面黒斑
第50図	18	1溝	土師器	椀	-	-	4.90	ヨコナデ・炙り	ヨコナデのちび	AC	良	褐灰	褐灰・灰黄褐	
第50図	19	1溝	土師器	椀	-	-	3.70	ヨコナデ・炙りのちび	ミガキ	AC	良	にぶい黄橙・黒褐	にぶい黄橙・黒褐	
第50図	20	1溝	土師器	椀	-	-	5.40	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデのちび	AC	良	褐灰	黒褐	
第50図	21	1溝	土師器	高環	-	-	4.00	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	C	良	にぶい黄橙	にぶい黄橙	
第50図	22	1溝	土師器	高環脚	-	-	7.10	ナデ	炙りのちび・ナデ	AC	良	にぶい黄橙	にぶい黄橙	
第50図	23	1溝	土師器	高環脚	-	-	3.60	ヨコナデ	ヨコナデ	C	良	にぶい橙	にぶい橙	
第50図	24	1溝	土師器	ミガキ高環	3.90	-	4.40	ナデ	ナデ	AC	良	にぶい橙	にぶい橙	
第50図	25	1溝	土師器	甕(把手)	-	-	5.00	炙りのちび	炙りのちび	CG	良	浅黄橙	浅黄橙	
第50図	26	1溝	土師器	甕(把手)	-	-	6.00	炙り・ナデ	炙り・ナデ	AC	良	橙	橙	
第50図	27	1溝	土師器	甕(把手)	-	-	4.55	炙り・ナデ	炙り・ナデ	AC	良	灰黄	灰黄	
第50図	28	4溝	須恵器	坏身	-	-	3.80	回転ナデ	回転ナデ	C	良好	褐灰	明褐灰	
第50図	29	4溝	須恵器	壺	-	-	6.80	回転ナデ・波状紋	回転ナデ・ナデ	C	良好	灰	灰	
第50図	30	4溝	須恵器	甕	-	-	3.00	回転ナデ	回転ナデ	C	良好	灰	灰	
第50図	31	4溝	土師器	高環	-	-	4.50	ヨコナデ・ナデ?調整不明瞭	ナデ・一部	C	良	にぶい黄橙	灰白	
第52図	1	5溝	須恵器	坏身	-	-	3.40	回転ナデ・回転へんがし	回転ナデ・ナデ	C	良好	灰	灰	
第52図	2	5溝	土師器	坏身	-	7.50	2.70	ヨコナデ・ナデ	ナデ	AC	良	にぶい黄橙	にぶい黄橙	粘土接合痕
第52図	3	5溝	須恵器	坏身	-	(8.40)	1.60	回転ナデ	ナデ	C	良好	灰	灰	
第52図	4	5溝	須恵器	坏身	-	(10.20)	1.20	回転ナデ・ナデ	ナデ	C	良好	灰	灰白	粘土接合痕
第52図	5	5溝	土師器	坏身	-	-	1.60	ヨコナデ・ナデ	ナデ	AC	良	浅黄橙	浅黄橙	粘土接合痕
第52図	6	5溝	土師器	坏身	-	-	1.90	ヨコナデ・ナデ	ナデ	AC	良	浅黄橙	灰白	粘土接合痕
第52図	7	5溝	須恵器	壺	-	-	4.50	回転ナデ・波状紋	ナデ	C	良好	灰	灰黄褐	
第52図	8	5溝	土師器	椀	(14.00)	-	3.00	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	C	良	にぶい橙	黒褐	内外面黒斑
第52図	9	5溝	土師器	坏身?椀?	-	(8.00)	3.70	ヨコナデ・ナデ	ナデ	C	良	灰白・にぶい橙・黒	黒	内外面黒斑・粘土接合痕
第52図	10	5溝	土師器	甕	-	-	5.60	ヨコナデ	ヨコナデ・ナデ・炙り	AC	良	にぶい橙	にぶい黄橙	
第52図	11	5溝	土師器	甕	-	-	7.10	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ・炙り	AC	良	にぶい黄橙	灰白	

法量の単位はcm。( ) 書きは、残存と復原を表す。

胎土：A角閃石 B石英 C長石 D赤色粒子 E白色粒子 F黒色粒子 G雲母 H砂粒

第15表 出土土器観察表⑤

図版番号	遺構名	種別	器種	法量 (cm)			調整		胎土	焼成	色調		備考	
				口径	底径	器高	外面	内面			外面	内面		
第52図	12	6溝	須恵器	坏身	-	-	3.30	回転ナデ・回転ヘカスリ	回転ナデ・不定ナデ	C	良好	灰白	灰白	
第52図	13	6溝	須恵器	坏身	-	-	1.60	回転ナデ	回転ナデ	C	良好	灰	灰	
第52図	14	7溝	須恵器	坏身	-	-	1.80	回転ナデ	回転ナデ	C	良好	灰白	灰白	
第52図	15	9溝	須恵器	坏蓋	10.60	-	2.80	回転ナデ	回転ナデ・不定ナデ	C	良好	灰白	灰白	内面へ記号
第52図	16	9溝	土師器	甕	-	-	5.60	ナデ?調整不明瞭	ナデ・灰りのちナデ	AC	良	にぶい黄橙	灰白	
第52図	17	9溝	土師器	甕	-	-	6.20	ナデ・指頭痕	ナデ・灰りのちナデ	AC	良	灰白	灰白	
第58図	1	1土	土師器	手捏	(3.50)	-	2.60	ナデ・指頭痕	ナデ・指頭痕	AC	良	灰白	灰白	
第58図	2	4土	須恵器	坏身	-	-	1.60	回転ナデ	回転ナデ	C	良好	灰	灰	
第58図	3	6土	土師器	碗?	12.30	-	5.90	ヨコナデ・灰りのちナデ	ヨコナデ・ナデ	AC	良	橙	橙	
第58図	4	6土	土師器	甕	-	-	11.25	ナデ・灰りのちナデ	ナデ	ABC	良	浅黄橙・にぶい橙	橙・にぶい橙	粘土接合痕
第58図	5	8土	青磁	碗	-	-	4.00	施釉	施釉	-	-	-	-	
第58図	6	10土	須恵器	坏身	-	-	1.90	回転ナデ	回転ナデ	C	良好	灰	灰	
第58図	7	10土	須恵器	壺	-	-	4.50	回転ナデ・ナデ・波状紋	ナデ	C	良好	灰白	灰白	
第58図	8	11土	須恵器	坏蓋	-	-	3.20	回転ナデ	回転ナデ	BC	良好	灰	灰	
第58図	9	14土	土師器	甕	-	-	3.40	ナデ?調整不明瞭	ナデ?調整不明瞭	AC	良	にぶい黄橙	にぶい黄橙	
第58図	10	14土	土師器	甕	(10.70)	-	3.50	ヨコナデ	ヨコナデ・灰り・ナデ	ABCE	良	灰褐	黒褐	
第58図	11	15土	土師器	甕	-	-	3.80	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・灰りのちナデ	AC	良	褐灰	褐灰	
第58図	12	16土	須恵器	坏身	-	-	2.30	回転ナデ	回転ナデ	C	良好	灰	灰	
第58図	13	17土	須恵器	坏身	-	-	1.20	回転ナデ・ナデ	ナデ	BC	良好	灰	灰	
第58図	14	17土	青磁	碗	-	-	2.10	施釉	施釉	-	-	-	-	
第58図	15	17土	土師器	甕	-	-	4.90	ヨコナデ・ナデのち一部ナデ	ヨコナデ・ナデのち一部ナデ	AC	良	にぶい黄橙	にぶい黄橙	
第58図	16	18土	須恵器	坏身	-	-	3.00	回転ナデ	回転ナデ	C	良好	灰	灰	
第58図	17	18土	青磁	碗	-	-	5.60	施釉	施釉	-	-	-	-	
第58図	18	19土	土師器	高坏脚	-	-	4.50	ナデ	ケズリ	AC	良	橙	橙	
第58図	19	19土	土師器	碗	12.10	3.30	5.60	灰りのちナデ・ナデ	灰りのちナデ・ナデ	ABC	良	褐灰	褐灰	
第58図	20	21土	須恵器	坏身	-	-	1.30	回転ナデ	ナデ	C	良好	灰	灰	
第58図	21	21土	須恵器	坏身	-	-	2.70	ナデ	回転ナデ	C	良好	灰	灰	
第58図	22	21土	土師器	甕	-	-	6.30	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ・灰り	AC	良	淡黄	淡黄	
第58図	23	21土	青磁	碗	-	-	1.10	施釉	施釉	-	-	-	-	
第58図	24	22土	須恵器	坏蓋	-	-	1.35	回転ナデ	回転ナデ	C	良好	灰	灰	
第58図	25	22土	須恵器	坏身	-	-	2.80	回転ナデ・ナデ	回転ナデ	C	良好	灰	灰	粘土接合痕
第58図	26	22土	須恵器	坏身	-	-	1.30	回転ナデ・ナデ	ナデ	C	良好	灰	灰	
第58図	27	22土	須恵器?	壺	-	-	1.30	回転ナデ・ナデ	回転ナデ	BCE	良好	にぶい黄橙	緑灰	
第58図	28	22土	青磁	碗	-	-	2.10	施釉	施釉	-	-	-	-	
第58図	29	22土	瓦器	火鉢	-	-	4.90	ナデ	ナデ・竹目	C	良	黄灰	黄灰	
第58図	30	22土	瓦器	火鉢	-	-	10.40	ナデ	ヨコナデ・ナデ	AC	良好	浅黄橙・にぶい橙	灰	粘土接合痕
第58図	31	25土	土師器	碗	11.70	-	5.50	竹目のちナデ	ナデ	BC	良	にぶい橙	灰白	
第58図	32	27土	須恵器	坏蓋	-	-	3.20	回転ナデ・ナデ	回転ナデ・不定ナデ	C	良好	灰	灰白	
第58図	33	28土	須恵器	坏身	-	-	2.50	回転ナデ	回転ナデ	C	良好	灰白	灰白	
第58図	34	28土	須恵器	壺	-	-	7.20	回転ナデ・波状紋	回転ナデ・ナデ	C	良好	灰白	灰白	
第58図	35	28土	土師器	甕	-	-	4.10	ナデ	ナデ	ABC	良	橙	橙	
第58図	36	28土	須恵器	坏蓋	-	-	2.40	回転ナデ・ナデ	回転ナデ・ナデ	C	良好	灰	灰	
第58図	37	28土	須恵器	坏蓋	-	-	1.50	回転ナデ	回転ナデ	C	良好	灰	灰	
第58図	38	28土	須恵器	坏身	-	-	3.50	回転ナデ	回転ナデ	BC	良好	灰	灰	
第58図	39	28土	土師器	浅鉢	-	-	7.50	ヨコナデ・ナデ・横方向の竹目	ヨコナデ	AC	良	褐灰	にぶい黄橙	
第59図	1	P71	須恵器	坏蓋	(14.10)	-	4.10	回転ナデ・回転ヘカスリ	回転ナデ	BC	良好	灰	灰	
第59図	2	P43	須恵器	坏蓋	-	-	1.90	回転ナデ	回転ナデ	C	良好	灰	灰	
第59図	3	P11	須恵器	坏身	-	-	2.20	回転ナデ・回転ナデのちナデ	回転ナデ	C	良好	灰	灰	
第59図	4	P51	須恵器	甕	-	-	1.40	回転ナデ	回転ナデ	C	良好	灰	灰	
第59図	5	P45	土師器	甕	-	-	2.90	ナデ	ナデ	AC	良	明赤褐	褐灰	
第59図	6	P49	土師器	甕	-	-	2.80	ヨコナデのちナデ	ヨコナデのち一部ナデ?	ABC	良	橙	橙	
第59図	7	P53	土師器	甕	-	-	3.10	ヨコナデのちナデ	ヨコナデのちナデ	AC	良	浅黄橙	浅黄橙	
第59図	8	P3	土師器	碗	-	-	6.40	ナデ	ナデ	ACG	良	にぶい黄橙	にぶい黄橙	
第59図	9	P71	土師器	碗	-	-	5.90	調整不明瞭	ナデ・一部指頭痕	ACG	良	灰白・褐灰	褐灰・にぶい黄橙	
第60図	1	水田層	須恵器	坏蓋	-	-	3.95	回転ナデ・不定ナデ・回転ヘカスリ	回転ナデ・不定ナデ	BCE	良好	褐灰・灰白	灰	
第60図	2	水田層	土師器	甕	-	-	5.10	ヨコナデ一部ナデ・ナデ	ヨコナデ一部ナデ・灰り?	AC	良	浅黄橙	浅黄橙	
第60図	3	水田層	青磁	碗	-	5.20	2.20	ヘカスリ・回転ヘカスリ	施釉	-	-	-	-	文様
第60図	4	一括	須恵器	坏蓋	(13.30)	-	4.75	回転ナデ・回転ヘカスリ	回転ナデ・不定ナデ	C	良好	灰	灰	
第60図	5	一括	須恵器	高坏蓋?	(13.20)	-	4.10	回転ナデ	回転ナデ・ナデ	C	良	褐灰	にぶい橙	初期須恵器
第60図	6	一括	須恵器	坏身	-	-	2.00	回転ナデ	回転ナデ	C	良好	灰	灰	

法量の単位はcm。( ) 書きは、残存と復原を表す。

胎土: A角閃石 B石英 C長石 D赤色粒子 E白色粒子 F黒色粒子 G雲母 H砂粒

第16表 出土土器観察表⑥

図版番号	遺構名	種別	器種	法量 (cm)			調整		胎土	焼成	色調		備考	
				口径	底径	器高	外面	内面			外面	内面		
第60図	7	一括	須恵器	甌	-	-	6.70	回転ナデ・ナデ・ハナズリ・列点文	回転ナデ・工具痕	BCE	良好	灰	灰	穿孔
第60図	8	一括	須恵器	壺	-	-	3.10	回転ナデ・波状紋	回転ナデ・ナデ	C	良好	灰白	灰白	
第60図	9	一括	須恵器	高環脚	-	8.60	10.00	回転ナデ・回転ナデのちナデ	回転ナデ	C	良好	灰	灰	
第60図	10	一括	青磁	椀底部	-	5.30	1.70	施軸	施軸	-	-	-	-	文様
第60図	11	一括	土師器	甕	-	-	2.40	ナデ	ナデ	ABC	良	灰褐	にぶい橙	
第60図	12	P78	弥生土器	甕	-	-	5.40	ナデ	ナデ	ABC	良	にぶい黄橙	浅黄橙	
第60図	13	1溝	弥生土器	甕	-	-	7.90	ナデ	ナデ	ABCE	良	灰褐	黒褐	
第60図	14	P76	弥生土器	壺胴部	-	-	4.20	ナデ	ナデ	ACE	良	にぶい黄橙	にぶい黄橙	粘土接合痕
第60図	15	一括	土師器	支脚	-	-	11.20	ナデ	ナデ	ABCE	良	橙	橙	
第60図	16	1溝	弥生土器	甕底部	-	-	4.10	ナデ	ナデ	AC	良	黒	にぶい黄橙	
第61図	1	19住	縄文土器	粗製深鉢	(25.70)	-	9.00	ナデ	ナデ	ABCE	良	橙	赤褐	
第61図	2	21土	縄文土器	深鉢	-	-	6.20	ナデ	ナデ	AC	良	にぶい黄橙	にぶい黄橙	
第61図	3	21土	縄文土器	深鉢	-	-	8.60	ナデ	ナデ	ACE	良	にぶい黄橙	褐灰	
第61図	4	21土	縄文土器	鉢	-	-	5.20	ナデ	ナデ	AC	良	にぶい橙	にぶい黄橙	
第61図	5	21土	縄文土器	鉢	-	-	5.20	ナデ	ナデ	AC	良	にぶい黄橙	にぶい黄橙	
第61図	6	1溝	縄文土器	浅鉢	-	-	4.80	ナデ	ナデ	ACG	良	にぶい黄橙	にぶい黄橙	
第61図	7	P47	縄文土器	浅鉢	-	-	4.20	ナデ	ナデ	ACE	良	にぶい褐	褐灰	
第61図	8	9溝	縄文土器	鉢	-	-	3.60	ナデ	ナデ	ABC	良	にぶい橙	にぶい黄橙	
第61図	9	3土	縄文土器	鉢	-	-	4.20	ナデ	ナデ	ACE	良	灰褐	明赤褐	
第61図	10	3土	縄文土器	鉢	-	-	3.70	ナデ	ナデ	AC	良	灰黄褐・にぶい橙	橙	
第61図	11	21土	縄文土器	浅鉢	-	-	4.40	ナデ	ナデ	ACE	良	にぶい橙	にぶい橙	
第61図	12	21土	縄文土器	浅鉢	-	-	3.90	ナデ	ナデ	AC	良	にぶい黄橙	褐灰	
第61図	13	21土	縄文土器	浅鉢	-	-	3.20	ナデ	ナデ	AC	良	灰黄・褐灰	灰黄・黄灰	
第61図	14	1溝	縄文土器	浅鉢	-	-	4.00	ナデ	ナデ	AC	良	にぶい橙	にぶい黄橙	
第61図	15	1溝	縄文土器	浅鉢	-	-	2.70	ナデ	ナデ	AC	良	にぶい橙	褐灰	
第61図	16	1溝	縄文土器	浅鉢	-	-	3.60	ナデ	ナデ	AC	良	橙	にぶい橙	
第61図	17	一括	縄文土器	浅鉢	-	-	2.40	ナデ	ナデ	AC	良	灰黄	灰黄	
第61図	18	1溝	縄文土器	鉢	-	-	3.10	ナデ	ナデ	AC	良	にぶい橙	にぶい黄橙	
第61図	19	21土	縄文土器	浅鉢	-	-	2.00	ナデ	ナデ	AC	良	褐灰	褐灰	
第61図	20	21土	縄文土器	浅鉢	-	-	2.60	ナデ	ナデ	AC	良	にぶい橙	にぶい橙	
第61図	21	21土	縄文土器	浅鉢底部	-	-	1.50	ナデ	ナデ	ACE	良	褐灰	にぶい黄橙	
第61図	22	12住	縄文土器	底部	-	(7.80)	2.60	ナデ	ナデ	AC	良	橙	灰白	
第61図	23	一括	縄文土器	底部	-	11.00	3.50	ナデ	ナデ	AC	良	にぶい橙	にぶい橙	
第61図	24	12住	縄文土器	底部	-	(7.00)	3.00	ナデ	ナデ	ACE	良	橙	にぶい黄橙	
第61図	25	13住	縄文土器	底部	-	(8.20)	1.60	ナデ	ナデ	AC	良	橙	褐灰	
第61図	26	1溝	縄文土器	底部	-	-	2.70	ナデ	ナデ	AC	良	にぶい黄橙	にぶい黄橙	
第61図	27	21土	縄文土器	底部	-	-	2.00	ナデ	ナデ	AC	良	橙	橙	
第61図	28	3土	縄文土器	底部	-	-	1.70	ナデ	ナデ	AC	良	浅黄橙	にぶい黄橙	

法量の単位はcm。( ) 書きは、残存と復原を表す。

胎土：A角閃石 B石英 C長石 D赤色粒子 E白色粒子 F黒色粒子 G雲母 H砂粒

第17表 出土石器・土製品観察表

図版番号	遺構名	種別	材質	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重さ(g)	胎土	色調	調整	
第62図	1	22土	五輪塔	凝灰岩	21.65	15.35	10.15	1980.0			
第62図	2	一括	磨石	安山岩	21.70	18.80	6.40	4200.0			
第62図	3	24住	磨石	安山岩	15.50	10.90	3.20	672.5			
第62図	4	一括	石庖丁	砂岩	2.50	8.85	0.90	25.5			
第62図	5	一括	石錘	安山岩	3.90	3.55	2.80	56.2			
第62図	6	12住	砥石	砂岩	3.95	1.60	2.00	15.9			
第62図	7	一括	土錘	土製品	5.50	1.35	1.20	9.6	ABC	杓-ア黒・にぶい黄橙	行・指頭痕
第62図	8	1溝	不明品	安山岩	1.70	0.85	0.80	1.8			
第62図	9	一括	紡錘車	安山岩	4.30	4.30	2.80	57.7			
第62図	10	1溝	紡錘車	安山岩	4.25	4.30	0.75	23.1			
第62図	11	一括	勾玉	含クロム雲母	3.90	1.65	0.80	5.9			
第62図	12	24住	勾玉	土製品	2.10	1.40	0.75	1.2	ABD	灰白・にぶい褐	ナデ
第62図	13	8住	円盤状石器	緑泥片岩	2.10	2.10	0.30	2.7			
第62図	14	17住	三稜尖頭器	安山岩	7.60	1.95	1.50	20.0			
第63図	15	1溝	石鏃	安山岩	2.85	2.25	0.35	2.0			
第63図	16	1溝	石鏃	姫島黒曜石	1.45	1.40	0.35	0.6			
第63図	17	4溝	石鏃	チャート	1.90	1.15	0.20	0.4			
第63図	18	4溝	石鏃	姫島黒曜石	2.10	1.90	0.40	0.9			
第63図	19	8住	石鏃	姫島黒曜石	2.30	1.90	0.35	1.0			
第63図	20	23住	石鏃	安山岩	2.25	1.65	0.30	0.8			
第63図	21	3土	石鏃	安山岩	1.95	1.60	0.30	0.8			
第63図	22	4溝	石鏃	安山岩	2.10	1.80	0.50	1.7			
第63図	23	P76	石鏃	黒曜石	2.40	1.30	0.50	1.0			
第63図	24	一括	石鏃(未)	姫島黒曜石	2.65	1.80	0.70	2.0			
第63図	25	22土	石鏃	安山岩	5.10	4.90	0.90	16.3			
第63図	26	1溝	二次加工剥片	安山岩	3.70	6.50	1.30	21.0			
第63図	27	一括	石鏃	安山岩	2.80	2.10	0.60	2.9			
第63図	28	一括	異形石器?	姫島黒曜石	1.80	4.00	0.50	2.2			
第64図	29	1溝	二次加工剥片	安山岩	5.85	3.40	1.20	27.7			
第64図	30	一括	二次加工剥片	安山岩	5.45	2.50	1.25	18.6			
第64図	31	P50	二次加工剥片	安山岩	3.95	2.50	1.15	10.4			
第64図	32	1溝	二次加工剥片	安山岩	3.25	2.45	0.80	5.9			
第64図	33	1溝	二次加工剥片	安山岩	3.30	2.70	0.75	6.8			
第64図	34	21土	二次加工剥片	安山岩	3.40	2.25	1.20	7.5			
第64図	35	1溝	二次加工剥片	安山岩	2.75	3.20	0.90	9.2			
第64図	36	水田層	二次加工剥片	黒曜石	5.05	2.30	0.80	7.2			
第64図	37	28土	二次加工剥片	黒曜石	2.70	1.65	0.70	3.1			
第64図	38	19住	二次加工剥片	黒曜石	1.90	0.85	0.20	0.4			
第64図	39	P5	石核	黒曜石	2.95	6.55	2.70	68.7			
第65図	40	28住	打製石斧	安山岩	9.20	6.85	1.60	150.9			
第65図	41	一括	打製石斧	安山岩	11.65	7.35	1.65	168.1			
第65図	42	28土	打製石斧	安山岩	8.70	6.00	1.80	97.2			
第65図	43	一括	打製石斧	安山岩	5.95	5.55	0.70	36.4			
第65図	44	一括	打製石斧	安山岩	7.50	5.30	1.05	43.6			
第65図	45	2溝	打製石斧	安山岩	7.65	6.20	1.50	67.5			
第65図	46	7住	打製石斧	緑泥片岩	8.45	5.10	1.15	57.5			
第65図	47	P23	打製石斧	安山岩	6.75	4.20	0.55	21.1			
第65図	48	4溝	打製石斧	安山岩	4.75	7.15	1.35	46.4			
第66図	49	P19	打製石斧	安山岩	7.30	4.90	0.90	41.4			
第66図	50	P13	打製石斧	安山岩	2.80	3.35	0.80	6.8			
第66図	51	17土	打製石斧	安山岩	7.05	7.95	1.30	76.1			
第66図	52	8土	打製石斧	安山岩	4.90	4.40	0.80	17.2			
第66図	53	一括	分銅	緑泥片岩	10.65	5.15	2.30	185.8			
第66図	54	21土	磨製石斧	緑泥片岩	11.80	5.35	2.85	236.5			
第66図	55	24住	磨製石斧	頁岩	12.50	5.80	2.50	283.9			

住居群全景（真上から）



完掘状況（南から）



完掘状況（西から）



写真図版 2



①土層 1 全体



②土層 1



③土層 1



④土層 2



⑤土層 2



⑥土層 3 全体



⑦土層 3



⑧土層 3



① 1号竪穴住居（南から）



② 1号竪穴住居カマド



③ 1号竪穴住居カマド縦土層



④ 1号竪穴住居カマド横土層



⑤ 2号A竪穴住居（東から）



⑥ 2号A竪穴住居カマド



⑦ 2号A竪穴住居カマド縦土層



⑧ 2号A竪穴住居カマド横土層



写真図版 4



① 2号B竪穴住居（東から）



② 2号B竪穴住居カマド



③ 3号竪穴住居（南から）



④ 3号竪穴住居カマド



⑤ 4号竪穴住居（北から）



⑥ 4号竪穴住居土器出土状況



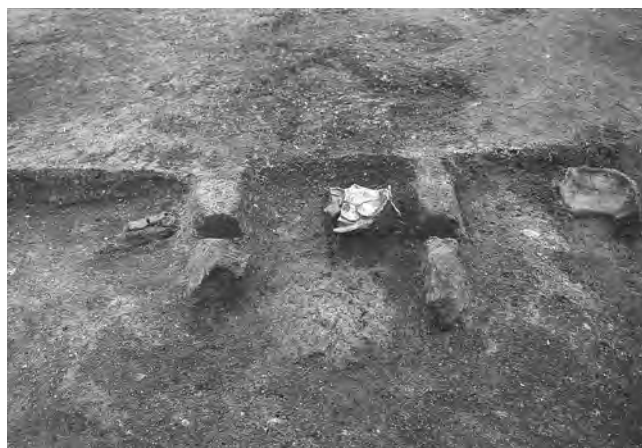
⑦ 5号竪穴住居（南から）



⑧ 6号竪穴住居（南から）



① 7号竪穴住居（南から）



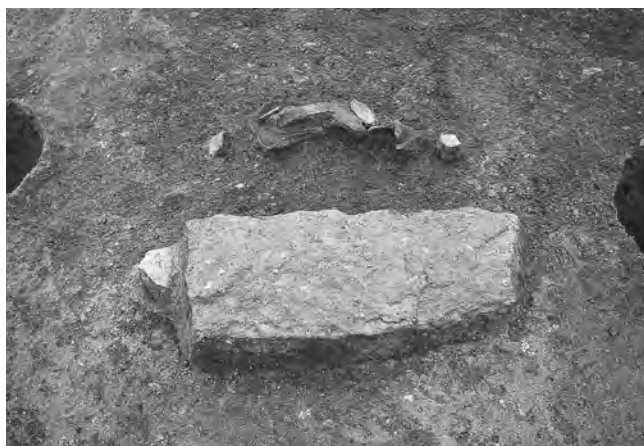
② 7号竪穴住居カマド



③ 7号竪穴住居縦土層



④ 7号竪穴住居横土層



⑤ 7号竪穴住居天井石



⑥ 7号竪穴住居カマド土器出土状況



⑦ 8号竪穴住居（西から）



⑧ 8号竪穴住居カマド

写真図版 6



① 8号竪穴住居屋内土坑



② 9号竪穴住居（南から）



③ 9号竪穴住居跡カマド



④ 10号竪穴住居（東から）



⑤ 11号竪穴住居（東から）



⑥ 11号竪穴住居カマド



⑦ 11号竪穴住居カマド縦土層



⑧ 11号竪穴住居カマド横土層



①11号竪穴住居遺物出土状況



②11号竪穴住居遺物出土状況



③12号竪穴住居（南から）



④12号竪穴住居カマド



⑤12号竪穴住居カマド縦土層



⑥12号竪穴住居カマド横土層



⑦12号竪穴住居煙道部土層



⑧12号竪穴住居土器出土状況



①12号竪穴住居遺物出土状況



②13号竪穴住居（東から）



③13号竪穴住居カマド



④14号竪穴住居（西から）



⑤15号竪穴住居（南から）



⑥15号竪穴住居カマド



⑦15号竪穴住居カマド縦土層



⑧15号竪穴住居カマド横土層



①16号竪穴住居（南から）



②16号竪穴住居土器出土状況



③17号竪穴住居（南から）



④17号竪穴住居カマド



⑤18号竪穴住居（東から）



⑥18号竪穴住居カマド



⑦18号竪穴住居カマド縦土層



⑧18号竪穴住居カマド横土層



①18号竪穴住居土器出土状況



②19号竪穴住居（南から）



③19号竪穴住居カマド



④19号竪穴住居土器出土状況



⑤20号竪穴住居（東から）



⑥21号竪穴住居（西から）



⑦22号竪穴住居（南から）



⑧22号竪穴住居カマド



①23号竪穴住居（南から）



②23号竪穴住居炉



③23号竪穴住居南側土器出土状況



④23号竪穴住居北側土器出土状況



⑤24号竪穴住居（南から）



⑥24号竪穴住居カマド



⑦24号竪穴住居カマド縦土層



⑧24号竪穴住居カマド横土層





①24号竪穴住居初期須恵器出土状況



②24号竪穴住居屋内土坑



③25号竪穴住居（南から）



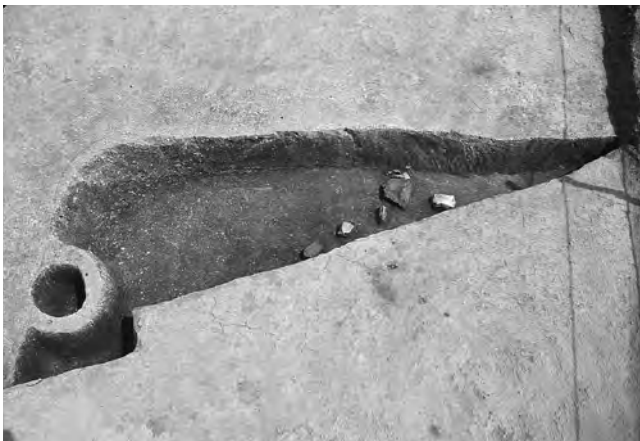
④25号竪穴住居カマド



⑤25号竪穴住居カマド縦土層



⑥25号竪穴住居カマド横土層



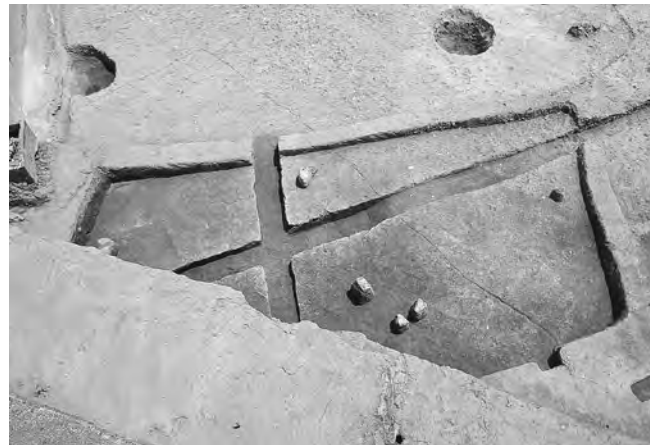
⑦26号竪穴住居（西から）



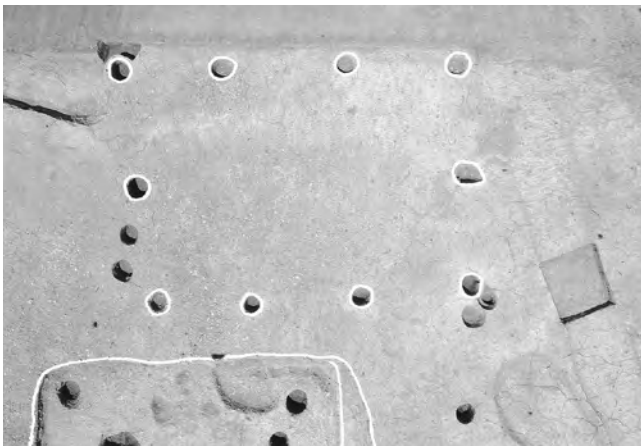
⑧27号竪穴住居（東から）



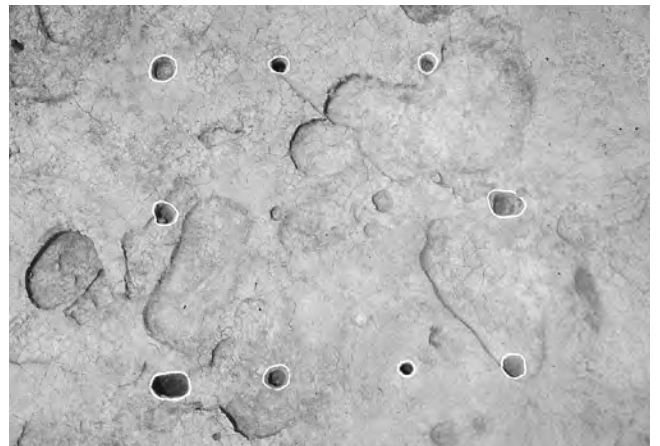
①27号竪穴住居カマド



②28号竪穴住居 (南から)



③1号掘立柱建物 (真上から)



④2号掘立柱建物 (真上から)



⑤1号溝南半 (南から)



⑥1号溝北半 (南から)



⑦1号溝土器出土状況



⑧1号溝土層①



① 1号溝土層②



② 1号溝土層③



③ 4号溝 (西から)



④ 4号溝土層①



⑤ 4号溝土層②



⑥ 5号溝 (西から)



⑦ 5号溝土層



⑧ 5号溝土器出土状況



① 6号溝 (西から)



② 6号土坑 (北から)



③ 19号土坑 (北から)



④ 21号土坑 (北から)



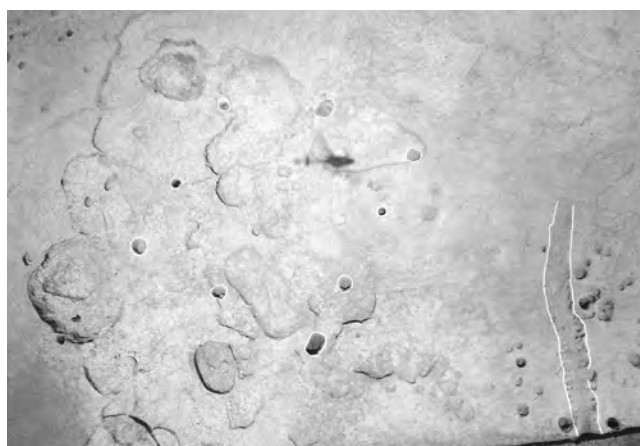
⑤ 22号土坑 (北から)



⑥ 22号土坑土層



⑦ 25号土坑 (南から)



⑧ 土坑群全景 (真上から)



7-3



7-4



9-6



9-7



9-8



13-1



13-3



13-4



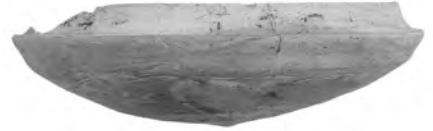
13-5



13-8



13-9



16-1



16-4



16-8



16-10



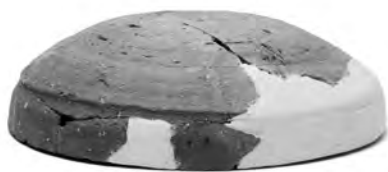
16-12



18-1



18-8



21-1



21-2



21-3



21-4



21-7



21-8



21-9



21-12



21-13



21-14



21-15



21-16



21-18



24-1



24-5



24-6



24-7



24-8



24-19



24-11



26-1



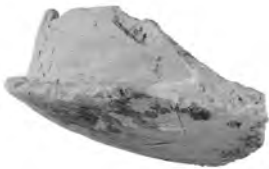
26-2



26-3



26-4



28-3



28-4



28-5



31-1



33-1



33-2



33-4



33-6



33-7



35-1



35-2



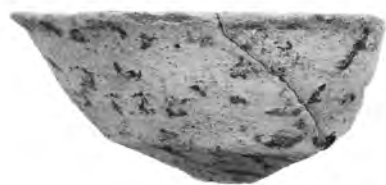
35-6



35-7



35-8



35-13



38-3



38-5



38-9



40-1



40-2



40-3



40-4



40-9



40-10



40-11



40-13



40-14



41-15



41-16



41-17





41-18



41-20



41-21



41-22



41-23



41-24



41-25



41-26



43-4



43-5



43-7



43-12



43-13



43-14



43-16



43-17



43-18



43-19



43-21



43-22



46-1



46-2



46-4



46-8



46-9



46-12



50-1



50-2



50-3



50-4



50-5



50-6



50-9



50-10



50-24



50-29



52-1



52-4



52-8



52-9



52-15



58-1



58-3



58-17



58-19



58-30



58-31



59-1



60-4



60-5



60-7



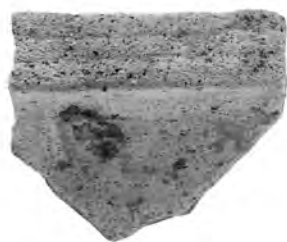
61-1



61-2



61-3



61-4



61-6



61-11



61-14



61-16



61-22



62-1



62-2



62-4



62-5



62-8



62-9



62-10



62-11



62-12



62-13



63-14



63-15



63-16



63-17



63-18



63-19



63-20



63-21



63-22



63-23



63-24



63-25



63-26



63-28



64-29



64-30



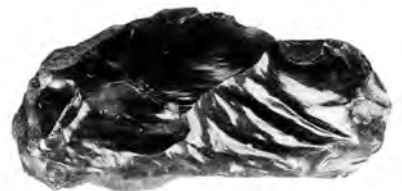
64-32



64-36



64-38



64-39



65-40



65-41



65-42



65-45



66-53



66-54



66-55

# 報告書抄録

ふりがな	くくりのいせきⅠ まちのつばいせきBくのちょうさほうこく
書名	求来里の遺跡Ⅰ 一町ノ坪遺跡B区の調査報告一
副書名	県営経営体育成基盤整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	(1)
シリーズ名	日田市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第88集
編著者名	渡邊 隆行
編集機関	日田市教育庁文化財保護課
所在地	〒877-0077 日田市南友田町516-1
発行機関	日田市教育委員会
所在地	〒877-8601 日田市田島2-6-1
発行年月日	2009年3月19日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
町ノ坪遺跡	大分県日田市 大字求来里字町ノ坪 1541～1543ほか	44204-6	204240	33°18'53.99"	130°58'3.63"	20040216～ 20040226 20040406 ～20040729	2,700㎡	農業基盤 整備

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
町ノ坪遺跡	集落跡	弥生時代 古墳時代	竪穴住居29軒 掘立柱建物2棟、溝9条 土坑30基 柱穴	縄文土器 弥生土器 土師器・須恵器 陶磁器・石器	

## 求来里の遺跡Ⅰ

一県営経営体育成基盤整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(1)一

### 町ノ坪遺跡B区の調査報告

日田市埋蔵文化財調査報告書第88集

2009年3月19日

編集 日田市教育庁 文化財保護課  
〒877-0077 大分県日田市南友田町516-1

発行 日田市教育委員会  
〒877-8601 大分県日田市田島2-6-1

印刷 尾花印刷有限会社  
〒877-0026 大分県日田市田島本町8-8